

川柳塔



No. 800

800号記念特集号
一月号

倉刊大正十三年
通卷八〇〇号

白川協加盟

ごあいさつ

『川柳塔』は、麻生路郎の『川柳雑誌』を継承して発行してまいりましたが、本号をもって誌齢八百号を迎え、また今年は、大正十三年の創刊から数えまして古希（七十年）の記念すべき年にあたります。これはひとえに同人・誌友ならびに全国柳人各位の川柳塔社に対するご支援・ご指導の賜物と厚く御礼申し上げます。今後ともこの栄えある伝統を守り、さらに川柳の発展と向上のために努力する所存でございますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

川柳塔社

『川柳塔』八〇〇号記念出版

集句 旅人 麻生路郎
夫婦 福寿草 麻生葭乃

編集・発行 川柳塔社

体裁 B6判・一八四ページ
定価 一五〇〇円（送料実費）

☆八〇〇号記念川柳大会参加者に謹呈いたします。

第17回鳥取県川柳大会

と き 平成6年3月27日（日）午前10時開場

ところ 米子駅前 米吾ビル6F ㊟〇六五―三―三三

（JR山陰線米子駅下車徒歩1分）

兼題と選者

「山」	高杉 鬼遊選
「雨」	柏原 幻四郎選
「深い」	土居 哲秋選
「ノート」	寺尾 百合子選
「明日」	金築 雨学選
「笑顔」	小林 由多香選
「屋根」	但見 石花菜選
「飯」	八木 千代選

出句締切 午前11時半（各題2句吐）

会費 出席者 2000円（作品集・昼食呈）

欠席投句者 1000円（作品集呈）

投句締切 3月10日必着

投句先 〒689-42 鳥取県日野郡溝口町溝口757-13

小西雄々方 第17回鳥取県川柳大会実行委員会宛

前泊会費 12000円（夕・朝食共）

夕食会費 5000円

主催 鳥取県川柳作家協会
後援 鳥取県・鳥取県議会・米子市

甲戌元旦

西尾 葉

好むと好まざるとにかかわらず、甲戌が走ってきた。取り敢えずお目出度うございませう。本年もよろしく。

寝正月の父や母を起して、かたをしよと、いろはがるたの宮をあけた思い出がある。いろはがるたは、京かるたから始まり、尾張かるたが出来、江戸に移って江戸かるたが出来た。川柳や狂歌の盛んになった文化年間の時期である。

一寸先は闇(京かるた)

一を聞いて十を知る(尾張かるた)

犬も歩けば棒にあたる(江戸かるた)

以上が、「い」の句である。並べてみると、それぞれに地域的な特徴もある。

いろはがるたで一番知られているのは、江戸かるたの「犬も歩けば棒にあたる」である。俗に犬棒かるたといわれている。事実、江戸の町は犬が多かったらしい。「伊勢屋稲荷に犬の糞」という諺がそれを示している。

いろはがるたの句は、官制の教訓でなくて庶民達が自ら選んだものである。従ってその句には、庶民の生活の反映があり、庶民の知恵、庶民の諷刺がある。

犬も歩けば棒にあたるという句には、

正反対の二つの解釈がある。

①でしゃばるからわざわいに会ふ。

②出歩けば意外な幸いに会ふこともある。

とある。棒にあたることを幸せに会ふとするのはおかしいとも思われるが、しかし、じつと引きこもっているだけでは棒にあたることさえ出来ない。日英故事こゝとわざ辞典で、犬棒をひくと、

A going foot is aye getting, if it were but a thorn (歩いてるえいれは何かを得られる。たとえそれが棘でも)

|| The dog that trots about binds a bone (かけ回っている犬はいつか骨を得られる) A dog who moves around is sure to bind bone と記われている。棒をboneとしたのである。

だが、わざわいにしろ、しあわせにしろ、いろはがるたの性格として、時と場合によって自分の教訓になる方を選ばよいためである。

昔、或る日、父が用事があって親戚へ出かけた時、丁度、おしるこをみんなして食べているときで、「あなたもどつぞ」とすすめられた。すると父はすかさず、「犬も歩けば棒にあたりませう」と言うたことをおぼえている。

大年の年頭にあたり、素晴らしい棒にあたることを祈念して挨拶とする。



座右の句

寒うおまんなあと芸者も年をとり

(路郎)

私の句

濡れ落葉誘い誘われひるの酒

伊藤 武

川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 甲戌元旦	西尾 栞	(1)
八〇〇号を迎えて	橋高 薫風	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞選	(4)
自選集		(40)
〈同人特集〉 私の一句	東野 大八	(44)
川柳の群像 山川阿茶		(58)
■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十丁)		(60)
水煙抄	黒川 紫香選	(64)
秀句鑑賞 「同人吟」	小出 智子	(62)
水煙抄	田中 薫	(85)
大空のころろ (37)	橋高 薫風	(100)
銀河系	河内 天笑選	(86)
茴香の花	八木 千代選	(90)
平成五年度 銀河系賞・茴香の花賞		(92)

八〇〇号を迎えて

橋高 薫風

平成も6年となりました。私ども川柳塔の誌寿八〇〇号を迎える佳き年の明けに、心からおめでとを申し上げます。

大正13年1月の創立句会と2月に発行の創刊号が七十年流れ続けた大河の源でありました。私は昭和54年発行の川柳全集2『麻生路郎』に、知性と情熱が麻生路郎先生の両輪をなすと書きました。常に先駆者たんとするパイオニア精神の権化のような厳しい足跡が昭和40年7月7日の終焉の日まで続きます。川柳雑誌社の編集部に入ったのは昭和33年で、その編集作業の合間に路郎先生が何ぶんもくだい程に繰り返し仰言ったことは、次のような事柄でした。

①自分は三十年計画を立てて先を見据えながら川柳の社会化を進めて来た。

②川柳雑誌を発刊するまでの柳誌は、兎糞的な発行のものばかりであったが、わが社が月刊を厳しく守ったので月刊が通例となった。

③昭和7年、創刊一〇〇号を迎え、「川柳の夕」を企画開催、朝日会館を満員にした。

④昭和11年3月に有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載拡大化を計る。保証金は確か千円だと仰言っていた。

⑤その年の7月職業川柳人を宣言、川柳雑

受賞のことは……………高橋千万里・木本朱夏……………(94)

■ひみこざろん「平成六年 甲戌」……………大塚節子・新 正子……………(95)

一路集「八」……………高橋千万里選……………(96)

「百」……………宮口笛生選……………(96)

「齢」……………森田熊生選……………(97)

初歩教室「約束」……………吉岡美房……………(98)

特集

〈寄稿〉「川柳塔」八〇〇号に寄せる……………(102)

川柳塔社各賞の受賞句一覽……………(111)

八〇〇号記念全国誌上川柳大会……………(120)

■川柳こぼれ話「再び閑話休題」……………田中正坊……………(149)

各地柳壇（佳句地十選／山本希久子）……………(150)

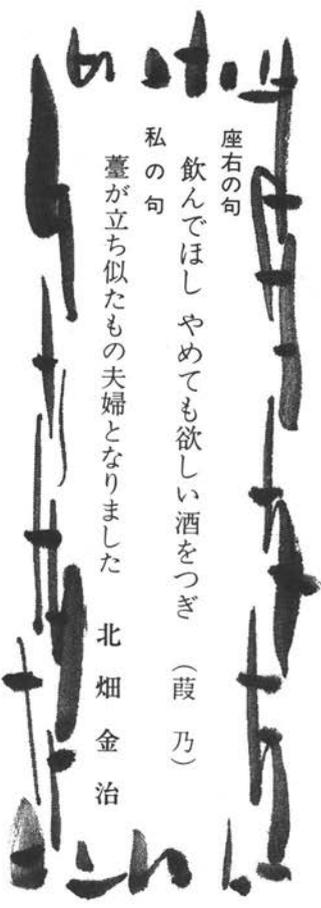
岩本雀踊子さん逝く……………西尾 栞・黒川紫香・宮口笛生……………(162)

十二月本社句会……………(164)

柳界展望……………(168)

■一月各地句会案内……………(199)

■編集後記……………(200)



座右の句
飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ (葎 乃)

私の句
臺が立ち似たもの夫婦となりました 北 畑 金 治

誌社を個人経営とした。この話のときは「専門家なき世界は發達せず」の言葉が付随した。これらの事項は、すべてスケールが大きいく一つの実現さえ大変なことであったので、これを四男五女の子育てをしながらサポートされたのが葎乃先生で、有り余る多くの才能を持ちながら、知らぬ振りを通ず地味な女丈夫でした。

16日の記念大会で、句集「旅人」とそれ以後の四百句、「福寿草」から三百句の「おしどり句集」が引出物に出ます。後進にとって心技の hands となる句集だから、ご期待下さい。

『川柳雑誌』は昭和40年10月号（通巻四六一号）から『川柳塔』と改題、今に至っています。中島生々庵氏を主幹に推しての路郎門下の組織の再構築でしたが、当時の川柳塔社設立準備委員も数名の外は故人となられました。西尾菜先生が主幹・理事長に就任されたのが昭和57年、川柳塔社の事務所の移転等を経て現在に至っていますが、この頃から川柳のブームと女性の進出が目立って来ました。路郎先生の三十年計画に及ばずとも、十年先を見据えて、われわれは進みたいものです。

『川柳雑誌』から『川柳塔』の現在にまで半世紀近く執筆を続けて下さった東野大八氏、川柳塔誌の表紙を三四〇回に亘りご揮毫の直原玉青画伯、印刷の労をお続け下さった藤原草心社の代表ご夫妻ならびに関係者の方々に心からのお礼を申し上げます。それでは16日にわ会館でお会いしましょう。

川柳塔

西尾 葉選

豊中市 田中正坊

月に月重ねてここに八〇〇号
編集者冥利につきる八〇〇号

七十の坂はゆっくり歩むべし

一つ許し一つ甘えて夫婦かな

大臣になり 大臣の顔になる

新時代夢見たこともあるオメガ

大阪市 西出楓 楽

一億で食べてはゆけぬ低金利

ファッションで飲んだワインの請求書

ブラック飲む人に一目置いておく

自慢ではないがと言ってから自慢

慶弔費 昭和の垢がまだ落ちぬ

生きるとや夢を捨てたり拾ったり

鳥取県 江原とみお

万策を使い果してから祈る

方便の嘘なかなか難しい

お隣の畑いつも比べっこ

いい天気身柄をどこへ干そうかな
木枯しは弱いところを知っていた
おのれの名しっかりしろと抱き起こす

八尾市 山下 美津留

村祭り力石には近寄らぬ

妖精の群に混じってスイミング

やんわりと説教節で焼を入れ

還暦へ実りの証 孫を抱く

飼い犬が家庭争議と言う平和

終局の姿いまだに描けない

藤井寺市 福元 みのる

整形の鼻が自慢をして困る

こつこつと貯めた貯金をはたく日日

酌む程に溜めたうっ憤湧いて来る

移植までして長生きはしたくない

寝る頃になってアイデア湧く始末

幕末の話となると演技づき

竹原市 小島 蘭 幸

花束を抱いてやさしい鬼になる

八時間は眠ると決めているおんな

淋しいと言ったことなどないすき

妻に読まれているなどと思う飲んでいる

妻の写真テレホンカードにしておこう

鳥取県 新家 完 司

靴の紐しつかり締めて散歩する

手作りのぐい呑みで飲む文化の日

ミッキーマウスとわたしおんなじ誕生日

飲み屋から歳暮が届く十二月

目的があり腹筋を鍛えている

熊本市 永田 俊 子

耳飾りよその不幸を聞き流す

女系三代続く上手な塩かげん

上見ない幸せにゆれるかすみ草

時計は要らぬかはたれ時という別れ

余波恐れとことんまでは調べない

鳥取県 土橋 螢

息吹たつ海の光に掌を合わす

春光につがいの鳥が現われる

天の声 地の声を聞く四方拝

書き初めに 壽いとしきと太く書く

生涯を決める 糸編みながら

富山市 舟渡 杏花

神話の筋を少し歪める村おこし

視た通りしゃべればきつと叱られる

百夜通いの妻ですつまの言うまんな

神話など馬耳東風のハネムーン

念願のあなたが光るくすり指

倉吉市 奥谷 弘 朗

毎日を紙とエンピツはなさない

赤紙でシベリア捕虜を丸四年

この年で花束受けたことが無い

沖の島見るとシベリア思い出し

満月がこんな嬉しい夜にする

廿日市市 林野 甦 光

移り気な足の先から冬になる

母となる姿似て来た血の絆

聡い耳老いても骨折り損はせぬ

一手先を読む人という気の疲れ

厳格に飼われ警察犬にされ

堺市 楊井 二 南

マスコミの非が招かせた失語症

中傷に堪えて培う自尊心

目算が狂い舌打ち繰り返す

疑心去り難く暗中模索する

判断に迷う背中を叩かれる

柳井市 弘津柳慶

こんな時ことわり上手な妻は留守
妻がいたら今頃ボケていただろう
男だぞと言っておれない世が変り
そう言えば父は母に弱かった
てれながら受賞のよろこびアンケート(市長表彰)

寝屋川市 江口 度

喜んでメスに食われていく生命
こま犬にコート忘れた七五三

鳥獸を白くしたがる神の民
狂言の尼さんおむつ洗うてる

賭け時代 福沢論吉泣いてる

東大阪市 森下愛論

落ちそうな眼鏡外して盃を受け
ネオン街流れに沿って飲み歩き
本当はとても寂しいひとり酒

風はしやぐ みの虫の揺れもまた
老い豊か旅先々の酒うまし

松山市 白石春嶺

オール5がノルマ教育ママの鞭
逢えるかも知れぬ未練の茜雲
掛け持ちにする礼服の大安日

残り火が燃える女の火消壺
仕合わせを夕陽に会釈するゆとり

鳥取県 土橋 はるお

そろばん通りになればお酒も旨かろう
休肝日妻が忘れていたらしい
犬が恐くて回覧板が引き返す
ちよつとずつ酒と女に弱くなる
とっぷりと暮れると酒も美味くなる

尼崎市 春城 武庫坊

正月の音はテンポが間延びする
目を入れた達磨手足が欲しくなる
海の駅無人になつて風騒ぐ
自分史の大陸編は墨を塗る
平凡の凡が背中の中のしかかる

尼崎市 春城 年代

朝ほつと夕ほつとする命かな
蟻螂の腰ゆらゆらときよう立冬
見てみないふりする蜘蛛もわたくしも
打ち明けたときから霧が深くなる
砂浜で扁平足を見破られ

名古屋市 越村 枯梢

老けたなと思う惚けたなと思う小銭入れ
誤算かな ああ生きすぎた生き過ぎた
純情を買われて口が重くなる
振り向くと囁きかける影法師
神の庇護願うにさもし一円貨

奈良市 宮口 笛生

朱を少しふやして奈良の秋もえる
自転車で飲酒運転して帰る

無農薬ではこんな白菜出来ません
米作るな作れと政府得手勝手

死んだらしまい精進上げをして帰る

島根県 堀江 正朗

斐伊川の音は見えた日語る音
初霞雷さんを供にして

いまにいまに何かを期待して楽し
冬陽射し歩め歩めと背な叩く

窓鳴らす風は雪ん子呼ぶ音か

島根県 堀江 芳子

懐かしさほろほろ賀状書いている
感覚を試す指先 鶴を折る

方丈さまと笑い話でお茶よばれ
腹立たぬことにも老いを感じさす

なにをしていても心経離れない

和歌山市 福本 英子

十年後の約束をする若い樹々
日記帳買うから良心咎められ

中ヒール履いてまだまだ老けられぬ
鈍い子を叱る逃げ道そっと開け

事故現場見た目でバラ園を歩く

西宮市 奥田 みつ子

八百号 塔はすつくと聳え立つ
論文しか書けない人のラブレター

氷のような君の横顔見えています
落ち葉はらはら どこかで琴を弾いている

鮫小紋 嵯峨野の秋に溶けてゆく

笠岡市 松本 忠三

底意地が悪いわたしのことかしら
病院を変えてみました仮病です

百葉の長から足下掬われる
ばあさんが偉そうに言う世の常か

地団駄をふんただけですもうお歳

八尾市 宮西 弥生

一円のまるさ軽さにある重味
落葉の一枚絵になる時計台

山里で出会うカラスも旅の友
よい夢のつづきを下さい初冠雪

目覚しを止めてからの深い夢

寝屋川市 稲葉 冬葉

瘦せても枯れても筆頭欄に僕
孫がまだ泣き止まぬお元旦

十八十色に私の色がない
近道を教えて工事中の札

余白埋めたのは愛のメッセージ

京都市 都倉求芽

逃げ水につられて道を踏みはずす
賢がりが出て童話をくつがえす
理論家を隅へ追いやる酒の席
御所の砂 今日徳川の音で踏む(時代祭参加)
両側の観覧席へ背がのび

今治市 矢野佳雲

ままごとの父さん役の子に嫁ぎ
自販機に慣らされていて子の無口
旅もしつとして檜山だけ残り
吹けばとぶアリの命にある重さ
計算機で勝手違うだけの道

美禰市 安平次弘道

花言葉恋のつらさをまだ知らず
年金の不満は止そう秋日和
だとしても夢の続きは伏せておく
鮮やかな裏切りに会うにわか雨
変化球わたしも老いたなと思ふ

大阪市 津守柳伸

初旅の予約へ春が動き出す
遷宮へぞろぞろと旗の下
玉砂利の音おごそかに年が明け
赤福でひと息入れる初詣
夜行バス野麦峠は雪になる

松原市 小池しげお

贈物 昔は俺の部下だった
弟が何しにくるか知っている
うれしくて妻と敬語で話する
役に立つ男に少し恩を売る
物置で父を憎めるだけにくみ

松原市 玉置重人

ある美学 黒子の役に徹しきる
深入りは決してしない無精卵
気の合わぬ男と不味い飯を食う
ふたありでひとりモヤシの髭を取る
記念日を忘れて高いものにつき

藤井寺市 吉岡美房

退院をしたら隣へ救急車
年金を優越感に較べられ
忙しい師走の中に居る孤独
十二月影が追い抜きそうになる
一年がやたら短い齢となり

豊中市 安藤寿美子

この島のどっち向いても蜜柑山
夕焼けの美しかった島の旅
ペンションのマスター無口なもの良し
木枯しはかなしい人の群れに吹く
歴史どう変って来ても初日の出

米子市 林 荒介
やわらかい布にお袋さんを包む

金魚の遊ぶ玄関に待たされる
玄関を濡らした人と話し込む
ひびわれた硝子の馬が手放せぬ
欄干に二つの腕を干している

米子市 林 瑞枝

わが想い届けと空に橋かけて
椿の朱 新春の脇役演じ切る
婚約のキスはみどりの真ん中で
巻紙にすらすら仮名のうまい公家
じゃが芋の花に男の詩がある

松江市 柳 楽鶴丸

たれ目だけ大黒様に似ています
素盞鳴尊と勤当だけ同じ
ピタミンABCみな含んでいる愛情
別人のような可愛い妻寝顔
知進知退を座右の銘に生きている

松江市 舟 木 与根一

怒り上戸で笑い上戸がゆるせない
シグナルか妻がときどき家を空け
不景気でうっかりしてた秋の天
連立与党はらはらさせて面白い
出雲路の神へ冷たい祭笛

下関市 石川 侃流洞
ガス電気煙が消えて山が荒れ
年金の目減りへ骨が凍ててくる
犬用の肉でうどんのだしを取り
好物は目刺 犬も主人思いです
自販機氾濫 街に乾いた風が吹く

高知県 赤川 菊野

も一人の私はとても勤勉で
逆境にたつと闘志のわく女
夢って好いないつもあなたが側にいる
職退いて人の心をとりもどし
美しく老いるポーズを考える

尼崎市 田中 薫

手紙破ることにして階段を降りる
かなしさは手の鳴る方へ目が動く
なるようになる姿勢で蛙浮いている
花の種しばらく夢を見ていよう
はらはらと落葉は秋のピアノを叩く

大阪市 河井 庸佑

不本意な仕事も義理で断われず
偉そうな口で値打ちを下げただけ
貧弱な知識で恥をかいただけ
末っ娘がひとり住むとあわてさせ
建前で押さねばならぬ今日の席

奈良市 米田恭昌

懇親会下戸の幹事のしぶい事

下見と言う名で楽しんでるコンペ

タイムトンネルこれより木曽路と言うロマン

木曽の旅遠い昔がそこかしこ

よよと泣く女のうなじ愛おしい

倉敷市 小野克枝

内部告発ズボンの裾に火がついた

かみなりの父を泣かせて式終る

反省は反省として裁かれる

安住のめぐらが柩とは哀し

泣いて笑って余生の駅は始発駅

砂川市 大橋政良

各駅停車 田舎まんじゅう買って来る

輪の中を見ようとしない不信心

火には火の風には風のいろがある

ラーメンを濃い味にする雪景色

九分九厘金に頭が上がらない

奈良県 田中紀美代

隙のない女がうかつと騙される

かじられた脛がなかなか戻らない

滝つばに溜めてた愚痴をどつと捨て

プライバシー携帯電話で撒いて行く

誕生日献金もよし花もよし

島根県 西村早苗

初日記まだ書きつづる懺悔録

初夢に亡妻もお屠蘇に酔うた顔

春のお月が美しい竹取物語

二次会にゆかぬ男に別の趣味

雪しきり思いが残る蛇の目傘

堺市 高橋千万子

表情をかくしきれない距離の椅子

目が合わぬようにしている目を感じ

恍惚の人にも色と欲は有り

おしゃべりも女多忙のうちに入れ

日当りを選んで秋の陽を惜しむ

高槻市 川島諷云児

約束はいつか破れる蛇の目傘

逆らえば出世に響くと知りながら

言い分を聞けば成る程ごもつとも

妻に詫び妻に甘えている余生

雰囲気に馴染めず独り貝になる

奈良市 天正千梢

0点の勇気父ちゃんほめてくれ

さがして居ます一緒に沈没出来る人

安全地帯で勝手な事を言いつづけ

貧弱な才能どうして競い合い

すすきヶ原 浄土の風に包まれて

島根県 小 砂 白 汀
七度目の犬が来ましたしつぽ立て(年頭吟)

手の届く位置であけびが口をあけ
長生きのほうび塩ぬき砂糖ぬき

遠耳のおかげ憂きこと聴きもらし

平然とめがね補聴器総いれ歯

十和田市 斉 藤 焔

実らない稲教材に貰われる

でも稲は一生懸命生きました

農高のサッカー凶作蹴つてV

出稼ぎは凶作日記閉じたまま

盆栽の仕立てはよそう子の未来

弘前市 真喜内實改め
時 内 果 林

八甲田の峰より高い甲吉句碑

句碑と立つ師の顔今日は日本一

病みあがり専用主夫の見習生

コンバインそよ風待つて刈るのです

経済の病床にいる一円貨

十和田市 阿 部 進

先祖との絆たちきる農を捨て

親ばなれした娘が投げる変化球

喋るのに長けて聞く耳持っていない

ほおずきをならせば母を想い出す

娘との愛の絆は心の支え

弘前市 小 寺 花 峯
ゆったりと胡坐をかけた葱坊主

また今朝も黄色で走る交差点

解けない紐で悲しい夕暮れ日

湯上がりの爪から貰う処世術

葉を落とす樹々には何も言うまいぞ

黒石市 相 馬 一 花

叩いても死なないような人が死に

酔い醒ましよりも効きます請求書

父にだけ晩酌一本つく家風

続編の間に邪魔なコマージュナル

究極のグルメが唸る菜っ葉汁

弘前市 村 田 善 保

自分史の序章に母の背の温み

一本の葦が生命を語り出す

脇役の人生だつて虹があり

感動のドラマの余韻抱いて寝る

満たされた歩幅で回顧展を出る

弘前市 佐 治 千 加 子

しがらみを落葉吹雪の中に置く

振り返りふり返らせる紅うるし

葛の葉も男ごころもひるがえる

極楽も地獄も天眼鏡の中

不覚にも見抜けなかった下ごころ

和歌山市 牛尾 緑 良

秋色に染まる夫婦の小さい旅

コスモスが途切れたところにある墓標

駅弁を買い旅心定まりぬ

片男波は万葉の空 鷗鳴く

生かされてまた冬に入る住所録

和歌山市 堀 端 三 男

ご厚意は受けときますと逃げられる

老人手帳ととも仲良くなりました

言い負けてから名案が浮かび出す

能無しだからにこにこと笑つとく

古希近い教え子達に囲まれる

和歌山市 木 本 朱 夏

忘れましよう銀木屋の花のころを

蕭々と秋には秋の音があり

身のうちに確かに熟れてゆく木の実

道ならぬこと思わせるひとの指

割箸を折り捨てるように別れ来し

和歌山市 内 芝 登志代

木守柿お正月まで頑張るぞ

急がば回れ途中で逢った福の神

着飾ってまだまだ捨てたものでない

自慢の肌美容研究八十歳

お米の名たと覚えて米不作

和歌山市 松 原 寿 子

一月の風と聴いてる詩がある

編み針と仲良くなろう休日よ

封筒を開き小さな夢を抱く

心を添えるひと目ひと目に風を視る

くりかえし繰り返し聴く影法師

和歌山市 桜 井 千 秀

すぐ蓋をするから臭い嗅ぎにくる

病気の器宥めすかして長寿国

偏見を背負って狂い出す目先

悟り切ったように螭螂動かない

遠くから見つめる山に憧れる

和歌山市 福 井 桂 香

日本の秋をアワダチ草が染め

土瓶蒸し少うし妬いているようで

ありがとうの言葉たつぷり振りかけて

吠えられた私も犬も恐いから

香りだけ誰にも負けぬ冬薔薇

和歌山市 細 川 稚 代

愚痴言えばこの青空に笑われる

熱引けばうまいコーヒーほしくなる

愛のうた今日は十九の娘になって

来年の約束しかとコードレス

大丈夫軽いジョークをとばしてる

和歌山市 宮口克子

七人の敵へ今年も年賀状
心あるなら只そつとしておこ
暖冬の猫とわたしの日曜日
胃や腸を覗いてもらう不様な身
穩便に運ぶ手立ての嘘一つ

海南市 三宅保州

標的にされる値打のある男
火傷する覚悟で受けた火付け役
妥協する度に指紋が消えてゆく
父の背を見過ぎて父を越えられず
器用貧乏りんごの皮が長くなる

和歌山市 山田高夫

どの道を選ぶにしても門がある
子を庇う母が付け足す言葉尻
偽善者の胸にそぐわぬバラの花
ひっそりと生きて世間に忘れられ
着痩せする女美人に生れつき

和歌山市 青枝鉄治

人ひとり許す気になる青い空
今ここで一押しすれば我が手中
雨降ると淡谷のりが胸に棲む
遠縁にすがり付かれた選挙権
嘘付けぬ男に遠い回り椅子

有田市 松井かなめ

つづくりをしなくなつて針が錆び
遮断機や信号待ちで愛実る
今になり亡母に聞きたい事はかり
みえみえの嘘を平気で言う息子
紅葉狩り落葉のように酔いどれる

米子市 小西雄々

糸切れた凧は幸福かも知れぬ
うわ滑りするジョークには振り向かぬ
利口者自分を守る闇を持つ
放浪の鞆を嘘で膨らます
古時計の傷へ蹉跌の残る悔い

米子市 石垣花子

余生まだ磨き足りない物ばかり
踊らせるための口裏合せてる
井戸の底覗いて昔話聞く
はじめから厨は別で同居する
好きなほど食べよと老母のてんこ盛り

米子市 田中亜弥

新しい靴でスタート華やかに
終着駅で男の数が少なすぎ
円い心で母から姑になりきつた
鍵穴の空気もよどむ倦怠期
墨は生きもの脈がつたわる筆の中

雲行きに迷いはしないボクの道
仲人の席で初めて褒めた夫
伏兵がまだまだひそむ残り旅
雲行きに樹々のみの虫揺れている
しあわせも八分辺りで丁度よい

米子市 野坂 なみ

福寿草描いて正月らしくする
冬枯れの中州は鳥の樂園か
同じ道歩いて岐路に立っている
いちよう並木のこのはなやぎはなんだろう
私だけ残ってみても淋しかろ

米子市 青戸 田鶴

この頃は時計がわたしを支配する
酉年も無難に終えて餅を掲ぐ
嘘少したして悲しみ和らげる
二人だけでわかる話を抱いている
戒めの礫一生忘れない

米子市 菅井 とも子

祭り寿司十指に余る具を拾う
風止んで雲も足場を整える
持ち慣れた時計わすれて間が持てぬ
凧へひらき直りの暮れの足
病欠へみやげ話はほどほどに

米子市 寺沢 みど里

升も疲れてはかることさえおろそかに
うっかりとピアノに聞かすなにわ節
白鳥見ている同じ想いでないらしい
石垣の数だけ兵が死んでいる
乾杯の裏の舞台がもめている

米子市 政岡 日枝子

公園の椅子でいのちと海を見る
口笛がまっすぐひびくいい朝だ
落ち着けと注意をくれた影法師
傷心の私をのぞく犬ふぐり
やすらぎをひっくり返すごきぶりだ

米子市 澤田 千春

初鏡わたしも年をとりました
水仙も鳥の掟に添うて咲く
バナナの叩き売りに同調してしまふ
年の瀬へ年金財布が目まわす
包丁の錆そのままに子に譲る

米子市 光井 玲子

巢は既に妻を主と決めている
雑談を不倫だなんて困ります
おばさんの群れにダンプが迂回する
ご主人の代わりにポチが畏まる
メニユーにはないおふくろのにぎりめし

米子市 新正 子

病欠へみやげ話はほどほどに

今年こそ青春しようか古希の春
三ヶ日楽しい面につけ替える
うっかりと年を忘れて生きていた
海山を越えて絆をたしかめに
石仏に真つ赤なもみじ良く似合う

米子市 中井ゆき
米子市 金山夕子

外側の好きな私は紅生姜
コレステロール株の如く野菜食う
世間に疎く心を作る女です
それからは青信号に身構える
座る半帖 寝る一帖を拭いている

米子市 川上より子

姑の味に思いを馳せる年の暮れ
父の下駄揃え大晦日を閉じる
七草の三種は芽生え庭の春
駅ひとつ飛ばしシナリオが狂う
貫徹に母からバック・ミュージック

米子市 茂理高代

時どきは深呼吸して雲を見る
咲いて散る花は愚痴など聞かせない
次の言葉が出ないからみかんむく
三面記事読んで空しく萩ゆれる
ゆっくりと蒔いた種なら裏切らぬ

米子市 白根ふみ

喝采の墜ちゆく秋を見失う
大根が甘くて凍々し霜の朝
碧天に潔癖なるをただす首
朝まだき橋を渡ると霧になる
せせらぎの邑に身内の薄あかり

大和高田市 岸本豊平次

ベッドタウン通勤電車で寝不足分
サイトサイトサクラガサイトの同窓会
嫁が風邪息子が孫をみてくれと
コスモスの風さわやかに休耕田
秋の空シャッターチャンスに雲を待ち

西宮市 門谷たず子

亡母の壺から時どき出してくることば
饒舌にさせる地酒と旅三日
反骨の父には余生などはない
ときめきを鞆につめるパスポート
眼鏡拭くと川原の石も丸く見え

姫路市 人見翠記

誕生日皇后様が倒れられ(平成五年十月二十日)
待合せ銀の鈴下と決つたり
再会は昨日の続きのように語り合い
グループは年齢の差など感じない
芭蕉忌に相応しく今日は時雨れる

箕面市 坪田紅葉

宝塚市 丸山よし津

音たてて流れる小川午後も雨
先生の手のぬくもりにただ涙（五十年ぶりの同窓会）
たたされた日もあり山と向い合う
二日間しゃべりつづけてまだ足りぬ
心にもない事を言う仲人口

高石市 浅野房子

不協和音奏で孤高の人となる
身の程を知らぬ器があふれ出す
自慢する種がないのを自慢する
割り勘でその場その場のお付き合い
木枯しが妥協許さぬ背なに吹く

大阪市 大塚節子

来客も電話もない日ジャム作る
二人連れそつと後ろへ回る女
袋帯ギックリ腰に厳しすぎ
間引菜の市へ出るのも残るのも
爆音が猫の昼寝の邪魔をした

寝屋川市 岸野あやめ

老いぬれば欲も小さく初詣
元朝や仕事始めの洩瓶とる
甘いもの好きで自分を甘やかす
人柄も器量も威張る程でなし
子は親を選べぬものぞ月の暈

アドリアで生きて企みなど持たぬ
愛ひとつ芽生え春待つイヤリング
夫のカルテ酒飲み過ぎと書いてある
ゴミ捨てに行くのに着替える社宅
きつい嫁が猫に優しい声で呼ぶ

出雲市 板垣草丘

蒸発もせずにドラマを続けます
ありがとう新たな袖を通す朝
大鯰を雪で困ったこともあり
要るいらぬ傘のやりとり見ている雲
跨線橋ブレイキ緩めた頃飲み屋

出雲市 島祥庵

冬の海話し相手が欲しそうだ
十二月 男重心低くする
約束が思い出せない朝の椅子
包丁研ぐ秋が深まりゆく話
念願を叶えてくれた紙吹雪

出雲市 吉岡きみえ

いずも路を神様一族にぎやかに
息抜きに読んだ漫画の処世訓
ナレーションに花嫁さんが泣いている
若さだな凄いパワーをもっている
熱爛もおぼろもとろり酔い心地

出雲市 園山 多賀子

アドリブに長けて重宝されている
秋晴れに腰の決まらぬ穴惑い
実らない柿の落葉の愚痴を掃く
軽はずみ投げた波紋の行方追う
噂風 耳立てている女偏

島根県 松本文子

伝言がまだ届かない 木守柿
カミナリが怖いとは人に言うてない
頼る気はないがスーブの冷めぬ距離
美しい文字でかしこと書いてある
目が覚めて昨日のままという安堵

出雲市 尼れいじ

大きな秋今故郷は真盛り
凶作をバネにしている祭り笛
米不足スズメが緊急会議する
偏見は持たぬ故郷の山と川
影持たぬ女が私の影を踏む

島根県 佐々木 鳳 笙

吊橋を揺らして愛を確かめる
その昔雨戸の軋む音で明け
時は移り五百羅漢に金が要り
腹見せて湖畔のポート冬ごもり
焼肉が素通りさせぬ換気扇

出雲市 岸 桂子

一言で割れてしまったシャボン玉
名も告げず鳥が運んだ花の種
私をその気にさせた一通話
せんべいが割れない今日の空模様
散る前に見てほしかった花の私語

出雲市 久谷 まこと

結果論みんな納得してくれる
うら腹な言葉も笑顔添えておく
あしたからまあ明日からと吸いつける
どの神も異議は唱えぬ出雲国
神々の集う道だけ開けとこ

出雲市 石倉 芙佐子

あやとりの相手もいない竹人形
風の子に手紙を託す花木綿
雲海の中から私出られない
昔むかしの想いは募る舞扇
醒めてみると炎は水の彩になる

出雲市 伊藤 寿 美

ハネムーン賢治の跡を辿る旅
鯨小紋仕立て直して亡母を着る
趣味で名が知られ男の貌になる
黄水仙愛の返事がまだ来ない
踊り場では踊れぬ赤い靴のウツ

友情は時々辛い夏大根

出雲市 小玉満江

苦の後に中々楽が顔見せぬ

半月を見上げジュースを買いに行く

突然の悲鳴なんだゴキブリか

指させばポチも見上げる飛行雲

唐津市 田口虹汀

振り返るシティーホテルの夜の灯よ

思い出という奇手もあり若返る

冬空と四つに組んで年の暮れ

満で言う齡が嫌いで頑固者

お供日の寺の窓から見た夕日

唐津市 久保正剣

勲一等貰うと押せぬ横車

身勝手な猫と女とエリツイン

エプロンよ愛することは汚すこと

倉の鍵本家の自負がぶら下がる

貞操を守る会には入らない

唐津市 仁部四郎

思惑が外れて嘘に足とられ

広告の嘘に仲よくだまされる

恋の嘘 女は百度吐いてよい

考えた嘘で掘ってた落し穴

大臣の嘘はペンキの重ね塗り

都会の風吸うた息子が戻らない

国籍をふたつ持つ娘のテリトリ

買物客通せんば赤い羽根

棕の木へ登ると見える村の駅

桑の実が熟れて小童回り道

唐津市 浜本義美

床柱背に初春の酒を酌む

曳山本番からつこのころ炎たつ

釣竿と遊ぶマニアの目が光る

とまり木のニュース脊に今日も飲む

旅立ちの顔とくらしの顔違う

唐津市 浜本ちよ

八百の記念に参加決め強歩

裁縫も料理も亡母には程遠い

母も姑も亡くしてからの大ききよ

来世には男に生まれ稼ぎたい

わが子見る眼鏡はいつもずれぬよう

唐津市 筒井朴竜

日稼ぎの疲れを癒す野田湯治

風倒木活かす林道のログハウス

無礼講も天下御免の曳山法被

邪馬台を探る末盧の倭人伝

古唐津のルーツ鬼子嶽登り窯

岡山県 嘉数 兆代賀

空気のような愛ですネ グイアモンド婚

節くれた手で伴せを握りしめ

大根卸しも人の情けもほろにがい

サンマ一匹二人で分けている余生

無人駅に破れた傘とわたくしと

岡山市 川端 柳子

サテ寝よう思う時から眠られぬ

人のいいだけが取得で損ばかり

底抜けに明るい人に春貰う

ねらわれた裕元スカーフいまは赤

うなずいておく ほどほどの距離をおき

岡山県 小林 妻子

無蓋車でトンネルばかり一代記

乗りかえのいらぬ汽車にのっている

待合でハナハト同士馬が合う

まだ走る貨車へ勿体ない奢り

乗りついで来た金婚の貨車まぶし

岡山県 矢内 寿恵子

万歩計短い秋を食べつくす

炎の封書りんごも赤く熟れました

傷ひとつ突かれてからの不整脈

山茶花も淀の中で散り急ぎ

踏ませたくない道歩いて子も親に

岡山県 山本 玉恵

良心と自問自答をくり返す

汲みあげる愛一杓のこの重さ

少し気取って少しくつろぐルーブタイ

きりきりしゃんと女をむすぶひとえ帯

木漏れ陽の情けにすぎる冬母

岡山市 井上 柳五郎

願いと誓い去年と同じ年初め

あれをしろこれをと妻に動かされ

世渡りの特技のひとついい笑顔

留守番に犬もストレスよく吠える

犬嫌いの俺に家内は戌の歳

岡山県 荻野 鮫虎狼

不景気な工場主は酒が好き

十二月音痴が唄う春の歌

凡人に見せない寺の裏の顔

朝市の稔りを買って秋深む

唯物も唯心も無し唯昼寝

岡山県 岩道 博友

隣からローカル色の知恵を借る

やがて来る嫁もくもの糸持つか

喧嘩してどっちも馬鹿酒やっている

追隨を許せば造反者が混じり

再生紙使って出来ているカルテ

岡山県 花田 たけ志

青空に今日の仕草を叱られる
人間は必死でみんなガン患者
必勝の汗を無にしたロスタイム
本音だが荒唐無稽で証人台
汚染度は援助次第の日本海

香川県 松村 迷観子

おんに祈るころの美しき
美しい姿は老いの夫婦連れ
リサイクルもつたいないは生きている
お隣にツルを取られている垣根
診断は日日薬という病

香川県 木村 あきら
明人改め

啓蟄が来ると羅漢も起きてくる(主幹句碑)
国境のない空 白鳥翔けてゆく
姿見にハジライのある試着室
道祖神ペアで立っている信濃
竹光を縄のノレンへ研ぎにゆく

香川県 成重 放任

意地っぱり自分のことを棚に上げ
袖の下昔も今もお役人
話食い金のある無い考えず
人間の他に恐ろしいものは無い
道草をするすべもない塾通い

香川県 川崎 ひかり

白紙にと戻すチャンスを見失う
嫁姑不可解なりき女偏
せめてもの心黙って聞く話
雑魚の群 手の鳴る方へ行きたがる
話すたびだんだん大きくなる魚

香川県 池内 かおり

朝シャンで女房殿のお稽古日
相談に来たのに膝が崩せない
口裏を合わせて堅い席に着く
酒の爛 夫はとても上手です
骨抜きにされたか返事に角が無い

香川県 新川 マサエ

やがて逝く野菊の道だ一歩ずつ
成せば成る一歩一歩の老いの坂
我を捨てて働く幸の軽い足
結び目が解けて心の軽いこと
句碑二つ優しい風が招く里

香川県 工藤 吟笑

孫たちが皮算用のお年玉
人ざわり良過ぎて時々使われる
あわてるなお釈迦さまさえ寝てござる
遊ばずに働きつづけ共白髪
狭い部屋座ったままで手が届く

八尾市 宮崎 シマ子

一つだけ夫に染まぬ色を持つ
老母なだめる舌は上手によく動く
鴨親子少し汚れた川に住む
老いは華やか正月用の服を選ぶ
男性化粧孫匂わせて来る年賀

八尾市 高杉 千歩

金婚へ五年がかりの計をたて
方円の器で老いの雪月花
鬼の留守二十時間を絵三味
お隣という親しさで子を叱る
終着駅見物人に囲まれる

八尾市 吉村 一風

手抜きした付けがどんどん増えてくる
ストレスも包んでゴミの日に捨てる
ほほ笑みを忘れぬように鏡みる
ストープ列車の地酒は小さい輪をつくる
定年で黄門さんが好きになり

大阪府 榎山 隆

薄味に慣れた余生を濃く生きる
直球がふえてくせ球減った妻
秋夜長埋蔵金のはなしなど
シャンソンの流れる窓に枯葉落つ
全体像見えないままに離陸する

八尾市 鷺見 章

久し振り帰る我が家は杖が要り(九月十七日退院)
退院に余生門出の発車ベル
木枯しが頬に厳しい車椅子
温かい心に触れた車椅子
夢悲し動く麻痺の手麻痺の足

八尾市 片上 英一

折鶴に夢をたくして無影灯
青春を謳歌ダンスに酔う福祉
味噌汁の冷めない距離のおらが村
ひらったく言えばあの娘に首ったけ
こおろぎのエレジーを聴くひとり酒

鳥取県 松下 英一

自問自答あきらめムードになつてくる
こだわりを少し残して席ゆずる
買いかぶりされて口数多くなり
地の縁で旧姓を呼ぶ人と逢い
すんませんと折れたに悪女にされていた

鳥取市 両川 洋々

これ神よ賄賂のバトン見逃すな
アイシャドーつけた敵だが手強いぞ
何が恐いつてそりゃあ女が一番さ
酒のないあの世だあまり急ぐでない
米どろぼうおっと死語ではござんせん

鳥取県 林 露 杖

老いふたり心に花を枯らすまい
吾が影を踏めばひよこりと逃げて行く

血縁が必ず味方とは言えず
米不足飽食に打つ一槌か

五十年孤児のえにしが風化する

鳥取市 春 木 圭一郎

誠実を貫き吾は自由なり

菊の香へ誘われ恋がゆれている
信じてるあなたの裏切りが恐い

滝つばへ落ちる運命の水が澄む

親からのバトンしっかり子へ渡す

鳥取市 美 田 旋 風

なれそめの海は今より荒れていた

肩書がつけばあなたも狙われる

手作りの花で仏に秋を盛る

大山の紅葉同じ顔がない

カジュアルな靴であちこち秋を追う

鳥取市 西 原 艶 子

約束のように野菊を活けておく

スマートにさよならを言う終列車

好きだとも思う嫌いだとも思う

底ついていくのは早い預金帳

貫くと決めた女のすわりだこ

鳥取県 山 根 八 重

もぎたての林檎の味にある情け
病む身には亡母が恋しいことばかり

他人様に言えぬ病が疼く冬
お天気が病を軽く重くする

身を横に痛みに耐える昼休み

鳥取県 上 田 俊 路

年齢も量も自販機気にしない

足軽の先祖でも孫知りたがり
勢いの風ふところを深くする

電話では良妻らしく受け答え
はずされて困る梯子を握る妻

鳥取県 羽 津 川 公 乃

あいまいな事が嫌いで敵も居る

スマートな頃の写真は宝です

犬掻きが上手になって群を出る

検診に赤信号が点滅す

世直しの殿に印籠渡そうか

鳥取県 さ え き や え

あきないをやめてしまった里の駅

経験のないのがこわいことを言う

若さがほしい千の石段ふみしめる

言いわけはとうにしくんでいたセリフ

大山に雪 人間らしさととりもどす

鳥取県 石谷 美恵子

スマートな頰を信じてもらえない
引算がつづく弱音がついこぼれ
明治生れの前で弱音など言えぬ
停年の錨は故郷の海と決め
綻びを縫い合う友でライバルだ

大阪市 北 勝美

海石榴市の椿に早し石仏
杉玉は酒のシンボル三輪の神
ふる里は躓く石にもある歴史
剪定鋏 脚立危ぶむ老いの脚
怠って冷夏の所為にする不作

大阪市 藤田 頂留子

流鏑馬に天神さまをしのぶ秋(天満宮)
電子手帳矢立に平成大矢数(生魂神社)
草枕 雲のドラマをあきもせて
ニュース欄 街は危険と隣りあい
はずれてと願う予感はどうびしゃり

大阪市 本間 満津子

紛争はどこにこんなに青い空
家族みな活き活き目標持つて居る
淡い色選んでやさしい顔になる
はいはいと素直で世渡り危のうて
衿立てて急ぐちり鍋待つ家路

大阪市 神夏磯 典子

したいこと沢山持つて年明ける
嫁姑いまでも亡姑は夢の中
新しい下着からだをいとうてくれ
手加減をされて傷つく自尊心
十人十色おなじに心伝わらぬ

大阪市 井上 白峰

見て欲しい見ないでほしい古日記
逃げて行く若さを追えば蹴躓く
ハイハイと軽い返事で重い腰
生命線信じて止めぬ酒煙草
盃の底にたまつた愚痴の山

大阪市 上田 柳影

うさぎ小屋にも菊一輪の秋の色
一徹な男のしわが増えている
落魄の過去振り返りたじろがず
これからの余生一病風痛し
完治せぬ傷をいだいて冬の風

大阪市 板東 倫子

論争はともかく日の丸は美しい
休めから辞めろになって来た不況
行楽よりも布団干したい上天気
パトカーが通れば犬が歌い出す
箸こけたくらいでうちの娘笑わない

大阪市 町田達子

どんぐりの愚痴は聞かない耳の芯
世の中が変ったクツキー焼く男
歳月に消されなつかし何もかも
公園の落暉へアヒル絵に溶ける
童話の里でのんびり文化の日

大阪市 榎本路児

プールでは泳げ海では泳げない
仁丹を噛みかみ勝機ねらつてる
金持つと少し使つてみたくなる
展覧会裸婦の隣で立ち止まる
通知簿を持って外孫お年賀に

大阪市 寺井東雲

タイ国へ日本の雀押し寄せる
お客来る隣の犬もついて来る
ゼネコンが倒れて工事どうなるの
犬猫にごはん食べ方厳しなり
偉そうにしない人ほど偉い人

岸和田市 福浦勝晴

なんでもない奴にいかれたジャンボくじ
木枯しにきりきり外れ馬券舞う
物情騒然よそに気楽な釣り仲間
あばずれた女に顔負けする女
捨てられた夜更けの路地で啼く小猫

岸和田市 島崎富志子

白浜で庄助さんのお正月
禁煙車 夫の腰が落ち着かず
まだ命あるから春の種をまく
コーヒーも米もブレンドという時代
FA宣言手抜き妻が口にする

岸和田市 原 さよ子

余生なお心に虹を忘れない
ダイエットの決意を嘆く秋味覚
残り火があるから白髪染めてます
方言もまじり話の和やかさ
存分に夕日を浴びた柿の色

岸和田市 古野ひで

絵葉書の紅葉が誘う旅心
亡夫の忌 黄菊白菊真つ盛り
血圧に一喜一憂する病床
世話好きのナースの言葉あつたかい
よく見える目になってから欲を出し

岸和田市 高須賀金太

結婚も離婚もちよつと騒ぎすぎ
政治家の言葉にモラルなどはない
飽食の陰でモラルがやせ細り
乗車券ごまかしといつて威張る客
法律は正義であると限らない

岸和田市 岩佐ダン吉

少年が海を見つめてばかりいる
何か期す男無口になつてゐる

仕方ない忘れたことにしておこう

ガラス越し落葉に季を知るベッド

口癖に汗は実ると母が言う

呉市 横田英詩

添うて幾とせ恋の続きをしています

とりあえず散歩と妻に言うて出る

子連れ再婚 保護者変つただけのこと

恩返し老母の小言の聞き役に

酸欠の街しずくする星もなく

竹原市 森井菁居

三人の子が三様で愉しいね

秋はそれでいいとも思う趣味多忙

イベントに来て出しゃばりの血が騒ぐ

賛成の拳手が異端者かも知れぬ

自分との戦に勝つて策士たり

竹原市 時広一路

小吉でいい御神籤よ初春の風

風の向き変り慌てる天の邪鬼

見栄えせぬけど菜園の無農薬

いい顔をしてる河原の石一つ

安売りのチラシちらりと見て捨てる

竹原市 岡本清水

見えぬ明日 無事を信じている愚か
多雨冷夏 果樹満作に掌を合わせ

暮れの今昔きびしき過去が去来する

我が家にも四代目待つ歳の暮れ

椎茸菌湧くほど生えるあの偉力

羽曳野市 榎本吐来

先行きは読み切つてゐる般若湯

売り言葉買う根性はまだ捨てず

てにをはと取組んでいる午後のペン

友の訃に開き直つた粗大ゴミ

それごらんどんどん太る消費税

羽曳野市 田中透太

三分咲きこれから先が楽しみだ

土と火の呼吸が合うた壺の彩

春までは黙つていよう冬木立

消火器で消える程度の恋ですか

よく弾む女が落ちた水溜り

羽曳野市 吉川寿美

思い出を零して歩く草もみじ

石女にざくろの朱が眼に痛い

乱れ萩かそけき夢を妊りぬ

妹看るこんなにつらい風の音

秋霖や涙もろさを倍にする

富士宮市 渥美弧秀

窓は雨FMを聴く三ヶ月

二杯目のコップ酒から喋る友

ほがらかな妻のハミング厨から

二病息災 詩と音楽に生きる日日

二病息災 夫婦で富士に合掌す

静岡市 安本晃授

初日の出 家族でうたう数え歌

春へ翔ぶ卒業証書もつ二十

乾杯に敵も味方もない地酒

方言の味は美事な尻上がり

耐えぬいた背中に残る灸の跡

静岡県 藪田 猿 杏

山頂でこころの迷いふっ切れる

留守電話 単身赴任の心揺れ

グルメより人と出会いに秋の旅

山の駅紅葉の中の発車ベル

秋を見てバス一本をやり過す

島根県 榑原 秀子

いただいた年におどろき未だとぶ気

大織ああ故里の祭りだな

縁起物という花籠を贈られる

難聴か検査に向く雨の中

いい分を誰もきいてはくれぬ聞

今治市 越智 一水

名の知れぬ草花が好き秋が好き

そばの花貧しさなどは言わず咲き

山頭火歩き放哉座す秋よ

庭石が泣く日笑う日陽の光

この庭に聴こう石の声水の声

今治市 野村 京子

秋の鏡切取線が見えてくる

ブランコが揺れて熟した恋心

洗う掌に甘さが残る罪の髪

秋のバラためらい傷のあとがある

夕焼けの向こうの街は天国か

高知市 北川 竹 萌

出発の知事辞で乗るサンフラワー(老人福祉洋上セミナー)

部屋割りで知りあいになる初対面

宿泊に少し気を抜く諏訪温泉

セミナー路の浅間温泉で旅を締め

帰り船二講義受けて締め括る

神戸市 山口 美穂

苦勞いっぱい背負った老母の丸い背

母病んでみんなスケジュールが狂い

しがらみを捨てれば青い空が見え

定年を楽しみに待つ趣味がある

月に叢雲地球の汚染嘆いてる

仙台市 川村映輝

富田林市 片岡智恵子

卒寿迎え白寿遠きにあるを知る
万物に君臨して恥多し

汚職した市長と知事がトップ記事

娘より小さい方は父の靴

週刊誌煙が無くとも火事にする

寝屋川市 柴田英壬子

辞書を手にたくわえているエネルギー

ゲームには弱い系図を背負うている

ふと翔んでみたいと思う靴に会う

旅慣れてシルバー族が垢抜ける

新しい芽を抱く鉢と年を越す

寝屋川市 平松かすみ

お静かに地球の脈がみだれてる

園児まで語る地球のエコロジ

姿見がだれより厳し評論家

これからがあるので妻をそらさない

ゼッケンを付けると老いにある力

富田林市 松本今日子

不相応な希望でしょうか車椅子

書くほどに心が重くなる手紙

夕暮のカラスよそんなに啼かないで

だんじりはまだ見えないか金本犀

大中小お茶碗並んでつつがなし

度忘れを競い愉快に老いかたり

周囲みな敵バーナムの森うごく

脱皮した蛇のころは元のまま

匿名の記事信じてはなりません

許すとは言わない父の瞳が潤み

富田林市 池森子

陽が落ちてたった一人の落し蓋

南向きの庭でひまわり子沢山

夫婦別姓 愛は明日を語れない

タイムリングはベスト真っ赤に熟れている

金になる話逃がして冬の窓

吹田市 山本希久子

いい旅といい友があり初曆

長寿箸 生家の味を守る母

花には花の時計があつて日が暮れる

酸欠の街で欠伸をうつされる

六十歳の青空がある旅便り

吹田市 栗谷春子

書きましたやっさもっさのその中で

わたしのは千歩でおまけ万歩計

稲妻に話の腰も折れました

秋深く極楽の日と地獄の日

どの顔もつつしみ深い島の人

吹田市 茂見よ志子

ときめいた心に今夜乾杯を
コンサート秋のパピヨン陶醉す
冬の花小春日和を恋しがり
森の鳥啼けば鳥も負けていず
温泉へ行きたい行こう会話だけ

京都市 松川芳子

急かされてあれこれ捨てる羽目になり
体温計下がったこととして出掛け
お誘いはハイハイハイと調子いい
コンパクト離さぬ母の身嗜み
喜怒哀楽だんだん母の無表情

京都市 山海友熙

絵巻もの時代祭りの機を織る
華燭の日手作りブーケがよく喋る
母と娘の花嫁衣裳に秘める鈴
髪飾りかのこまばゆい祝い膳
京の川春着の彩をうつしだす

堺市 黒田真砂

風邪引いて家事の手抜きが多くなり
計の報せまさかと思う金もくせい
中学の孫がバイトで掃除する
孫に背丈越されてうれし誕生日
孫二人娘二人と囲む鍋

堺市 柿花紀美女

あれこれと区切りがつかず年が暮れ
病院の待合い同病とよく喋り
むなしさも入れて法話を聞いている
あれこれと気になる老いの冬仕度
バーゲンで得したように買ってくる

堺市 一瀬福一

振り向かぬ男自惚れ曳いている
ロボットは良いな頭痛の種がない
金なくて悲しくないが不便だな
相談に正論だけの石頭
なぜ責めてくれない妻が酒を酌ぐ

堺市 近藤豊子

コスモスとともに吹かるる寺の址
塔心礎昨日の雨の底に在り
明日香路の祈りのいろの曼珠沙華
レブリカの須恵器なれども祖母のよう
にこり酒 弥生の土器の底に照り

箕面市 椎江清芳

ふぐ刺しの皿も値段の位置を占め
旗上げのグラスの底にある野心
能登の旅朝市主婦の目で覗く
妻の粥こんになうまい病み上がり
娘の嘘を見抜いた母の目が笑う

箕面市 岩津 ようじ

七転び八転びのまま黄昏れる

面従は得意腹背なお得意

宝石という美しい罪つくり

二三日迷い押印やめにする

小春日和も少し生きててもいいな

広島県 田村 新造

警備兵刺して流浪の旅となり(興安鎮逃亡記)

北斗見て行方さだめた逃避行

南満へ千キロといういばら道

南満の頼みの綱は国府軍

脱走で黒河悲劇の街となり

広島県 藤解 静風

カラオケも文化だそうで熱が入り

増税のうわさへ秋刀魚の口尖る

山茶花の垣根訪うてはならぬひと

秋霖へひもとく本のある炬燵

眠りから覚めて埴輪の素直なり

西条市 片上 明水

全快をしたから拝む般若経

この人のひと言を待つ部屋静か

魚屋の隣に住んで冬の蠅

横顔を入れて野原の秋を撮る
日帰りの旅でも妻の靴が鳴る

姫路市 大原 葉香

つんどくの活字に溺れ置きコタツ

ブルドッグ醜男なのは血の絆

何もかも知ってて黙す鬼瓦

魚養殖 野菜はハウス肉輸入

おでんつつく男に野心などはない

姫路市 丁坪 サワ子

終焉は住み慣れた地だと老いの友

秋風が沁みて老斑また一つ

出不精な私を知ってる土踏まざ

夕焼も赤トンボなど知らぬ子ら

かくれんぼ探せば鬼は塾の中

姫路市 中塚 遊峰

古里も回忌重ねて遠くなる

懸命につくしています砂の城

院長の温みに任せてある余生

隣保にも噂づくりのおひま人
ペダル踏む古希の身うれし押し車

守口市 結城 君子

茶団子とおうすで宇治の小半日

おそれ多くも見比べている観音像

子育てが終って見入る生命線

疵跡の不服 水面下の動き
ひとり歩き落葉も気軽な音をたて

守口市 森川まさお

倉吉市 野口節子

仏壇に供えて似合う富有柿
都会にも過疎はありけり鉢の菊
束の間の命に鎖が多過ぎる
本来は無一物だと思えども
午後の雨 和尚が藪から現われる

豊中市 吉田あずき

駅弁とゆれて幸せ主婦の旅
虚か実か移ろいて行く秋の山
視野無限まだまだ外に学ぶもの
裏返すべからず夫の玉子焼
ジंकスを破るつもりで出す一步

豊中市 辻川慶子

脇役に徹してこころ満ちたりの
秋日和 旅の約束してしまふ
料理教室食べる楽しみ増えてくる
うっかりとちやっかり姉妹がよし
明日と言う逃げ道があり四面楚歌

倉吉市 淡路ゆり子

惜しみなく花に余生を傾ける
本当の事言えて夕陽が美しい
一生をすたすたにした赤い紙
薬包紙わたしを護る鶴を折る
瘤二つあって落ち着くらくだの背

巢立つ子に過保護の靴が重すぎる
血の絆 銭のもつれですぐ切れる
農政の向きはどうあれ土が好き
年齢が邪魔で言えないアイラブユー
夢一つあれば華麗な絵が書ける

町田市 竹内紫靖

マツチ擦る動作 仏壇だけになり
賞品の扇子は若手棋士の筆
ステッキに顎をあずける日が来たよ
古希からも「ございます調」歯ざれよし
差益還元 晩酌によし万歩計

富山市 酒井輝

着飾ったスピッツも来る初詣
置き場所を替えた臍くり見当らぬ
立ち読みを結局買って出る弱さ
ホテル街歩く不孝な影二つ
残高のゼロに気付かぬのも若さ

藤井寺市 中島志洋

戌年のくせに根っから犬嫌い
犬嫌い知らずに犬が寄ってくる
愛犬をいらいらさせる立ち話
寄り添うた二人を犬が吠え立てる
よく動く妻にやりたい努力賞

奈良県 長谷川 春 蘭

東大阪市 崎 山 美 子

湯豆腐に老いを忘れて亡父恋し
露ほどの身すぎ世すぎと思しいる
手の甲の皺を愛しむ秋思とや
留守居することも一役鍵はどこ
木の実独楽回すこつあり老いの指

西宮市 西 口 いわゑ

河内長野市 井 上 喜 醉

青虫の脱皮へ草の露こぼれ
愛は七色 言葉すくない方がいい
女の髪にいくつドラマがうずもれる
なんらかの皮を着ている浮世なり
小半日 金魚眺めている微熱

伊丹市 山 崎 君 子

遠く来て長い白夜の赤ワイン (カナダの旅)
ナイアガラ二国をつなぐ虹の橋
花の町バンフで聞いた名古屋弁
時差ボケのとれない老母のひとり言
長旅の他人の情けはアルバムに

阪南市 坂 口 公 子

泣きごとと言うてられない床柱
土壇場で角を落した鬼の情
床柱の根っここの穴に気がつかぬ
夕焼けの空へ燃やして明日の夢
一片の白紙が悲喜を演じ切る

茨木市 堀 良 江

伊達巻きはやっぱり最後に食べてます
金次郎さん遊びたい子はいませんか
ロダンの像 枯葉背にまだ答え出ぬ
鳩もカップルわたしもデート花時計
外聞も恥もこわいと思う齡

倉敷市 田 辺 灸 六

検診に一つ二つは故障箇所

ゆるぎなき信念とおす酒煙草

カタログに無かった老いの背となり

古希すぎて妻の指図が多くなり

天秤にかけて夫婦を見る他人

生駒市 北 山 悟 郎

時たまに妻の目盗むスリル感

なんでもない些事が余生の尻を追う

今もなお進軍ラツパが耳の底

空転の日が続いてる老いの坂

涙の言葉に男騙される

北九州市 梅 田 宣 司

端正の松にも錦欲しかろう

雪の街からはげたポストに旅を入れ

平均寿命間近に中味変える遺書

勲章をさげた気取りで赤い羽根

人間を止めず煙草と縁を切る

高知県 小 澤 幸 泉

酔いの目にただ妻だけが美しい

燃え尽きぬイライラだいて冬に寝る

ノーマーク妻の素顔に安堵する

ワンカップ父の癒えない街で飲む

ポリープが目覚めた父の冬の朝

諫早市 原田メイシユン

北風にまかす覚悟で枯葉散り

減反をうらんで自然が怒ったか

学歴で見るから人に裏切られ

人を見る目はこころの中にある

七尾市 松 高 秀 峰

横綱の番狂わせを期待する

栄転の噂の中で左遷され

七人の敵よりこわいロボットで

透析に一生委せて生きる欲

和泉市 西 岡 洛 醉

休日の大陽 孤独を急き立てる

一灯を灯す我が家に住み慣れて

一行詩掛けてまさぐる善の道

腹の立つ事ひとつ今日の疎ましき

西宮市 秋 元 てる

杜に響く掌の温い音が好き

聞く人が一人は欲しい父の唄

日がな雨 髭が芽を出す日曜日

ほとばしる若さりんごの丸かじり

河内長野市 植 村 喜 代

ああ余生 雀百まで踊れない

秋日和 雲の行方は気にしない

虫の音も秋だ秋だとさわいでる

のど飴の数をふやして眠られず

吹田市 井上照子

設計の誤算一人と炬燵広すぎて
好きな色問われピンクを遠慮がち
岐路に立ち支えが欲しい風の中
使途不明赤字が嵩む年の暮れ

大阪市 中西兼治郎

就職に父はは肩の荷をおろし
倅せは消火器使ったことがない
山海の珍味ですなと言うお世辞
ほんとうの他人になって出る家裁

大阪市 渡部さと美

ゆっくりリズムへ疲れる孫と子のリズム
黄葉の下を満足する歩幅
たまに来る娘だから優しく言うてくれ
座ぶとんがいつも妥協をしてくれる

竹原市 岩本笑子

思い出のポプラ並水も散り急ぎ
別れとや峠に咲いたオミナエシ
四十路坂 小春日和とローンかな
終電車帰るところがあるんだな

貝塚市 行天千代

言い訳の出来ぬお人をペンで刺す
人のあら探して生きる職も有る
この年齢では宿も泊めまい一人旅
ページ繰れば若い頃のは句も若い

宝塚市 吉田笑女

かけ足で過ぎる季節を風が追う
口出して火の粉をかぶる羽目になり
ライバルへ返す言葉が出て来ない
麦茶一氣にのんで高ぶる氣を静め

岸和田市 芳地狸村

三輪山が神 本殿のない社(三輪明神)
酒樽をきれいに飾る酒の神(大神神社)
実直な男の顔に影がない
報道の重さを知った誹謗記事

岸和田市 三輪通彦

賞罰もなく面白味足りぬ人
ルビー婚過ぎて夫婦も飯の味
些事ばかりこだわる母を子が疎む
難病へ嘘をつくのも思いやり

岸和田市 田中文時

格式を片っ端から崩す嫁
盃を伏せる勇氣に欠ける癖
酒の量だけはとくに父越える
いちように腹突き出して同窓会

出雲市 板垣夢醉

賞罰の波にいるより風の海
自慢話が長くて体かゆくなる
隠岐みやげのれんで聞かすしげさ節
焼鳥の匂に負けた腹の虫

西宮市 瀬尾 六郎太

甘ずっぱい秋の香運ぶ金本屋

持統帝 式年遷宮今も尚

案外に大事な行事重なりて

中秋の名月亡母の衣かつぎ

岡山県 池田 半仙

ぼろくそに言う友なのに信じられ

テノールも落ちてバスにもない魅力

初霜にゲートボールが焚火する

二者選で天の句でも片や没

川西市 松本 ただし

休耕田今度行ったら駐車場

九分九厘忘れるくせに書かぬメモ

一月の詩 北風が持ってくる

天井で正座している冬の蠅

宝塚市 中田 純次

心経の心は生きる道しるべ

バブル消えこの世の素顔見えてきた

晴れ着やめピアノを買った七五三

菊作りカルチャー三年匙を投げ

弘前市 岡本 花匠

雪囲い終ってホッと北の性

ぼたん雪こどもの夢を乗せて降り

こだわらず素顔で生きて恙無い

地吹雪を生き抜く村の活性化

十和田市 小笠原 敏人

どうだんを賞でて酒席が賑わしい

留守電に自分で朗報入れておく

冷害の藁を束ねる顔の皺

冷害でスリムないなご少し居り

羽咋市 三宅 ろ亭

新年からせめて一日一提言

極論に墮して己を狭くする

ざっくばらん口舌だけの常套語

過疎漫歩 野良犬停って凝視する

和泉市 岡井 やすお

止動方角馬のキャリアを人間に

脛の傷勲章にしてお立台

昼休み今日はどこまで万歩計

傘寿など威張っておれぬ茶寿が居る

加賀市 細呂木 魯木

制服を脱ぎ解放感の背伸びする

書くだけの手紙ポストへ入れぬ恋

方便と嘘を意識し自己欺瞞

スタートの静けさ妖気立ち上る

吹田市 瀬戸 まさよ

出て行った二階に少し悔い残る

自然体一病に生き会得する

甘党の父に不満の母の酒

何事も善意善意のもどかしさ

亡父恋し亡母が恋しいわし雲 香川県 山地 マツエ

病む友へ言葉を選ぶ思いやり

話し合いついたら酒がよく回る

大根もサンマも乗ってるローカル線

出雲市 富田 蘭水

酒断ってまだまだ生きる青写真

秋空があまりに高い失意の日

嘘ばかり並べて顔が火照ってる

この好意渡ると橋が崩れそう

寝屋川市 堀江 光子

思い出と持病話題に同窓会

旅愁ふと村の銀座へ紛らしに

カロリーが気になってくるフルコース

湧くような蟻がいつしか列つくる

大阪市 故神 保拓生

肩書きがないから言える裏話

生きてるかど現況届書かされる

天の声ほしくゼネコンお金積む

平凡という幸せもあるはずだ

大阪市 松尾 柳右子

テレクラのティッシュくれたよ五十路坂

奥入瀬の瀬音に鋭気加速する

美しい言葉の中の嘘に会う

好きな犬しゃべる玩具で我慢する

月あかり思うは子の幸孫の幸 島根県 藤原 鈴江

咲きほこる命いとしや短くて

幾星霜菩薩の顔となり給う

何事も過去形になる佗しきよ

宇部市 平田 実男

催促をしないほうから返しとこ

目を入れてやればダルマの自己過信

拔擢の椅子で孤独な風に合う

医学書が一足先に癌告知

堺市 中野 櫛子

善き姑の面をつけたりはずしたり

孫の所作 教えもせぬに亡夫のくせ

真行草いまだ治らぬこの堅さ

丸おにぎり海苔をはりつけJリーグ

和歌山市 田中 輝子

ゆっくりと結論だした娘を離す

ピーマンの真っ赤なるのも他人事

海鳴りを遠くで聴いている和解

キャッチボールしようか鬱の日の友よ

大阪市 大野 武太

愛犬にカメラを向ける大欠伸

ご理解をなんと調子のよい役所

迂闊にも自慢ばなしになつてきた

二等兵のまんま今も生きつづけ

和歌山県 西口忠雄

団地美人すたすたのほる七、八階
書きやすい読みやすい名をつけてやる

粒選りに種の保証は母がする
木枯しが吹くと小便近くなる

和歌山県 田中みね

大鼓判押すと煽てに乗る舞台
何てこと今から来いと飲み仲間

無言電話咄嗟に浮かぶ顔があり
結論から先に言つてよ長電話

和歌山県 北山好笑

宝くじ誰かに当るのが魅力
朝風呂の顔の揃った宿の膳

カメラ手にしばらく窓の牡丹雪
猫の子が人みしりして抱かれてる

和歌山県 堀畑靖子

五十歳まだバラ色の夢を見る
どこの誰か知らぬともよし釣り仲間

わたくしのペースに乗せてある夫
何が気に召さぬか無口なる夫

鳥取県 津村八重子

おだやかな心で神に手を合わす
バイトにも胸にや羽ばたく夢もある

春を待ち貼った障子の明るさよ
本を読むよめる幸せ抱きながら

鳥取市 岩原喬水

放射能来るかもしれぬ海睨む
新築をしたがゼネコン俺に来ぬ

潔白な俺とヒラメの腹白い
熟れ過ぎの皺を鏡は嘘言わぬ

鳥取市 武田帆雀

天高し仁風閣を描く女
核心は口慎しんで酌ぎ交わす

酒ばかり飯が減らぬと妻の乱
太陽を背にして菊の首正す

鳥取県 田村きみ子

六十八年良い年でしたありがとう
雨の日はのんびり筆を走らせる

自由気儘アリバイなんかない生活
粕汁に酔った酔ったと姑笑う

鳥取県 乾喜与志

飽食の世に米不足来てしまい
犬つれて卒寿の道を散歩する

知恵熱を知らぬ健康優良児
テレビから香ってくる菊花展

鳥取県 乾隆風

忘年会忙中の閑こしらえる
女房のあとから座る初鏡

ころの隅に恋の化石が一つある
婆さんのおせち料理を督める嫁

名優をしのぐ親父の猿芝居

鳥取市 西村 黙 光

黙ってりやとても立派な方に見え

理容院へ変身術をかけに行く

淋しい日妻へ不倫を匂わせる

鳥取県 黒田 くに子

ふり袖をほめるとくるり舞って見せ

夫がいるそれだけで良い秋暮色

歯を抜いた顔で嘘などつけません

ライバルもそっと目薬さしてやるよ

鳥取県 石尾 かつ乃

もう我慢出来ぬとかかし一揆する

雲行きに出足が鈍るガラス窓

母の忌の墓前にこぼれ種が咲き

ライバルを越すには仮面二つ三つ

鳥取県 西川 和子

シルクロード駱駝なしでは絵にならぬ

人柄も器量よしでも縁遠い

波乗りが上手になって沖へ出る

ぎりぎりのとこで自分の唄が出る

倉吉市 米田 幸子

足許を照らす灯りは弥陀の灯か

婦唱夫随 妻のタクトで今日も暮れ

高級車 親は単車で我慢する

美容院の鏡と妥協して帰る

不況風年末ジャンボに夢託す

自惚れが強くて皮肉通じない

究極の寒行素足の永平寺

胎教に名曲聴かせパパ演歌

大和郡山市 坊農 柳 弘

どう使う生命保険の満期くる

ファミリーでもう鳥達の北帰行

情と理の狭間に心ゆれ動き

よっこらしよ十七音字に日が暮れて

東大阪市 安永 暁子

分校の子が居なくなる島の春

赴任地で妻に遠隔操作され

スイートンも遠くグルメに名を替える

末席の一声幹事慌てさす

豊中市 井上 直次

志は詩なり賑らむばかり初春の夢

家計簿に補正予算も組めぬまま

サラ金のティッシュを貰う無表情

自分史へ陽のあたるペン影のペン

枚方市 海老池 洋

時どきは縫い目ほころぶ妻でよし

更年期かしら美男子に出会わない

商店街のボスで選挙も大好きで

会場を出て芸術は肩がこり

松山市 宮尾 みのり

豊中市 三宅 つえ子

木犀の香り教えた裏通り

しあわせになつて仏に掌を合わす

板の間に膝を揃えて習う経

たたき売りで買ったバナナを友に分け

芦屋市 黒田 能子

一枚目夢のふくらむカレンダー

結納のその後の彼と父の仲

お葬式華やかすぎる僧の袈裟

贅沢な舌ですいとんが好きと言つ

出雲市 小白金 房子

杯洗の中に男の顔がある

土の香と心が届く里の味

共進会メダルに残る牛の声

思考力亡き母徳ぶくじら尺

島根県 石 飛水 煙

敗戦の重たい枷がまだ続く

雪便り日本の長さ自覚する

流してる涙が嘘をもて余す

真夜中になると時計が蘇る

竹原市 石原 淑子

激しさをバラからもらうかすみ草

竹原の第九の輪に迷い込む

独り居り大きな声のひとりごと

子離れて自分の為の彩を選ぶ

池田市 岡本 吉太郎

はらはらを何度もこえて金婚や

知事すれば三代食えるほんとなあ

影うすき一生なれども楽しかり

和歌山市 玉井 豊太

お年玉ふところ具合い立ってある

犬舎にも松飾られて当り年

平均に進む我が家の足の音

豊中市 滝北 博史

祝う春 川柳塔は八百号

賭けごとの好きな男を守る銃

教訓にうなずいているのは他人

倉吉市 最上 和枝

気短なくせに電話の長いこと

信じろと言つて三日も帰らない

忘れたい人の名前とよく出合う

大阪市 清水 利武

天の声出して検事に裁かれる

犬年の妻吠えてます年始め

ポーナスがスキーの予約しています

(前月分)堺市 近藤 豊子

縄とびのなかがまがふえる寒い朝

デイズニールランド行ってきた児の輪ができて

七歳はや「昔のわたし」語りだす

鳥取県 幸家 單車

吉報に急に体が軽くなる

小さいが我が家の城があたたかい

空港が鳥の砦に困ってる

鳥取県 谷口 次男

腕にのる饅頭こわい やや肥満

キラキラと大根足の健康美

金太郎さがしにクマが街に下り

鳥取市 前田 一枝

気楽さはもめる子もなし遺産無し

あせるほど深くなるみぞとび越せぬ

夢はいい人のうわさに乗らぬから

鳥取県 鈴木 公弘

借金を忘れてしまう癖がある

歯医者からいじめに遭った礼を言う

ほどほどに酔うと泣き出すので困る

鳥取県 大角 正道

駆け出したわが子についてゆく影だ

親子四人で明日への種を蒔く

親になるため教科書を読んでいる

鳥取県 大角 幸代

愛は一途で真つすぐな瞳をしている

生命の音が私を強くしてくれる

やさしさのリズムで駱駝旅をする

茨木市 藤井 正雄

干しいかに島の詩がある頬冠り

店握る母の細腕繁盛記

送られて送ってひと駅歩く仲

枚方市 小森 正晴

年あらたおかげおかげで生きて候

京料理 皿の空間までも味

経済の泡はなかなか消えませぬ

大阪市 小糸 昭子

子離れの上手な母の塩加減

約束を破る勇気が出て来ない

柿実る庭で咲かせた亡父の菊

岸和田市 藪野 けい子

お隣の町名出てる新聞記事

ふたありの足跡砂丘たそがれる

渚の愛 恋の足跡すぐ消える

和歌山市 玉置 当代

朗報を聞き丁寧な風呂洗う

米不足 休耕田の草紅葉

朝市の蟹とお喋りする輪島

はりま文芸川柳大会

1月13日 正午開場

姫路文学館3F講堂

課題・選者(2句以内) 踏む||保西 岳詩▼視野||

前田美巳代▼敵||真殿舎句里 会費 五〇〇円

自選集

正本水客

時雨きて紅葉も今年おくる色
米不足みずほのくにと言うのとれず
息つまる思い偉才谷垣史好の訃
かかさずに年賀状くる宿おもつ
新しい足袋で新しい風にあつ

八木千代

裸木の樹皮が錆びゆくのがわかる
雑木林の仲間もみんな寒そうだ
冬のなさを春のなさに繋ぎたい
こうやって何度も冬を越してきた
どうせなら錆を鏝に仕立てよう

野村太茂津

幸せを探るヒントを子に与え
毒舌のエール優しい裏返し
安らいだ暮らしを願うのは欲か
深読みをし過ぎた悔いも少しあり
来年は傘寿へくれた息子のエール

野田素身郎

乗車してすぐ本を出す眼鏡の娘
男が持つては様にならない紙袋
冷えてきてしよつちゅう蹟く後遺症
凍てつく日も明治の母は水でよい
一坪の庭の落葉をもてあまし

藤村女

私を包むやさしい影と居る
子や孫が包んでくれたお年玉
風花が頬に冷たい初詣
穏やかに押して押されて初詣
まろやかな余韻で亡娘の鈴が鳴る

大矢十郎

一族の三十人へ初春が来た
上へ下へなすり役所の十二月
秋叙勲あれから背筋伸びてくる
猫撫でに気付く善人遅過ぎる
父をよう知った白寿の面白し

本田恵二朗

無駄のない年輪ほのぼの底光る
長のつく肩書三つ使い分け
心眼という武器かくし持っている
孫達に慕い寄られて生きる幸
お美事な投球さすがと思わせる

児島与呂志

根来坂ころころ小石ころげ落ち
ふところ手まだ残ってる小正月
ちらし寿司だまし舟に乗って見る
昼酒の友あり齢を信じよう
賀状あり一期一会のままの人

工藤甲吉

平成大凶作 雀もあきらめる
文化勲章 両腕を抱えられ
ひしひしと冬ひしひしと飢える村
天地人 人間だけが狡すぎる
有難や美人の席と入れ替わり

遠山可住

中流へ禁断の実が熟れて来る
草笛よ水子の眠り深くなる
遺言状心の丸いうちに書く
虹の恋なんて知らないエリートで
頂点の影は笑ったことがない

藤井明朗

コスモスの微笑ゆらゆら風のキス
文化の詩ゆたかに実る里に住む
紅葉終る山冷厳な冬の景
念願の町に就職孫の意気
戌年を迎える景気春の彩

小林由多香

荒れもした海定年の帆を下ろす
パチンコを打つ顔女捨てている
滝つぼに心の迷い沈ませる
あいまいな返事でいつも逃げられる
スマートな先生だった恋心

恒松町紅

迎春の軸恙なき夫婦箸
老いはまだ背を伸ばさせる役があり
宍道湖の夕日他国で自慢する
簡単な結び戸惑う新世代
老骨の腰が知らせた勇み足

久家代仕男

出稼ぎが戻り正月らしくなる
石路の花ありし日の師を偲ぶ
ぶきつちよへ女将がほぐす蟹の足
老人にいろは炬燵の寒いこと
脚よせて股大根は含羞み屋

月原 宵明

額縁のうしろから出た使途不明
軽率な小指にわびるくすり指
適当に忘れ長生きしています
叱つてた父が笑つてばかり古い
晩酌が回ると父の仏さま

金井 文秋

気くばりをするだけで役くたびれる
よつこらしよで立ち上がれたらまだ若い
相手の力読めない程もうぬぼれる
挑むもの無くなったので呆けてくる
おだててくれる間は見込みありそうだ

波多野 五楽庵

夏至が去り冬至がめぐる冬の乱
懺悔室小窓も涙溜めている
五線紙に春のやさしい風を書く
津軽孤独雪の昇華を受けとめる
やさしくて鯛の首も断ちきれぬ

辻 白溪子

ご近所の噂を提げて来た見舞
病名が同じでベッド打解ける
お隣の犬が留守番引き受ける
玉子焼作り別居に慣れている
心から感謝が言葉だけで足る

水粉 千翁

人間を連れてるきのえ成通り
嘴で分けてる育ち盛りです
やっぱりそうであつたのか爪を噛む
今日こそを磨いてもらう靴の艶
なんとなく合わせ鏡にして女

植村 客遊子

夫婦箸 十年夢のようにすぎ
はつきりと言わぬ卑劣へ遠ざかり
人生行路行く手の嵐へ気がつかず
正直がすぎて野心家とも見られ
結局は妻が意見の苗を植え

有働 芳仙

里帰り妃も娘の声になり
寄せ書きへ餓鬼の頃の癖が出る
風の手に夢が膨らむシャボン玉
言うことがいつもおんなじ老夫婦
窓少しひらいて和解の風を入れ

故岩 本雀踊子

深酒の飲まぬおやしを見て育ち
炭の火で焼く松茸も久しぶり
コーヒータム世間話捨て来る
御近所で顔のきくのが妻の方
冬を越す天井の蠅が動かない

河内天笑

阪神を買い取るカネを溜めてます
髭を剃る 男の業はこれくらい
マネキンが着ていた服に笑われる
景色見に行つて空き缶拾うてくる
抱き上げてみたい可愛いおばあちゃん

小出智子

九十歳の春が母にもやってくる
何時来ても見晴らしのよい家だ
血圧にかなり応えるJリーグ
好きな人が一人二人と先に逝く
当分は母と炬燵の言いなりに

西田柳宏子

行き届き過ぎた言葉でうとまれる
十までを数える声は元気なり
段違い裏の裏まで見すかされ
気の合う仲間と渡る赤信号
せいたくに馴れ人間の屑が増え

松川杜的

男には男の買物 市場籠
約束は約束 秋の空は空
横文字は嫌 今聞いたのにもう忘れ
似たもの夫婦 体重までも一緒に
百歳も所詮キンさんギンさんだからこそ

高杉鬼遊

こうすればこうなる読みの落し穴
踏切の向うで待っているえにし
たよりないあんとと語る法善寺
竹を踏む元気は先がしれている
もんじゃ焼これが名物東京都

阿萬萬的

ご公務とは申せ多忙なご皇室
米不作チャンスと自由化せめて来る
知ったかぶりした唇に秋を知る
プライドを捨てれば急に痛む腰
影だけが素直に僕について来る

黒川紫香

餅の数減った雑煮で春祝う
新しい友達増えた年賀状
しつかりと冬の音聞く山の寺
言うだけは言うたつもりで蜜柑むく
孫出来た話赤飯もろて聞く

橘高薫風

初日かげわが句碑に酒まいらせん
南天と写されてよい歳になり
誌寿八〇〇お若いなあと『ほととぎす』
写経とはおのれ眠らす子守唄(樽谷垣史好君)
生きるとは写経に続き賀状書く

同人特集

私の一句

晴れた日の灯台孤高の美しき
 五十年振り素顔のまま逢いにゆく
 碑を建ててやがては雪になるだろう
 おしゃべりの鴉が横に棲む不安
 まどろめば桃遙かより流れくる
 災害は先ず善人を薙倒す
 親の背を踏み越えて行く子のパワー
 ふきつちよな男結びも愛である
 往き昏れる大正暮色秋深む
 母の忌に降る雪なれば手のひらに
 年寄りが降りると走る田舎バス
 心底はまだよみとれず歩を合せ
 吉祥天の紅にとまった男の目
 貧乏な頃はなんでもうまかった
 言いたいこと何でも言える無位無冠

十和田市	高知市	枚方市	堺市	和歌山県	豊中市	出雲市	大阪市	大阪市	八尾市	米子市	米子市	弘前市	大阪市	八尾市
阿部	川竹	海老池	高橋	西口	三宅	園山	榊本	井上	山下	八木	小西	波多野	稲本	西尾
	松		千	忠	つ	多	落	白	美	千	雄	五	凡	
進	風	洋	万	子	え	賀	児	峰	津	代	々	楽	子	栗

人形が人間になる深い闇

快適に暮らして居ます酒の量

恋心を他人行儀で布告する

歳聞いて見てもどうにもならぬ女

リハビリのシゴキに耐えた脂汗

垣根越し煮っころがしの来る絆

ダンジリの屋根で実りの秋を舞う

家よりも車を先に買う若さ

終止符を打つまで続く句読点

所作などは要らぬ二人で茶を愛でる

風薫る遊び上手なイヤリング

つんのめりつんのめりゆく八十路

年金も福祉も足りて和む老い

長寿法いつも笑顔絶やさない

糸電話あのネあのネと弾む午後

他人様の命の足しに私の血

不しあわせ父母の匂をおぼえてる

白い杖 僕を置き去りにはしない

竹を踏む竹に笑われまいとして

米子市

新

正子

奈良市

天正

千梢

岡山県

花田

たけ志

奈良市

宮口

笛生

大阪市

西田

柳宏子

和歌山市

青枝

鉄治

豊中市

井上

直次

大阪市

中西

兼治郎

和歌山市

桜井

千秀

出雲市

富田

蘭水

茨木市

藤井

正雄

名古屋市

越村

枯梢

鳥取県

羽津川

公乃

鳥取市

西村

黙光

島根県

西村

早苗

寝屋川市

平松

かすみ

豊中市

滝北

博史

島根県

堀江

正朗

島根県

堀江

芳子

いいのでしようかこんなに燃えている余生
魂は私だけの非売品

寝屋川市 稲葉冬葉
海南市 三宅保州

鯛雲 明日は京都の梅を見に
神の手が遠くにいなさる膝頭

呉市 横田英詩
弘前市 小寺花峯

夫婦善哉歩幅まだまだ縮まらぬ
十年も会わぬと奥さんも替り

河内長野市 植村喜代
岡山県 荻野鮫虎狼

不況風余剰人員という落葉
弟妹が良過ぎて姉の出番なし

唐津市 浜本義美
唐津市 浜本義美

強がりを言ったと思う電話口
訥々と言葉を噛んで訴える

桜井市 故岩雀踊子
姫路市 大原葉香

どの窓も幸せごっここの灯がともる
子等の舟一つ一つが沖へ出る

香川県 山地マツエ
堺市 柿花紀美女

ファイトがあつてソフトな母だった
座るにも起つにもよいしよどっこいしよ

宝塚市 吉田笑子女
芦屋市 黒田能子

あの笑顔みんな味方にしてしまふ
美しい話の記事へ妻を呼ぶ

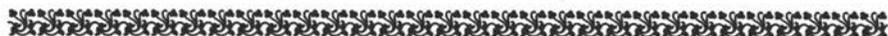
西条市 片上明水
和歌山市 野村太茂津

口惜しいが今日も魂売り尽す
枯れてなどないぞと青い芽黄色い芽

今治市 越智一水
岡山市 井上柳五郎

火の彩にわたしを染めるめぐり逢い

岡山市 井上柳五郎



この姿勢角曲つても崩さない
 正座して天皇皇后見舞われる(奥尻島)
 残ったのはロボットだった消去法
 もう一度迎えに来たらついてゆく
 恋人の部屋で鳴らしたオルゴール
 板塀のピラが濡れてる尋ね犬
 盲導犬 主人の歩み心得る
 背も腰も曲っていないから強気
 二枚目が三枚目になる佳いお酒
 社長にも痛いこと言う母がおり
 陽炎の向うに仕事の唄が見え
 酉の年サンズイ偏も要りますな
 防災の役目を森は知っている
 愛犬が今日の鼓動を察知して
 七福神平均年齢問われても
 校長がオロオロ回る田を回る
 老人に似合うポーズでつましく
 好きだから素直にハイと返事する
 ラストシーンのとこで眼福したと言う

米子市	大阪市	美禰市	鳥取県	尼崎市	豊中市	高槻市	大阪市	羽曳野市	大阪市	和泉市	寝屋川市	鳥取市	大阪市	大阪市	十和田市	鳥取県	岸和田市	甘日市
金山	正本	安平次	松下	黒川	田中	辻井	金井	榎本	小林	西岡	岸野	春木	松尾	津守	齊藤	津村	芳地	林野
夕子	水客	弘道	たつみ	紫香	正坊	白溪子	文秋	吐来	トメ子	洛酔	あやめ	圭一郎	柳右子	柳伸	八重子	八重子	狸村	甦光

嬉しきはまだ湧いて来る好奇心

診察券入れに変わった名刺入れ

ばうふらにすれば命の水溜り

幻想の森で地軸の声を聞く

手に残る何でも惜しい物になり

奉賀帳ふるさと思う人ばかり

射程距離変えて珍し愛の色

麦の穂の一本 墓も春となる

お目出度い出番となった葉指

花群れて揺れてひと雫のわたし

屠蘇の膳次々孫が酌に来る

公害の中でも旬は凜と生き

曹長と聞き陽溜りの席ゆずる

ワケもなく北という文字泣けてくる

さりげなくギンギラギンに生きている

土壇場で血は水よりも濃いと知る

春愁や男に欲がもつとほし

噛みしめる情けは生きている余韻

腰痛も一人世帯は寝ておれぬ

大阪市 板東倫子

倉敷市 野田素身郎

箕面市 岩津ようじ

川西市 松本ただし

和歌山県 児島与呂志

出雲市 小玉満江

岡山県 岩道博友

吹田市 栗谷春子

和歌山県 池永正雄

和歌山県 田中輝子

柳井市 弘津柳慶

宝塚市 中田純次

新宮市 大矢十郎

青森市 工藤甲吉

和歌山県 宮口克子

岸和田市 三輪通彦

小阪市 上田柳影

倉敷市 田辺灸六

貝塚市 行天千代



ふるさとへ一步踏み出す柵破る
 海が見え川もやさしい顔になり
 その時は一人で逢いに来て欲しい
 産声にうっとり母性満ちてくる
 定年の鳩尾押せばよくへこむ
 亡姑の味ついで雑煮は吉備仕立
 にぎり飯流れが変わるかも知れぬ
 火消壺一気に燃える夢を抱く
 花の中光の中で眠りたや
 ふるさとの山へ無冠の父詫びる
 富士の見えて我が家に客が増え
 うっかりと夏を忘れた天の神
 煮こぼした女の恋よ秋桜
 泣き事は止そう自分で決めた道
 見るもよし見ざるもよしと我は咲く
 黄塵万丈 騎馬民族の幻か
 ねじ巻きの柱時計が一つある
 叙勲にて降って湧いたるフルムーン
 繰り返す愚も女なりバラの朱

吹田市	寝屋川市	尼崎市	尼崎市	姫路市	高知県	今治市	豊中市	大阪市	熊本市	大阪府	下関市	米子市	守口市	唐津市	鳥取県	和歌山市	米子市	広島県
山	北	春	春	人	赤	野	江	清	永	靱	石	政	結	仁	黒	田	石	田
本	田	城	城	見	川	村	口	水	田	山	川	岡	城	部	田	中	垣	村
希久子	綾子	年代	武庫坊	翠記	菊野	京子	明光	利武	俊子	隆	侃流洞	日枝子	君子	四郎	くに子	みね	花子	新造

豆をむく妻とはずんでいる話

夕陽から許しが出ないまま暮れる

母が居るただそれだけの子の帰省

日本が変わる胎動ききながら

物いりがつづくよいことがつづく

日本の花で埋めたい父の日よ

タンポポの綿毛荒地の覇者となる

底辺で励まし合ってこの叙勲

紙風船つけば昭和の音がする

投げられた礫わたしを強くする

少年の迷いへ母の匙加減

日本の子に教えたい日本語

優勝へ活字が躍る人が舞う

鬼は外五枚コハゼの足袋を履く

よろこびの鼓動へわたし見失う

散るまいと思うもあろう花になる

ふるさとの門はいつでも開けてある

しびれないおまじないしてお茶の席

夕陽には今日の砂絵を見てもらう

松原市

宝塚市

奈良県

和歌山市

八尾市

唐津市

黒石市

有田市

豊中市

和歌山市

和歌山市

富山市

大阪市

寝屋川市

鳥取市

倉敷市

兵庫県

岸和田市

米子市

玉置重人

上田佳秋

長谷川春蘭

福井桂香

宮西弥生

田口虹汀

相馬一花

松井かなめ

辻川慶子

玉置当代

内芝登志代

酒井登輝

河井庸佑

柴田英壬子

小林由多香

水粉千翁

遠山可住

原山さよ子

野坂なみ



紫陽花の花の雫に色は無く

薬呑み死にたい等と嘘っぱち

休日のわたしをそんな目で見るな

明日もまた咲かねばならぬ花眠る

交差点毬は行く手を思案する

霧はれて普段の町の顔になる

抱きあつたかたち草の芽が伸びる

休日は地藏さんより動かない

生まれたり消えたり雲のひとり旅

薄く引く紅がうれしい人と会う

毒舌家優しい文字で見舞状

どちらかが付き添う杖になる老後

立ちくらしながら峠越えてきた

野仏の列から風化してしまふ

停年の間近でゆっくり幕降ろす

いろは唄祖母に習った節のまま

向う岸の花の赤にはかなわない

してもせんでもだいじな一日減ってゆく

役立たぬ指はつめだけよくのびる

寝屋川市

香川県

鳥取県

竹原市

米子市

東大阪市

鳥取県

鳥取県

鳥取県

鳥取県

大阪市

松山市

米子市

米子市

加賀市

茨木市

米子市

大阪市

出雲市

堀江

工藤

新家

時広

澤田

崎山

土橋

土橋

田村

山根

北根

白石

寺沢

田中

細呂木

堀

菅井

本間

吉岡

光子

吟笑

完司

一路

千春

美子

美子

はるお

きみ子

八重

勝美

春嶺

みど里

亜弥

魯木

良江

とも子

満津子

きみえ



種袋軒に吊して病んでいる

親と子が違う尺度で計ってる

胎動の海で涯なき夢を追う

御成婚山から庭へ木を移す

まだ白い夏があつて負けられぬ

一生を通行人として無冠

振り向くと味方は誰もいなかった

一病を持って下着は白を着る

冬の実が幸せそうに赤うなる

どくだみの白い十字に咲く日陰

喜寿の春過去は語らぬことに決め

キーボード候文も書いた指

金の力借りるとどこか漏れてくる

不況風寒い訓示を聞かされる

過去は過去明日へ翔びたい竹とんぼ

プランコを揺すって見えてきた自由

生きていた喜び一つ餅の味

父偲ぶ一語一語が今生きる

かけ違う釦ひとつを抱いて秋

和歌山市

鳥取県

弘前市

出雲市

大阪市

和歌山市

和歌山市

岸和田市

豊中市

松山市

鳥取県

町田市

八尾市

奈良市

高石市

富田林市

竹原市

島根県

倉敷市

細川 稚代

上田 俊路

村田 善保

板垣 草丘

神夏磯 典子

山田 高夫

堀端 三男

島崎 富士子

吉田 あずき

谷 真風

林 露杖

竹内 紫鏑

吉村 一風

米田 恭昌

浅野 房子

片岡 智恵子

岡本 清水

石飛 水煙

小野 克枝



蚊も蠅も一人ぐらしの友である
 傾いた日もありました夫婦独樂
 すんなりと嫁かれてからの広い部屋
 筈の一尺伸びて生き残る
 ばらを打つ愛の終りの一雫
 生き方に父が一杯朱を入れる
 さりげない愛で埋めてゆく余白
 夫婦別称私は誰の子だろうか
 どんぐりころころ君と僕とは同じ枝(谷垣史好を偲ぶ)
 人妻として心得る川の幅
 稲燃える津軽が燃えるそして冬
 恋終るりんごに齒型つけたまま
 よろこんでよいのか愚息に見おろされ
 太陽と約束があり早寝する
 青春の燃える血を説く燃える人
 軋む日もあった線路を振り返る
 倅せの証無沙汰の日が続く
 今やつと亡母のわだちへ掌を合わす
 水にまで制限されて生きてます

八尾市	宇部市	和歌山市	京都市	富田林市	藤井寺市	西宮市	仙台市	藤井寺市	五所川原市	和歌山市	今治市	大阪市	茨木市	高槻市	竹原市	西宮市	七尾市	
宮崎	平田	福本	山海	和田	吉岡	門谷	川村	笠原	西出	加藤	木本	月原	渡部	井上	川島	林井	松高	
シマ子	実男	英子	友熙	維久子	美房	たざ子	映輝	吸江	楓楽	彩人	朱夏	宵明	さと美	森生	諷云児	菁居	はつ絵	秀峰



子供の瞳大人の恥部を突いてくる
 命なりこの秋にして雲のいろ
 薊ゆれ富士百態の散歩道
 齢ですか忘れましたわピンク着る
 長い道でした花野がみえて来た
 今日も又あの日の船を待つ浜辺
 起死回生リングの色が美しい
 補聴器がだんだん世間狭くする
 発信機巻かれた首と知ってない
 うっとおしい顔して席をつめてくれ
 回り道してよかったと妻が言う
 愛情に疑いはない豆を煮る
 良いことが毎日続くから怖い
 茶をわかすことで始まる私の朝
 雪柳だれかかくしていませんか
 水の鳥火の鳥も飼ひ生きてゆく
 折鶴に息吹きかけて窓開ける
 老け込まぬために妻には言えぬこと
 遺産分け意気込む女のマニキュア

岸和田市	唐津市	吹田市	出雲市	米子市	鳥取市	寝屋川市	松山市	羽曳野市	西宮市	鳥取市	京都市	京都市	香川県	米子市	吹田市	富士宮市	守口市	熊本市
福	久	井	石	中	西	里	宮	田	瀬	武	松	松	川	茂	茂	渥	森	有
浦	保	上	倉	井	原		尾	中	尾	田	川	川	崎	理	見	美	川	働
勝	正	照	芙	ゆ	艶	小	み	透	六	帆	芳	杜	ひ	高	よ	弧	ま	芳
晴	劍	子	佐	き	子	路	の	太	郎	雀	子	的	かり	代	志	秀	さ	仙

美しい錯覚でよし男と女

西宮市

奥田

みつ子

青空にむかい自分を褒めてやる

大阪市

宮本

欣史子

冷える日は本と炬燵があればよい

松原市

北野

久子

一人暮しいつでもお湯が沸いている

大阪市

鈴木

節子

黄昏の長い廊下が胸にある

島根県

松本

文子

生きるとは水を汚してばかりいる

大阪市

小出

智子

拾四台豪華に駆ける唐津曳山^{やま}

唐津市

筒井

朴竜

賞味期間過ぎて夫婦の味になる

羽曳野市

吉川

寿美

風誘う食欲誘う月に酔う

大和郡山市

坊農

柳弘

横糸の強さで生きて生かされて

岡山県

矢内

寿恵子

へ理屈とパフォーマンスで生きのびる

鳥取県

谷口

次男

この国に生まれて好きなさくら色

倉吉市

淡路

ゆり子

損だ得だと裸で生れ来しものを

八尾市

高杉

鬼遊

仲よしのままで夫婦をしています

八尾市

高杉

千歩

毒くれるいい友達をもっている

出雲市

岸杉

桂子

声変りした少年が面映ゆい

鳥取県

中原

汲香

一番重い水甕だいて生きている

鳥取県

中原

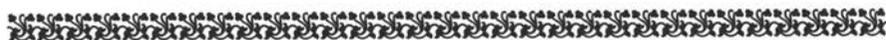
諷人

ビックリ箱に私の影を入れて置く
蟹の甲羅に深い悩みの跡がある

鳥取県

中原

喜与志



すくすくと育つ葉が母にある

一日がこんな長い妻の留守

遠い記憶ある街角に立ち止まる

温い言葉へ涙もろくなり

このように心に梅がほころぶ日

赤い血の流れるいのち曼珠沙華

燃料切れ不時着したか無人島

君だけは分かってくれと悪い酒

慎重に角を曲ったカタツムリ

わが影も直立不動の日を忘れ

慶びの日はゆっくりと陽が昇る

文恩の師の懐かしい声を聞く

聞き馴れた声が味方をしてくれる

しあわせを追いかけているいそがしさ

月欠けて満ちてゆっくり生きてます

今降りた山に納得して帰る

火の粉少し被って友だちと別れ

明日をまた軽い気持で待っている

初釣りの波止で夕陽を掬いあげ

富田林市 藤岡 花梢

藤井寺市 中島 志洋

和歌山市 岩本 美智子

岡山県 横山 一声

大阪市 町田 達子

八尾市 片上 英一

大阪市 寺井 東雲

大阪市 故神保 拓生

出雲市 久谷 まこと

島根県 小砂 白汀

出雲市 竹治 ちかし

姫路市 植村 客遊子

堺市 楊井 二南

堺市 河内 天笑

堺市 河内 月子

米子市 林 荒介

米子市 林 瑞枝

米子市 青戸 田鶴

平田市 久家 代仕男



会うたびに美しくなる君は女優

受験子の窓に不発の弾がある

ワープロに春の句ばかり覚えさせ

舞い上がる風船無数 六甲おろし

すぐ真面目な母が踊りの輪の中で

逢うて足る胸の渚に寄せるもの

りんどうの淡紫に亡母を恋う

飛鳥路に悲恋をかばう風のうた

終戦日 人それぞれの暑い夏

正論へ眼だけ賛成多数なり

たっぷりの墨で大の字書いてみる

闘えば負けそう相手は男前

石に腰下ろして秋と話してる

欲捨てた煙の出ない玉手箱

ころろ重き日の 沈まない太陽

紫外線カットの日傘 原爆忌

煮こぼれる人を見送る冬の蓋

千匹の鶴を墨絵の中で飼う

踏鞠踏む阿形吽形人間座

竹原市 小島 蘭幸

倉吉市 最上 和枝

岡山市 川端 柳子

倉吉市 渡辺 独歩

岡山県 山本 玉恵

島根県 佐々木 鳳笙

吹田市 藤村 夙女

泉佐野市 阿萬 的

池田市 岡本 吉太郎

寝屋川市 江口 吉度

岸和田市 岩佐 ダン吉

岸和田市 高須 金太

西宮市 西口 いわゑ

松原市 小池 しげお

尼崎市 田中 薫

豊中市 安藤 寿美子

富田林市 池森 森子

堺市 板尾 岳人

豊中市 橘高 薫風

山 川 阿 茶

東 野 大 八

私は先天的の独り者らしく、四緑の酉年は後家星だそうで、本名の初子も十格で十という数は完全を意味し、外から入る余地がない。それで男性も受け入れられず、弾いてしまふのだそうで、八卦でも姓名学でも四柱推命でも全部後家、即ち一人でおらねばならぬ運命だそう、もし主人があつてもマイナスになつてもプラスにはならず、女であつても男のような仕事を持つて一生働かねばならぬ運命だそうである。

縁談へ見せた手相は後家の相で、これが私の宿命らしい。

一人おつて気楽とんぼで、その上嬢ちゃん気分がぬけないから若く見えるらしい。あんまも肉体的にも二十年若いという。まアお世辞半分としても十年は若いらしい。

その代り叩きやみの食いやみで、その点、細いと思わぬでもないが、プラスにならぬ宿六ならあつてもなくても同じこととあきらめ切っている。

仕事はあるし、多方面に興味はあるし、ノイローゼにもならず、男性ホルモンの注射で発作を押さえねばならぬ必要もなかった。しかし、争われぬもので

男みな阿呆に見えて売れ残り
女同士男飼育のことに觸れ

共学の一番一番女の子

花ちゃんに泣かされてくる男の子

お家はんの鶴の一声皆だまり

というようなダイアナコンプレックスめいた句が出てくる。

生活力がなければないで、女は駄目だと馬鹿にされ、一人でどうにか向うをむいて歩いておれば、やれ、パトロンがあるの、二号じゃあないか等しい世間である。昭和二十三年まで両親が揃つていて、二十四年に父を失つてからは文字通り一人切りで、毎年税務署が同情してくれる。

男には至る所に青山ありで、旅の恥はかきすてとか何とかいい方便が沢山ある。しかし女の場合、殊に私などブライドが高いのか、しようむない男は嫌である。

注文が沢山ある。自分の理想に近い男はウロチヨロしてないし、先方もノーサンキューであろう。結局は相合わぬ男性対女性の平行線である。殊に面子があつて多少の財産でもあれば警戒心も手伝つて、易々とよろめきも出来ないじゃありませんか。

女世帯猪口はお汁の味見だけ

大晦日煮てもたかず小唄弾き

こんな生活をしているので気安いのか、少しも淋しいとは思いません。

何を食べようと何時帰つて来ようと、どこへ行こうと好き放題、文句をいう人が居ないのだから気ままになる一方である。

「何物にもわずらわされん生活で、これ程結構な事はない」

と路郎先生はおっしゃる。しかし

行末を思う日もあり朝の風呂
こんな句の出る時もある。

長文の引用で恐縮だが、これは昭和34年10月号の『川柳雑誌』特集「わが独身の句」山川阿茶一の抄録である。明治30年5月13日生れだから、このとき六十二歳である。

字数はこの倍もあるのだが、強がりをつけてもそこは女、独り身のペーソスがどこなく漂っていた。

子に縁の薄い運命を気楽がり 阿茶
というのがそのエッセイの締めくくりの句である。

「父君は西区で皮膚科のお医者さんで、ご本人は東京女子医大卒、並ぶ者なき才媛で、古いサンデー毎日に大きな写真入りで、前途洋々、艶っぽい話は山ほど待っているだろう」と書かれたそうである。吉岡弥生先生の愛弟子で、才気煥発、教授達も舌を巻くほどであった由、男を男とも思わない面があったとは同窓生の女医さんたちの話。『男みな阿呆に見えて売れ残り』の色紙を丸額に入れて、診察室に掲げておられました。『育児書の通りに弱い子を育て』という句も面白いですよ」と、その短冊をみせて頂きました。

一か月に一回は、女性ホルモンを注射させ

られました。診察台にうつぶせになり、お尻をクルリとまわって、注射位置を指示されるのでした。(岡本久三書簡)

右の人物は、山川皮膚科医院の薬剤師であつたらしく、なかなか阿茶先生の慕しぶりにくわしい。

院内にお稲荷さんをお祀りして、毎月一日十五日には、ハンペン、ごぼうの天ぷらなどを欠かさず供えていられたほか、すみ色判断のおまじないが好きで、生駒の聖天さんによく詣りされていたとか、川柳仲間には、武田勇宗(元田辺製薬重役)、永井丸石製薬専務とかが茶坊主なみの側近だったとあるが、殊にウマが合ったのは、日本橋の平尾猛という小児科医さんで、時折二人で堀江新地で芸妓をあけてのドンチャン騒ぎをやらかしたらしい。また女医の友人は、川維同人の太田良子。この阿茶・良子の書簡形式のやりとりが川維・昭和37年2月号にある。

「やはり女医タイプといえば阿茶さんのような方がピンとくるでしょう。看護婦さんとお二人だから二六時中先生とよばれていらつしやるでしょうが、私なんかいい年になつてチョコカチョコカしている。子供と遊んだり、喧嘩したり、夫婦げんかもよくやるし、時には買物カゴ提げて市場へ走ることもある。」

女医でつかと足の先まで見直され 良子

「お互い女医として開業している二人。私は皮膚科、貴方は眼科、することはちがつていても何か医者として共通なうれしき、かなしき、なまげなき、しゃくにさわる事等々があるはずですね。(中略) 医者になつてあなた、よかつたと思われませんか。私も罹災後は免状を役立て、世渡りしてきたのですけれど医者はあまり好きではありません。いつも思うのですが、おいしい物を食べ、きれいな着物をきて旅や芝居を見る。その欲望のための出費は自分なりに覚悟の上だけれど、予期せぬ病氣、願わぬ病氣などでお金を払つてもらふその仕組みが嫌なのです。無報酬だったらどんなにいいだろうといつも思う。」

大した苦勞もせず治療して、大変感謝されて頂き物をしたり、また、大変骨を折つてあげたのに薄情なやめ方をする。健保を大変ありがたがつて遠慮がちの人、逆にあつかましい自分本人の人、十人十色でやりにくいですね。そこで女医だとあつてはうかぬ渡世ですね」
平成4年1月11日死去。享年94歳。法名釈尼妙雲。

尖端をゆく小嬢さんで売れ残り 阿茶

葬式に来て茶柱のたつ茶碗

▼次号は「西出 栄」

柳籠裏三篇研究 (二十丁)

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博

鈴木倉之助 故岡田 甫

意があるとすれば、夢うつつの間に股間からよつきり頭をもたげた所を仲間に発見され、離されて騒ぎになったのであろうか。

331 野郎の御蔵ラ子朝ッぱらのさわぎ 五扇

岩田「御蔵子」は「御子良子」のことであろう。伊勢大神宮につかえ、神饌を供えるおとめであり、潔白な少女でなければならなかつた。

「野郎の御蔵子」とは何をいうのか全くわからず。句意不明であるが、あえて想像をたうましくすると、少年の御蔵子で、朝一物があばれ出して困るとの下がかり。

青木「野郎の御蔵子」は稚児のことではなからうか。「朝ッぱらのさわぎ」に朝立ちの

佐藤衆道未経験の丁稚が、ふとどきな手代などに水揚げされたのではなからうか。朝になって、丁稚が泣くやらわめくやら、てんやわんやの騒ぎになったのではなからうか。七久保「本句の野郎は女の子・少女という意味の「女郎」からの類推で用いられた語で、一般的に「男の子」と考へるべきではなからうか。

「御子良子」は少女とのみ考えがちだが、「塩尻」に「今俗書子良一式所謂童男童女此歟云々」とあり、子良の館には少年も居たことがわかる。「御子良子」は七、八歳から十

三、四歳までの少年・少女であった。

「御子良子」の先行吟に芭蕉の吉野の紀行文で有名な「笈の小文」に、

御子良子の一もとゆかし梅の花
がある。「朝立ち」の説に賛

鈴木「小生は疑問句としておく。

岡田「御蔵子（御子良子）」の名称は伊勢神宮のそれを明示している。解はそれからはずれるわけには参らず。したがって七久保氏が例示された「塩尻」の文献もあり、大神宮に奉仕する男児と解するより仕方がない。やはり青木氏のいうように朝立ちが正解か。

332 はねるのをくんと欲な猫もらひさ、波

岩田「燕居雑話」巻之五（天保八序）に、
〔不捕鼠猫〕猫之善捕鼠者日常睡、終日跳躑者必不捕鼠——俗にいふ鼠とらずは能くかけあるくと云は何国も同じこと也。麒麟猫の名も実に雅にして且有味といふべし。

とある如く、はねる猫は鼠を捕らない代りに「麒麟猫」という名がある。そういう目出度い名の猫をもらおうというのが「欲な」ことなのであろう。

西原「礎稿賛」この作者は「キリンネコ」を

二十丁

知っていたと思ふ。

佐藤 礎稿ご明解。りっぱです。

鈴木 贊、岩田さんお手柄です。

岡田 同。

333 時斗屋のかんばんミへた通りなり 五扇

岩田 酒屋の看板は杉の葉を束ねたものであるとか、湯屋の看板は矢であるとか知らない人が見ると全く商売と関係のないものを目印としたものが多いが、時計屋の看板だけは見たまま、即ち時計を形取ったものであるというのであろう。その実際の資料を見つけることが出来なかつたのでご教示を得たい。

西原 贊、小生も時計屋の看板を尋ねたが見つからず。句からは、そのまま時計の形が画かれていたものと思ふ。

佐藤 時計屋に看板などなくてもよいのであろう。店先に飾つてある時計を見れば誰でもすぐにそれと分かるということではないか。

『人倫訓蒙図彙』に「時計師」の挿絵がある。これは店先の図かと思われるが、時計師のそばに、火の見やぐらのような時計が二台置いてある。

鈴木 礎稿に贊、小生も看板は知りません。

岡田 解は佐藤説のとおり。表に看板を出さ

ずとも、店内の時計で時計屋とわかる。

334 生れかわつて剃髪を五郎する 芹丈

岩田 箱王が得度の式をせず、箱根を下りて元服した事を詠んだものであろう。

主題句は、その元服を詠んだもので、本当ならそのまま剃髪をして、僧侶となるべきに、これはさにあらず、「生まれかわつて剃髪した」、即ち「元服した」との句意であらう。

紀内 礎稿に贊し難い。曾我五郎時致は生れ變つて武田晴信入道信玄になつた、との俗説がある。

箱根にて剃らぬかわりに甲斐で剃り六
西原 紀内説に贊、

富士の前で死んで後へ生まれ
佐藤 同。生れ變りの俗説は、いろいろとあり、この信玄は、さらに由井正雪に生まれ変わる。また、熱田明神が楊貴妃に、等々、さげばかなりあるであらう。

鈴木 紀内氏ご明解。

岡田 同。

335 琵琶と摺鉢ハどいふ縁だらう 五帆

岩田 孝霊五年に、陥没して琵琶湖が出来、その土が盛り上がつて、富士山になつたとい

う。それを詠んだ句である。

物には、それぞれ取り合せの縁があるものなのに、琵琶と摺鉢はちよつと聞き慣れぬがどつち取り合せだらうと謎めかした句である。

すり鉢をふせたやうだにびわが出来

孝霊五あふむくものにのぞくもの

鈴木 ただそれまでの句です。岡田 同。

ひょうせんきょう 第一回 紙上川柳大会

作品 「雑詠」2句(未発表に限る)
選者 小松原爽介(時の川柳社)

泉 比呂史(ふあつすと川柳社)
春城武庫坊(川柳塔社)

応募料 1000円(協会員は無料)
締切 1月31日(月)

◎応募方法は原稿用紙に2句と住所・氏名・電話番号を書いて左記へ

応募先 神戸市長田区平和台3-15-1
藤本静港子方 兵庫県川柳協会

秀句鑑賞

同人吟 小出智子

—12月号から

恋人のように親子のようにいる

小島蘭幸

日々の暮らしの中で、極めて多忙であったり疲れたりしている時は、作句も思いに任せず、何故こんな辛い思いで川柳を続けなければならぬのかと考え込んでしまう時がある。休みたい時には休めばよいではないかという甘えが先立ってしまうが、そんな自分との葛藤の果てに、佳句を作ろう作ろうとしているのに気付き、今の自分をありのまま表現すればそれではないかと思ひ直して、まるで石ころで塔を積みよ様に、うまくゆかないけれど、仕上げた時の喜びが忘れられずに、毎月の作句を重ねています。

じっくりと句を鑑賞させて頂いていると、思い掛けない作者との出会いがあり、感動を頂けることをとても幸せだと思っています。

止ってる時計の下で待っている

安藤 寿美子

「止ってる時計」とは作者自身の停止した時間だ。時計に左右されない時間がたまにあるのもよいはず。そう考えると待たされる苛立ちも薄らいでゆくというもの。

蟻螂の斧ふりあげて声の欄

石川 侃流河

新聞の「声の欄」を読むと、人の考え方の違いをつくづく思う。中には非常に共鳴することもあって、拍手を贈りたい思いにかられる。だが、所詮は蟻螂が斧を振り上げているようなものだ、三者的な見方もおもしろい。

石ころ一つ蹴とばして飲みにする

江原 とみお

男の人がお酒を飲みに出る時の心境が、女にも判るような気がする。「石ころを蹴とばす」にこの作者の心の動きがあり、心憎いほどの男っぽさがある。男でなくては、いやこの作者でなくては創れない句だと思ふ。このように微妙な心の動きも、川柳のころろにはかならない。

来年の事は鬼にもわからない

田中 透太

来年の事を言うと鬼が笑うとよく言われるが、現実はずっと厳しく、来年の事など誰にも分かってはいない。昨年、年賀状を頂いた人が今年はずも黄泉の国へ旅立たれているということに、人の命の果敢無さをつくづく感じさせられる。平成五年は、川柳塔にとって大切な人達を失った。省略された言葉で、川柳のみ表現出来る軽味の句にされた。

湯舟から孫を頂くバスタオル

淡路 ゆり子

何度読んでみてもほのぼのと喜びの伝わってくるような。お湯から上がったばかりの湯気の立つピカピカの赤ちゃんを受取る様子が見事に表現されている。孫の句は艶がないとよく聞かぬが、こんなにも生き生きした孫の句は少ない。

東京の味大阪の味うちの味

山本 希久子

とてもぶつさらばうに詠まれているようにのに、「うちの味」と纏められているところがこの句を捨て難いものにした。一つ屋根の下に育ったお子さん達が家庭を持たれると、それぞれ異なった家庭の味を作ると、それぞれ感じられたのではないだろうか。それはそれで幸せなことだが、やはりうちの味が作者にはびつたりなのだ。

無器用な恋で手袋編んでいる

新 正子

手袋を編むという動作からして、如何にも不器用な恋だ。セーターなど編んでアレセント出来るほどこの恋は進んでいない。清純な女性の初めての恋かとも思えるが、女性はこの頃が最も美しく、幸せな時だとも思う。編物をする若い女性をつまぐ捉えている。

硝子窓にグラスと書いてある新居

小野 克枝

木の香りのする新居は、何処を見ても夢が広がってゆく。「グラス」と白墨で大きく書かれているだけなのに、作者には強い印象となり、喜びに繋がっていく。

鶴橋で買った包みがよく匂う

玉置 重人

テレビ等で時折紹介される大阪の鶴橋は、韓国の人達が多く商っている街である。この街は非常に庶民的で何でも安く、気軽に買物が出来る。美味しくて安いので有名な焼き肉屋などがあって、夕方になると長い列が出来るそうなる。買って帰り、家庭で楽しむ向きも多いと聞く。ちなみに、環状線鶴橋駅のプラットホームへもその句はブンブンとして、勤め帰りの足を誘うそうなる。鶴橋という地名を浮き彫りにされた一句。

秋の野をゆるりゆるりと老いんかな

矢内 寿恵子

都会の生活と違って耕す土地のあるのは幸せなことだ。畠に出て作業をすることによって健康にもよし、物を作る楽しみもある。ゆるりゆるりと老いて行くには実によい環境でもある。何の屈託もなさそうなる、のびやかな表現をされている。

鍋の蓋少しずらせて長電話

田中 輝子

雑詠には日常茶飯事が詠われて当然だが、長電話となると言い尽くされた感がある。ところが、「鍋の蓋を手ずらせて」というようなちよつとした動作が、この句を引きたてて内容のあるものとし、平凡でないものにした。

紅鮭の切身と海の話する

大橋 政良

紅鮭の切身の前に、どんな話をされたのだろう。北海道石狩地方に住まわれる作者と鮭の絆は深く、きつと物語は尽きないことと思う。都会に住む者には計り知れない世界のあつたことを思い知らされる。

妹と歩いて誤解された町

佐々木 鳳笙

誰にでも淡い思い出の一つや二つはあるものだが、作品にするまでにはなかなか思いが至らない。久し振りに訪う町で遠い日の思い出が甦る。この句の「町」が鮮やかに表現されて、静かな町の佇いまで想像させる。

若い芽を伸ばす垣根を低くして

内芝 登志代

草木の若芽に警えられて、人を育てることも通じる。垣根を低くするとはよい言葉遣いも通じる。垣根を低くするとはよい言葉遣いも通じる。垣根を低くするとはよい言葉遣いも通じる。



黒川紫香選

静岡市 小木久子

名古屋市 藤井高子

窓の灯がみな幸せと限らない
余暇利用充実させる趣味の道
思ひ出の手紙 落ち葉と焼き捨てる
外面がよすぎて家でくたびれる
深追いはよそうみじめになるばかり

広島市 森田文

見えるまで双眼鏡が鳥を追う
たちまちに霧が目かくしする蔵王
東北や視野の果てまで稲の波
横を向く人につられて横を見る
牛と豚のトラックに合う悲しい日

東京都 山口新子

通勤電車私の掛ける椅子がある
好物をひと口残すほどの別れ
盃の酒に浮いている慕情
顔洗うゆびに夕べの泣いた跡
京で逢い京で別れる茶はもみじ

心地よい疲れしあわせ噛みしめて
裏切りはなかった ななかまどの赤さ
何を言っても炎の耳に届かない
デパートの鏡は世辞にこと欠かぬ
即答をしようとするから茶にむせる

熊本県 大川幸子

細切れの時間を綴って編むセーター
おだやかな言葉で文句つけてくる
非は相手なのに世の中難しい
精一ぱい現実路線走ってる
するいのか匿名というかくれみの

広島市 流奈美子

元旦や昨日と違う鳥の声
微笑めばほほえみかえす福寿草
きらきらと未来の星へ産衣着す
花の波浴びて私も花になる
愛を着るとっても温いと思う

富山市 島 ひかる

還暦の夫へふかしたお赤飯
どの顔もわたしに似てる羅漢さま
微笑めばほほえみ返す鬼子母神
名が並ぶだけで嬉しい席がある
少年の心へ少女で逢いにゆく

富山県 高島 五月

ご自慢の容姿へ秋がしのびよる
秋深し再起不能の夢をみる

野の花がしっくり似合う我が家です
母逝ってブレイキ役がもういない
奥尻の海コップがひとつ浮いている

宝塚市 永田 暁風

勲章を飾るあたりへ棺の菊
椅子が一つ壁に向って置いてある
帽子掛けでいつまで待っているつもり
女の群へ少し油断をして這入る
敬礼して征って還らぬ遠い海

尼崎市 田辺 鹿太

泣いた児の機嫌とつてる泣かした児
お茶漬でいいかとヤツも独り者
もう少しましな科白で口説いてよ
雨の齋場テントの外にいる他人
揉み消したはずの火種と出会う街

摂津市 木下 道子

命を賭けた恋は昔の日向ぼこ
見晴らしのきく墓地気持良さそうな
挑戦を体よくかわす平和主義
別々の思いに耽る真珠婚
母の周りの空気はいつも澄んでいる

西宮市 亀岡 哲子

車椅子押す娘らの髪束ね
コスモスに埋もれて遊ぶおさな髪
駅へ出る道を尋ねて萩の坂
しなやかな心で許し合うて秋
大声で笑うてみよう瀬戸際だ

西宮市 牧 淵 富喜子

叱られてブランコぴたり止まってる
ごきぶりが出たと階下から呼びにくる
こんがり魚が焼ける安定期
途中下車出来ずに悔いの荷が増える
一隅のバラ枯れている虚脱感

熊本市 宇野 照代

家計簿の一行跳ばした無駄使い
野仏のリボンになった赤とんぼ
少し世帯じみて娘の里帰り
お日様の愛が届かぬビル谷間
特急で来て乗り換えて待たされる

大阪市 江城修史

生涯を娶ることなく逝きし友(谷垣史好さん逝く 三句)

惜別の命よ生きて欲しかった

三十六キロ軽い体が逝きました

長びく不況心豊かになれますか

らせん階段一つひとつにある掟

尼崎市 森安夢之助

札束の魅力磁石を狂わせる

青春の汚れを消した跡がある

惜しみなく財布を開けて孫を待つ

夫婦独楽その後はうまく回ってる

野仏に誓いを立てて国を出る

静岡市 沢田きん

文通で四季折々を娘と語り

ぎっしりと柱暦にある予定

薄化粧女ごころを胸に秘め

嫁姑やはり他人だなどと思う

言い返す言葉暫く待つゆとり

久留米市 鶴久 百万両

亡父の絵がだんだん褪せていく焦り

指人形に男の罪をあばかれる

幸うすいおんなと夢を語りあう

軍歌には弱い男の秘話をきく

守銭奴の哲学さすがだと思ふ

八尾市 大内朝子

打ちあげた花火不発のままです

反り合わぬ器の中で四苦八苦

薄味にすっかり慣れてある余生

老父さんが逝って淋しい釣り道具

藤井寺市 高田美代子

まるまると影もふとって秋です

大根の煮える匂と冬に入る

ライバルより先に好きだと言つてある

張り替えた障子へ初春の陽が白い

柏原市 大峠可動

八百号 天を貫く月日なり

ふるさとの笛吹きたくてまわり道

道連れの妻と一体尊語り

史好逝くなんと悲しい秋だろう

米子市 足立由美子

私と心ゆくまで話し合う

雲一つない青空を描いておく

気がつくとき老いの話になつて

おみくじのいいとこだけを信じよう

和歌山市 杉山精子

猫舌の男と食べる夜啼きそば

向い風に妥協しだした膝頭

安らぎをくれる呑気な母の笑み
人間を見下している猫の髭

似た者の夫婦で負けぬ口喧嘩
二枚目の役者にもある裏表

尼崎市 的場 十四郎

残り火は歩幅合せて燃えてみる
栄冠のコップうれしい秋日和

尼崎市 尾宮 弘治

不器用な愛が背中で波をうつ
板前の夫に厨褒められる

子の無理を父の帽子が許してる
ネクタイに法被祭りの奉賀帳

尼崎市 山本 すみ

顎を出す者などいない蟻の列
反省の色は見えないうす笑い
相談に来たのか正座崩さない
声出して自分に聞かすように読み

出雲市 原 章峰

目の前の大阪駅を見失う
直訴する言葉を立って聞いている
金魚売りも風船売りも四苦八苦
米寿からわたしの歳を引いてみる

熊本県 岩切 康子

異常気象 未熟なままに土に戻る
旧道を歩いて昔の顔に逢う

挨拶の自己PRはほどほどに
お見舞が決って頼る花屋さん

八尾市 生嶋 ますみ
レントゲンには写らない恋の傷
紙屑にされるチラシをメモがわり
ちよつと気を許すと弾みつく財布
愚痴こぼしあつてひとときコップ酒

横浜市 菱田 満秋
奥入瀬は紅葉の色で流れる
救急車つぎつぎ眠れぬ夜を襲い
ガンという噂を追って計報くる
撫順市で生れ撫子の花が好き

西宮市 山本 義子
午前四時 松本駅はみなりユック
山小屋のおやじはひげがよく似合う
神のごとく穂高は赤く朝日もえ
ななかまどの赤さは歳を忘れさせ

兵庫県 森脇 和子
毛皮ショー溜息ばかりの帰り道
彼を追う意見が少うしくい違う
峠越すまではと折鶴身を案じ
ひとり旅ひなびた宿の湯が溢れ

貝塚市 池田 寿美子
現実と夢の接点にさわがれる
デパートの下見に一寸胸算用
渡し舟歴史とロマンに包まれる
スパイスの効いた言葉に甦る

旭川市 朝倉大柏

でこぼこを歩き続けて二人きり
ゼニ出しただけでは溝が埋まらない
ふるさとに来てふるさともう逢えず
善人が善人ばかりと思ひ込み

今治市 渡辺南奉

本が好き眠りぐすりの役もする
マイペース功を焦るとけつまずく
なみなみと酌ぐから甘えぐせが出る
以心伝心おんなじとこにサロンパス

西宮市 岡本道子

白旗のごと布巾干す北の窓
不器用な箸が逃がした旨い薯
スケジュール真っ白 風についてゆく
五体みななのうのう遊ぶ秋三日

松山市 丹下美津子

スーパーで生活の顔をのぞかれる
冗談が本当お嫁に参ります
皇后さまも伊予路の風にいたわられ
お体一杯お言葉にして美智子さま

鳥取県 土橋睦子

日曜日ゆっくり熱いお茶飲んで
整持って建具屋さんがきてくれる
大晦日に鏡しっかり拭いておく
珈琲飲む少しリッチな雨やどり

童唄落ちてる里の秋拾う

鳥取県 奥谷彩子

軒下のつるし柿に冬降りて
指切りで恐い約束して帰る
脇役に徹する二度の靴を履く

松江市 松浦登志子

脇の下汗ばむような人に会う
鉄アレイ励む妻みてドア閉める
領分を侵さぬように嫁姑
胎教に名曲ばかりきかせてる

大阪市 勢理客 トミ子

冷害に稲焼く煙ゆれゆれる
いつからか愛に凭れてばかりいる
逢いたいとふと思うとき椿落つ
確実に見返りがある袖の下

吹田市 馬淵光子

心付けやっぱり相場あるらしい
育ちより野良には氏が見え隠れ
出迎えをしてくれるのはペットだけ
先週の運勢見てから買う次号

福岡市 井崎ミサ子

こんちくしょう思えど顔は笑つとく
いつからか小言になつてゐる話
健康法 出来る事だけやってみる
ありふれた台詞しかないほめ言葉

弘前市 一戸ツネ

おとぼけがお上手ですね社長秘書

四季の花にそれぞれ違う花ばさみ

残るいのちやさしく生きるわらべ唄

吹き溜まる枯葉の音の私語をきく

酒田市 永澤裕子

白鳥を持って余してる米不足

活性化軍艦マーチだけの街

逢いたいと来てた賀状が訃に変わり

台本も無くそろそろと年が明け

熊本市 北川一進

カレンジャー師走の風も忙しい

表現にさすがセンスのある句調

無駄一つ残さぬ料理人の腕

恐竜は孫がくわしい話振り

寝屋川市 宮崎菜月

小説に染まった顔で湖に佇つ

ここからは佳境に入るしおり草

双六の上がりは花咲婆さんで

根性で命の日めくり突き進む

寝屋川市 北岡波留吉

スパイとは気付かず部下にした不覚

先ず味方だまし重大決意する

色眼鏡で嫁を見るから嫌われる

カラオケで憂さ晴らしてる恐妻家

大阪市 三浦千津子

土壇場で女の腰が座っている

さて余生 手向う矢など持っていない

疲れをいやす丁度いい雨が降り

浅瀬ばかり追うと人生味けない

尼崎市 吉永伊三郎

マゼランが死んで地球が丸くなる

言い負けたうつぶん捨てに縄のれん

頬つぺたにチューして孫帰って行く

孤児の眼に祖国は遠い飛行雲

尼崎市 湊修水

湯豆腐の湯気のむこうに不況風

よい米は米屋酒屋にしてやられ

物置の買い出しリュック出番くる

札束でゼネコンと野党かきまわす

尼崎市 河津正治

会釈する目が何事か言っている

聞いてない振りして老母が返事する

相槌が良くて説明興に乗り

補聴器をはずし内緒の話する

尼崎市 岩倉キク子

遠い日の思い出誘う冬景色

春夏秋冬 軽い財布で明け暮れる

出来のよいコビー本物馬鹿にして

味をみてうなずいていた亡母の背な

寢屋川市 富山 ルイ子

届かない背に嫁の手でサロンパス
菊花の契り終章看ると決めている

毎朝の散歩 仏に独り言

八起き目を石の達磨に励まされ

高槻市 守先伸子

燃えるならポインセチアの赤ほどに

今すこし生きてる心算 墓洗う

見栄張った嘘が嘘呼ぶクラス会

夕暮れに人待ち顔の木守柿

宇部市 中村三良

きな臭い噂話が部屋に充ち

雑魚なりの歯ぎしりそれも闇に消え

詮索は止めて何時ものぬるい風呂

仕上げは矢張り茶漬けで妻とさし向い

河内長野市 水谷正子

達筆の嫁が賀状を書いてくれ

合格を願う絵馬さえ狭き門

シャム猫も三代目には野良となる

引越しの荷物の中でかけうどん

香川県 辻上よしみ

心待ちしていた女にやっと逢え

握手した手の温もりを忘れない

初恋も昔話の中に生き

貴方だけ心の窓をそつと開け

和歌山市 森 茜

眠れない夜は眠らずそれも良し
指尺で孫のセーター編む灯り

悩みごと消えたかんと沙汰がない

おいしそうな椅子へ食指をうごめかせ

香川県 堤 くに子

傷ついた心に優しい里の風

嬉しさを伝える電話軽い声

三つ子でも持ち合わせてる二枚舌

告白をされて今夜は眠れない

綾部市 藤田芳郎

詫び状に誤字が多くて許せない

ほどほどで良いとは無理な申しよう

年金へ孫が呪文をかけに来る

禅僧の眉に雪積む濡れ草鞋

高槻市 執行稲子

大往生なのに涙のとめどなく

人妻にこころを燃やすモラル無視

「お似合いよ」淡いブルーの花帽子

紅葉狩り空まで続く点と線

豊中市 松岡久留美

この話損と知っても断われず

弱かった父の残した薬箱

へそくりが貯った頃に見付けられ

子のくれた出湯の旅が身にしみる

島根県 松本聖子

深夜ベル間違いでしたてぼつと切れ

秋日和コスモス街道走り抜け

大声でどなっているのは空いばり

安物を買って並べてうれしがり

松江市 安食友子

余裕だねプロポーズならきつと来る

そう言えば箆筒にゴンを忘れてた

背くらべ孫に越されてうれしがる

標本に胡坐かいてる鬼やんま

唐津市 山門幸夫

仲よしと本気で喧嘩青い空

言い訳が通らぬ老妻の勸の訝え

サングラス外せば優しい顔になり

トンネルの窓の鏡で羽繕い

和歌山市 木村親路

吉も凶もいくたびあった床柱

きつとだよ指切りをしてあきらめる

断崖の上に年越すブルドーザー

サンタクロース煙突のない家ばかり

尼崎市 長浜澄子

父さんが帰る家中灯をつける

ミカン剥きながら話の先急かす

失言を庇い渦中にある孤独
昔話引き出すように柿を剥く

広島県 森川抜智

満中陰すんで陽気になるお酒

出張で覚えて来たのは阿波踊り

雨のため旅館キャンセルする不満

兵庫県 北川とみ子

ふんぎりのつかぬ話が風に舞う

不器用に生き喝采を知らぬまま

人並みに姑と呼ばれて茶をもらおう

和歌山市 山口三千子

虹の橋渡った母の一周忌

雨垂れが木魚のように響く夜

鴨鍋を炊いて矢鴨を思い出す

河内長野市 大西文次

左遷地も満更でない住み心地

御堂筋歩いただけの初デート

告白をすると言う手に騙される

今治市 村上久美子

人生相談やたら喜劇が多過ぎる

愛冷めてからが夫婦の正念場

誤算とはお互いさまのああ夫婦

大阪市 亀井円女

皺の数二分の一は子がくれた

老いるとはただ有難うで暮すこと

もめた日はお茶も無言で苦いこと

米子市 木村 春枝
ストレスは礫にまかせ飛ばします

玄関に見慣れぬ靴が脱いである
残すもの何も無いので良く眠る

出雲市 西尾 和子

ここだけの話いつしか風にのり

秋日和雲さわやかに流れてる

親切のやり取りをして日が暮れる

佐賀市 古川 かずのり

友情を荷物に思う負けいくさ

死にたいは生への未練合言葉

頂点で浮かれてみたいカタツムリ

姫路市 小井 里光

天高く私も高く日を送る

太鼓打つギヤルも一役買う祭り

吹き荒ぶ風は心を空にする

唐津市 市丸 はる子

あなただけを見つめて渡るかずら橋

おはようも配って犬と歩く道

幸せな今を魚拓に閉じこめる

静岡市 浅子 まつゑ

頑固さが取柄と言うが困りもの

喋るだけ喋り私の出番ない

ソプラノで百舌鳥がさえずる秋の山

枚方市 前 たもつ
悪友の呼び出しタイミング悪い

ここだけの話の声が大きすぎ
抜き立ての野菜を食べる贅沢さ

今治市 越智 青園

結び目がかたくて約束裏切れぬ

ストレスの袋も干して昼寝中

新しい家にも家風ついてくる

今治市 白石 サダ子

父の無口子がカムフラージュして愛し

土産物持ちきれぬまま買っている

隙間風ふさぐ友いて温い街

姫路市 丸尾 はる子

つなぐ手に心温めて歩を合わす

駄馬同士よくも続いた夫婦道

残り火よいつまで燻る火消し壺

尼崎市 中澤 向西

赴任地で支えられてる子の便り

やさしい娘運よく嫁に来てくれる

失言にそれは苦しい夜だった

尼崎市 向井 末貞一

常連は時刻違えずやって来る

ダイエット三日坊主で痩せられず

シャンペンの栓飛ばしての祝勝会

西宮市 菊池 トミエ
踊ります過去に悩みは振り捨てて

移り来て隣の猫に世辞を言う
カラオケも踊りも出来ず座ってる

枚方市 森本 節子

淋しさを伏せて済ました満中陰
ほめられた言葉は素直に受けておく
カルチャーの明日に備えておでんたく

八尾市 平川 幸枝

老眼鏡見つけて磨く布探す

一ぱいの酒が女に火をつけた

買物メモ見ながら年の用意する

鳴門市 八木 芳水

幸せは怒ってくれる父母がいる

片腕を下戸に預けた千鳥足

新聞は寝る前読むときめた主婦

熊本市 高野 宵草

無駄遣いしにゆくストレス捨てにゆく

お調子に乗せられ妻に袖引かれ

いい方に解釈せねば身がまたぬ

熊本市 遠山 夏生

老い一人ご用聞きでも来てほしい

真向いに我が山がある茶が旨い

ライオンも檻の中では眠り猫

兵庫県 西井 つや子
コスモスに嬉しい心を覗かれる

エプロンを変えて満ち足り草むしる
思いきりさんまが焼ける我が家です

兵庫県 円増 純子

花が好き花はいけずを言わぬから
年金で気楽な老後と思うたに
故郷へ帰る切符を握りしめ

高知市 桑名 知華子

幸せも中程なりか曇り空

来年の時間を友と予約する

茶づけ食べ今日一日を締め括る

相生市 中塚 礎石

一病息災 薬草の味信じきる

嫁にきたこけしに涙青い月

一人子を頼りにしてる核家族

寝屋川市 後藤 黎之助

新聞を賑わす騎手に夢を賭け

実らぬ秋おごる人間叱る天

孫の弾くピアノ聞けるか二十一世紀

寝屋川市 井上 すみれ

ふるさとの月はまだ兔が餅をつく

元旦や犬も神妙な顔をして

この辺でジョークにしようか怒ろうか

街路樹に林檎の実る伊那の町
大阪市 大河 未佐子

お隣が好くて住み替え踏み切れず
隅っこで沈黙してゐる出来る人

和歌山市 榎原 公子

満ち足りたラストへ星のシャンデリア

携帯電話それからまずい酒になる

漢江は濁りビルラッシュ カールラッシュ(ソウルの旅)

福岡県 本田 忠男

聞き上手叩けば響く箱を持ち

花の名は知らず花壇は妻のもの

近すぎて直ぐに届かぬ思いやり

出雲市 園山 かおる

政治家の汚職へ凍て付く冬の風

返事待つポストも茜に燃えている

奥さんと呼ばれて田舎も都会じみ

静岡市 永倉 柳華

解決は簡単お金で済む話

野次馬の中へ割り込む好奇心

浴衣着て市場賑わう旅の朝

和泉市 中川 楓

ふるりの八百屋の辻が消えていた

丈夫な子 後は放任しています

うれしい日どの辻も皆走りたい

剪定に道行く人が話しかけ
河内長野市 印藤 智子

天気など気にせぬ若い二人です
握手したその温もりを持ち帰る

神戸市 岩田 信義

米不足話題にしながらグルメ旅

禁煙の標示目につく煙草のみ

終電車 等間隔に席を占め

香川県 田中 ふみ

丹精が人を和ます菊花展

温泉に浸りしみじみ句碑思う

何となく老い行く気配身に滲みる

静岡市 大村 正雄

伝統の職人芸にある魅力

御朱印を頂き仰ぐ仁王門

ベレー帽気取って被る俄画家

広島市 中村 要

顔色を読んで程よく泣いてみせ

ティーカップ レモンの雫にほだされる

裏口であえば優しいお役人

和歌山県 村中 悦男

宅急便孫の注文入れておく

たわむれる孫と屈託ない時間

二人して孫が忘れた絵本みる

瞬間を大事に生きて今日の幸
岡山市 中 嶋 千恵子

人生の峠で見えて来た喜劇
へそくりを削りにやつて来る孫も

岡山県 牧 野 秀 香

春萌えて実れば秋に燃えて散る

先代に感謝の心で吊し柿

廃屋の庭にも秋が燃えて居り

岡山県 伏 見 すみれ

反対に歩いて故郷が遠くなり

遠来の客に都合を言うのとれず

終点に来て古里を恋しがり

八尾市 秦 正 子

大年だポチにも首輪新しく

冬空もやけに眩しい病み上がり

新品のコートで街へ出たくなる

島根県 武 島 ちよえ

不作でも二人の米は足りている

信号のない道行けば工事中

行商が試食の分は別に出し

米子市 小 塩 智加恵

印籠の効き目が失せた親子です

夫には値札見せない化粧品

おいおいと名前忘れた夫と居る

富田林市 山 原 昭 水

義理堅い賀状の文字が枯れている
束の間の殿様になる加賀の宿
この頃は七人の敵もういない

香川県 薦 沢 翠

お別れの握手はかるくかるくする

殺し文句を言わなくなった恋人よ

私はいいのあなたの濡らさないように

広島市 元 林 光 子

群生のコスモスに酔う赤とんぼ

夢素敵今宵はどなたがプロポーズ

思ひ出の唱歌うたって夜が更ける

寝屋川市 土 井 英 明

歌よりも派手な動きに鐘が鳴る

同業に道を聞いてる外回り

母ちゃんと大の男が呼んでいる

羽曳野市 芦 田 絢 子

医学書を見るなど医者に叱られる

終章へ残りページを確かめる

手応えも歯応えもない豆腐鍋

兵庫県 酒 井 靖 子

決心を告げれば灯り揺れてます

すり切れて飽きても回る母の独楽

野良犬の気楽さ今日も旅に出る

消えてゆく泡に未練が残ります
 兵庫県 中野 とよ子
 気楽には見えてもなりの苦勞ある
 西宮市 古谷 ひろ子
 腦裏から私を呼びに鈴が来る
 電卓では計れぬ人の幸不幸
 都会の子から米の宅配来る不作
 夕映えのポスト挿んで投函す
 神戸市 向井 泰子
 人工島に萩のこぼれる道も出来
 弱い子に夫もついていてくれる
 六十の再婚頑固を押し通す
 羽曳野市 山本 たけし
 秋夜長ちよつと呼び込む夜鳴き蕎麦
 京土産「おたべ」おたべとくれた叔母
 雑学を仕入れた父の軽い酔い
 柏市 上鈴木 春枝
 食管理する妻の胃にあわせられ
 酒場での指切りなどは忘れよう
 正攻法にこだわってまだ勝てぬ
 兵庫県 倉垣 恵美
 含羞んでいる屑米をいとしがり
 四国路はうどんの腰の強さから
 菊人形にされて歴史が香り出す

定年の暮ゆつくりと降りてくる
 十和田市 阿部 喜久江
 不景気へやませ追い打ちかけてくる
 大いちょう出世早くて間に合わぬ
 唐津市 山門 タミ
 仲よしが出来てよかつた一年生
 手をつなぎ昔を語る九段坂
 アドバルーンあそこも家の売出しか
 静岡市 片平 静代
 つわぶきの花も咲いてる菊日和
 一匹の蚊に人間が悩まされ
 数珠の手が挿んでばかり京の旅
 大阪市 清水 絹子
 のぼるまで気楽な山に見えたのに
 青首大根 店に顔出し冬支度
 石けりをする子はいない塾通い
 枚方市 濱田 良知
 突き放す言葉の裏に愛がある
 通夜の席 次々に出る裏話
 繩のれんまた昭和史が弾みだす
 寝屋川市 瀧本 八十八
 不況風首筋寒くなる夜長
 引張るも流すもうまい憎い打者
 タイミング外して浴びたホームラン

親友と別れる余韻かみしめる
秋祭りすめば一斉冬支度

島根県 三代 朝子

奥山の紅葉 温泉宿に着く

高松市 松本 翠

その下の涙をかくす厚化粧
それ程の愛があつたか嫉妬心
鍋料理父娘げんかに母の知恵

香川県 宮内 沢 恵

女達を強くしたのは男達

お返事は紅梅一輪あらかしこ

今日もまた男が嘘いう美人と言う

茨木市 島元 ふみ

怪我の足車車の多いこと

買っておきがないと不安の戦中派

泡くって弁解しても妻の勘

和歌山市 池永 正雄

和紙一枚墨痕淋漓待ちうける

衛兵の眼が残ってる哨舎跡

こっそりとサンタ爺やも屋台酒

今治市 渡邊 伊津志

想い出を創り遺してゆく市展

目の奥の深い所に海の青

養殖の魚うつろな目で煮られ

和歌山市 古久保 和子

鑄掛け屋が来なくて手なべ直せない
肩書きをいっばいつけて顔が無い
両の手でつつんで握手してみたい

泉佐野市 内田 倫子

つまみより話し相手の欲しい酒

何もかも幹事まかせの楽な旅

顔からは心の中が読み取れぬ

鳥取市 中澤 正恵

約束を果せたように散る紅葉

嫁姑畑には知恵を借りた仲

大根の泥も土産の顔きかす

羽曳野市 西村 りつえ

姑の座いい座り方見ておこう

愚痴ってる顔は淋しい貌に見え

口下手を笑顔で補う片えくぼ

藤井寺市 川端 たかし

古代史を揺り起こしてる竹の筥

追っかけて来る足音を待っている

金で済む話どっさり聞いてくる

島根県 小林 延子

うんと贅沢してやろうひとり旅

他人の不幸きいて自分を慰める

電話機の向うで白ける声がする

岡山県 江口 有一朗

込みいった話慎重に受話器取る

心身の水面を均す座禪する

心の奥のセセラギの音に耳澄ます

岡山県 土居 ひでの

成年の夫は還暦の唯中に

新築のプランへ割り込む双児説

踏まれても君を信じている余生

鳥取県 丸山 希久代

雲ゆきの悪さに穴へとじこもる

影ふみも出来ないビルの谷間道

一目ぼれとんとん拍子に進む縁

池田市 水木 博 男

未練ないと言うて一筋涙落ち

運転士がおけさを歌う佐渡観光

フルムーン妻が何もしないだけ

羽曳野市 酒井 一 壺

苦勞してやっとなつかんだ課長補佐

角のある石も下流で丸くなり

石橋を叩いて渡り無位無冠

大阪市 尾崎 黄 紅

冬に耐えてる夜店からきた金魚

年金があつて生きてるようなもの

人間の弱さが怖いことをする

徳島県 濱田 白柳子

銃弾も毒矢も今なら受けて立つ

孫といってお伽話が板につき

年金の暮らし喝采なく暮れる

大阪市 川原 章 久

裏鬼門気になる自分もそんな年

植木屋の長講釈で冬仕度

妻の背に疲れが見える六十路板

和歌山県 藤井 春 子

初対面そのひと言にある重み

満ち足りて笑顔忘れたネックレス

裏方の汗が祭りを盛り上げる

弘前市 中山 雅 城

片言も横綱締めて板につく

落款を押せる人生歩みだし

お節介 嘴だんだん長くなる

出雲市 荒木 恵美子

泣き笑い見つくしてきたこの鏡

黙っても語ってくれる三面鏡

一歩ずつ遅れて歩む日々続く

高槻市 江原 秀 夫

石を抱き根はどこまでも伸びてゆく

銀髪にワインレッドは恋の詩

妻の名をちよつと優しく石に彫る(てん刻)

道競と激しく変わる曳山囃子
唐津市 野田旭恒

庄巻の曳山引出しの轍跡

曳子よりなお興奮のギャルの群

鳥取市 田賀八千代

神様に御縁あるよに手を合わす

母さんの弱音は聞いた事がない

オーイ雲明日はいい事あるからな

弘前市 浅田隆樹

誰も皆抱いてやらねばさみしがり

誰のためすすり泣くのか木枯しの吹く

叱られて生きる喜びかみしめる

鳥取県 小西鈴枝

山の幸とどけてくれる友を持つ

山里の水車ここでも村起こし

深い谷奇麗な百合が咲き誇る

出雲市 林悦子

万華鏡思いのままの夢世界

秋日和静かに時を重ねます

仲良しはいつ見てもあきないわ

泉佐野市 大工静子

ペン持てぬ友へ一句の片使り

服装で犬は納得留守の小屋

栄転だ我が家の近くに勤務でき

大阪市 中橋恵美子
ハンドルが人格変えて走りだす
八十も女ピンクの布団買っ

寝屋川市 籠島恵子
水に流そうなんてあなたのきれいごと
母の荷は土の匂のものばかり

羽曳野市 福田悦子
冬の絵に小さくなった鏡もち
ストープをつけてビールのうまいこと

米子市 鹿島蘭
雨降りにはボチも合羽を着せてやる
折り箱が浮きつ沈みつ海に浮く

寝屋川市 坂上高栄
何気なく付き添う刑事の思いやり
諦めて犬も不貞寝か尾も振らぬ

吹田市 古川喜美子
あきらめたように電話のベルがやみ
時計のねじ巻いた心の捻じまいた

唐津市 福島紀一
嬉しいとなんだか酒に手が届き
旅プラン未知の山河へ馳せる夢

和歌山県 上岡正直
天狂い地まで狂ったこの秋は
角砂糖湯水に溶けて妥協する

新潟県 高野不二
作況指数にも届かない稲を刈る
カラオケがあるから二次会嫌いです

岡山県 国米きくゑ
休日は部屋一ぱいに寝てる父
フカフカの布団良い夢見るかしら

和歌山市 森口恵子
幸せがそこにあっても越せぬ山

静岡県 中西雅
ヒロインになりきっている午後の顔

立冬に汗して庭の草むしり
花を賞で歌にも残すゆかし人

熊本県 増田一乗
ブラジルのいとこが来たといとこ寄り

鳥取県 清水加代子
ブラジルもカラオケうまく披露する

寡婦というのは多くを語らない
行政でできることはそれだけだと

寝屋川市 太田とし子
真ん中に一つ残ったお饅頭

静岡市 柳沢たま
何買うの親が子供にきくゆとり

茶柱が立って良い事ありそうだ
両眼を閉じて反省してる孫

香川県 松岡遼雲
還暦や文字の大きい辞書を買う
食べるだけの収入で佳し鯛雲

鳥取県 橋本孝由
父という誇りに今日をあまんずる
男に夢おんなに愛のゆとりあり

静岡県 三浦つね
一匹のハエが窓から迷い込む
愚痴一つこぼさぬ嫁のいい笑顔

岡山県 富坂志重
祖母一人とてもわびしい釣りしのお
貧乏と笑われながらも花がすき

糧原市 西本保夫
掃除だけして来たらしい老人会
井戸端がなくて四つ角立ち話

兵庫県 玉田三重
流行に負けると年齢をとる
許すのに返事なかなか見つからず

鳥取県 槻谷仲子
街角でいまだに呼んでる昔の名
ライバルと同じ悩みでお茶はずむ

唐津市 浜本治幸
こそそと話せば噂の影を見る
鈍行の旅で気ままな風に乗る

青森県 諏訪 明雄
煩悩で固めた法話ありがたいがたく
ありがたく聞いた話で眠気する

吹田市 西岡 豊
被写体は喜寿のお顔で舞扇
天保山行李かついだその昔

高槻市 乙倉 武史
自転車を盗られた夢を又も見た
秋夜長テレビを消して新刊書

鳥取県 近藤 秋星
コモ巻いて貰って松も冬仕度
ひよろ高い男が帽子振っている

鹿児島県 大山 舞鳥影
シルバー席のヤングに祖父母いるのかな
輸入してあちらで米の値が騰り

島根県 児玉 幸子
どこまでも追っかけて来る丸い月
岩山を紅葉で飾る立久恵峡

島根県 菅田 かつ子
遠足へはしゃいでいるのはママのほう
頼られているからけっこう忙しい

松江市 佐野木 みえ
矢面に立ったあなたを見直した
秋深し清張の本読み返す

姫路市 福島 姫女
闇夜の目 身の毛がよだつ猫きらい
元気なきや歩数進まぬ万歩計

東大阪市 松山 隆
小さい嘘無意識でいる健忘症
公園が心つないだひと休み

唐津市 入江 喜久亭
キスしよとすればポケベル邪魔をする
泣き真似の上手い女に騙された

唐津市 山口 ふさ子
教養がずらりと並ぶクラス会
部屋毎に置いて眼鏡を探す父

鳥取県 中西 智恵子
かみさんに蹴飛ばされてひとり寝る
さよならは言うのはよそう秋の風

彦根市 大平 太郎
親友のまさかも浮世寺参り
雪化粧今年の顔で富士の山

岡山県 福原 辰江
朗報を待ってる母へ歩を速め
明朗な若妻家中灯をととす

藤井寺市 楠 昭子
香煙の香に慣らされた秘書の役
母の手が荒れる北風連れて来た

松江市 浦辺 静江
どうしても嘘言えずして貝になる
秋空へ洗濯物が白く揺れ

静岡市 松下 正枝
大銀杏だけがよく知る寺の過去
窓の灯に皆それぞれの暮らしあり

鳥取県 山内 芳江
思春期の手綱締めたり弛めたり
頭から言うから二の句出てこない

姫路市 服部 一典
今日一日不況を飛ばす秋祭り
何してはる一番こたえる年金者

泉佐野市 河原崎 礼子
さいはての岬でいつものテレビ見る(佐多岬)
落人の隠れ家今は民宿に(五家荘)

大阪市 出山 美津枝
夫婦坂 秋風吹いた日もあった
木枯しにTシャツ軒で震えてる

大阪市 徳田 慶子
飲んで寝るガイド泣かせのツアー客
有り難い法話を聞いて足しげれ

八戸市 島田 昭治
決意だけいつも新たな春がくる
子離れの遅い妻ですうるさ過ぎ

鳥取県 山本 正光
行きたくない警察と税務署に
ためらいがとけたら花の種を播く

香川県 たかはしたみ
向かい合うこけし反対向けてやり
座禅した友は菩薩にみえてくる

羽曳野市 徳山 みつこ
ファミコンゲームではしゃいで夜の二人きり
けいこしてつけた自信は胸の内

島根県 森 茂美
武器売った口で平和を唱えても
秋の空地図をなぞってフルムーン

鳥取県 権代 康女
紅葉の山にはずんだ万歩計
子の喧嘩しげれ切らした親が出る

天理市 飯田 昇
黒部ダム静と動とを大盛りに
呑み込んだ軽い妥協にある重荷

箕面市 木村 天弘
艱難に耐えて明日の虹が立つ
OB出社知ったOLただ一人

岡山市 山磨 行子
二百年の歴史を崩すシヨベルカー
子はリッチ カードの付けは親にくる

東京都 小寺 九

タクシーで競い合ってる不景気さ

つくづくとなつてよかつた公務員

池田市 木村 一 笛

天高くとんびが鳴いて秋を呼ぶ

スポーツの幕切れいつも不可解だ

大阪市 乾 哲 静

国会は眠気覚しの野次が飛び

五十年連れ添つた妻の独り言

兵庫県 安 達 厚

病人にお変りないかとナース聞く

デカンショも民謡ですかと猿が聞く

米子市 服 部 朗 子

打ち解けて弱音を語る秋の夜

旅日記くり返し読むおばあちゃん

枚方市 八 田 敏

体力が余生のプラン狂わせる

花と実と窓辺に四季を呼ぶ暮し

米子市 永 井 三 津 子

私にも青春の時あつたはず

孤独ゆえおとぎ話も信じたい

鳥取市 植 田 一 京

健康が頼りにこにこ生きている

軍服の兄の遺影よ若過ぎる

岸和田市 寺 田 甚 一

野次飛ばすときに議場で目立つ人

裏方を大事にしてるよい芝居

大阪市 平 井 露 芳

夕鶴も力が尽きた九十歳

傘の花見事開いた日本一

寝屋川市 豊 福 路 子

大仏さまへころがり込んだ俄雨

定年の甥へ秋陽の京洛路

海南市 谷 口 義 男

噛み合わぬ親子の会話年齢のズレ

民主主義首相公選こそルール

出雲市 中 村 トク 子

手鏡で亡母の笑顔を思い出す

朝早く落穂ひろいの鳩の群

岡山県 福 原 悦 子

広告の裏へ一句を書き止める

人生の道連れいつも影法師

泉南市 坂 根 流 水

騙す奴やっぱりうまい事を言う

スポーツも金で表示の裏表

鳥根県 安 部 美 恵 女

奥出雲 紅葉みごとループ橋

ふれあいの句と対話する文化祭

唐津市 江川 春琴

言い訳もせねば誤解が深くなり
よく似てる電話の声に騙される

豊中市 月原 方郎

風邪口実三日遅れの返事書く
神妙に手を引かれてく七五三

静岡市 増田 扶美

秋深く秋葉山々旅の人（遠州秋葉山への旅）
弾む声青空翔けて袖の旅

大阪市 中井 正秀

ライバルも見方変れば良い友だ
難しい話はあとと酒を注ぎ

島根県 岩田 三和

ふるさとで声つぶすほど唄うべし
くたびれた千円札が来てくれた

鳥取市 谷口 百合子

あいまいにされて流した終い風呂
燃え尽きた夏ひまわりが枯れている

鳥取市 谷口 侑里

年金で気楽に見えて火の車
あちこちと変わり初めの医者に行く

島根県 福岡 博利

この店へ来ると句帖がほしくなる
檜山へ行きたくもなし酒の味

◆ジュニアの部

香川県 田中 なみ子 (小6)

暗闇で人の気配を感じとる
紅葉が山を彩る里の秋

八〇〇号記念川柳大会

とき 1月16日(日) 午前10時開場

ところ なにわ会館・金剛の間

兼題 (各題2句・正午締切)

「眼鏡」 小林 由多香 選

「似る」 奥山 晴生 選

「母」 時実 新子 選

「ジャンプ」 小松原 爽介 選

「酒」 田中 好啓 選

「旅」 山田 良行 選

「鏡」 磯野 いさむ 選

「事前投句」 「ころ」 西尾 栞 選

会費 3000円 (昼食・記念品・発表誌呈)

主催 川柳塔社

後援 (社)全日本川柳協会

—水煙抄

秀句鑑賞

—12月号から

田中 薫

もう秋が来ている人形の手足

曼珠沙華その一途さを秋が抱く

改札口を通つてあの人も消えた

永田 暁風

作者の透明な抒情に私は射すくめられてしまふ。言葉が語り継がれてゆくとき、言葉は日常性の手垢にかきりなくまみれているものだが、秀れた魂の深淵を濾過して滴り落ちると、言葉の日常的な意味性は遙かに飛び去り、さらさらと輝く結晶体として定着する。

殊に、第三句において、語の字義を追つて句の解釈を試みるなどという愚を犯さないことだ。

「川柳は未完の詩である」とは作者の持論である。ドビュッシーの音が澄明な水面に吸い込まれてゆくように、生きることのかなしみの枯野をさまよつ、厳しく透徹した抒情の極点で凝固した優美な矢に、私のこころを貫

かれていよう。

真夜中にひとりて傷をなめる癖

山田 葉子

あの日から秋が淋しくなりました

流 奈美子

名もない花とはあなたが知らぬだけのこと

木下 道子

本を買う金が欲しくて本を売る

田辺 鹿太

悲しいと螢光灯がまぶしいよ

浅田 隆樹

階段をのぼり詰めたら考える

木村 春枝

自動ドア吐き出されてから心決め

中村 三良

人は自分の目の高さでしか物を見ることが出来ない。

愛、疑い、憎しみ、裏切り、嫉妬、そして

絶え間ない別れ。傷つき、哭き、救われたいと願う。救われたい衝動が川柳を書くという行為に向かわせるのだと、私は思っている。

城よ

季節よ

無疵なところが

何処にある

アルチュール・ランボオ

アルチュール・ランボオ

水平線の彼方には、人間のかなしみを癒す泉があるのだろうか。こころの激しい飢えを満たす果樹園が広がっているのだろうか。きつとそんなものはありはしないだろう。けれども虚しいのちは、水平線の向うに隠れている真実を求めて、移ろいやすい季節を生き続けてゆく。

しなやかにコスモス秋が揺れている

小林 英子

しなやかなのは作者のこころに違いない。

素直なこのしなやかさを大事にして欲しい。

扁平に広がる妻の足の裏

狂わない時計男の腕にある

きれぎれに醒めて狂気のあわれなる

岡本 道子

百人が川柳を書けば、百のこころの風景があるはずなのに、この作者のように魂の内面への視点をしっかりと持ち、個の世界を構築している作家が稀有なのは、ほんとうに寂しいことである。

ともあれ、この作者の鋭い感性は、人間の孤独なこころを見据える独自の眼を、内面深く沈めている。

銀河系

河内天笑選

松原市 小池 しげお

目かくしの手を愛称で言いあてて

便箋に書かせ貸金あてにせず

晩酌は一合外ではそれ以上

美面市 岩津 ようじ

米自由化するしないするしないする

長いものに巻かれる日本の美德

保険屋の勧誘教訓じみてる

今治市 矢野 佳 雲

計算をしたら合わない子を育て

わっしょいわっしょい蟻にも祭あるらしい

塾へ来てまたライバルの数がふえ

京都市 都 倉 求 芽

奥さんたちのリストしっかり焼芋屋

ぼろぼろになるまで通す意地もある

岡山市 小林 妻 子

盆暮れに五百万円ほどほしい

タクシーに乗らなんだ分呑んでいる

広島市 中村 要

不況風はずみをつけて吹く師走

頭から布団かぶった黙秘権

倉吉市 野口 節子

色恋は卒業したと白々し

ジェラシーも欲もたしかだ生きている

黒石市 相馬 一花

アオムシが俺より先に試食する

心からお詫びをするという狡さ

大阪市 中橋 恵美子

意識もない親類に義理包む

意志強いので酒なんぞ止めません

川西市 松本 ただし

エンマにはとつときの嘘持ってゆく

極楽を信じたくなる仏の目

岸和田市 田中 文時

定年後ひねもす妻の顔を見る

一円の使途不明金ない暮し

吹田市 栗谷 春子

はがゆいと思われつつも群にいる

末の娘がガラスの靴を穿きたがる

姫路市 中塚 遊峰

知らん振りしてみな知っている他人

神の手が大きく見えて来た懺悔

砂川市 大橋 政良

手の届く線から欲が深くなる

乾杯のグラスにつなく導火線

鳥取県 土橋 螢

半紙に六字 王羲之の真似をする

この道で仏に出逢うかも知れぬ

倉敷市 小野 克枝

一緒になる前の写真は手をつなぎ

普段着で祝ってくれる長き友

岡山市 江口 有一朗

中性といっても女の香を残す

地球儀よ何と茶番な小競合い

大阪市 大河 未佐子

大茶盛り茶筌の泡もビッグです

馬子にも衣装古窓にもカーテン

今治市 越智 一水

凶作をスズメは知って寄りつかず

ソバの花満開に咲き村貧し

兵庫県 北川 とみ子

達筆で読めない遺書を渡される

聞き上手噂の鍵はかけておく

米子市 青戸 田鶴

おぼろげなもの鮮明に甦る

賑やかに見えて虚ろな浜の貌

旭川市 朝倉 大柏

縦に振る癖がついている首である

履歴書に会社に尽す顔を貼る

名古屋市 藤井 高子

ビル風の谷で気丈な鬼瓦

ゴム紐のように伸びゆく余命表

巨額脱税を一度はしてみたい
他人だと思えば腹も立ちません
和歌山市 木村 初子

こおろぎよ許せねぐらの草を焼く
ハンサムとたった二人のエレベーター
大阪市 亀井 円女

目の前の喜寿に命も忙しい
テリトリーちゃん和承知の犬と猫
岸和田市 三輪 通彦

配給米の悪夢がよぎるコメ不足
母親のベットのような一人っ子
静岡市 柳沢 たま

留守にする灯りとラジオつけて出る
美人ではないが笑顔がうつくしい
藤井寺市 中島 志洋

神棚から紙屑箒へ外れくじ
香川県 新川 マサエ

唯座るだけの役目に汗をかき
大阪市 板東 倫子

キリストの泣き顔に似たラモス・ルイ
よそ行きの面を互いに捲りあう
鳥取県 新家 完司

叩いても発奮しない尻となり
農に生き無芸を恥じぬ太い指
出雲市 園山 かおる
兵庫県 酒井 靖子

○×で育ち世間を甘く見る
仙台市 川村 映輝

幸せな時に活きたい花がある
鳥取県 大角 幸代

生き方が変わると髪型も変わる
西宮市 西口 いわゑ

極行く大きな欲を積み残し
米子市 小西 雄々

まるで外人十二離れたお友達
鳥取市 新澤 正恵

目で食べて口で見ている甘い菓子
堺市 高橋 千万子

真実を話せば笑顔どう変わる
美面市 椎江 清芳

婆ちゃんが硬貨よっこらしよと拾う
大阪市 星野 四郎

薬の本読んでお医者嫌われる
鳥取市 春木 圭一郎

ポーナスが減ってもくれるありがたさ
鳥取市 谷口 百合子

バランスが崩れるほどの花に酔う
鳥取市 西原 艶子

つけまつげしてまで化けることはない
米子市 金山 夕子

バイヤーともつ鍋つつくのも仕事
寝屋川市 坂上 高栄

呉越同舟これも出会いか面白い

命一つゆれてる今日はまっ真ぐに
姫路市 大原 葉香

金儲け匿していのち磨り減らし
鳥取県 橋本 孝由

散髪をしだすと咳が止まらない
海南市 三宅 保州

幸か不幸が汁かけ飯を知らぬボチ
米子市 石垣 花子

近道の空地が売れた回りの道
大阪市 尾崎 黄紅

おじいちゃん花びんが花を待ってるよ
熊本市 立道 善太郎

ふるさとの小川が好きだここで死のう
熊本市 立道 英子

テレシヨップにあった意外な落とし穴
阪南市 深日 白光子

ぼろくそに言うて無口に負けている
綾部市 藤田 芳郎

残のない余生で少し背伸びする
香川県 木村 あきら
(明人改め)

いい天気地藏さんにもごあいさつ
鳥取県 江原 とみお

ストレスをじっくり癒やす手酌酒
八尾市 山下 美津留

赤青黄一度に点いた児の写生
広島市 森田 文

大木を細い根っ子が支えてる
米子市 永井 三津子

唐津市 浜本 久仁於
社長派と専務派がいる三代目

今治市 渡 辺 南 奉

割箸でケーキ食べたいおばあちゃん

宝塚市 丸 山 よし津

駅前 ニヨキニヨキ生えたノッポビル

青森市 工 藤 甲 吉

花ピラを二枚合わせた紅い唇

唐津市 岩 崎 實

コスモスがみんなこちらを向いている

吹田市 山 本 希久子

幸せのコントを盛った白い皿

茨木市 堀 良 江

生命湧く実感のあり快復期

弘前市 村 田 善 保

励ましの言葉を耳の底に置く

岡山県 福 原 辰 江

目を閉じて風の音聞く石仏

大阪市 神夏磯 典 子

集まればガンの話に花が咲く

羽曳野市 芦 田 絢 子

老若を使い分けてる六十路坂

和歌山市 田 中 輝 子

入口にうまい話があり迷路

鳥取県 鈴 木 公 弘

老いらくの恋シグナルに気付かない

羽曳野市 徳 山 みつこ

フラッシュを浴びるトップの罪の色

愛された嬉し涙を溜めておく
鳥取県 土 橋 睦子

米子市 服 部 朗 子

長病の弱音を聞くも看護です

米子市 光 井 玲 子

うれしくてつい大声になつてくる

奈良市 米 田 恭 昌

泡盛は戦の悲哀忘れない

柏原市 大 峠 可 動

せめぎ合う政府北風吹きつける

鳥取県 ささき や え

侵略だったと言われ戦死の兄が哭く

岡山県 土 居 ひでの

泥水もかぶって人間らしくなり

和歌山市 榎 原 公 子

偶然の出逢いへ弾む穂となる

和歌山市 古久保 和 子

美人湯に他人より長く温もう

豊中市 辻 川 慶 子

天国と地獄味わう欲の果て

守口市 結 城 君 子

こと済んでから太つ腹なことを言う

青森県 諏 訪 明 雄

顔で泣き心で遺産かぞえ切る

宇部市 中 村 三 良

受け皿の白さ邪心は許されぬ

倉敷市 田 辺 灸 六

突つ張って一步踏み込む老いの舌

仮面して恋のつづきをしてみたい
鳥取県 権 代 康 女

香川県 成 重 放 任

戸惑うていらぬことまで気を配り

藤井寺市 高 田 美 代 子

秋はジグザグ古い恋など思い出す

静岡市 小 木 久 子

覚え書きのメモが何処にも見当たらぬ

出雲市 島 祥 庵

子守唄の背景にある枯すすき

茨木市 藤 井 正 雄

子に送る一枚足している甘さ

鳥取県 乾 隆 風

お浄土の扉いつでも開いている

泉佐野市 内 田 倫 子

幹事にはうってつけだとおだてられ

米子市 鹿 島 蘭

浴槽の中でヌードのポーズとる

大阪市 町 田 達 子

ええ格好したばかりに払わされ

和歌山市 青 枝 鉄 治

いろはから育てた部下に整理され

大阪市 川 原 章 久

通りゃんせここは裏口億持てこい

高槻市 江 原 秀 夫

傘寿までつきあう意地の酒二合

大阪市 津 守 柳 伸

誰も居ぬ部屋が待つてる宴あと

和歌山市 桜井千秀
戻ろうかまだ足取りの軽いうち

笠岡市 松本忠三
父ちゃんとしいちゃんどつちが偉いのか

静岡県 藪田 彥 杏
力より金やと老議員が言った

寢屋川市 平松 かすみ
何回目 ちよつと言えない回り年

熊本市 遠山 夏生
松茸の高値子供に領けぬ

枚方市 海老池 洋
遠島へきびし本社の机上論

東大阪市 松山 隆
儲けには疎いが気前よい男

唐津市 山門 タミ
それぞれに一物秘めて並ぶ顔

唐津市 市丸 はる子
どうかねとライブバルさぐり入れて来る

兵庫県 玉田 三重
しまい湯に温められて匂が浮かび

大阪市 井上 白峰
一言が過ぎて大きな溝を掘る

今治市 月原 宵明
この街にまだ番台のある風呂屋

唐津市 田口 虹汀
子や孫をがっちり受けて端瓦

吹田市 吉川 涉
素直だが内の嫁にも角がある

鳥取県 土橋 はるお
ギリギリの財布で男気が出せぬ

鳥取県 田村 きみ子
苺苗植えると冬の音になる

弘前市 岡本 花匠
五線譜にのれぬ男の浪花節

尼崎市 春城 武庫坊
着物が米に化けた昔が来ぬように

鳥取県 石谷 美恵子
どつぷりと金に埋もれて孤独です

和歌山市 玉置 当代
ティーカップ彼に合わせてアメリカン

熊本県 増田 一乗
高音につられ合吟のどつぶれ

枚方市 濱田 良知
引き際の美学を花に教えられ

香川県 辻 上 よしみ
心根が良ければ器量よしとする

泉佐野市 河原崎 礼子
猫の目のふてぶてしさにけんか売る

倉吉市 最上 和枝
新築へ居場所なくした古机

熊本県 高野 宵草
テープ切る賄賂掴んだ汚れた手

高槻市 乙倉 武史
義理人情言つてはおれぬF・A制

広島県 田村 新造
島倉千代子もガンだと妻を励まそう

鳥取市 植田 一京
栄転に身辺整理せまられる

大阪市 榎本 露児
コスモスを抜けて伐折羅に逢いにゆく

大阪府 榎山 隆
一冊のアンソロジーを追う炎

姫路市 小井里 兆
コスモスの清楚の中にある情痴

和歌山市 杉山 精子
意地悪な風モンローを真似てみる

尼崎市 春城 年代
葬式の帰り見舞うて頓着なし

和歌山市 楠見 章子
二千円スーツ翌朝はち合わせ

兵庫県 遠山 可住
横道を歩いた過去に援けられ

京都市 松川 杜的
四コマに生活の知恵を一寸借り

出雲市 久谷 まこと
耐えている心底誰もものぞかせぬ

和歌山市 堀畑 靖子
妻の取る舵狂い出す更年期

弘前市 一戸 ツネ
コスモスと別れを惜しむ赤とんぼ

鳥取県 山内 芳江
無農薬誇り形にこだわらぬ

枚方市 前 たもつ
決心をつけるつもりで暖簾分け

尚香のむ

八木千代選

チリメン雑魚の雄と雌とが気にかかる

大阪市 西出 楓楽

大ざっぱにみれば何の変哲もない雑魚の一群れ。大阪のおかたの目にもかからない弱小の魚たちではあるけれど、その中には弱いものなりに小さいものなりに行先が見えて精一杯の意見を言おうとしている雑魚もあるに違いありません。その弱々しい声に耳を傾ける人があります。そしてこの声はいったい雄か雌かと妙に気になる人があつた。あんがい雌かもしれない。作者は大魚の餌食にもならず生き延びて、その上に捨て身の主張をくり返すのは、子を産んだ、もしくは子を産もうとしている母性の声だと感じているようです。そんな思い過ごしをしなくなる面白さがこの句の身上です。あつさりと思んでもチリメン雑魚の雄雌にこだわるなんて、なんとも結構な思考ではありませんか。

饒舌が止むと山茶花咲いていた

西宮市 牧淵富喜子

少しかだけ教訓めいた感じもしますが、すでに冬に入っていたとは書かないで、山茶花の花を句の中いっばいに咲かせてあるのが美しい絵になりました。うっかりと夢見て過ごした春、怖いもの知らずで自由に振舞っていた夏への後悔、そして落葉の秋になったことにも眼をそらしてきた不覚、饒舌を続けてきたのは真実を直視しようとしないうでただ一寸のばしにしただけの迂闊さであつたと私の来しかたに重ねてつらくなりました。

ふつと気がつけば葉の闇から匂うような山茶花。この花にびつたり視点を置いた仕立てかたが絵だけで終わらないで心の奥まで届いてきたのでした。

滝の流れに今日も一つの出会いあり

八尾市 宮西 弥生

やわらかな返事で逃げる急斜面

名古屋市 藤井 高子

手を落とし足を落として踊り出す

大阪市 北川 弘子

昨日と今日の間で騒ぐ波の音
他人になって行くわたしを殺さねば
水の無い川で方舟往きくれる
クレヨン画どれも眩しい未来たち
一日にいちど仕合せだと思っ
届かなかった返事それからのわたし
冷静になつてしこりのおきどころ
涼しい目で黒い金魚は自然界
恋人も賞味期限が切れました
枯葉いっばい私の行方など思っ
頭上から消えぬ霧あり刑続っ
この道は遠い不要なものを脱ぐ
善悪のけじめを迫る雨後の街
フィルターを通すとみんはやわらかい
城壁の白をめぐらす温かき

倉敷市 小野 克枝
堺市 板野 美子

残された者が切ない縄を編む

藤井寺市 高田美代子

花びらを集めてみても過去は過去

豊中市 辻川 慶子

改札がピンポン閉じて行く喜劇

和歌山市 福井 桂香

いちにちの中でふうっと死を思っ

鳥根県 松本 文子

どうすれば何点入る毬あそび

堺市 高橋千万里

足跡を辿って凄さ分かり出す

米子市 金山 夕子

雨上がりの景色あらたなる出発

和歌山市 岸野あやめ

上から消えぬ霧あり刑続っ

大阪市 神夏磯典子

善悪のけじめを迫る雨後の街

米子市 政岡日枝子

フィルターを通すとみんはやわらかい

和歌山市 桜井 千秀

城壁の白をめぐらす温かき

和歌山市 榎原 公子

つかめそうな雲へ空振りばかりする

米子市 青戸 田鶴

くらがり帆船ふたつ ちちとはは

和歌山市 宮崎 菜月

ジェラシーという粘土細工が掌に

米子市 寺沢みどり

雨上がりの景色あらたなる出発

米子市 林 瑞枝

上から消えぬ霧あり刑続っ

和歌山市 木本 朱夏

善悪のけじめを迫る雨後の街

和歌山市 田中 輝子

フィルターを通すとみんはやわらかい

米子市 新 正子

城壁の白をめぐらす温かき

尼崎市 春城 年代

つかめそうな雲へ空振りばかりする

堺市 横田マリ子

くらがり帆船ふたつ ちちとはは

米子市 茂里 高代

ジェラシーという粘土細工が掌に

西宮市 西口いわゑ

雨上がりの景色あらたなる出発

宝塚市 丸山よし津

遮断機の向うにきつとある答

十三夜 一葉に逢う月が無い

西に住む人と別れて西は見ず

ほの見えて海の暗さに抱かれる

幾重にも紐掛けました羽の箱

今日もまた郵便受けに何も無い

寄りそった時計は同じ時刻む

心音を聞いてふかあくなる母性

日めぐりに一つの岸を見すえている

わたくしの舞台はやはり台所

脱皮繰り返しだんだん小さくなる

こぼれ萩 訣れたひとの匂消す

満月がいびつに見える目のこわさ

野の小道 野花が裾にまみれつく

見通しが甘いぞ一天かきくもる

折鶴を百枚折って寝る予定

コスモスに頷くことを強いられる

若くみられたくて背骨をのばす

妹と歩くおんなじ影ぼうし

犬も走るよ落暉の塊燃えながら

きゅつきゅつと帯締める手へ霧が湧く

帯締めた姿が決まらなくなった

衝動買いこれも健康なればこそ

一生へ約束何度まで来て来る
ライバルへ深いおじぎをしておこう

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 中井 ゆき

東京都 山口 新子

和歌山県 杉山 精子

大阪市 大河未佐子

鳥取県 西原 艶子

芦屋市 黒田 能子

鳥取県 大角 幸代

米子市 野坂 なみ

和歌山市 堀畑 靖子

西宮市 奥田みつ子

倉吉市 淡路ゆり子

枚方市 森本 節子

米子市 澤田 千春

弘前市 佐治千加子

鳥取県 谷口百合子

岡山県 矢内寿恵子

米子市 鹿島 繭

吹田市 栗谷 春子

大阪市 町田 達子

和歌山市 岩本美智子

米子市 石垣 花子

和歌山市 宮口 克子

河内長野市 植村 喜代
西宮市 門谷たず子

ことごと暮れの薫りを炊いている

きつと魔がさしたのでしょうあのことは

心の景みるために瞳はとじられる

花一ぱい咲かせ画廊の灯がぬくい

女とは一生紅葉と言言葉

容赦無し 一匹狼吠えたる

コマ回るまだまだ業と生きてやる

絆だけ豊んで仕舞う火消しつば

発想を少し逆転させて見る

幸なことに私 字が読める

帳尻を合わす眠りが浅くなる

リフレッシュ自己採点が甘くなる

めがねごしの視界真実遠くなる

人様に上げる涙を貯めている

明日は明日 今日のを月に洗う

うるさいが妻は手近な常備薬

いきさつを聞く柔らかい耳を持つ

二人旅みればあふれる涙かな

つり橋の揺れに歩調を合わす術

昨日まで鳴いてた虫が気に懸かり

泣きごとはO型だから我慢する

秋日和好きな道だけ歩いてる

回り道 優しい庭と巡り合う

今朝もまた花の話でおはようさん
庭の花一番咲きは仏様

米子市 白根 ふみ

茨木市 堀 良江

富田林市 片岡智恵子

八尾市 高杉 千歩

鳥根県 今若 章子

和歌山市 森 茜

今治市 野村 京子

兵庫県 中野とよ子

鳥取県 石谷美恵子

寝屋川市 太田とし子

大阪市 津守 柳伸

貝塚市 池田寿美子

唐津市 浜本 ちよ

大阪市 亀井 円女

青森県 福士 トキ

鳥根県 園山多賀子

柏市 上鈴木春枝

鳥取県 さえきやえ

和歌山市 古久保和子

高知市 桑名知華子

鳥取県 羽津川公乃

米子市 小塩智加恵

泉佐野市 内田 倫子

和歌山県 内芝登志代
香川県 川崎ひかり

受賞作品

高橋 千万子

紙コップ ビールの重き手にこたえ

ごみ箱は世帯ゆずった事を知る

一つの輪うなずく顔としぶい顔

財布拾うて咄嗟に浮かぶ善と悪

許すこと出来ればなおる不眠症

準賞作品

工藤 甲吉

貰い泣き余程優しい人である

反省をしてから殻に閉じこもり

能面のようでは美人とは言えず

大敗をしてあきらめがつきやすい

タンポポの綿毛に身寄りなどはなし

評 かたくなに生きさまを吐きつづけられる千万子さん。

栗主幹とおないどして七回目のトリどしたが、鋭い川柳
眼に衰えを見せぬ集中力は後進の鏡です。次は平成五年度の
アンコール作品。
(河内 天笑)

ホホホホの中に包んでいるいじめ

ウインドの猫背にはつと身をそらす

スタミナがあるから嘘がまだつける

実になってから梅園は静かなり

言いたいこと山ほどあろう丸い石

トレードのきかぬ夫婦が無事にいる

善玉にも鬼が一匹住んでいた

他人さまの尻尾が妙に気にかかる

夢みんな破れ人間らしい顔

生きてゆく余分な枝葉切り捨てる

小耳から刺は心臓まで届く

他生の縁ひっそりお墓隣合っ

眼鏡新調 大発見が出来るかな

丁坪 サワ子

澤田 千春

相馬 一花

青柳 金吾

野口 節子

濱田 良知

斉藤 荔

江原 とみお

竹治 ちかし

石垣 花子

新 正子

岩津 ようじ

渡辺 南奉

受賞作品

木本 朱夏

失った時間を抱いているたまご
一隅を照らす灯りと親密に

迎え火を焚けば子猫も畏まり

夏の疲れが少し滲んでいる手紙

時雨きて身を庇うものなにもなし

評 選をさせて頂くことは何時の場合も、全神経を傾注して当る訳ですが、この最終の「茴香の花賞」を決定する時は、自身の非力を思い知らされるほど、優劣付け難く、時間を費やしました。追い追いと新しく投句してくださる方も増えて心の中で応援をする思いでしたが、これも選者冥利です。

木本朱夏さんの受賞作は、独りで生きて来た女性のひたすらな思いの滲む句に、作者の姿勢が見えるようです。

北川弘子さん、佐治千加子さんの句は、女性の心の深さ、西出楓楽さんの句の軽妙な佳さ、宮西弥生さんは芯の強さを表現されています。松本文子さん、田中輝子さん、藤田泰子さん、春城年代さん、高田美代子さんの句も、心に残る個性を見せて頂きました。

一年間を振り返って何時も思うことですが、よくぞ続けて投句してくださいましたと有難く思っています。

(小出 智子)

準賞作品

北川 弘子

しばらくすると水はいつもの水になり

嫉妬かな背広の匂い髪の匂い

足音が近づいてくる本を読む

鍋の底丸くて安心してしまふ

佐治 千加子

むすんで開いたてのひらに意地を載せ

縄文の女の意志を持つ素足

ふるさとの川でひたすら鮭となる

愛しさは水方円に沿う如く

西出 楓楽

有頂天塩と砂糖をまちがえる

掘り下げて出られぬ穴にしてしまふ

インスタントの方が美味しいなどと言う

大根の白さが怖くなってくる

宮西 弥生

母の日も父の日もなし真正面

店一つもって知る風の向き

深刻な話は花が散ってから

ええとこを見ることにして他人の中

平成五年度苗香の花賞



木本朱夏

高嶺の花と憧れていた苗香の花賞を、思いもかけずいただき感激いたしております。
「上手い句よりも佳い句を」と心に言い聞かせ、川柳という素敵な怪物と格闘してまいりました。
悲しいとき辛いとき、私のそばには川柳がありました。これからも自分の思いを自分の言葉で綴りながら、遙かな道を精進いたしたく存じます。今後ともよろしくご指導下さいませ。ありがとうございました。

柳 歴
昭和五十七年
三幸教室入会
菅井智水庵に
師事
昭和六十二年八月
川柳塔社同人

平成五年度 銀河系賞



高橋千乃子

この度は思いがけなく銀河系賞を頂き、ありがとうございます。川柳を長くつづけているおかげと喜び、感謝しております。振り返れば昭和六十一年度路郎賞を頂きましたその後、皆さんのお勧めで句集発刊もできまして川柳本望でございます。これも諸先生はじめ川柳友のお蔭と感無量です。年を重ね、少々耳も遠くなり、会話が減り、淋しい時も川柳に没頭しています。生ある限り、私の生き甲斐として日々、川柳をたのしんでいます。ありがとうございます。

柳 歴
柳歴三十余年
大萬川柳へ投句
川柳塔社同人
堺川柳会会員

受賞のごとば



平成六年 甲戌

大塚 節子



前、旅先で出会った、
「犬被り犬」
が何とも可愛く、しおらしく、ち

よこんと座っていたのを憶えています。幼い時「犬被り犬」背え高うならしまへん」と祖母に叱られた私は「あの犬、大きくなられへんに」と思いつつ、いつか記憶の片隅に、この随想の題材を考えあぐねている頃、とある民芸店で「犬被り犬」に久しぶりに出会い、お店の人にいろいろ尋ねました。

「犬の玩具は種類、量とも多く、犬被り犬も全国で作られています。荒神棚に供えて願うと、子供の百日咳が治る、天井に吊してお

くと鼻が詰らない呪いになる、などと言って求められます」

とのことでした。また、「犬と竹を合わせて「笑」と結びつけて、縁起を担いだもので、楽しい犬被り犬である」と記した葉も貰いました。

「この竹の目は粗いですね」と言うところの方が鼻がよく通ります」と笑って教えて下さいました。そんなご利益があるとは存じませず、大変失礼を申し上げました。

早速買ってきて、姪の安産、子供の成長、咳のお守りにと欲張った願い事をしていました。「笑う門には福来たる」。今年も皆様と一緒に、大いに笑える佳い年でありますように、よろしくお願い申し上げます。

私と冬

新 正子

昔、NHKで「夢千代日記」というドラマがありました。ご覧になりましたか？私が生まれ育ち、暮らしている山陰の冬は、今でもドラマと同じ冬の色をしています。

子供の頃、冬はどっさり雪が降りました。大きなばたん雪が次から次と落ちて来て、ど

んどん雪に埋もれて行き、幻想的な別世界にさらわれて行くような気がしました。

雪合戦、ソリ遊び、かまくら、雪だるま、トランプ、いろはかるた、花札、百人一首、みかん、つるし柿、干芋、かき餅、あられしもやけ、あかぎれに泣きながら、そこには楽しい冬がありました。

母親になると、冬は正に闘いの季節になりました。三人の子供達の洗濯物と健康管理。「若かった」と、今なら言える冬でした。そして今、戦い済んで残った二人。

コタツと小さなストーブをつけた四畳半で雪見酒もせず、コタツで手と手が触れ合ってあやしくなる事もなく、障子を開けて、山陰独特のどんよりとした灰色の空を見て、「あと何回大雪が降ったら春になるのかしら？」と話しつつ、熱い番茶を飲んでいきます。

冬のドライブはアイスバーンが恐いし、松葉ガニはすっかり高くなって、いつの頃からか食べられなくなり、春を待つ楽しみは年を経るごとに大きくなり、春の訪れを思うと胸がときめきます。

この頃の冬は私にとって、待つ季節と言えるのではないかと思います。

耳を澄ましてごらん下さい。ホラ、あなたにも春のささやきが聞こえて来るでしょう。

八

高橋千万里選



柳友の固い絆の八〇〇号
 春夏秋冬ころ重ねて八百号
 八つ当りされて小犬の不審顔
 八分目の幸に満足して生きる
 下山する勇気がいった八合目
 八方ふさがりブルースをきく秋の夜
 八方が塞るもまだ上下あり
 八起きして描いた画廊の絵が光る
 八起き目の鼻緒をきつく締め直す
 八起き目のことさらきつい男坂
 八起きしたるまがかぶる荒い波
 八起きした男の度胸妬ましい
 八起き目の君へ男の応援歌
 八人目の敵を忘れていた不覚
 八人目の敵に長男でんと居る
 八人も育てた母が独り住む
 永字八法 長男に教えられ
 永字八法習った筆の持ちはじめ
 八面六臂明日はどうあれ今日渡る
 八百長に似た談合で裁かれる
 八方美人いつか自分を失い
 家計簿に八方美人のツケがくる

幸夫 幸夫
 ひでの 幸夫
 英子 幸夫
 彩子 幸夫
 富喜子 幸夫
 みつこ 幸夫
 敏 幸夫
 旋風 幸夫
 美代子 幸夫
 寿美 幸夫
 英王子 幸夫
 良知 幸夫
 あやめ 幸夫
 諷云児 幸夫
 故雀踊子 幸夫
 明水 幸夫
 杜的 幸夫
 新造 幸夫
 洛醉 幸夫
 有一朗 幸夫
 佳雲 幸夫
 典子 幸夫

そつのない八方美人にあった敵
 四苦八苦しても父には追いつけず
 八番目に生んでもらって今があり
 口八丁手も八丁の嫁が来た
 末広がりとも八にこだわる姑の意地
 制服を脱ぐ十八はもう女
 もう一度十七八の恋したい
 八十の母へ笑える日を送る
 八時半出社する者休む者
 八百を十二で割って恐れ入る
 胸突き八丁またも味方一人減り
 ひと休み胸突き八丁越した坂
 進むより退く勇氣 八合目
 八百八橋今はいくつになつたやろ
 口八丁手八丁で母兼寿
 住
 喜寿の坂こらあたりは八合目
 八起きめの靴は素直に履くことだ
 八面六臂娘盛りを棒に振り
 八起き目のフアイトへ神も手を添える
 四方八方まるく治めた茶がうまい
 人
 八面玲瓏そんな政治家迎えたい
 地
 八十だ粗大ゴミとは言わせまい
 天
 八つ当り猫の木登りうまくなり 太田とし子
 軸
 スーパーをぬけてツケ効く八百屋まで

晋 恭昌
 島 恭昌
 ふさ子
 波留吉
 宵明
 辰男
 艷子
 次男
 南奉
 南洋
 高夫
 正坊
 達子
 千歩
 希久子
 重人
 虹汀
 鉄治
 柳影
 みのも
 寿恵子

百

宮口笛生選



百戦錬磨 靴がだんだん重くなる
 百点は今も変らぬ金字塔
 勇氣百倍 妻と跳び越す水たまり
 百八つ今年も無事に暮れました
 百度で絆の太さ難く
 百度石が立つてのご利益ありそつで
 學歷が百科事典を重くする
 女百態 恋の修業がまだ足りぬ
 お百度の鳥居のかげのびちぢみ
 百獣の王がサファリーで餌もらい
 百星霜変らず睨む鬼瓦
 百点でないから好かれてる上司
 一円貨百枚握ってミニ遍路
 写経百巻 悟りに遠い凡夫です
 百日目 孫のおぜんに鯛がつく
 ゼネコンへ百鬼夜行の鬼嗤う
 百面相ワルにはなれぬピエロかな
 百の罪捨てて仏にすがりつき
 百歳百歳 一流スターになりました
 百叩き恋の刑なら喜んで
 三桁まで生きるつもりの薬瓶
 百叩きすると男の顔になる

南奉 南奉
 繁 南奉
 希久子 南奉
 とよ子 南奉
 武史 南奉
 柳影 南奉
 隆 南奉
 正子 南奉
 志重 南奉
 拔智 南奉
 柳五郎 南奉
 鉄治 南奉
 狸村 南奉
 ツネ 南奉
 智加恵 南奉
 朴竜 南奉
 故雀踊子 南奉
 寿論 南奉
 愛恵子 南奉
 落児 南奉
 芳郎 南奉
 しげお 南奉

路 集

百罪を抱いて地獄の門に着く
仕合せな時は目立たぬ百度石
百歳になつたら富士の絵を描こう
肩たたき百できつちり止める孫
意見百出 見切り発車の笛を吹く
百点が宙を飛んでるランドセル
イベントの百花の中で蝶になる
百歳になれば許せることもある
百戦練磨ビール味のほろ苦い
百歳のハードルやはり高すぎる
風百態 詠い続ける詩の心
百の窓百のドラマの灯がともる
百万の味方に勝る妻が居る
モーニング珈琲 百円玉三つ
百鬼夜行 賄賂取る人贈る人

美代子 里 兆 英王子 シマ子 あずき
みもの 彩子 艶子 英子 大柏 あきら
サワ子 寿美 正坊 螢
ネオンつけ百鬼夜行の街にする
百万の金より嫁の温い声
百人の意見が一致する怖さ
百円をたたんだ頃が懐かしい
水子地蔵のうしろに百の風車

新しく齢を重ねる日記買つ
終極の齢まで微笑絶やすまい
年齢不詳隣へ越して来た美人
八百の紙齢を重いなと思つ
年齢を知る日の椅子が冷たすぎ
十戒も偽善もわかる齢になり
齢を書く欄で戸惑うボールペン
年齢不問の職を探している寒さ
ほどほどの齢であの世へ行くつもり
弥陀の掌に齢あずけている余生
数え齢上手に使い分けている
明日より今日大切に生きる齢
齢聞いて保険屋菊を褒めただけ
死亡欄 夫より若い人が逝く
肩書きも齢も気にしてないピエロ

森田熊生選



齢

初歩教室

題一築く

吉岡美房

句の中に「築く」という言葉を入れなくても、題の意味をしっかりと掴んでいる句であればよいのですが、句だけを一句取り出してみると「築く」という意味に限定出来ない、次のような句がかなりありましたので、注意してほしいと思います。

- (例句) バブル時の家ばつばつと売れている
 それでは添削句から発表します。
 この平和築いた陰に人柱 三千子
 (この平和築いた犠牲大きすぎ)
 宮築く朝日を受けた一輪車 春風
 (遷宮に奉仕で築く宮柱)
 肩たたき地盤を築くその後 幸雄
 (改革の名で党略の地位築く)
 無人らしい新築ビルが淋しそう (申弘子
 (新築のビルが淋しいバブル消え)
 ゼネコンと知事で築いた夢の跡 ひろ子
 (ゼネコンの金で築いた夢の跡)

- 宮々と築けば崩す倅いて (宮々と築いて怖い税が来る) きぬ
 ゼネコンで築いた財は砂の城 (裏金で築きゼネコン総崩れ) りつえ
 国の基礎築く農政崩れそう (国の基礎築く農政崩れそう) 圃幸子
 マスコミが築いてくれたスターの座 (マスコミが築いてくれたスターの座) 圃章子
 (新築を磨き込んだる幸せよ) トミエ
 (新築の幸せ柱磨き上げ)
 新築に一汁一菜ローン付け 行子
 (新築の幸せ暮し締めつける) 姫女
 増築をしたくても無い隣接地 (増築も出来ぬ我が家に狭く住み) 円女
 雨もりもしましよう城も五十年 (雨洩りもしますよ築後五十年) ますみ
 増築にふんぎりついてする同居 (同居してもらおう増築やっとな出来) 方郎
 改築は息子の代へわがボロ家 (改築の夢は息子にあずけよう) 方郎
 (改築す築きし亡父に詫びながら) (父) 静子
 亡父に詫びながら改築決意する (新築の庭引き立てる五葉松) 君江
 (新築の庭引き立てる松を植へ) (新築に父母は在さず空しさよ) ミツオ
 (新築にとどこか空しい父母が居ぬ)

- 礎を築いて人は土となり (礎を築いた先祖大きすぎ) ふさ子
 財産を築いて後の空しさよ (財築き子無き空しさつものらせる) 侑里
 コツコツと築いた我が家子がない (こつこつと築いた老後一人切り) 弘子
 近ごろは家庭の土台崩れてる (積木くずしを築き直せる術がない) 慧心
 一身代築くは夢のままとなり (身代を築く夢から遠く住み) 一男
 築いたと言えぬ我が家のローン高 (一代で築けぬ我が家ローン高) 恵美
 妻の座を築き今年は五十年 (五十年築いて妻の座が揺らぐ) タミ
 城築く守りは妻に任せとく (築いたら城の守りは妻任せ) 幸枝
 築いては崩す二人の基礎固め (崩れても築く二人の基礎固め) 芳水
 一代で築く労苦を子が習い (一代で築いた苦労貧しい荒し) 隆
 僕らの愛を築きましようとプロポーズ (プロポーズ二人の愛で夢築く) ツネ
 結婚し新築で住む果報者 (新築で別居農家に嫁が来る) 美寿子
 築かれた二人の世界風もなき (風雪をしのぎ一人の城築く) 黎之助

孫築く積木の家をそつと見る

節子

(たのもししい孫が積木の城築く)

夫婦愛三十年で築き上げ

嘉子

(三十年築きゆるがぬ夫婦愛)

築けども一喜一憂この不況

太一郎

(こつこつと築き不況にたじろがず)

砂上の城は築いてもきずいても (例) 静子

(砂の城築き疲れた子が帰る)

砂の城築いて夢が溶けてゆく さち子

(崩れても砂山築く子らの夢)

築くだけ野暮だった砂の城 武春

(砂の城築く野暮だと言われても)

雨つぎやつと築堤完成す フク子

(被害出てやつと築堤腰をあげ)

人災を台風禍と言ひ崖築く 忠男

(人災と言われてやつと土堤築く)

人格で築いた地盤靴を脱ぎ 志重

(人格で築いた地盤揺るがない)

富豪き息子にバトンタツチする 孝由

(子や孫に築いた富で仲違い)

胸中に築いた想い崩される 美智子

(胸中に築く想いをふくらます)

無防備な女だから塀築く ふゆ子

(未だ女独りになって築く塀)

おんなの城築くになんどうますくか 義子

(蹟きを越えて女の城築く)

こつこつと築いたポストに来る定年 保夫
(こつこつと築いたポスト幕を引く)

築いた友情に水を差すのも金 たもつ

(築き上げ友情金に崩される)

下積みでぼつぼつ築く新世帯 操

(下積みに耐えた努力が築く地位)

内心に築く子供に還る道 繁

(この辺で子供に還る道築く)

石垣が築城の謎ときあかず 絢子

(築城の謎石垣がときあかず)

築城の石垣に見る美の神秘 高栄

(石垣の美に築城の神秘見る)

伝え聞く築城からむ人柱 一乗

(築城の秘話に悲しい人柱)

山上に寺院築いた古しえの人 正子

(高僧の徳が築いた大伽藍)

巣を築く鳥のせつない母性愛 (例) 章子

(巣を築く鳥の番にある健気)

巣を築く蟻は持ち場で汗流す 義男

(汗流す働き蟻が巣を築く)

定年に築く我が家は退職金 三重

(退職金とても届かぬ建築費)

子育ては崩して築く繰り返し たもつ

(崩しては築く子育て繰り返し)

入社以来社に身を粉なに地位築く 孝由

(入社後は会社人間築く地位)

着想・表現ともに立派な句

我が柳誌八百号を築きあげ

ひでの

増築の隣へ可愛い嫁が来た

(申) 弘子

下積みの汗が築いた今の地位

(例) 静子

築くとはとても言えない家を持ち

芳郎

築城の夢は捨てない仮住い

辰男

二人して築いた家に独り住む

さち子

新築に帰る歩幅が早くなる

君枝

城築きやがて一人という老後

敏子

ゼネコンで築いた地位にあるもろさ

よしみ

良い家庭築いてほしい親心

春枝

戊年を築く真つ白日記帳

三重

新築の親を宿する部屋がない

幸雄

夢多き未来を築く青春譜

志華子

温い和を築かれる美智子さま

はる子

後悔を重ねて築く処世術

ひろ子

長城は風 夫役の民の長恨歌

幸夫

身を捨てて平和築いたボランティア

みつこ

戦争をせずに築いてきた平和

私の句

築五年売り家になった訳がある

新世紀築いてくれる孫を持つ

題「魚」——1月15日締切(3月号発表)

宛先 下583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

大空のこゝろ

(37)

橘 高 薫 風

よい春にされて松竹梅をっけ

きつちりと坐れば春の酔ごち

ねまきから余所ゆきにするお元日

お元日女房の声に子等の声

飲みに来いと言い／＼春を留守にする

昭和六年新春特集号の路郎の近作年頭吟である。その編集後記に、

☆明けましてお芽出度う。お蔭で本誌も八歳の春を迎えました。お互いに柳運長久を祈って乾盃いたしましょう。

☆本誌を創立して川柳の社会化を叫んでから既に満七箇年の歳月が流れましたが、幸いにして柳人はもとより一般社会に於ても漸くよい意味の川柳とは如何なるものであるかというアウトラインだけでも知ってくれるようになって来たことです。当時反対していた柳誌までが今日では自己の声としてこれを叫んでおります。当初私が目指したのは大衆に向っての宣伝でありました。殊に宣伝の急先鋒にある操觚業者や教育者に向って誤まれた川柳観の打破運動を試みたのであります。他の

柳誌の如きは当然ここに落ちて来ることを予想していたので、一切それ等の罵声反声などには耳を籍さなかつたのですが、果して今日の状勢を招来している事を思うと非常な喜びを感じます。世俗的の漫罵や物質的の圧迫を物ともせず悪戦苦闘をつづけて来たのでありますから、少しは酬われてもいいだろうと思つています。私がかつて発表した三十年計画の第一期は正に完了したと言つてもいいでしょう。が、これからがいよいよ骨です。更に手綱を弛めず一九三一年辛未柳壇への奮闘を期したいと思つて居ります。相変らず御後援と御鞭鞭を祈つてやみません。

と書き出している。ところが四月号の後記は橋本緑雨氏で、「主幹路郎先生が病気で入院されていられます。一日も早く全快を祈ります」とあり、翌五月号巻頭言には、

▽私は何事に対しても常に熱と力をもって、ひたすらにすむ。従つて私はよく病臥する。そして私の病臥の原因が肉体の酷使にあるということを感じているのであるが、病臥

するところまで驚進しなければ些の休養をも思わない。

▽ここに於て私の病氣は私の肉体を保持する安全弁だと思つている。だから一旦病臥したとなると、今度は病魔追放のために全力をあげる。私の性格はそんなところへも極端である。常に病氣を忘れている私は病臥して、はじめて病氣を発見するのである。

▽そして私は私の病氣に対して感謝する。私病氣を発見して、私の熱と力を一時病氣追討に転向することが出来ないとすれば、私は既に己に現世を離れていた筈である。この意味に於て私は私自身の病魔を祝福する。

▽しかしながら私の周囲に対しては、私の病氣は一つの罪悪であることを常に痛感させられているものである。私の病臥は私の周囲に対して多くの支障を来たし、尠なからざる迷惑を及ぼしていることを思うと、病魔を呪詛することも又人一倍ならざるを得ない。かかる時、私は私の妻子の、私の知己の寛恕を乞わざるを得ない。

とある。まあなんとよく病氣入院する路郎先生ではないか。

川柳雑誌社では、「阪大川柳会」と「神豊川柳会」が医者、「御旅支部」が歯科医で、「川柳草々会」が薬剤師、コレはウカウカ死

ねぬと路郎が書いたのはその当時で、この年の七月二十五日に阪大川柳会が発足した。

▽長崎博士、笠原博士、丸島氏らの肝煎で、天神祭の夕、四時過ぎから大阪帝国大学の記念館楼上で教授連、事務官等によって組織された阪大川柳会が産声をあげた。兼題「父」の句評並に作句に就て四時間余り駄弁を弄した。多年の懸案が実現されたので非常な盛会だった。散会后大病院のバルコニーで天神祭の渡御を拝観した。

これは八月号の後記。九月号の各地柳壇欄の阪大川柳会発会の項には、丸島利生報で、予ねて身持ちであった阪大川柳会が七月二十五日天神祭の夕、路郎主幹に産役を煩わしととつと呱呱の声をあげた。集まる面々二十余人、路郎主幹を驚かす程、左様に熱心に作句に関する質問の矢を放った。何がさて口八丁の猛者連として今後の例会が思いやられて頼母敷限りにこそ。

兼題「父」

路郎 選

愛の巢は親父に背き師に叛き
兒につれて父母思ふ日の多く
父の威をかりて便宜を頼みに来
減俸のパパとは知らずブラ下り
飯をくう真面目な父を稀に見る
段々に父に似て来る母の愚痴

正 義

広告をかたいで歩く父もある
下戸の父言う程までに金ためず
重荷をば背負つて父は眠りこけ
頭程光らぬ父でありにけり
友愛といつている間にパパとなり
(人) 聡明な親仁この頃耳遠く
(地) 出る朝とかえる夕べが父らしう
(天) 父親の帰るを信じ母は老け
この中の百酒の雅号の作者が西尾菜主幹で
明治四十二年生まれの白水星西年ゆえの命
名であった。この兼題「父」の他に出された
「温泉」で、天位を獲得されたのが、昨夏、
香川県白鳥町に句碑となつた
温泉や座り羅漢に寝る羅漢
の句である。丸四年後の天神祭に発刊になつ
た合同句集「大川端」には、佐野菜(後年、
西尾家の養子となられる)の名で出ている。
評価の高い句集なので佳句を紹介して置く。
金魚屋に舞妓たもとを教えられ
とき汁の一筋白く船世帯
六角堂幾何学的に暮れて行き
三の糸切れて久しくなりにけり
謹厳の彼も人の子ブラスなり
酒酒酒秀才の影何処へやら
伯林の夜を君黙々と歩く気か
尋ね人浴衣のままと書いてある

勇 三
寿 一 郎
義 郎
百 酒
義 郎
勇 三
利 生
路 生
柳 秀
路 生
筑 川
湧 三

今日からはお前というぞ俺という
笑うという事を忘れて金を貯め
蚤にも喰わせず天下もとらず
筈は竹になるとは知らなんだ
お婿さんと名をぬきにして呼ばれてい
大阪は金の鎖も目につかず
逆境に居て褒められる耳の相
二階借生駒の山も一寸見え
先生の癖は書生のものになり
枕もとさぐるは金でなかりけり
上役の上役の方針だ
大望は春の雲だけ知つてくれ
金を蔑すみ金にあこがれ二干才過ぎ
はいくと言つてはいるが自尊心
使われに行く身電車ですましこみ
一本の外はどうでも良いテーブ
アルバムの妻も仲よしみな美人
舌も足も纏れて酒の楽しけれ
あの晩の風邪よと女嬉しそつ
染め直し昔の生地を褒められる
のうくと山の湯槽で雪をさく
大阪帝国大学の勅任官の教授連を交じえた
句会で、路郎先生と長崎柳秀博士のお二人に
はお酒が出たそつで、当時学生の北川春巢氏
は入会を断られたという。

洗 塵
青 一 路
氷 炭
方 正
千 秋
正 甫
貞 三
利 生
橙 舎
芳 一
栗
山 彦

「川柳塔」八〇〇号に寄せる

孝行・人妻

田辺 聖子

麻生路郎に佳句が多いのは、みな人のみとめるところであるけれど、私も現代川柳紹介の書である『川柳でんでん太鼓』に多く引いた。路郎の句はいくつもの貌をもつ。うがちもユーモアも批判も詩もある。句により句趣はちがう。私は路郎の句が好きだ。好きな句に○をつけてみると、一ページほとんど、ということが多いからおどろく。

たいへん現代的な作家で、作品生命はいまも衰えていない。私は岸本水府の句も好きで、二人を並べてみると、ほんとに好敵手だったと思う。同時代に生れ合わせ、互いに競い合うライバルを持てたのは、作家にとつても川柳にとつても幸福なことであつた。

ところで路郎さんの句には短篇小説みたいな句が間々あり、エスプリの利いた短篇を、ぎゅつと圧搾するところなるんじゃないかという気がする。そいつうとき路郎の目はほとんど小説家である。

「孝行はいい男がしなびて来」（昭2）
わずか十七文字で、男を的確にスケッチし
て間然するところがない。

「武玉川」にも
「嘘が嫌いで顔がさびしい」（十二篇）
というのがあり、路郎のと趣向はちがうが、
どちらもふと笑ってしまふ句だ。

孝行、というコトバ、現代ではほとんど死語の如くであるが、戦前ではむろん生きてい

る。〈君に忠、親に孝〉を叩きこまれて、つまり現代風にいふと、道徳的管理をされ、マインドコントロールされて国民は育つ。

しかしそんな時代でも、孝行と男は、きわめてむすびつきにくい概念のコトバであつた。〈男〉というのだから、社会人であらう。子供や嫁、娘、なら馴染む〈孝行〉というコトバは、社会人とは融和しにくい。〈男〉といふのは、やるべきことがいっぱいあり、やりたこともあるはず、エゴや打算、野望、術策にみちみちているもの、〈孝行〉どころではないといふのが男の生態であらう。よく成功した実業家が親孝行を吹聴するが、あれはヤラセである。

親のことを思わぬではなく、よかれとは思ふものの、まず目前の、自分の人生の舟を嵐から守ることのほうが大事。それをやらないで、孝行にかまけてる男は、男の脂気が足らん奴であつて、「しなびて来」の、「来」がいい。この一句、私にはおかし。

「人妻となつて卑怯な眼をつかい」（昭10）

路郎さんの観察は鋭い。それに語句の適切犀利なこと。〈卑怯な眼〉がいい。

〈人妻〉はすでに〈女〉でもなく〈娘〉でもない、人妻という種族である。人妻は家庭という一国一城のあるじとなったのだから、お愛想もいい、顔色も見、外交手腕も要るだろう。要するに、おとなになって世態人情の諸説にも通じてくる、ということだろう。

人はそうやって人生の年輪を重ねるのであるが、この際、女に特有の嘘や見栄が不透明な色つぼさを人妻に与え、人妻臭というよくなモヤモヤした雰囲気を生む。路郎さんはこれに〈眼〉にレンズを絞る。その色気はいとわしいものではないがしかし〈卑怯〉と形容せざるを得ない所がある。いや、ほんとうに一篇の小説ができそうだ。

路郎さんの句はいまも生きています。あまたの俊秀が育たれ、『川柳塔』通巻八百号を数えて生々発展されていることをお祝いする。

人生の詠嘆を思う

木津川 計

ああ、この通りだと思い、やはり「嗚呼」と私も嘆じたのは橋高薫風氏の次の一句だったので。

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

人生とは何かを言い尽しています。人の世を説く在来一切のすべての試みは、この一句への到達に向けた試行錯誤だったのだ、と私は申します。

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」はロバート・フルガムの著書でした。砂場で学ぶ代りに、私は長じて川柳からどれほど多くを教えられたことでしょうか。

もちろん、他の短詩型文学も人生の教師であつたこと違いありません。ですが、詩は美しい鉄筋ビルの趣で、華麗だから靴も脱げずに私は畏まりました。

短歌は二階建てですから親しめましたが、上り降りに息が切れて、一階で寝ころんでばかり私はいたのです。

そこへいくと、俳句は平家建の気易さのほが、書院造の格式ですから礼儀をわきまえねば出入り叶わぬ窮屈さを払拭できないのです。

だから、同じ平家建でも町家の風情をたえた川柳に私は馴染み、「子沢山僕の枕は何処へいた」(路郎)、「浴槽へずらり立ったは皆わが子」(霞乃)、四男五女の子育てに愛情深くしてうろたえていた路郎や夫人の市井の生き方に私は共鳴し続けたのでした。

岸本水府と並び、日本の現代川柳を隆盛に導いた麻生路郎はこの道の求道者でした。川柳を「人間陶冶の詩」と言つた路郎の考えはともすれば下俗のユーモア雑言と川柳を解する連中への手厳しいいましめだったのです。

ケースワーカーたちの雑誌「公的扶助研究」に発表されて世論の響きを買つた第一回福祉川柳大賞入選句に私は呆然としたのです。これらは絶対に「川柳」でなく、「三流」の暴言



でしかありません。「救急車自分で呼べよはかやろう」「金がないそれがどうしたこくんな」「親身本気じゃあたしや身がもたぬ」。麻生路郎は「句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸である」とも捉えていました。文は人なり、を思い起さず、けだし名言というべきでありましょう。

人類は悲しからずや左派と右派 路郎
「これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによって、平和な世界を生み出した。念願に燃えているものである」と路郎は綴っています。

尾道に生まれましたが、十歳から終生大阪に在って、この地の体臭に身を染めた大阪人それが麻生路郎でした。由来、大阪は平和都市であり、大阪人はなべてことごとく平和主義者であった——私の変らざる大阪観であります。がめついや、ど根性は一九六〇年代の流行語であり、高度成長を支える精神と目されたが故に賞揚され、遺憾ながら社会化されて、ゆがめられた大阪観に定着したのです。ですから、人情に満ちた大阪をやはり私たちは謳いたいと願います。

私どもの『上方芸能』は創刊以来二十五周年、わずか一六六号にしか過ぎません。大正

十三年から當々、八〇〇号の堆積にただ頭を垂れるのみです。ご関係各位様のご努力に深甚の敬意を表させていただきます。

冒頭の如く、人生の詠嘆、切なさを再び思います。であるからこそ、慈味豊かだった麻生路郎の精神は生き続けねばなりません。希望の応援歌が『川柳塔』からこれからも歌われることを念じ上げます。

おめでとございませう。

和

小島蘭幸

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

麻生路郎先生のこの一句が今、私をとらえて放しません。『川柳雑誌』を継承した『川柳塔』が誌齡八〇号を迎えるにあたり、感慨一入です。私は『川柳塔』創刊号からの緑なので路郎先生には、お会いする機会はありませんでしたが、私の川柳の師、山内静水はことあるごとに「君、川柳は情熱だよ。川柳は下手でいいんだよ」という路郎先生の言葉を引用されておられました。

『川柳塔』創刊号に麻生霞乃先生は「生命

の「一頁」という玉稿を寄せられ、そして第二号には、

事務整理

書類焼く火は落城の火とも見ゆ

という珠玉の一句を発表されています。当時編集をされていた不二田一三夫氏は、後に、「落城の火とも見ゆ」に泣かされると題して一文を書いておられます。

『川柳塔』創刊から二十八年の歳月が経つた今、私は川柳塔同人であることを誇りに思っています。『川柳塔』の和が好きなので、平成五年八月二十一日、香川県大川郡白鳥町に西尾菜主幹と橋高薫風理事長の句碑が建立されました。白鳥町の町おこしとして生れた句碑は縦一・八m×横一・二mの庵治石製で、一つの大きな石を半分にして、二つの句碑にされたそうです。この二つの句碑は、正に今の川柳塔の和を象徴していると思います。

酒とろりとろり大空のころか

私の寝室に飾ってある路郎先生の短冊です。大空のころも、また、川柳塔なのです。八〇〇号を心からお慶び申し上げます。おめでと川柳塔！

援筆無窮の人生

東野 大八

誌齡ここに八〇〇号、ここからの祝意を表したい。筆者個人にとつても、それは振りかえれば雲霧茫茫の歲月であつた。

私が麻生路郎主宰と銘うつ『川柳雑誌』に最初の筆を下ろしたのは、たしか昭和25年3月号(通巻二八〇)ごろと思う。以来、この『川柳』が主宰者の死去により『川柳塔』と改題し再発足したが、昭和40年10月号(通巻四六一)であつたと記憶するが、この間、数回の休載を除き、私はこの八〇〇号に及ぶまで、なんと通巻五二〇分の執筆をひたすら書きつづけてきた勲定になる。歲月で計算すると、ざつと四十四年間にもなる。歲月とは隙を過ぎる白駒の如し(宗の太祖)とはよく言つたものだ。うたた感慨に堪えない次第である。

これというのも、今は亡き麻生路郎先生という偉大な川柳大先達との「男の誓い」よりなるものと、今もつて自負している。

この間、無償の援筆に、先生らしく応えられたものか、『風流・人間横丁』(昭和35年11月川柳叢書刊)を刊行して下さつた(筆者にとつては川柳関連の著書は、あとにも先にもこの一冊のみである)。

「人間死ぬまで旅人でね。葎乃(夫人)が私一代のもの、死んだら金りんさい柳誌など

八〇〇号に寄せて

月原 宵明

『川柳塔』誌齡八〇〇号、更に創刊七十年という輝かしい年を迎え、感謝感激に堪えず心からおよろこび申し上げます。

『川柳雑誌』創始者、麻生路郎師あり、中島生々庵師、現在の西尾某師と三代の主幹をお迎えて、今や川柳塔は川柳文芸の代表的

は出さん、とニラミつけて言つ」(『川柳雑誌』麻生路郎追悼号・小生拙文参照)

得体の知れぬ川柳ごときものに魅入られ、その生涯と家族を窮亡に陥れたという、その怨念を先生は、眼頭拭つて申されたその酒席

的一幕を、今もつて私は昨日のように明確に記憶している。にも拘らず『川柳』から『塔』へ、えんえんと駄筆を弄し続けたのも、先生

への男の友情と、往時の名編集人不二田一三夫の熱情溢れる人間愛に拠る。

今も私は、本誌に駄文を弄し続けているが「川柳の群像」二〇〇回を以て、永遠の袂別を川柳とともに宣言する決意を固めている。

存在として活動を続け、「人間陶治の川柳」を標榜し、人の道と絆を大切にしてい今日の大発展を見るに至つた。

なお現理事長橋高薫風師の秀でた指導力と強い情熱は高く評価され、黒川紫香・野村太茂津両副主幹、西田柳宏子・阿萬萬の両副理事長はいずれも生え抜きの精鋭であつて、推進力抜群であり、さらに十九名の常任理事はいずれも現川柳塔の先達として活躍し、私生活は犠牲の上、専念されているご熱意は感銘あるのみで、私達は主幹以下この人達の振る

旗に、安心して続いて行くばかりである

兎角、周年祝典等、歴史を回顧する時には、自然と先賢の功績顕彰、報恩が想い出の中で強く脳裡を掠めるもので、私もその例に洩れず、麻生路郎師に触れる恥ずかしい出来事がある。

それは昭和九年、路郎師が今治市へ足を運ばれた四国川柳大会が、初めて今治市で行われた時のこと、無事大会終了後、前田伍健先生以下松山勢と、主催の今治勢が路郎師を囲んでの懇親会で、お酒を召された上機嫌の路郎師が、乞われて半折の揮毫をしておられ、その中の一枚が不本意と思われたか落款もせず、反故と共にあったことを発見した。

新参の私が到底、揮毫を頼む勇気もなく、しかし残念で致し方なく、悪い事と思つたが、その半折をそつと戴いて帰り、後日仮表装して、私ひとりの秘密の宝として、文字通り秘藏して今日に至つた。書き損じとして反故にした理由はどうしても解らない。その句は

酒とちりとろり大空のころりかも

この句意は二十歳代の私に解らず、三十年後にじわじわと共感を呼んだが、しかしこの取得行為を恥じ、誰の目にも触れさせなかつた。

泉下の師に是非お許しを賜りたい。

羊 羹

羊羹のすこしかたいも旧家らし 路郎
という句で指が止まった。大正か昭和初期の句であろう。羊羹そのものの存在も、私達に身近でもあり、しかも高価な嗜好品でもあった。いかにも旧家のたたずまいが感じられる句である。

昭和二十八年に刊行された、麻生路郎川柳生活五十年記念・麻生路郎川柳句集『旅人』の八〇〇句目の作品である。

二〇〇句目は、

古くとも僕には仁義禮智信

四〇〇句目は、

ほほえめばほほえむ恋の川田順

という句がある。句集というものは、古いたとえて恐縮だが金太郎飴のようなもので、どこを切つても、麻生路郎氏の素顔が出て来る。顔のない句集もたまにあるが、それは例外。

一時期お住まいも近くだったし、お手紙を戴いたこともある。番傘に籍を置きながら、私はひそかな路郎ファン、隠れ路郎ファンだったのである。

岩 井 三 窓

『川柳雑誌』の本社例会場（御津八幡宮社務所）の前を何度も逡巡して通り過した戦前の頃、もしあの時飛び込んでいたら、と思うと感無量である。

八〇〇号に因んで、誹風柳多留の八〇〇句目は、と調べてみた。これは数え易かった。

初篇は七百五十六句、二篇の四十四句目が八〇〇句目である。気が進まないが書こう。

方丈は雑蔵へ来ていちゃつかれ

（似合こそすれ似合こそすれ）

「方丈は寺の住職。たまたま用事で訪れた後家を口説いて、人目に付かぬ雑蔵の中で戯れられた。僧侶は禁欲を強いられただけに女犯の句が多い」（教養文庫・誹風柳多留）。

書いては見たが、後味が悪いので、岸本水府川柳集（文庫版）の八〇〇句目を採す。

引き止めて音の忙しい鏗節 水府

四〇〇句目は、

友禪は箆をはみ出て長い風呂 水府
やはり句集は金太郎飴である。

（番傘川柳本社）

祝 八百号

去来川巨城

創立七十周年を迎えられるにあたり、誌齡八百号記念の祝宴を寿がれるとのこと、まことに目出度く心からお慶び申し上げます。

七十周年で八百号ということの矛盾は、すぐお判りのように、その中に忘れ果てようとしておめしている私たちに、残酷無惨な戦争、それも敗戦という非情極まる暴力の爪跡が、厳然と残っていることを思い知らされました。

例えようもない人材も、物資も、とことん欠け果てた窮乏時代を克服して、これからの夢を生む新時代に対応され、その脈々たる息吹きを横溢される貴社に、改めて、心から祝福と敬賀を申し上げます。

むかしより「継続は力なり」という諺がありますが、八百号を積み重ねた実績は、来たるべき二十一世紀に向かって大きく飛翔する原動力でありましょう。

道元禪師という方の書いた『正法眼蔵』という書物の中の問答に：「問う、枯木また龍吟ありや、否や、答う、われ鬪饑の裏に獅子吼あり」と。たいへん難しい問答のように

も思えますが、要は、枯木のような中から龍の歌が聞えるか、との質問に対して、私には、されこうべの中からも獅子の音が聞かれます、と答えたということであろうと思います。

このことは、いつ、いかなるときでも、心あらば無から有を生じるなどは、決して不可能なことではない、と謂われているようで、川柳を志すものの道をも訓えられたような気

川柳塔の魅力

波多野五楽庵

人間五十年 下天のうちにくらぶれば、夢幻の如くなり。織田信長の好んだ敦盛舞曲の一行であるが、人間には限りがある。

柳誌多きと言えども、途中で泡沫の如く消えた柳誌の如何に多いことか。同人誌の悲哀は、この一事につきる。消え去った理由と対

持になるのです。作品創造の面でも、組織運営の面でも、この気概は通用するでしょう。

川柳は古い文芸となつてしまつたのではと、心を痛められる声が起りつつある現代ではありますが、川柳塔の旗印の下では、その杞憂は全く無用のことのように拝見します。

それは会員諸氏の勃々たる気魄の中に、つねに、文芸のいのちである未来図が存在するからでありましょう。同好のものとして甚だ頼もしく感ぜられる存在であります。

この祝宴を記念として、更に大きく、前進されんことを希つております。ほんとにお目出度うございます。

(ふあうすと川柳社)

策は、「川柳塔」八百号の魅力の中にこそあると言つても過言でもあるまい。その魅力とは、

第一に、指導者のすばらしさである。

路郎先生、生々庵先生、栗先生と脈々と引きつがれ、なお路郎先生の心を心として脈打つ指導力と温かさ。一度温情に接したら忘れることの出来ない和の頂点にこの方々がいらつしやる。泡沫柳誌はまずこのことを学ばなければいけない。

第二は、八百号を支えて来た多士済済の群像と才能であると申し上げて憚らぬ。

紫香先生、薫風先生をはじめ、全日本にくてはならぬ人々が、がっしりその基盤を守り、指導力を發揮していらつしやる。役員をしている一人一人が、それぞれの柳社を指導している主幹であり、それでありながら驕ることもなく、川柳塔本社をがっしり支えている。この強みこそ、やがて来る千号への基盤であると言ふことができる。

第三は、川柳の中道を歩む未来への足音であらう。伝統川柳のうがち・軽さ・ほほえみ

すばらしきかな、川柳塔

天根夢草

『川柳塔』誌齢八〇〇号、おめでとつございます。川柳塔社の皆さんは、みんな仲よしだという印象が一番強いのです。それは多分先導なさっている西尾栗先生のお人柄からうまれてきているのだと思います。

西尾先生は、壇上でお話をなさっていると、きカメラマンが近づきますと「写真ですか」といって静止なさいます。そうすると会場がなごやかな雰囲気になります。

西尾先生は、このごろちよつと足が弱られたようです。そのために近くの男性が肩を貸

の三要素を充分ふまえた上で、なお詩性川柳を追求してゆく内容のすばらしさ。特に小出智子さん、八木千代さんの受け持っている、

読者に安心を与える本、それは『川柳塔』です。偉大なる執筆者、東野大八先生の「川柳の群像」は毎号2ページにわたって、一人ずつ丹念に人物像を描いておられます。これは、いずれ一本にまとめられることでしよう。貴重な資料でもあります。

茴香の花の一句一句に、これからの川柳の表情が生き生きと表現されている。中道を歩む『川柳塔』の前途は、この二字にあると私は確信してやまない。優しく温い人々の群像。川柳塔の魅力はここにあった。『川柳塔』八百号バンザイ。嬉しき一杯で字がにじんで来る私である。

三十数回になる橋高薫風先生の「大空のころ」もすばらしい読みものです。田中正坊編集長の博識も目立っています。編集長も、もっと書いてほしいと思います。(川柳展望社)

したりしますと「若い女性だったらしいのに」などと平気でいわれます。多分、本気でそう思っておいでなのでしょう。おおよそ先導者らしくない先導者だと思えます。

西尾先生は私をみるとすぐ「新子さんによるしくね」といわれます。それだけしかいわれません。ほかのことは、なんにもいって下さいません。西尾先生は、それがすべてのメッセージだと思っておいでなのでしょう。

『川柳塔』という本は安心して読めます。編集パターンに大きな変化がないからです。

故人の眼を
恐れています

八木千代

八〇〇号という大変な誌齢をすっしり受け止めています。大正十三年の創刊といえ、不思議にも私の暦と重なる事になってしまします。よくよくの縁だと改めて思うのです。

今、机に川柳塔の古い一冊があります。575号ですから昭和五十年の三月で愛染帖出版の号ですが、「愛染とは物に心が沁みこみ愛着の深いことである」と選者は書かれています。同人になってそろそろ三十年。私の暦のほうは一途に生きては来ましたが、何

度も崖つぶちに立たされましたけれどその都度、幼い時から私を慈しみながら一足先に此岸を離れざるを得なかった私の眼らに支えられ、どうにか立ち直らせて頂きました。

そして川柳塔の歴史です。一度だにお目にかかった事は無いのですが、路郎先生の孫弟子である私は自称しています。私のような者にでも、折りあることに路郎先生の在りし日話を話してくださる先生がた、敬慕が伝わるのか凄く近い存在になってゆくのは長い年月の間には当然なことでした。

今この八〇〇号大会の盛儀を眼にされましたら、どんなにお喜びでしょうかと胸がつまります。一さらばさらばですと雲の峰へ渡られた先生のことですもの、きつとあの眼光で見据えていらつしやるに違いありません。生々庵さん、多久志さん、小松園さん、好郎さん、摩太郎さん、一三天さん、牧人さん、酔々さん達の複数の眼。涙もあらたな史好きさん、雀踊子さん。山陰においても茗人さん、緑之助さん、日満さん、三結さんなど、数秒の間でもこれだけの指が折れてしまします。私は川柳をこよなく愛された故人の温かくて厳しい眼を生涯恐れます。

どうぞこれからもお護りください。雲の峰からずつと見守って下さいますように。

八〇〇号に寄せる

吉岡龍城

創刊大正十三年から七〇年、人生古来稀也と申しますが、川柳塔八〇〇号の偉大なる歩みには、川柳誌として名実共に稀也と言えましよう。

大正の浪漫時代から始まり、昭和初期の不景気を越えて戦争の時代に入った非常時体制昭和十八年の雑誌の統制、川柳にとって暫くは、多難で肩身の狭い時代が続きました。しかし、そんな荒廢の世相の中でせめて心の豊かさを川柳に求める人も多く、戦争終結と共に、昭和二十一年に率先して麻生路郎先生の『川柳雑誌』は再刊されました。

私共もその頃から本格的な川柳を知って、全国的にも続々と川柳誌も誕生しました。私が川柳を教わった、田中辰二、大島溥明の両師も麻生路郎先生と親交があつて、

俺に似よ俺に似るなと子を思い
子を死なし学校に子の多いこと
寝転べば畳一帖ふさぐのみ

辰二師から、この名句の「うがちの心」を手本として勉強せよと教わりました。

私が知りました路郎先生のプロ川柳家としての理念と情熱には感動深いものばかりでした。私共の川柳道楽ではとても及ばない川柳濃度を感じます。それが現在の『川柳塔』に受け継がれて八〇〇号の発展の基盤となったのでしよう。

柳社の運営は、経営と指導と同人の三本柱で発展すると言われますが、円満福徳な経営キャリア充分の西尾栗主幹を中心として、清新で魅力的な橋高理事長外の有能なリーダー、そして百花齊放の同人の足並も揃って、現在の『川柳塔』の充実した内容、作品の活性化は全国の川柳界から注目され、羨望された存在です。

私共が目指す二十一世紀の川柳は、必ず他の短文芸と肩を並べて協調し合うことでしょうが、そこに『川柳塔』千号誌の輝かしい姿があるでしよう。御発展を祈念致します。

(川柳噴煙吟社)

最近思っていること

大野 風 柳

川柳はいつでも「いま」を詠うものだと思う。「いまの自分」「いまの暮らし」「いまのおもい」などなど。

ペンを持って紙に向うとき、一年前のことは考えないこと、昨日のことも考えない、いまを考えて詠う、これが川柳だと思う。

だから、「いまの時代背景」を摺んでいなければならぬ。つまり、「いま」と「過去」の違いをである。

川柳を書く行動の裏打ちに、常にその時代があるということに気付くべきであろう。

以前から、物の時代は去った、心の時代になったと言われている。この心の時代とは、ひとりひとりのよろこび、楽しさを持つ時代だと私は思う。

物の時代は、便利さという共通したものを求めて来た。AさんもBさんも、そして私もすべて共通な便利さを大切にしたい。

しかし、いまの心の時代では、AさんのよろこびはAさんのもの、BさんはまたBさん

なりのよろこびを持つ、私もまた私のよろこびを持つことなのである。

それぞれが違う、異質のよろこびや楽しさをキチンと持つ時代に入っていると思う。

あなたのよろこびを、あなたは果してお持

光陰矢の如し

有 働 芳 仙

『川柳塔』八〇〇号出版の偉業！ 誠に御同慶の至りです。故麻生路郎主宰の『川柳雑誌』に小生が入会したのは昭和二十六年頃かと思えます。

光陰矢の如し、もう五十年にもなろうとしています。現在、熊本川柳会会員十余名が川柳塔の南限支部として、和気藹々として作句活動が続けています。川柳塔の支部の中では一番ミニ支部ですが、皆張り切って塔風川柳へ情熱を燃やしています。一番有難いことは、

ちであろうか。あなたの楽しさは何かと問われて明確に答えられるであろうか。

川柳についても同じ。あなたの川柳がある筈である。あなたしか居ない川柳を求めるべきである。それが、あなたのホンモノ川柳と言える。

改めて、自分と他人との違いを確認してから、川柳を書いてみてはどうであろうか。

(柳都川柳社)

こんな小さな支部でも主幹の西尾先生はじめ薫風師、紫香師の温かい指導をうけたことでした。はるるばる熊本までも出かけて頂き、句会に懇親の宴に膝つき合わして御激励や御指導をうけた想い出は、昨日のことのようにはつきりと思ひ出すことができます。

『川柳塔』が脈々として発展し、会員数も殖えつつある裏には、このような本部先生方の愛の指導があるからと思えます。幸い熊本川柳会も会員の永田俊子女史が川柳塔賞および路郎賞の二賞を頂き、頑張つて頂いており、少しは肩身が広くなり、これも御愛導の賜と感謝して居ります。これ以上、会員数は殖えそうありませんが、最後の一人まで頑張つて御熱導にお応えするつもりです。

川柳塔社各賞の受賞句一覽

川柳塔社は現在、「川柳塔」(同人吟)の掲載句を対象とする。「路郎賞」、「水煙抄」(誌友吟)を対象とする。「川柳塔賞」、各地柳壇の「佳句地十選」から選んだ「各地柳壇賞」、「銀河系(愛染帖)」の作品群から選ぶ「銀河系(愛染帖)賞」、「茴香の花」から同じ方法で選ぶ「茴香の花賞」、「一路集(課題吟)」の各題天位句を対象とする。「一路賞」の六つの賞があります。

それぞれ創設の年度が異なり、選考の方法も違います。が、いずれも優れた作家の顕彰と新人の発掘に大きな役割を果たしています。かつて七三七号(昭和六十三年六月号)に、「栄ある二賞の足あと」として、路郎賞・川柳塔賞の本賞一覽を掲載しましたが、今回、八〇〇号を記念して受賞の対象となった準優秀作を含めて、すべての受賞句と作家名を年度順に収録しました。

路郎賞

昭和四十一年度(一九六六) 第一回

内職に藤色があるたのしきよ

〈準優秀作〉

春に咲く花をわが手で咲かせた気
疲れてるまぶた閉じれば音がする

昭和四十二年度(一九六七)

身よりなき老婆いくさのことにふれ

〈準優秀作〉

僧正ヶ谷雨も寿永の色なるか

内藤きさ子

寺田 花宵

宮川 珠笑

森田 布堂

正本 水客

人生の傾斜へころげまいとする

昭和四十三年度(一九六八)

似て居ない父に足音だけが似る

〈準優秀作〉

添わしても根じめの花はあっち向き

炎天をテクテクテクと自嘲する

昭和四十四年度(一九六九)

足跡を残そう砂のある限り

〈準優秀作〉

父の歳より長く生き父を識る

情熱の枯れた時 樹氷のようになりたい

不二田一三夫

木山 遠二

西出 一栄

工藤 甲吉

本田恵二郎

後藤 梅志

西田 清子

昭和四十五年度（一九七〇）

握手した手が離れないまま坐り

〈準優秀作〉

冷戦中なのに仲人頼まれる

ふところの金がいや味な口をきき

昭和四十六年度（一九七一）

灯台の夕陽神話を抱きよせる

〈準優秀作〉

久々の素足へ女たかぶって

煩惱は裂けし柘榴に極まれり

昭和四十七年度（一九七二）

暇閉ず耐える苦痛が洩れぬよう

〈準優秀作〉

耐えて来た拳を悔いもなく開き

余生など牡丹は知らぬいさぎよき

昭和四十八年度（一九七三）

揚つても揚つても雲雀に空がある

〈準優秀作〉

落ち着かぬ心へ香を焚いてみる

片目の達磨いつも心の隅に抱く

昭和四十九年度（一九七四）

檀山へ背負うて呉れる子もおらず

〈準優秀作〉

一と粒の種 太陽は見逃がさず

石だたみの余韻 歴史が通り過ぎ

浜田久米雄

野田素身郎

有信新之助

尼 緑之助

八木 千代

吉岡 美房

堀江 正朗

水粉 千翁

三井 酔夢

小浜 牧人

本田恵二朗

小出 智子

藤井 春日

本田恵二朗

正本 水客

昭和五十年度（一九七五）

悔いのない汗千金の夢追わず

〈準優秀作〉

花芯をのぞいて花を哀しませ

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし

昭和五十一年度（一九七六）

染め替えて羽織は過去を喋らない

〈準優秀作〉

ポケットに蜜柑が一つ落着かぬ

生き難き死に難き貌 檻の鶴

昭和五十二年度（一九七七）

生き方の違いを敵のように言う

〈準優秀作〉

女三人ふつと話題の無いこわさ

春めぐる母なる匂い蓬摘む

昭和五十三年度（一九七八）

満開の花に誘われ修羅出土

〈準優秀作〉

菜を漬ける女の業と楽しさと

樟脳よ君と僕とは瘦せるべし

昭和五十四年度（一九七九）

ペンシルの芯は脇道など知らぬ

〈準優秀作〉

銀髪になったら着たい色があり

児のおしめ換える十指にある祈り

林 瑞枝

岩田 美代

小浜 牧人

岩田 美代

谷垣 史好

三宅 不朽

森井 菁居

垂井千寿子

水粉 千翁

香川 酔々

岩田 美代

高杉 鬼遊

松原 寿子

本間満津子

和田維久子

昭和五十五年度(一九八〇)

女と妻のあいだで好きな彩を着る

〈準優秀作〉

秋の蚊よお前これからどうする気
ためされているとも知らずまだ喋り

昭和五十六年度(一九八一)

順々に嫁くそれだけを羨まれ

〈準優秀作〉

上役と打ち出してから棋力落ち
元旦の心四恩をかみしめる

昭和五十七年度(一九八二)

来る人が来て去に元日黄昏れる

〈準優秀作〉

御身ぬぐい大仏様のお手に乗る
雨や憂し家庭医学の赤い本

昭和五十八年度(一九八三)

歳月やゆるし合うより他はなし

〈準優秀作〉

水甕があふれて朝を疑わぬ
馴染客犬へも土産買って来る

昭和五十九年度(一九八四)

エトランゼ前もうしろも風が吹く

〈準優秀作〉

現代の落人かくれ里がない
ぼんぼこ山の月は狸を眠らせぬ

小出 智子

野田素身郎
児島与呂志

大矢 十郎

野田素身郎
工藤 甲吉

市場没食子

高橋 操子
谷垣 史好

西山 幸

八木 千代
川口 弘生

林 はつ絵

西出 楓楽
林 瑞枝

昭和六十年(一九八五)

春ざわざわ一級河川まだ眠り

〈準優秀作〉

薬玉を迂闊に割れば核になる
春風に可愛い嘘の二つ三つ

昭和六十一年度(一九八六)

聞かせとこ九官鳥が喋るから

〈準優秀作〉

月の砂漠を妻と歌ったことがない
裏切りの話はしない手話仲間

昭和六十二年(一九八七)

この夫に草書のかすれがちと欲しい

〈準優秀作〉

混浴の吃水線を心得る
叱られてみたくて軽い嘘をつく

昭和六十三年(一九八八)

アトリエのみかんころんだものでない

〈準優秀作〉

空調の音かすかなり美術展
灯を消してただそれだけの夫婦なり

平成元年(一九八九)

さくらさくら今年も皆に逢えました

〈準優秀作〉

どの彩を足しても虹が落着かぬ
女郎花やわいおとこが多すぎる

谷垣 史好

渡辺 独歩
奥田みつ子

高橋 千万里

波多野五楽庵
辻 白溪子

松川 杜的

土居 耕花
樫谷 寿馬

高橋 操子

奥田みつ子
榎本 吐来

宮崎シマ子

福本 英子
田中 正坊

平成二年度（一九九〇）

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む

〈準優秀作〉

雲に来てひばりはやつと巢を想う
わが恋は褪せずあかねの炎ゆる中

平成三年度（一九九一）

千本を伐り一本の植樹祭

〈準優秀作〉

ひょうたんの駒を出そうとあせつてる
光らない釘が一番きいている

平成四年度（一九九二）

頂点に立つといくつも影が出来

〈準優秀作〉

六十から女に生きる差がうまれ
ひとりよがりの席に画紙が落ちていた

平成五年度（一九九三）

ああ余生つるべ落しに日が暮れる

〈準優秀作〉

残ったのはロボットだった消去法
西の年サンズイ偏も要りますな

奥田みつ子

栗谷 春子

春城 年代

斉藤 劼

吉岡きみえ

松下たつみ

矢野 佳雲

片岡智恵子

丁坪サワ子

永田 俊子

安平次弘道

岸野あやめ

〈準優秀作〉

情熱の残りを犬とじやれて見る
理性に負け執念に燃え筆をとり

昭和四十三年度（一九六八）

消えるから雪は剝那を淨く舞い

〈準優秀作〉

このままで良いとつくづく思える日
銀婚へ曲りくねった道で着き

昭和四十四年度（一九六九）

宝石の悲哀永住権がなし

〈準優秀作〉

縫い上げて羽織って妻のものどなし
何げなくいっしょに洗濯してあげる

昭和四十五年度（一九七〇）

倅せな女にふだん着が似合う

〈準優秀作〉

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない
金魚すれちがう互いに目もくれず

昭和四十六年度（一九七一）

モノリザの笑いへ私も笑ろうてみる

〈準優秀作〉

空白の欲しさが草をむしらせる
ひと眠りしたら小さな欲だった

昭和四十七年度（一九七二）

飾り壺一枝さされた事もなし

前田美己代

小谷 葉子

高杉 鬼遊

増田 次章

八木 千代

王 紫

両川 洋々

樋口 一峯

小出 智子

河野 君子

岡元 春昇

生信 笑子

榊原 秀子

阪上十止庵

谷岡 芳枝

川柳塔賞

昭和四十二年度（一九六七）|| 第一回

雲の峰あるけばあるくほどひとり

三宅 不朽

〈準優秀作〉

亡母点となりて心の海に佇つ
雑然とテトラポットは役に立ち

昭和四十八年度(一九七三)

めでた めでたでひとり娘をもつてかれ

〈準優秀作〉

鉄骨の夏雲湧かすエネルギー
春風に唯なんとなく遠廻り

昭和四十九年度(一九七四)

小出しする愛円周をかけている

〈準優秀作〉

春闘の夫を信じてみごもれり
引金に指掛けたまま説く平和

昭和五十年(一九七五)

末法の世の新聞をたたみけり

〈準優秀作〉

鴉の目柘榴割れる日知っている
朝の靴働く方へ向けてある

昭和五十一年度(一九七六)

お早ようと豚が正しくささやいた

〈準優秀作〉

てのひらの温みも投げたお賽銭
本当の甘さは塩が知っている

昭和五十二年(一九七九)

咲いて散る ただそれだけの世に疲れ

嘉数千代香

玉置 重人

堀江 芳子

谷 のぶお

荒田 つる

小谷 葉子

谷川 渥子

麻野 幽玄

安藤 潮音

梅本登美也

大林曲ん手

山田スミ子

江口 度

西山 幸

〈準優秀作〉

ぼろぼろの心を洗う旅に出る
善人のその日その日を音たてず

昭和五十三年(一九七八)

デッサンのままで成長して女

〈準優秀作〉

考える蛙ボカんと浮いてみる
私だけ入る小さな円を描く

昭和五十四年度(一九七九)

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠

〈準優秀作〉

仁王像の阿吽の間にある笑い
飛びついてからをどうする青蛙

昭和五十五年(一九八〇)

該当作なし

〈準優秀作〉

大胆な女は踵返さない
〇歳の瞳の中にある私

昭和五十六年度(一九八一)

もう一人の私がいればぬりつぶす

この街の機械の音を愛す父

〈準優秀作〉

和の中に生きて夕日のすばらしさ
逃げ過ぎて風が変わったとも知らず

納 史葉

大林曲ん手

古谷 節夫

矢野 佳雲

川上 富子

岩田 三和

辻 文平

桑田 静子

園山多賀子

古田 寛子

橋元 美恵

西村美佐女

天満三千代

矢野 佳雲

昭和五十七年度（一九八二）

太陽の笑顔を独り占めにする

〈準優秀作〉

この城に生きたあかしの石の苔
人生はどこかに抜ける穴がある

昭和五十八年度（一九八三）

渡し舟みんないい顔して渡る

〈準優秀作〉

春夏秋冬 草の匂いの母でいる
こだわりを捨ててダルマは起き上がる

昭和五十九年度（一九八四）

不器用な夫婦で植える柿の種

〈準優秀作〉

目の鱗みたいに外すコンタクト
正面に山ありゴミを焼いている

昭和六十年（一九八五）

順番に咲いて散るなら事もなし

〈準優秀作〉

寝ておれと叱るが何もしてくれず
定年を待たずに定期券が切れ

昭和六十一年度（一九八六）

鶴の瞑想或は人より深からん

〈準優秀作〉

投げられた小石をひとつ持ち歩く
寡黙なる大樹の下の思いやり

奥山美智子

昭和六十二年（一九八七）

裁かれているのだろうか寒すぎる

〈準優秀作〉

昔むかしの話が好きな藁の屋根
人の世の長し短かしどっこいしょ

昭和六十三年（一九八八）

思いきり眠ってみたいねむり草

〈準優秀作〉

追伸がずっしり重いしだれ梅
今に見て居れと雑巾掛けをする

平成元年度（一九八九）

もたれ合う人と喧嘩をしています

〈準優秀作〉

姑さんと嫁とでなしに出会いたい
千羽鶴北の序曲を思いだし

平成二年度（一九九〇）

泣きに来た海が他人の顔をする

〈準優秀作〉

人並という幸せがありがたい
桐箆のしみはおんなの夢のあと

平成三年度（一九九一）

桜咲く放浪癖はまだやまず

〈準優秀作〉

子育てが終って消えた力瘤
鮎すしを食べて近江の息を吐く

河瀬 芳子

流 奈美子

藤井 高子

土居ひでの

野村 京子

児玉 歌子

池 森子

山根 八重

森 茜

野村 京子

石尾かつ乃

清水 絹子

高杉 千歩

高田美代子

森崎 忠祿

平成四年度（一九九二）

嫁ぐ娘に正座で話すこともなし

〈準優秀作〉

運動会おわって長い夕ごはん

花ひととき人ひと盛り冬木立

平成五年度（一九九三）

したたかに生きる女の返し縫い

〈準優秀作〉

主のない鉄の楔を抜いてやる

組でみじんに刻む消費税

各地柳壇賞

昭和四十八年度（一九七三） 第一回

握手など知らない母の低い腰

昭和四十九年度（一九七四）

ガラス切る一直線の音さやか

昭和五十年（一九七五）

和を願う別れの嘘が美しい

昭和五十一年度（一九七六）

能面の裏に烈しき血の通う

昭和五十二年（一九七七）

抱き上げた母の両手の広さかな

昭和五十三年（一九七八）

遺影おがむ心を風が吹き抜ける

松浦登志子

酒井 靖子

宮崎 菜月

児玉 歌子

原 章峰

尾宮 弘治

大矢 十郎

土井 鹿蔵

岩本雀踊子

高橋 夕花

大路 美幸

竹中 綾女

昭和五十四年度（一九七九）

よく出来た積木ゆすつて見る他人

昭和五十五年（一九八〇）

捨てられた姿で葱は根をおろし

昭和五十六年度（一九八一）

嬉しい日悲しい日にも花は売れ

昭和五十七年度（一九八二）

独り居の耳が大きくなってくる

昭和五十八年度（一九八三）

砂山のもろさを知らぬ少女たち

昭和五十九年度（一九八四）

サインペン女は妻になり切れぬ

昭和六十年（一九八五）

どのペンにかえてもやっぱり僕の文字

昭和六十一年度（一九八六）

そろばんに合わぬ律儀が捨てられず

昭和六十二年（一九八七）

来年も生きるつもりの花の種

昭和六十三年（一九八八）

子を五人産んでひとりの米を研ぐ

平成元年（一九八九）

菊活けて心変りを追いかげず

平成二年（一九九〇）

森を抜けると風は無色になつて吹く

梅原 憲祐

新谷 笑痴

狭間希久志

本間満津子

八木 千代

遠山 可住

田中 正坊

永田 俊子

田中 正坊

赤川 菊野

吉岡 美房

春城武庫坊

平成三年度（一九九一）

青空を見ると洗濯したくなる

平成四年度（一九九二）

一生をスベアで終る鍵もある

井崎ミサ子

池永 正雄

銀河系賞

平成二年度（一九九〇）|| 第一回

きのうより重いバットを振ってみる
連敗の力士の顔を見ておこらう

なつかしい人なつかしい歩きかた
子供らよ虹にふりかえりもせずに

ある時は鯨になって群を出る

平成三年度（一九九一）

土橋はるお

新家 完司

愛染帖賞

昭和六十二年度（一九八七）|| 第一回

呼び鈴に妻よりも猫速く来る

九十には恋人がなし長閑なり

寝たきりがお天気博士のファンとなり

老夫婦お花見猫も来て座り

寝たきりに妻はにこにこ叱られる

昭和六十三年度（一九八八）

三界の万霊雪となって舞い

荒武者に似る鱈の顔北の貌

山一つりんこの花に包まれる

原爆の日はみちのくの果ても照り

二人寝てチンチロリンを聞いている

平成元年度（一九八九）

書きすぎぬように大事なひとへ書く

今はたましいの時間で月の下

書き終えた手紙と二枚貝の殻

思い出のありすぎるのも形のうち

すすき野に小さな弓を負うてゆく

木山 遠二

工藤 甲吉

八木 千代

風船同士重さを比べあっている
銭を喰う子供がなけりや淋しいぞ
エッチな写真入れた財布を子が覗く
面白いことにも個人差はあるよ
D51の煙が入る喫茶店

平成四年度（一九九二）

幸福が続きますよう腹八分

流される方が楽だと知っている

青信号ばかりで眠くなってくる

差引零 余さないのもむつかしい

誤魔かしてみても白には戻れない

藤田 泰子



茴香の花賞

昭和六十二年度(一九八七) 第一回

許せないものは許さず秋を待つ
母の忌の薔薇も牡丹もにくむべし
袖着て素直なものを取り戻す

西山 幸

今日も元気ですかいたずら電話さん
表札もひとり暮らしに草臥れる

昭和六十三年度(一九八八)

木守柿 刻を飾ろうかと思つ

ほうれん草の僅かな紅が衝いてくる

心ぼそい日暮れを愛撫してしまふ

両肩を絹の重みにみたされて

山の名をひとつ刻んでから越える

平成元年度(一九八九)

蓋をしておけば誰かが開けにくる

晴着きる女に年はないのなり

マネキンが冷たく笑う飾り窓

パッチワーク恋のかけらを継ぐように

姫だるまやさしい顔で起き上がる

平成二年度(一九九〇)

蝶になるまでのプロセスたのしもう

トマトを切るとなまくらなのがよくわかる

雨の日のポストに頼りがいがある

鞞鞞の漕げない友と乗るシーソー

佐藤 奏月

寂しくてもいちど声を掛けたくなる

平成三年度(一九九一)

五十五歳柱の傷も深くなる

ぼろぼろの心に化粧して出かけ

笑ったからすこし体が軽くなる

一つ加えて人並にしてみたらう

名月や母に電話がしたくなる

平成四年度(一九九二)

一気に書いた便り一気にポストまで

水漏れの早さを忘れないでおく

せせらぎを宿すわが体内の哀

梨も林檎も一度皮ごと食べてみる

見守って下さる蘇生する時間

後藤 正子

田中 輝子

松本 文子

西口 いわゑ

一 路 賞

平成元年度(一九八九) 第一回

山ほどを語り尽して夫婦かな

平成二年度(一九九〇)

幸せはじっくりがよし豆を煮る

平成三年度(一九九一)

ほつれてはならぬ絆だ深く縫う

平成四年度(一九九二)

花束を投げると海の裏があける

牛尾 緑良

田中 正坊

西原 艶子

椎江 清芳

大空

橘高薫風選

大空へ働きぶりを見て貰う
 落第の眼に大空があるばかり
 船旅のとも大きな空といふ
 旅に出て空がこんなに広がった
 大空の下でうつむくのは卑怯
 大空よ怨という字が消えてゆく
 大空へ翔び立つ子等が病んでいる
 大空を汚して人が裁かれる
 大空に向くミサイルが苦しそう
 大空も落した星を案じてる
 大空にレモン転げしままの恋
 コスモスの一輪空を広くする
 大空が我が家の上にもちやんとある
 ワンルームの壁に故郷の大空が
 大空を見渡し洗濯物をほす
 大空を見ているわたし蟻になる
 踏切でふと大空が目に入る
 大空を仰いでひどい物忘れ
 大空は幻は髪を梳く

大 阪 小池しげお
 千 葉 浅田扇塚坊
 広 島 岩本 笑子
 大 阪 瀬川 幸子
 佐 賀 久保 正剣
 兵 庫 林 はつ絵
 兵 庫 鈴木 良征
 愛 媛 岸 万伯
 大 阪 宮本かりん
 鳥 取 菅井とも子
 滋 賀 平賀 胤寿
 広 島 藤解 静風
 島 根 堀江 芳子
 兵 庫 原 宣子
 熊 本 北川 一進
 鳥 取 新家 完司
 和 歌 山 福本 英子
 島 根 恒松 叮紅
 鳥 取 林 瑞枝

大空が澄んでいたところかぐや姫
 大空を汚してならぬ父母が居る
 大空の下で冠正すべし
 大空の下でコンタクトを失くす
 一、二の三で大空に消えようか
 餌がなくなつて大空ばかり見る
 大空に無償でもらうものばかり
 大空にいつか抱かれてゆくのち
 生きるものみな大空を分ち合う
 大空の下で初孫歩き初め
 大空の旗に大空澄みわたり
 登頂の旗に大空澄みわたり
 大空の青に生きたし青磁焼く
 八月の大空へ鐘沁みわたり
 大空をゆっくり見てる終戦日
 八月の大空澄んでいくさ止む
 知らんぶりの大空がある原爆忌
 大空は許していいキノコ雲
 大空の涙あの日黒い雨
 大空に諍い知らぬ万国旗
 大空のいつもどこかがきな臭い
 大空は砲煙嫌う色保つ
 ラーゲルの大空雁の飛ぶ故国
 大空へ生きる微量の毒を吐く
 大空に陽を見て月を見て無職
 大空が青になる時地は平和

大 阪 叶岡 史風
 京 都 藤田 芳郎
 兵 庫 田辺 鹿太
 島 根 長谷川博子
 島 根 松本 文子
 新 潟 高野 不二
 鳥 取 木村富美子
 大 阪 上田 佳風
 富 山 結城 健治
 和 歌 山 村中 悦男
 東 京 松崎 酔柳
 香 川 松岡 遼雲
 福 岡 八尋いさを
 大 阪 植村 喜代
 大 阪 故神保 拓生
 岡 山 藤川 良子
 兵 庫 氏林 洋敏
 大 阪 岡 良三
 大 阪 堀 良江
 熊 本 永田 俊子
 大 阪 古川覚然坊
 大 阪 岡本 久峰
 鳥 取 小西 雄々
 島 根 佐々木 裕
 鳥 取 山根 八重

大空の青さを牛の瞳にうつし
 大空へ睡はく我を忘れた日
 母が逝き大空だけの里となる
 大空はふる里だった赤とんぼ
 ふる里へ続く空だよあの青は
 大空へ叫んで男故郷を出る
 大空に向ってドンキホーテなり
 大空を飛ぶ夢シャガールのポーズ
 大空のドラマ金環蝕を見せ
 大空を捲ると海の色になる
 空が動いているのではないこの夜明け
 神さまを信じたくなる今朝の空
 大空が光ったその朝のノルウェー
 大空の果てにわたしの予約席
 大空のあの一点は僕の席
 銀河列車噫父も乗り母も乗り
 広い空にも通れない道がある
 大空の心尊厳死が似合う
 子子や大空の展さを見て沈む
 大空へ消えてしまった揚雲雀
 大空の高き広さを草の上
 天才の雲を大空放し飼ひ
 天人の舞楽きこえる花曇り
 大空に羽搏くような名を付ける
 大空へ孫の名を書く「大」と書く

岡山 伏見すみれ
 島根 尼 れいじ
 大阪 岩佐ゲン吉
 京都 小林 幸子
 大阪 指宿千枝子
 佐賀 岩崎 実
 鳥取 小谷美ツ千
 大阪 福井富美子
 兵庫 田渕 定人
 鳥取 林 荒介
 青森 笹田かなえ
 大阪 島元 ふみ
 鳥取 川上より子
 岡山 小野真備雄
 岡山 小野真備雄
 大阪 古川喜美子
 青森 波多野五楽庵
 大阪 岡井やすお
 山口 石川侃流洞
 京都 山海 友照
 鳥取 野中 御前
 大阪 井上 直次
 北海道 本山 哲朗
 愛媛 宇都宮章子
 香川 池内かおり
 鳥取 川崎 秋女

大空を想いつづけるかいわれ菜
 貪婪な目に大空はうつらない
 大空の夜は賑やか星の街
 大空を食い散らかして生きる街
 大空へビルのロケット美しい
 大空を我がもの顔に摩天楼
 大空を四角に切って都市砂漠
 大空の青は天然乾燥機
 国境のない大空が青く澄み
 大空に国境はなし黄砂降る
 大空へ歩調をとったのは昔
 大空のサムライだったやつも逝き
 大空に翼を振って消えた友
 戦闘機飛ぶ大空が小さくなる
 大空をはみ出して舞う尾白わし
 大空を生涯飛べぬ風見鶏
 大空を擦っている竹トシホ
 大空の裾を火花にくすぐられ
 大空も昔はもっと広かった
 大空は疑うことをやめという
 大空を向く哀しみを呑むために
 雲一つない大空とする和解
 大空も風も好きです車椅子
 手鏡で大空掬い取るベッド
 自閉の瞳のぞけば深い深い空

奈良 大村美千子
 福島 藤川 紫水
 愛知 異相たけお
 東京 小寺 九
 奈良 林 正浩
 大阪 田中 正坊
 大阪 水木 博男
 愛媛 清家 勉
 岡山 菊池 七穂
 山口 飯田 白流
 福岡 佐々木よしお
 岩手 三浦たくじ
 和歌山 三宅 一郎
 鳥取 石谷 忠良
 鳥取 西村 半量
 大阪 坂上 高栄
 鳥取 高田 羅奈
 岡山 田辺 灸六
 大阪 結城 君子
 岡山 井上柳五郎
 和歌山 杉山 精子
 福島 玉木 柳子
 鳥取 田村きみ子
 愛媛 宮本はるみ
 北海道 吉田 泉陽

病窓の大空望みも区切られる
 大空に見られた野心どうしよう
 大空へ乳房を見せているモデル
 大空にジーパン穿いたかぐや姫
 無に返り大空に似た心です
 大空の心を持つとよく眠れ
 追伸にいつも大空書き添える
 大空よ母の行方を知らないか
 大空は母のふところねんころり
 かあさんの心の大空はくが飛ぶ
 大空は懐深いお母さん
 大空に疲れた風が手に戻る
 大空に老いても負けぬ夢伸ばす
 古稀すぎてまた大空を恋しがら
 大空にわたしのころ転がそう
 眼をとじてあなたの空を見ている
 大空へ I LOVE YOU と書いてみる
 大空に聞いて貰おう恋をした
 大空へ飛び込んでゆくハネムーン
 大空にはばたく様な初舞台
 大空を泳ぐ金魚の昼の夢
 大空へ鳶と鷹の子同じ夢
 長雨の大空を突く杉木立
 青春へ回帰大空澄みわたり
 大空へ向かって今日が消えていく

和歌山 垂井千寿子
 大阪 野島満寿巳
 大阪 辻 香豊
 佐賀 永石 實
 山口 弘津 柳慶
 愛媛 花岡 順子
 福島 嶋原 啓一
 大阪 石川 勝
 大阪 根 小砂 白汀
 大阪 大内 朝子
 佐賀 山門 タミ
 広島 江川 美栄
 広島 勝武 夏喜
 岡山 田原 稔弘
 愛知 柳生みち子
 大阪 木本ゆかり
 大阪 片上 英一
 鳥取 谷口百合子
 京都 向田桜羊子
 長野 北城 千里
 兵庫 西口いわゑ
 兵庫 松浦 大鷹
 岡山 国米きくゑ
 和歌山 野村太茂津
 鳥取 足立由美子

大空に翔け上がりたし虹の橋
 潮岬のまるい大空遠い青
 大空へ竜飛燈台迫り上る
 大空にネプタ太鼓が鳴り響く
 大空へ男いっぴき津軽風
 風飛ばす空を奇麗に掃いておく
 大空が縮まってゆく冬の風
 大空に雪降る楚歌のごとく降る
 汽車は北へ智恵子の空が広がる
 負けまいと大空睨んだことがある
 大空の彼方に無人駅がある
 大空を仰ぎ職場へ歩を速め
 大空の青さが見たい白い杖
 大空に祈れば届きそうな青
 大空の心は弥陀の心かも
 心経の心は空よ大空よ
 育つ樹のいただきぐいと大空へ
 大空を眺め憶測ばかりする
 四方とも水平線の広い空
 いま少し詫びると大空晴れそくな
 大空へ心の窓を開け放つ
 大空へ背を競い合う葱坊主
 正直な目で大空をじっと見る
 大空の純粹な青心色
 大空を取りこむ額を買いにゆく

岡山 行吉 照路
 兵庫 山本 義子
 兵庫 秋元 てる
 青森 阿部 進
 青森 佐治千加子
 岩手 菅沼 道雄
 大阪 楊井 二南
 岡山 寺尾 俊平
 東京 佐藤 季穎
 兵庫 牧淵富喜子
 広島 横田 英侍
 岡山 国定 姬代
 兵庫 西川 市三
 愛媛 中岡 鍊三
 佐賀 田口 虹汀
 兵庫 中田 純次
 岡山 長尾 恒心
 大阪 泉谷喜代子
 岡山 池田 半仙
 兵庫 倉垣 恵美
 大阪 川島颯云児
 和歌山 桜井 千秀
 大阪 高杉 鬼遊
 大阪 鴨谷瑠美子
 大阪 那須 鎮彦

大空の一角にある物干場

大空の下で泣いたり笑ったり

血を湧かす未知あり大空の青

大空へ少年の羽ぬれている

少年の描く大空に雲はない

ころ満ちて大空の下駆けている

勝鬨の腕大空へ突き上げる

宣誓の声大空へ燃え上がる

全快に大空を又はばたける

大空は運動会の旗が好き

大空にキリンの首のあつけらかん

孫と手をつなぎ大空とびたいな

大空の向うの明日を信じよう

大空で凧しがらみの糸を切る

同じ空仰いで夢と嘆息と

大空の夢を今頃見なくなる

大空をゴクンと一気飲みにする

大空が澄んでベテンス師震えてる

亡父さんのトランペットが大空に

大空へ一番機見る新空港

旅の終りは此の大空に流れたし

隠し事しておりません空の青

大空を掴みに行つたしゃぼん玉

大空へ芽が出揃うた豆もやし

天道虫にも私にもある大空よ

大阪 小出 智子

和歌山 山根 恵美

奈良 中原比呂志

愛知 石原圭依子

島根 島 祥庵

大阪 高杉 千歩

島根 古割 舞吉

岡山 二宗 吟平

大阪 富山ルイ子

大阪 渡部さと美

大阪 榎本 路児

鳥取 津村八重子

奈良 石田 常念

京都 阪本 国公

兵庫 射場 昭一

和歌山 山路 瞳子

鳥取 土橋はるお

鳥取 山田 草人

愛知 藤井 高子

大阪 池田寿美子

大阪 高田美代子

大阪 柴本ばっは

鳥取 上田 宣子

兵庫 田中喜代子

広島 小島 蘭幸

大空を憧れているあひるの子

大空は少年の夢みすてない

大空の高さを知った肩車

大空があるから富士が美しい

日本人心の空に富士を持つ

大空を誰もが解ろうともしない

いつからか空見上げなくなつたのは

大空へわれらの塔がそびえ立つ

秀句

大空を裏返したくなる朝だ

真上から銀河こぼれるプロポーズ

大空にむかつて好きといつてみろ

大空の下孫が生れてじじが死に

大空へ笑顔いっばい向ける花

見送った女が飛行雲になる

大観の富士 大空に瞑想し

大空へサンテグジュベリ旅に出る

凱旋をして大空を振り返る

切々と空は手紙を降らすなり

特選

大空に虹だけ描いた少年よ

大空へ両手広げる平和像

どこまでも大空どこまでもひとり

軸吟

大空の青一色に迷い込み

和歌山 玉置 当代

島根 富田 蘭水

鳥取 野沢 大漁

島根 榎原 秀子

石川 姥浦 博

大阪 藤田頂留子

兵庫 河島いち子

鳥取 春木圭一郎

和歌山 北山 紀世

愛媛 山之内さち枝

鳥取 土橋 螢

大阪 伊佐岡よし子

大阪 海老池 洋

兵庫 香川 水聲

大阪 岡田 一枝

和歌山 岩本美智子

大阪 珍斉源次郎

鳥取 八木 千代

鳥取 中森葉士人

佐賀 山口 高明

大阪 北川 弘子

大阪 橘高 薫風

スタート

齋藤大雄選

スタートに初心の二字を置き忘れ
 スタートの日からタクトを振る新婦
 のんびりもきかん気もいる育児室
 スタートで途中下車など考えず
 スタートの位置で静かに目を閉じる
 睡眠薬を飲んでスタートインを押す
 スタートは輝いていた流れ星
 合鍵を掌におきスタートふり返る
 スタートを見送る母の目に涙
 又元のスタートの位置鉄を振る
 スタートへ戻って初心確かめる
 スタートの火種を燃やす火打石
 ごちやごちやでスタートを切るフルマラソン
 粹順の不運は言わず馬走る
 ゼロからのスタート風と火の航路
 スタートもゴールもごいっしょ阿弥陀さま
 それぞれの夢と虹もち始発駅
 抜糸の日再出発を考える
 スタートを案じる母の百度石

鳥取 松下たつみ
 岡山 尾高 水陽
 兵庫 吐田 公一
 大阪 福田 悦子
 青森 斉藤 焔
 兵庫 春城 年代
 大阪 伊佐岡よし子
 兵庫 森田勢津子
 島根 堀江 正朗
 愛媛 中居 善信
 和歌山 桜井 千秀
 山形 大木 一枝
 大阪 小笹 鍊太
 兵庫 松浦 大鷹
 北海道 星川 信康
 大阪 西村 哲夫
 岡山 井上柳五郎
 岡山 田原 稔弘
 大阪 森下 愛論

再スタートへ賭ける男の靴の紐
 ゼロからのスタート妻と手をつなぎ
 楢山へ行く日もおんな紅をさす
 停退がスタート寸劇はじまりぬ
 感無量スタートのゼロいまのゼロ
 スタートの孫のズックが脱げている
 スタートは狭い間借りの飯茶碗
 スタートに茶碗が二つ置いてある
 スタートの手鍋で妻とまだ走る
 ヨーイ・ドン神も仏も悲劇だな
 末っ子が離陸しましたハネムーン
 スタートの駅に桜が咲いていた
 朝焼のスタートラインで五指を繰る
 スタートの虹がだんだん遠くなる
 保育室スタート並ぶ足の裏
 スタートはたしかに妻が従いて来た
 定年が晴れてスタートした絵筆
 肩書がなくて気ままな二度の職
 一日のスタートしっかり飯を食う
 スタートでトップもビリも胸を張り
 浄土へのスタート雪の夜がよろし
 人類の原点化石から学ぶ
 スタートは茶碗二つに箸二膳
 人の世に旅立ちがある生と死と
 スタートのときには虹が眠ってた

大阪 吉川 寿美
 福岡 村尾いさむ
 和歌山 木本 朱夏
 鳥取 渡辺 独歩
 大阪 山本 翠公
 大阪 吉川 道子
 愛媛 塩路よしみ
 岡山 平田たけよ
 福岡 古賀 健次
 長野 丸山 健三
 大阪 北田 綾子
 鳥取 新家 完司
 北海道 野沢なみ子
 兵庫 西口いわゑ
 大阪 真崎浪速子
 香川 山地マツエ
 大阪 山本たけし
 静岡 川島 一斗
 鳥取 土橋 睦子
 大阪 羽原 静歩
 岡山 寺尾 俊平
 大阪 小川 速水
 香川 川崎ひかり
 大阪 田中 正坊
 兵庫 鈴木 良征

スタートに並ぶ仏の顔がない
 すさまじい気魄の中のスタート
 スタートに勝負をかける水しぶき
 脱サラのスタート祝う鯛を買う
 スタートの時には亡母も居てくれた
 スタートの足が手の鳴る方に向く
 スタートで言葉はいらぬ父の背な
 スタートの昂り軍鶏の首伸びる
 八起き目のスタートに立つ素っ裸
 人情の何かを再出発で知り
 仏滅のスタートだから意地をもち
 スタートを神に任せる阿弥陀くじ
 洗濯からスタートでした漫才師
 スタートの情熱はない老い二人
 スタートは屋台を引いた回顧録
 ゼロからのスタート恥じることはない
 スタートに戻り夫婦の養を振る
 ちくはぐにスタート切ってまだ夫婦
 雨の中スタートきって会いにゆく
 裸になったわたしに出発点がある
 スタートに大きな夢が捨ててある
 通勤車朝のスタート詰め込まれ
 ヨーイドンケーキを切ってからの修羅
 白い画布ひとり芝居の幕があく
 受胎告知動き始める父の貨車

和歌山 山根 恵美
 奈良 大村美千子
 鳥取 松本 舎人
 兵庫 船津とみ子
 鳥取 権代 康女
 島根 西村 早苗
 大阪 大峠 可動
 大阪 佐倉 宗悟
 愛媛 月原 宵明
 大阪 藤井一二三
 奈良 中原比呂志
 鳥取 鈴木 公弘
 大阪 小西 幹斉
 大阪 崎山 美子
 大阪 河井 庸佑
 福岡 国武ナカ子
 兵庫 森 富士枝
 香川 堤 くに子
 奈良 田中紀美代
 岡山 嘉数兆代賀
 福岡 松元 寿永
 山口 長井 柳虎
 福島 熊田 巽
 岡山 黒田よしを
 福島 山田 寛二

スタートを思えば美味いにぎりめし
 敵かな羽化へ静かに目を凝らす
 スタートで見えていたはずの虹がない
 一日のスタート蛇口全開す
 スタートは歩幅が合っていた夫婦
 スタートで転んで母の顔を見る
 一日のスタートたまご一つ割る
 スタートでもう白旗を母は振り
 スタートはまっすぐ飛んだ竹トンボ
 定年でまたスタートに立つ思い
 生い立ちのみんな貧しい立志伝
 国訛り背に深くしむ再スタート
 スタートで軽い呪文を考える
 命ある限りスタート台がある
 空箱もみな横上げて開店日
 リハビリのスタートナースの肩が好き
 スタートは一人で曳いていた屋台
 スタート台にゆっくりと朝が来る
 冥土へのスタート火葬のボタン押す
 スタートはアダムとイブの組むドラマ
 スタートの無理へ神様目をつむる
 スタートに立つと凍ってくる笑い
 スタートに後もどりするあみだくじ
 毎日がスタート朝のチンが鳴る
 真白な靴スタートで身構える

兵庫 門谷たず子
 大阪 住田英比古
 高知 岡村 千鳥
 兵庫 伊藤 晴代
 兵庫 東狐恭仁子
 大阪 深日白光子
 奈良 住田 天端
 岡山 山本 玉恵
 大阪 大路 美幸
 青森 村田 善保
 兵庫 前川 蛙泡
 石川 広本 文子
 兵庫 奥山美智子
 京都 谷口 笠雪
 栃木 田代 好鳥
 奈良 西本 保夫
 大阪 藤井 正雄
 島根 金築 雨字
 岡山 藤原 秋月
 岡山 矢内寿恵子
 大阪 梶川雄次郎
 大阪 岩佐ダン吉
 岡山 宮本 照子
 兵庫 牧淵富喜子
 愛知 石原圭依子

永遠の宇宙へ私の始発

スタートの毬がこのごろ弾まない

ごみ袋片手に鬼が朝を発つ

初孫が歩きはじめた長い道

順位など知らぬ黄色いランドセル

スタートの亀百難の海へでる

スタートが下手でビリには馴れている

蹠いたスタートはるか夕焼ける

スタートはみんなテープを切るつもり

スタートへもどるへその緒捜して

六十のスタート若葉マーク貼る

新たななるスタート無色の砂が舞う

スタートの頃は舞台を走るだけ

試作機のスタート一瞬みな静か

スタートラインもう振り向かぬ靴の先

スタートは他人の飯を食った腕

退院へ再スタートの靴の紐

スタートは成田別れたのも成田

どん底でここがスタートだと思ふ

スタートは一緒だけれど亀になる

仏弟子としてスタートの風生まる

今日からのスタートしかと夢がある

一瞬のスタート欲の目を集め

スタートに返りも一度爪を研ぐ

ブライドは捨て再スタートの靴重い

大阪 足立 淑子

鳥取 高田 羅奈

大阪 岡 良三

兵庫 菊池トミエ

東京 持溝 楨子

鳥取 江原とみお

大阪 板東 倫子

鳥取 白根 ふみ

和歌山 内芝登志代

鳥取 田賀八千代

鳥取 石尾かつ乃

島根 尼 れいじ

大阪 吉川 晋吾

大阪 小森 正晴

大阪 楊井 二南

青森 岡本かくら

愛媛 村上久美子

山口 平田 実男

愛媛 結城ときえ

兵庫 三崎ふゆ子

大阪 古川喜美子

山口 弘津 柳慶

大阪 一瀬 福一

広島 流 奈美子

鳥取 岩原 喬水

關志満々スタートライン火花散る

披露宴苦楽をとまずデコレーション

花吹雪いっぱい浴びてウエディング

ゆっくりとスタート点を切る余生

厨から今日の命が始動する

スタートは逢うだけで良い恋の道

スタートを待つ少年えんぴつ尖らせて

スタートへ祝辞が長い披露宴

過去の道捨てた女の出発だ

スタートから逝くまで火の罪風の罪

スタートをさせて黒子が泳ぎ出す

振り出しに戻るスベアキがない

アリガトウを一杯抱いてハネムーン

一滴の水でスタートした大河

馬の眼が今スタートを告げている

スタートを考えている足の裏

呱呱の声きみもわたしも地球人

スタートに戻る私の縄電車

スタートで背伸びしている影法師

スタートの顔が並んだ美容院

スタートまでに深い褥りの刻を持つ

ゆっくりとスタートします雨の午後

生きる者へのスタートライン喪が明ける

スタートを切り泥舟と知らされる

スタートは二度目なんです神父さま

和歌山 木村 初子

北海道 山田 秀雄

和歌山 岩本美智子

茨城 太田紀伊子

山梨 雨宮 五郎

鳥取 野沢 大漁

大阪 木本ゆかり

島根 佐々木風笙

和歌山 土岐 照

鳥取 小西 雄々

福島 浦井千代子

宮城 保田 二郎

大阪 石川 勝

愛媛 矢野 佳雲

京都 中井三重子

鳥取 森田 熊生

京都 井上 信子

鳥取 澤田 千春

大阪 井上 白峰

岡山 岡 やすえ

鳥取 政岡日枝子

大阪 河内 月子

和歌山 田中 輝子

岡山 国米きくゑ

兵庫 向井 泰子

ヨーイ・ドンで仲良しと手を放す
 スタートでゴールのポーズ考える
 スタートから一直線に虹を追う
 スタートもゴールも孤独と言う勝者
 スタートの時は真つ白だった靴
 スタートに立つ春ひとり
 スタートの絵は母ちゃんと二人きり
 入社式大器も木偶も燃えている
 ヨーイ・ドンこれからみんな敵になる
 一日のスタート蛇口ほとぼしる
 スタートはたった一人のドアチェーン
 意気込みは誰にも負けぬ始発駅
 スタートで転びピエロに甘んじる
 ゼロからのスタート父の背に美学
 スタートの赤紙ゴールの貌が無い
 胎児誕生未来の風が走りだす
 スタートで亀もしている深呼吸
 スタートのもつれ奥歯が欠けてゆく
 スタートにライバルがいる友がいる
 第二のスタート天地無用を貼っておく
 二期のスタート出来ぬおにやんま
 スタートは駆け落ちだよと苦勞人
 出遅れた亀の勝利を信じたい
 七転八起スタートラインが消えかかる
 スタートは大勢だった登り坂

島根 松本 文子
 和歌山 堀端 三男
 大阪 宮崎シマ子
 大阪 都倉 謙三
 岡山 清水悠貴子
 岡山 大石あすなろ
 和歌山 牛尾 緑良
 北海道 吉田 泉陽
 鳥取 岸本 静生
 島根 吉岡きみえ
 京都 松川 芳子
 兵庫 吉岡 圭治
 山口 安平次弘道
 京都 平尾もも代
 福岡 田尻 茂
 山形 鈴木玲於子
 鳥取 流郷登美枝
 鳥取 上田 宣子
 大阪 池 森子
 富山 舟渡 杏花
 島根 原 章峰
 大阪 金井 文秋
 福島 渡邊 満洲
 兵庫 丸尾はる子
 兵庫 井床 芦蘭

スタートがとも上手なかつむり
 スタートは三度転んで鬼になる
 我が喜劇柝を打つたるは亡父だろう
 毎朝のスタート靴が並べられ
 スタートライン隣も息を詰めている
 スタートを切れば男は振り向かず
 スタートの躓き神に試される
 スタートはゼロだったねと笑える日

秀句

脱皮する少年地球儀が動く
 スタートと同じ人と今も居る
 スタートの後を過保護が追いかける
 再びのスタート二の矢は用意せぬ
 スタートは遅れたけれどやさしい子
 スタートを切る一瞬の風となる
 振り出しに戻り殺意とむかいあう
 そして秋たつたひとりのスタートだ
 出直しは見送りのない無人駅
 スタートはふたつに割つたにぎりめし

特選

臍切つて無題のドラマ幕を開け
 ゼロからのスタート外は猛吹雪
 残された時間出発点にする

軸吟

原点に立てば妻来て妻の貌

大阪 板尾 岳人
 兵庫 山本ひさゑ
 石川 姥浦 博
 大阪 欄 智久
 兵庫 前田しゅう子
 愛知 小島 鍵造
 大阪 中田たつお
 高知 百田 幸
 北海道 本山 哲朗
 佐賀 福島 紀一
 山口 飯田 白流
 大阪 柿木 英一
 大阪 早崎 和子
 北海道 武田 正美
 大阪 高田美代子
 鳥取 小谷美ツ千
 京都 藤田 芳郎
 大阪 土田 欣之
 北海道 朝倉 大柏
 大阪 北川 弘子
 和歌山 山口三千子
 北海道 齋藤 大雄

妻

工藤 甲吉選

今日も負けあしたも妻に負けるだろう

妻だからあなたの影についてゆく

稲妻がバチバチ光る今朝の妻

妻がいて御飯があつて猪口もある

少し太いが僕を支えた妻の足

妻なればこそ内心で手を合わせ

妻よ妻やはりおまえの傍がいい

笑い声だけは誰にも負けぬ妻

奥の手があるぞと凄む妻の顔

戸を開けてガランと広い妻の留守

貧乏を苦にせぬ妻でありがたい

盲点の真ん中を突く妻の槍

わがままな俺を自由にさせる妻

気丈でも折に可愛い妻となる

妻だから言える言葉が一つある

いびきかく妻よ一日ありがとう

子をひとり生むたび妻が強くなる

良い妻になろう毛糸を買ってくる

花言葉一つ覚えて浮く妻よ

島根 金築 雨学

愛媛 野村 清美

青森 中山 雅城

和歌山 木村 初子

京都 奥山 晴生

大阪 乙倉 武史

鳥取 田賀八千代

東京 持溝 禎子

大阪 吉村 雅文

大阪 児玉 蛙

鳥取 土橋 螢

静岡 安本 晃授

鳥取 土橋 睦子

和歌山 土岐 照

香川 松村迷観子

福岡 梅田 宣司

大阪 守先 伸子

兵庫 前川千津子

青森 斉藤 荔

妻という大きな傘の下にいる

打てば響く妻ではないが頼もしい

マニキュアをしながら妻は指図する

言い勝って妻へすまないと思う

ゆっくりと見たことがない妻の顔

面と向かえば妻にはいつも歯が立たぬ

美しく飾って妻と方舟に

一生の借りだと思ふ妻の膝

突然の妻の敬語へ身構える

サーブ権いつしか妻に握られる

運不運妻の口から言えませぬ

ジリジリと妻が外堀埋めてくる

葛藤を笑顔で躲す妻の知恵

妻ですよいたわり少し下さいな

いのち綱しつかり握る妻がいる

ネクタイが妻の機嫌を知っている

宿帳の妻は小さくてれている

アイラブユー妻に一度も言っていない

家計簿の赤を苦にせぬ妻といる

つっぱり背なにも妻の老いを見る

家計簿に妻の百面相がある

子離れをしてから妻の座に戻り

朝刊であり夕刊である妻といる

ばてたなど言っておれぬ妻の位置

もう少しましに写せと妻が言う

鳥取 小谷美ツ千

鳥取 菅井とも子

兵庫 嵯峨根保子

兵庫 吉田 笑女

和歌山 小根田 守

大阪 吉川 晋吾

大阪 池 森子

京都 松川 芳子

愛媛 越智 青園

大阪 片岡智恵子

広島 森田 文

香川 木村 明人

青森 波多野五楽庵

鳥取 黒田くに子

島根 福岡 博利

鳥取 権代 康女

福島 熊田 巽

鳥取 植田 一京

兵庫 秋元 てる

広島 新山 胤一

奈良 御園 孝子

大阪 茂見よ志子

岡山 北川 大成

鳥取 田中ひでお

兵庫 牧渕富喜子

妻がいるから温い晩のめし

記念日を忘れて妻にどやされる

灯芯に油注いでくれる妻

いつどこでおんならしさを捨てた妻

平凡な妻の尻尾を見てしまう

来年もありますと妻慌てない

糟糠の妻に言えないありがと

エプロンの白さで明ける妻の朝

酔うほどに妻の暗示にひっかかり

妻が手を放すと揺れる縄梯子

完璧な妻にすこし飽いてくる

不思議にも自転車乗れぬ妻である

はしり書き一枚置いて妻の乱

いい妻になろうなろうと靴磨く

夢でよい亡妻よ酌しに出ておいで

妻の座にすわりそねた花の種

愛し抜く妻を愚妻と申し上げ

コスモスを植える妻が好きだから

貧乏くじ引いたと俺も妻も言う

妻の座にすわり名前を忘れられ

十円の電話で妻をよろこばす

因習の家系に妻としての自負

達者なら食えると笑う妻と居る

妻として耐えた昔も語り草

ガン告知妻が後ろにいてくれる

和歌山 山田 高夫

兵庫 久保まさお

鳥取 林 瑞枝

京都 山本 磔

岡山 灰原 泰子

大阪 堀江 光子

大阪 板東 倫子

岡山 妹尾 道子

大阪 石川 勝

京都 藤田 芳郎

兵庫 井床 芦蘭

大阪 堀 良江

青森 一戸 ツネ

島根 岸 桂子

愛媛 越智 一水

島根 勝部 操子

岡山 山本 玉恵

広島 古田比呂子

島根 安江謙之助

高知 西森 利恵

大阪 中川 楓

大阪 森下 愛論

高知 村上 俊一

岡山 竹中すみ恵

大阪 山崎寿々子

病床の妻は幼い顔になり

ハンドルは妻にまかせて見る世間

晩酌一合料理の好きな妻が居る

妻の座に妻が座らぬようになる

母になる女になる妻のふところ

日めくりよ妻には詫びることばかり

オタフクの面で妻の座守り抜く

大根を美味しく炊ける妻がいる

ダイや婚空気のような妻である

セールスと一騎討ちする妻の舌

美味しいの一語で妻はうれしそう

明るさを売る妻がいる小商い

日曜大工妻が一枚うえでした

腹立てた妻へだまて飯を食う

太陽のような女を妻にする

一番のお守り札は妻である

妻たちが華やいている趣味の会

アルバムの妻に長女がだぶりだす

沈黙と言う切札が妻にある

海亀の涙を妻は知っている

答えない亡妻と話している独り

野菜高妻のリズムが狂いだす

屈託のない女房でよく笑う

最初から飾り気のない妻だった

タンスを開けると亡妻の匂する

大阪 森川まさお

島根 園山かおる

兵庫 丸山よし津

京都 谷口 笠雪

岡山 藤川 良子

京都 阪本 国公

岡山 小野 貞江

広島 森井 一枝

鳥取 野中 御前

岡山 大石あすなろ

大阪 木村 天弘

愛媛 中村 好恵

京都 小林 幸子

新潟 高野 不二

鳥取 田村きみ子

和歌山 内芝登志代

兵庫 西口いわゑ

鹿児島 大山舞鳥影

京都 前上 英一

大阪 平松かすみ

愛媛 谷 真風

島根 森 茂美

和歌山 中後 清史

鳥取 光井 玲子

宮城 牧野無名子

あなたアナタ甘える妻に敷かれてる
無人駅下りると妻のふるさとだ
先着百名その先頭に妻がいる
五十年妻と歩いたまわり道
妻病んで笑い袋が開かない
何もかも知って知らないふりの妻
這い上がる手を握るのは妻だった
老妻に閑白の座を乗っ取られ
良妻悪妻あなたの出方次第です
五十年添うてもポツケ探る妻
妻にもう勝てそうもない口喧嘩
妻となら地獄極楽いとわない
老いて今妻が女神に見えてくる
大蔵と外務を兼ねて妻多忙
威張ってる男も怖い妻がいる
せつかちで一寸とぼけた妻でよい
天国の妻に言いたいことばかり
買いはつたらどうと持つてるらしい妻
平凡な妻よく食べてよく笑う
振り向けば従いてくるのは妻ひとり
これからは妻にいはばつていてもらう
七十路の今も妻には借りばかり
泣き言は言わず支える妻の手だ
ハイヒール妻も女でありました
妻という大きい石を光らせる

佐賀 浜本 ちよ
鳥取 谷口百合子
福島 玉木 柳子
岡山 田辺 灸六
山口 安平次弘道
和歌山 西村 和成
福岡 一宮志のぶ
岡山 本田恵二朗
大阪 原 美恵子
山形 大木 一枝
奈良 古川 一高
秋田 田村 三郎
和歌山 藤井 春子
愛媛 竹田さやか
岡山 山名 基子
愛媛 結城ときえ
大阪 太田とし子
大阪 里 小路
大阪 宮本かりん
福島 鳴原 啓一
大阪 渡部さと美
奈良 石田 常念
石川 吉本 君枝
和歌山 宮口 克子
和歌山 後藤 正子

やりくりをまかすと妻は生き生きし
何時の間か妻の口から天の声
ああ言えばこう言う妻といて疲れ
逆境とがつぶり四つに組んだ妻
妻がいて子がいて僕が走ってる
フィナーレは妻の拍手があればよい
太陽の次に頼りにしてる妻
愛しても愛したりない妻である
妻の財布は一円玉を可愛がる
死なれては困る妻だが強過ぎる
極楽か地獄か妻の手を握る
愚妻とも言われ結構頼られる
包丁が欠伸している妻の留守
初詣で妻にサイ銭借りました
許すとは言わずに妻はめしを炊く
母さんと呼ばれてハイと言う妻で
疑ってくれない妻が怖くなる
ハンカチの折り目きれいに妻がいて
妻のタクトでやっつと峠につきました
彼岸花燃えてる妻が呼んでる
定退へ初めて妻にありがとう
どん底で妻よほんとにありがとう
別姓で暮らしていても妻は妻
舌たらず妻が横から補足する
じくざぐの道でも妻がついて来る

大阪 伊佐岡よし子
大阪 吉田 大輔
石川 紺屋 肇
青森 荻野 ふじ
大阪 玉置 重人
和歌山 三宅 保州
大阪 小川 速水
長野 小柴 和貴
岩手 菅沼 道雄
鳥取 岩原 喬水
青森 小寺 花峯
島根 園山多賀子
大阪 中島 志洋
大阪 滝北 博史
兵庫 北川 茂子
大阪 籠島 恵子
千葉 浅田扇塚坊
京都 辻 一弘
鳥取 澤田 千春
大阪 宮城 如水
鳥取 小林由多香
兵庫 倉垣 恵美
大阪 松永 会美
鳥取 松本 舎人
岡山 菊池 七穂

戸籍簿に妻の一字が光つてる
 年金がついてる妻で頭が高い
 フルムーン手持ち無沙汰な妻の朝
 面白い妻の踊りだ見ていよう
 自問自答妻は黙って聞いている
 花言葉妻は昔を忘れない
 ゴミ分別妻の特技が一つ増え
 妻にやる勲章探しているのだが
 妻の吹く笛は時々乱を呼ぶ
 そして妻鍋を磨いて憂さはらす
 愛一途妻が家紋を輝かす
 妻の叱言の中に居るやすらぎ
 童心にかえて妻とかくれんぼ
 攻めてきた敵のひとりに妻が居た
 大声で妻へ怒鳴った事を恥じ
 サラリーの日はニコニコの妻でいる
 病む妻が無言で出した手をにぎる
 地獄へも妻といっしょと決めている
 腕組んで妻と歩いたことがない
 ラストダンスやっぱり妻と手をつなぐ
 雑言に馬耳東風の妻である
 何よりも恐いと思う妻の世辞
 一本のバラ買う妻の誕生日
 金婚の妻に献ぐるものがない
 受胎告知妻は早くも母になり

大阪 上村 和子
 和歌山 桜井 千秀
 大阪 住田英比古
 愛知 柳生みち子
 大阪 田中 正坊
 大阪 稲葉 冬葉
 岡山 荻野 鮫虎狼
 愛知 本多 則夫
 和歌山 細川 稚代
 兵庫 門谷たず子
 鳥取 西村 黙光
 熊本 高野 宵草
 鳥取 幸家 單車
 和歌山 木本 朱夏
 大阪 西村左久良
 鳥取 杉本 孝男
 鳥取 西村 半畳
 鳥取 中森葉士人
 愛媛 渡辺 南奉
 大阪 福井富美子
 兵庫 萩原 繁
 大阪 神夏磯典子
 岡山 寺尾 俊平
 鳥取 林 露杖
 北海道 横島流水子

負けた日も妻の笑顔に救われる
 結び目を気長くほどく妻でよい
 本当は妻に一目おいている
 妻の座を返上したい日もあった
 究極の頼りは妻と病んで知る
 幸せの一つか妻がよく笑い
 豊かでも貧しくもなく妻とい
 てのひらへ愛という字を妻が書く

秀句

妻の持つ刺はこっそり折っておく
 大根の白さは妻の白さかも
 妻と居る一日長いなと思う
 妻の目を真つすぐ見たら負けになる
 人妻と妻を比べてどうする気
 妻の手にやがては戻る奴風
 目ぐすりを優しくさしてくれた妻
 風花の舞うころ妻になりました
 妻の瞳の奥でときどき荒れる海
 古希の妻あ有難や有難や

特選

俺と言う貧乏籤を引いた妻
 家に妻花屋に花のあるように
 いつからか妻が鶴匠になっていた

軸吟

朗らかな亡妻の笑いを忘れない

鳥取 春木圭一郎
 徳島 濱田白柳子
 大阪 崎山 美子
 高知 百田 幸
 大阪 吉川 渉
 大阪 中尾 飛鳥
 大阪 伊藤 武
 兵庫 田中 薫
 大阪 村上ミツ子
 兵庫 石田 明子
 兵庫 氏林 洋敏
 愛媛 山之内さち枝
 岡山 小野真備雄
 大阪 片上 英一
 大阪 勢理客トミ子
 兵庫 河島いち子
 和歌山 田中 輝子
 佐賀 山門 幸夫
 兵庫 住谷 石舟
 広島 藤解 静風
 兵庫 東狐恭仁子
 青森 工藤 甲吉

嘘

大木 俊 秀 選

群羊の蹄で嘘が崩される

やさしい嘘薔薇も一輪添えてある

シャボン玉嘘を隠して戯れる

嘘ついて妻へすまなく思う宵

嘘みんな知ってた母の大きい傘

も一人のわたしが嘘を許さない

足一本案山子は嘘のない姿

そうこなくて嘘だと父に励まされ

逮捕まで嘘をつかせて遊ばせる

嘘うまく言えぬ夫のお帰りだ

落語家の嘘は羽織を脱いでから

夕焼けの中の二人に嘘はない

舌の根がヒリヒリ疼く下手な嘘

嘘ひとつ飲み込んでいた手術台

仲人の嘘は一生忘れない

身を守る咄嗟の知恵が嘘になる

あの世まで通すと決めた嘘もある

嘘つきとののしりあっている家裁

泣きながら小さな嘘をだきしめる

山形 鈴木玲於子

大阪 吉川 渉

和歌山 藤井 春子

兵庫 植村客遊子

大阪 徳山みつこ

兵庫 谷岡 福子

福島 藤川 紫水

島根 福岡 芳枝

島根 岩田 三和

鳥取 石尾かつ乃

大阪 羽原 静歩

兵庫 住谷 石舟

愛媛 村上久美子

大阪 稲葉 冬葉

岩手 三浦たくじ

和歌山 中後 清史

愛媛 宮尾みのり

愛媛 片岡 要

島根 松本 昌

澄んだ目に出かけた嘘を引つ込める

嘘聞いてふらりと暮れの町に出る

嘘でない証拠子どもができました

桜咲くまでひとつの嘘をたたみ込む

嘘ひとつ心の襷を出たがらぬ

手をむすぶ嘘のかけらもない顔で

欠席の嘘を一筆書きそえる

嘘ついた顔は鏡を曇らせる

嘘を書くことの上質なボールペン

妻の掌の中で夫は嘘を吐く

えんま様首肯く程の嘘だった

来世誓うくらい嘘はついておく

黄昏のげんまん小さい嘘と嘘

充電をしてから嘘がはずみだす

年若く言ってパートの職を得る

廻らない首をたくみに嘘で振る

嘘ついた罰今生で歯を抜かれ

嘘言わぬ合わせ鏡のしわに負け

嘘でない証拠乳房が張ってくる

鼻の汗哀しい母の嘘である

華麗なる嘘片方の耳で聴く

ころころと嘘を転ばす雪だるま

父さんはもつと出来たと通信簿

星の輝きに嘘はありませんね

語り合う手話の十指に嘘がない

大阪 中島 志洋

島根 西村 早苗

大阪 田中ゆみ子

鳥取 政岡日枝子

和歌山 松原 寿子

鳥取 鈴木 公弘

新潟 高野 不二

島根 小白金房子

兵庫 鈴木 良征

宮城 佐藤 安男

岡山 小林 妻子

大阪 西出 楓楽

大阪 福浦 勝晴

京都 森本 芳月

京都 谷口 笠雪

大阪 吉村 雅文

大阪 田中 文時

兵庫 藤原 久子

京都 小林 英子

大阪 岩佐ダン吉

岩手 菅沼 道雄

大阪 高杉 鬼遊

大阪 梶川雄次郎

鳥取 西浦 小鹿

青森 齊藤 荔

嘘だけで背がズギズギするもんか
 友達を庇う嘘なら叱るまい
 残業のその後にはすこし嘘がある
 散りばめた嘘風よけが欲しくなる
 嘘少し足しふる里へ出す便り
 嘘言えば舌にからまる彼岸花
 朝晩に愛していると言う儀式
 前向きと答えて嘘が通過する
 病室の折り鶴嘘を聞き飽きる
 抜けぬけと嘘からませている小指
 美しいドラマに嘘が欠かせない
 へその緒の箱にしまつてある嘘よ
 嘘ついて見舞の花を置いてくる
 四月馬鹿楽しい嘘を選っている
 てのひらの嘘は昨日のまま残る
 嘘を聞く耳が妥協をして困る
 約款は小文字だ嘘がつき易い
 気の弱い男に嘘は言わぬこと
 モナリザの目を見て嘘はつけません
 掌できれいな嘘を転がせる
 体調が良いとすらすら嘘がでる
 夕焼けに嘘を言ったら負けになる
 二三日善意の嘘を抱いて寝る
 嘘ばれて花の命は戻らない
 嘘嘘嘘 幾つついたら地に還る

鳥取 中森葉士人
 兵庫 田辺 鹿太
 山口 飯田 白流
 兵庫 小山 紀乃
 福岡 小柳 政子
 岡山 淡路ゆり子
 茨城 岡本 恵
 大阪 内藤 摩耶
 奈良 住田 天端
 広島 実成キクエ
 香川 長尾田鶴子
 福岡 佐々木よしお
 大阪 岡田 一枝
 広島 中木 未香
 大阪 桑田砂輝守
 鳥取 光井 玲子
 大阪 住田英比古
 鳥取 乾 喜代志
 青森 相馬 一花
 兵庫 奥山美智子
 兵庫 氏林 洋敏
 鳥取 土橋 螢
 島根 青山 竹雪
 岡山 川端 柳子
 岡山 小野真備雄

味噌汁に時どき浮かぶ妻の嘘
 嘘書けぬ日記で花を描いておく
 逢いに行く嘘がだんだん剥けてくる
 罪のない嘘ききたくてゆくベンチ
 嘘一つ守り通して亡父送る
 嘘ばれて小骨ちくちく身を攻める
 美しい指にも嘘がある女
 折箱に嘘をつめこみ帰宅する
 ポックリ寺から楽しい嘘を持ち帰る
 山彦がきれいな嘘を繰返す
 美しい嘘を通しての櫃
 嘘発見器の針が容赦をしてくれぬ
 幾千の嘘を背負ってゆく櫃
 少しずつ重ねた嘘が石になる
 嘘を聞くベッドに赤い陽がこぼれ
 一言の嘘が廻した風ぐるま
 美しい嘘で飾った花の種
 しりとりにつまると嘘がころげ落ち
 散り急ぐ花にやさしい嘘を言う
 嘘言うてくれて見舞の手がぬくい
 秋灯下ドラマのように嘘をつく
 妊娠をしました嘘はひかえます
 紫陽花の七彩嘘は見当らぬ
 嘘の種蒔くと歪んだ枝が出る
 誓詞読むときは嘘つく顔でない

徳島 竹重 武介
 広島 森田 文
 和歌山 田中 みね
 岡山 坂井 半升
 鳥取 森田 華子
 兵庫 酒井 靖子
 大阪 藤井 正雄
 兵庫 小川 酔月
 京都 奥山 晴生
 愛媛 月原 宵明
 兵庫 井床 芦蘭
 愛媛 橋田呂久朗
 北海道 武田 正美
 兵庫 山本 義子
 岡山 小野 克枝
 島根 島 祥庵
 山梨 雨宮 五郎
 愛媛 坪田イサ子
 島根 伊藤 寿美
 名古屋 藤井 高子
 京都 上島みよ子
 大阪 河内 天笑
 鳥取 林 瑞枝
 佐賀 田口 虹汀
 和歌山 青枝 鉄治

セールスを追い出す嘘もうまくなり

とんでもない嘘極楽で会いましょう

卵から孵る嘘を吐きたがる

嘘言わぬから恐龍の大悲劇

肩たたき合つて夫婦に嘘がない

嘘一つ胸で発酵しはじめた

嘘のない日には素直な絵が描ける

書いたり消したり鉛筆の嘘つき

終章の姑へ情けの嘘ひとつ

嘘ひとつ神が履かせた重い靴

嘘ひとつ心に鉛抱いている

にんげんに言葉があつて嘘を言う

嘘吐きと言われ舌出すほどの嘘

イヤリング小さな嘘をぶら下げる

美しい嘘をゆるしているポスト

補聴器を外して嘘を聞いてやる

雨から雪別ればなしはうそだろう

ユーターンして嘘のない土に生き

嘘の無い暮らし一円無駄にせず

朝顔を咲かせて嘘のない暮らし

断りの電話へ嘘がとちり出す

看護婦が悲しい嘘に耐えている

嘘のない独楽をどこまで廻せるか

佐賀 市丸はる子

山口 安平次弘道

福島 洪木 久雄

岡山 北川 大成

愛媛 越智 一水

鳥取 石垣 花子

大阪 早崎 和子

宮城 牧野無名子

和歌山 尾田 綾子

島根 岸 桂子

大阪 坂野はつこ

大阪 長江 時子

千葉 伊藤 三峨

鳥取 奥谷 彩子

大阪 三宅つえ子

宮城 川村 映輝

島根 松本 文字

和歌山 小根田 守

愛媛 宇都宮章子

福岡 藤田きよし

愛媛 清水 恵子

福岡 渡邊 満洲

福岡 古賀 健次

嘘ついで蕎麦を変えゆく糸車

あらぬ方に転がる嘘にあわて出す

堂々と嘘の効き目が書いてある

嘘ひとつ許せば元の風になる

嘘一つ隠し切れずに割れた面

とつておきの笑顔でとつておきの嘘

女よりきれいだ嘘のおんな達

嘘をつく携帯電話持ち歩く

嘘のある説教だからおもしろい

子の嘘に合わせて踊ることにする

針千本吞もう大事な嘘を言う

糊代の嘘と嘘とを張り合やす

人ひとり救う嘘だと覚悟する

嘘をまるめて秋空へ投げ返す

ウッソーと秋の体重計に言う

横顔が素敵で嘘がお上手で

嘘つきだがお金遣いは美しい

嘘めいてくる帳尻の合う収支

本当の理由は別にある辞退

嘘つばち曲り角から消えていく

コンパクト綺麗な嘘を組み立てる

よく走る嘘の帽子はつかまらぬ

教え子に嘘をついている披露宴

大阪 山田 里子

兵庫 秋元 てる

大阪 故亀山 恭太

和歌山 杉山 精子

兵庫 森田勢津子

青森 笹田かなえ

鳥取 高田 羅奈

兵庫 田中喜代志

大阪 大路 美幸

島根 田中美禰子

愛媛 結城 寂坊

石川 吉本 君枝

福岡 森園かな子

大阪 小出 智子

佐賀 久保 正剣

広島 横田 英侍

大阪 小西 幹斉

大阪 堀 良江

東京 松崎 酔柳

鳥取 白根 ふみ

大阪 真崎浪速子

鳥取 澤田 千春

愛媛 若松 博文

嘘のない暮しエプロン白く干す
花時計くすくす笑う四月馬鹿
丸見えのかわい嘘を聞いてる
暗算をしながら嘘をつきとおす
美しいうなじへ嘘を投げてみる
優しさの限りを尽くす嘘である
ほほえみを返して嘘を消してます
女王さまの嘘だ忘れることにする
嘘隠す嘘で倍々ゲームする
いま問えば嘘を言わせることになる
早昼を食べて来た嘘腹が鳴り
病室の嘘が廊下で泣きくずれ
ポケットの嘘をときどき出してみる
団地を回る嘘つきの古帽子
獄中記やっぱ嘘を書いている
ここからは嘘は通さぬ大鳥居
足袋のこはせくい込む嘘をつく度に
気が減入る嘘だが命救えそう
友を庇う嘘だな見逃してやろう
かばう嘘着ぶくれてゆく冬木立
嘘ついてからは会社を休めない
ポケットの嘘が歩幅をせまくする
花から花へ嘘を楽しむのもおとこ
嘘についても胸がドキドキしなくなる
土用干し梅の赤さに嘘がない

和歌山 木本 朱夏
大阪 神原 文
鳥取 足立由美子
大阪 佐倉 宗悟
岡山 藤川 良子
鳥取 小谷美ツ千
鳥取 山宮 愛恵
鳥取 金山 夕子
大阪 金井 文秋
香川 萬沢 翠
兵庫 射場 昭一
青森 櫻庭 順三
北海道 大橋 政良
福島 山田 寛二
青森 波多野五楽庵
兵庫 大原 葉香
大阪 足立 淑子
和歌山 野村太茂津
大阪 石川 勝
北海道 野沢なみ子
大阪 江口 度
奈良 貝原 博次
和歌山 田中 輝子
鳥取 新家 完司
大阪 松本今日子

善人の嘘はどもつてばかりいる
どうせならゴムで消せない嘘をつく
嘘ひとつ抱いてシグナル赤になる
嘘つきは第九条に近寄らぬ
嘘泣きをしたミヨちゃんにだまされる
真面目な耳は嘘の一つに悩み抜く
うっとりとなあなたの嘘を聞いている
おろおろとつく嘘なれば許されよ
秀句
矢印が大きな嘘をついていた
ネオン消して今夜の嘘はおしまいに
かくし通した嘘でよかった昼の月
ネクタイの皺税務署へ嘘つきに
安楽椅子に嘘が座ったあとがある
土下座して男が嘘をついている
嘘ついたことが一度もない狸
恐ろしい小川の嘘が海へ出る
あたたかい嘘にとろとろ寝てしまふ
手を握りしめて言わねばならぬ嘘

特選

とんねるを出るまで嘘を懐に
別れ道どっちの嘘も手を振って
美しい嘘よ芒の穂が光る
軸吟
ライバルの瀕死へ傷は浅いぞと

鳥根 勝部 操子
熊本 大川 幸子
大阪 上田 柳影
大阪 うつみ仙吉
香川 川崎ひかり
鳥取 渡辺 独歩
岡山 北川 拓治
大阪 高田美代子
鳥取 大橋はるお
東京 佐藤 季穎
佐賀 福島 紀一
大阪 玉置 重人
京都 小林 幸子
岡山 田原 稔弘
大阪 板尾 岳人
鳥根 園山かおる
鳥取 八木 千代
大阪 勢理客トミ子
青森 加川 炎川
千葉 浅田扇塚坊
和歌山 神平 狂虎
神奈川 大木 俊秀

時計

森中恵美子選

一秒ずつ確かに二十一世紀
 六月十日天智天皇水時計
 何時かときけば答えぬ時計草
 奥尻島悲運の刻を指す時計
 夢を巻けなかつた柱時計の捻子
 花づくり時計は持たぬ背の丸み
 午後五時の時計が妻にして帰す
 主人より長持ちしてる掛け時計
 ロンジンだウォルサムだと酔うている
 時計きょう心の臓まで響く音
 毎日を時計のように帰る夫
 鳩が出る時計と留守番しています
 終電にいつも間に合わない時計
 過去ばかり言つて時計の遅れがち
 時計からはなれ余生を陽と暮す
 絵日記の時計の針は午後三時
 砂時計小さな恋を見つけたよ
 ちぐはぐな時計を聞いているひとり
 嬉しさは亡父の時計が未だ動く

和歌山 内芝登志代
 大阪 小野 楠暁
 島根 田中美禰子
 大阪 西村左久良
 大阪 柿木 英一
 大阪 丹波三千子
 愛知 本多 則夫
 京都 谷口 笠雪
 大阪 福浦 勝晴
 大阪 山本 翠公
 広島 実成キクエ
 広島 古田比呂子
 奈良 大村美千子
 京都 藤田 芳郎
 石川 細呂木魯木
 鳥取 田村きみ子
 鳥取 田賀八千代
 福井 村中 富三
 京都 松川 杜的

稲苧りが済むまで時計休ませる
 質屋から出した時計が動いてる
 一年は早いと時計思わない
 秒針が笑い時計の値が下がる
 常連が時計のようにやって来る
 年に一度はドクターストップする時計
 時計台むかしの歌がよみがえる
 青春を食べた時計がにくらしい
 ハナ金の男時計に励まされ
 議事堂の中は眠たくなる時計
 待たされた記憶ばかりの腕時計
 子育ての母の振りが今止まる
 限界に挑むストップウォッチおす
 セコンドの音が聞える酔いの底
 中世の飾り時計に見る祈り
 点滴の夜に話していた時計
 柱時計がポーンと鳴ると飯にする
 酩酊の帰宅時計は知っている
 他人のままで別れた杳い花時計
 時計などなくても月は満ちてくる
 愛枯れたことを知らないペアウォッチ
 ひと寝入りさてそれからの二時三時
 真夜中の時計羊を飼い慣らす
 資料館被爆を時計指したまま
 時計などいらぬ男の独り旅

青森 山田十九子
 大阪 土井 英明
 大阪 神原 文
 徳島 竹重 武介
 大阪 藤村 べ女
 兵庫 鈴木 良征
 大阪 町田 達子
 和歌山 垂井千寿子
 茨城 加藤 権悟
 京都 田中 笑風
 鳥取 高田 羅奈
 福島 渡邊 満洲
 和歌山 坂部紀久子
 大阪 上田 佳風
 大阪 松村 隆
 大阪 岩佐ダン吉
 鳥取 小西 雄々
 佐賀 高島 保
 福岡 藤田きよし
 大阪 吉田あずき
 静岡 吉野 信子
 大阪 海老池 洋
 和歌山 古久保和子
 福岡 八尋いさを
 岡山 北川 拓治

許さねばならぬ時報を聞いている
 ただ何と無く老いの目で時計見る
 夢を見ているのか時計動かない
 形見なり南京虫と言う時計
 時計など持たぬ男に賭けてみる
 赤ちゃんの顔は時計を忘れさせ
 若いので進む時計を持たされる
 年一度振り子時計に会いに行く
 無人駅のたり動いている時計
 捻子を巻く時計が性に合っている
 ティファニーの時計をはずす妻の乱
 耳なりへ柱時計の白い刻
 土に生き土の時計に歩を合わす
 お日様が真上に來てる腹時計
 古くても五時にはちゃんと五つ鳴る
 故郷で時計は逆に回ります
 ラーメンのお客呼んでる時計台
 再会の時計いつきに逆戻り
 夫婦の会話に入るべからず鳩時計
 年とった時計と祖父の話など
 からくり時計の泪は見えないことにする
 時計より律気な男花を買う
 神さまと出会う時計を遅らせて
 時計より確かな老母がいてくれる
 青春は錆びた時計の裏にある

島根 島 祥庵
 愛媛 谷 真風
 島根 富金原佐吉
 兵庫 秋元 てる
 岡山 春名 正己
 大阪 神夏磯典子
 大阪 高田美代子
 大阪 梶川雄次郎
 京都 本莊 福子
 鳥取 土橋 睦子
 大阪 山本 半銭
 大阪 辻 香豊
 和歌山 牛尾 緑良
 兵庫 白川 夜船
 北海道 朝倉 大柏
 高知 西森 利恵
 静岡 大村 正雄
 大阪 福井富美子
 千葉 神田ゆめ治
 兵庫 門谷たず子
 大阪 芦田 絢子
 鳥取 松本よしえ
 和歌山 田中 輝子
 岡山 矢内寿恵子
 青森 一戸 ツネ

喫い過ぎに注意している花時計
 故障とある時計があつて無人駅
 きつちりと三回腹のへる時計
 朝の貌駅の時計を目に入れて
 逆立ちの芸ひと筋に砂時計
 天国にきつと時計はないんだね
 生真面目な時計と渡る丸木橋
 陽が落ちてそれから進む腕時計
 ペアで買った時計そろつて遅れだし
 念力で動いた時計誰にやろ
 三世代少々ちがう腹時計
 出陣の珈琲を飲む腕時計
 退職の時計をいとおしく思う
 目覚しが鳴つてこの世の人となる
 婦長さんの時計狂つたことがなし
 人間様だけが時計を持つている
 ボンボン時計がすこし遅れている生家
 捻子捲きに帰る故里ある時計
 残日やだんだん早くなる時計
 あの人が來ると時計が動きだす
 負けがつづいてるポケットの時計
 家中の時計が抱いている不満
 夕展の時計無心の時がある
 からくりの時計お前も寂しいか
 ロボットに負けてはならぬ腕時計

大阪 乙倉 武史
 愛媛 矢野 佳雲
 大阪 江口 度
 鳥取 上田 俊路
 和歌山 青枝 鉄治
 大阪 結城 君子
 大阪 野島満春巳
 大阪 堀 良江
 岡山 野田素身郎
 鳥取 野沢 大漁
 大阪 平松かすみ
 広島 横田 英詩
 兵庫 前川千津子
 和歌山 木本 朱夏
 大阪 羽原 静歩
 香川 工藤 吟笑
 大阪 中田たつお
 和歌山 堀端 三男
 大阪 山本希久子
 鳥取 林 荒介
 島根 原 章峰
 兵庫 田中 薫
 愛媛 山之内さら枝
 大阪 瀬川 幸子
 福島 浦井 隆

失なつたものが大きい砂時計

ペアウォッチ妻の腕とは限らない

「ハハキトク」時計が速く回り出し

婚を決め同じ時計を買ふ二人

古時計生家をおもうこともなし

軍隊の時から馴れた五分前

幸せです時計は止めてございます

窓際の時計はゆつくりと刻む

花時計見下ろしパイの焼き上がる

ヒロシマの目覚し時計鳴り止まぬ

英霊の兄が遺した腕時計

ときどきは止まる先生の時計

午後九時に老母の時計が休みます

言い訳はしない腹時計が進む

五分遅れの時計のままで父の秋

鴉ばかり集つてくる花時計

間の抜けた音で三時を打っている

遅れたら困る時計とくらして

鳩時計わが家のへその位置で鳴る

時計屋で新品の音買つて出る

駅長の時計きつちり壊られ

総理官邸の時計は古い方がいい

人並みに進んで欲しい子の時計

飲む時の時計ひとりで走り出す

目覚しが鳴つてやるまいかと思ふ

富山 結城 健治

京都 奥山 晴生

青森 相馬 一花

青森 兜森 祥智

岡山 寺尾 俊平

青森 中山 雅城

大阪 山崎寿々子

大阪 宮園射月芳

兵庫 亀岡 哲子

福島 小林 忠義

鳥取 小林 露杖

岡山 小野 克枝

香川 川崎ひかり

鳥取 森田 熊生

大阪 石川 勝

宮城 保田 二郎

愛媛 中居 善信

大阪 河内 月子

島根 長谷川博子

京都 小林 幸子

大阪 中尾 飛鳥

香川 松岡 遼雲

島根 竹治ちかし

大阪 吉村 一風

岡山 藤原 秋月

部屋ごとの時計が違う自己主張

僕の時計僕を上手に働かす

快晴へ妻の時計が蝶になる

砂時計あまりに律義過ぎないか

ひっこして時計も手狭そうに鳴り

人減らし時計が左から廻る

朝と晩時計が違う音を立て

ばらばらの時間がならぶ時計店

父がいた頃は時計もよくうたい

世界中の時計が止るガン告知

目覚ましの音の大きな方にする

時計にも明日の予定を覚えさせ

学校の時計はみんな寄付ばかり

古時計ときどき叩くことにする

へまばかりすると時計に叱られる

時代屋の柱時計も三時です

たしかなものに寝た切りの腹時計

腕時計外せば風が見えてくる

太宰読むときは時計も止まつてる

砂時計魔法の解ける場所に落ち

ロマンしか食べぬ顔する時計台

秋のベンチとても哀しい時計です

コスモスも木の実も熟れている時間

若鷺と運命共にした時計

御召列車ひいた時計がうちにある

愛媛 岸 万伯

鳥取 鹿島 蘭

青森 岡本かくら

広島 中木 未香

和歌山 森 茜

北海道 大橋 政良

大阪 森川まさお

大阪 橋本 定雄

東京 清原 悦子

大阪 伊佐岡よし子

鳥取 西川 和子

鳥取 森田 華子

佐賀 仁部 四郎

奈良 石田 常念

大阪 小出 智子

岡山 藤川 良子

富山 舟渡 杏花

鳥取 新家 完司

京都 山本 礫

愛媛 越智 一水

大阪 うつみ仙吉

長野 丸山 健三

鳥取 中原 汲香

大阪 和田維久子

鳥取 松下たつみ

花時計男は辛抱強いなあ

時計は港いつかは白い鳥と逢う

母さんの時計で家族動かされ

日曜日同じ時計で飯となる

爺さまも振り時計も元気です

突然の葬を時計が指図する

大時計井伏鱒二の小説に

關いの時計となるかガン告知

回遊魚の誰かが持っている時計

ワイングラス時計見ぬのがエチケツト

懐中時計駅長さんと共に辞め

北風を柱時計がつれて来た

時計を止めて一気に開く竹の花

空港で時計の針を帰国させ

秒針と走る機関士物語

遅刻して見る花時計やわらかい

大時計みんな生きてるすばらしい

デジタル時計海は広くて大きいぞ

運命線を少し削ってゆく時計

菊で逢い百合で別れる花時計

過労死がくるぞぐるぞと腕時計

砂時計また振り出しに戻される

わたくしの時間を時計屋で買った

等身大の柱時計に一札す

涙脆い時計を持っている詩人

愛媛 橋田呂久朗

和歌山 神平 狂虎

大阪 茂見よ志子

青森 小寺 花峯

鳥取 江原とみお

和歌山 中後 清史

大阪 大野 武太

京都 井上 信子

兵庫 井床 芦蘭

大阪 油谷 克己

大阪 金井 文秋

京都 上島みゑ子

兵庫 河島いち子

広島 新山 胤一

大阪 土田 欣之

島根 富田 蘭水

大阪 玉置 重人

愛知 柳生みち子

兵庫 青木 公輔

大阪 真崎浪速子

大阪 上田 柳影

大阪 片岡智恵子

島根 金築 雨宇

大阪 河内 天笑

大阪 板尾 岳人

啄木の過去を聞かれる砂時計

長針が一つ動くと汽車が来る

平成の時計で作る時刻表

鉄砲弾みたいな人のウォルサム

女には女の時計ねじを捲く

砂時計一つ生れて一つ死ぬ

今朝も逢う駅の時計にほっとする

生真面目な時計の中に父母が住む

秀句

年金の時計が朝を告げている

初心という時計を今も持っている

鳩時計女の老いは覚め易し

亡父の咳古い時計がボンと鳴る

時計代りだった汽笛を懐しむ

いちにちの時計どうにか掴まえる

目覚しが女神になると眠りだす

海近くなる時計も速くなる

音楽を持ってたかあさんの時計

少年の時計が背伸びして困る

特選

仏さんと秋をまわっている時計

わたくしも時計も友を待っている

時計はいつもお寺の鐘とくいちがう

軸吟

よろこび上手な女と正確な時計

岡山 宮本 照子

兵庫 香川 水聲

鳥取 西村 黙光

兵庫 田中喜代志

大阪 三宅つえ子

大阪 大峠 可動

鳥取 川崎 秋女

大阪 吉村 雅文

大阪 榎本 吐来

大阪 桶高 薫風

愛媛 宮本 末子

広島 小島 蘭幸

茨城 船橋 豊

鳥取 八木 千代

鳥取 白根 ふみ

鳥取 林 瑞枝

大阪 小西 幹齊

鳥取 新 正子

大阪 池 森子

香川 薦沢 翠

鳥取 政岡日枝子

大阪 森中恵美子

雑詠 黒川紫香

八百回ときめき合うてきた柳誌
 喜怒哀樂ぎっしり詰めて八百号
 雑詠に一息入れる客の声
 雑詠を良く読む程に味がある
 雑詠に心の中を見すかさず
 白菊を活けてまぎらす淡い思慕
 熊本の殿六十余州掌握す
 クリントンさんと総理で秋の絵を飾る
 偉い人の名刺があつたポケットに
 産声を聞いて強くなつて行く母
 爪赤く染めたのも居る遺産分け
 ロボットが揃つて首が揺らぎだす
 退院がま近冗談聞かされる
 勲章の似合う男の広い胸
 石畳エキゾチックに濡れている
 独楽まわすいつかは止まる独楽まわす
 金魚追う子の母親がやかましい
 浦島太郎の気分で降りた故郷の駅
 学童疎開の頃はやさしい森だった

大阪 河内 天笑
 岡山 二宗 吟平
 鳥取 山中 康子
 和歌山 川下 崇
 広島 藤岡ヒデコ
 兵庫 奥田みつ子
 宮城 川村 映輝
 大阪 小西 幹斉
 鳥取 武田 帆雀
 青森 中山 雅城
 大阪 辻 白溪子
 鳥取 光井 玲子
 岡山 中桐 敬吾
 鳥取 羽津川公乃
 島根 安食 友子
 香川 萬沢 翠
 兵庫 嵯峨根保子
 愛媛 宮本はるみ
 奈良 杉野 睦朗

気分いい日で散髪に行つて来る
 人文字へ濁点となる角に立ち
 唯一の味方と思うフライパン
 鮎の骨上手に抜いてまだ独り
 計算に長けているのは皆他人
 自転車置場で一つ拾つた恋でした
 思い出がだんだんセピア色になる
 いつまでも苦勞の二字が消えぬ母
 怒鳴らなくなつた親父の独り言
 対岸の花が生き生きして見える
 序の口はテープで流す祭笛
 想い出の中の小窓が閉まらない
 又あした言える倅せかみしめる
 鍋底で豆はじくよう熱帯夜
 古里は錦をまとい帰るとこ
 腕白の靴のサイズが親を越す
 使い捨てすずめて脛がふえつづけ
 ストレスを流す小川を持っている
 雨だれが昂奮気味に愚痴語る
 満腹になると変つていた答
 金で得た座り心地の悪い椅子
 海鳴りが鼓動となつて寝つかれぬ
 それなりのくらしの顔で食うてくる
 タコ焼きのタコ抜いたのをたのみます
 信楽狸が隣の庭に行っている

奈良 宮口 笛生
 群馬 黒崎 和夫
 兵庫 北川 茂子
 大阪 梶川雄次郎
 兵庫 大橋あきゑ
 大阪 内田 一弥
 大阪 高田美代子
 大阪 川島諷云児
 鳥取 林 露杖
 鳥取 寺沢みど里
 東京 佐藤 季穎
 和歌山 田中 輝子
 大阪 中野 櫻子
 大阪 故神保 拓生
 千葉 高橋 統治
 鳥取 西川 和子
 大阪 江見 頓坊
 鳥取 田中 亞弥
 福島 大原 吾朗
 徳島 安宅美代子
 兵庫 前川 蛙泡
 愛媛 野村 清美
 大阪 河内 月子
 兵庫 向井 泰子
 鳥取 土橋はるお

祭り月ことしの稲穂まだ垂れぬ
 響きあうものがあるから添うている
 売れ残る分譲地にも曼珠沙華
 母が居ぬふるさと他人の顔をする
 新刊の匂いが秋の本棚に
 防災のリュックにとまる秋の蝶
 メロン食べ乍ら聴いてる友の愚痴
 横座り白足袋の指拗ねている
 表札は自分の文字で律義者
 生きていて良かったこない天気
 うちの猫尻尾を振って返事する
 休耕田急にお米は出来まへん
 働きの揃いうれしい蟻の列
 味のある線に曲っている胡瓜
 保育器の中から父を値踏みする
 親近と嫌悪が半ばする軍歌
 医者が首ひねれば不安増すばかり
 生涯を健気に生きる手話の指
 ぼっぺんを吹いて故郷の風に乗る
 会う会わぬ六十路にもある秋の夜
 これ程の贅があろうか朝の風呂
 百万弗の夜景に負けぬ月一つ
 いびきにもリズム凡人よく眠る
 落葉踏む別れたときの音がする
 いい人と思ひ込むのは早過ぎる

岡山 中北 恵子
 鳥取 足立由美子
 大阪 濱田 良知
 熊本 永田 俊子
 大阪 田中 透太
 静岡 大村 正雄
 大阪 原 美恵子
 大阪 山本 半銭
 奈良 伊藤 定子
 鳥取 新家 完司
 大阪 入江 正夫
 岐阜 渡辺 杏村
 大阪 珍斉源次郎
 北海道 大橋 政良
 青森 相馬 一花
 大阪 田中 正坊
 鳥取 岩原 喬水
 広島 流 奈美子
 岩手 菅沼 道雄
 大阪 榎本 吐来
 愛媛 塩路よしみ
 大阪 吉田あずき
 福岡 佐々木よしお
 兵庫 和田 翠女
 大阪 池田寿美子

泣虫が五百羅漢の中にいる
 基敵が来ない淋しい日曜日
 今駆けているのはうちの子ともです
 ひとときを徹子の部屋で若返る
 風はらむ父の凧にもある誤算
 車座のどの杯も丸い月
 句読点打ちきれぬまま冬の雨
 歓声を上げて母よぶ虹の橋
 子に嫁が来ずに今年も柿熟れる
 住所録頼れる順に書いておく
 病院で死なないことに決めている
 完璧にピエロ演じた自己嫌悪
 少しいびつな興味をさそり座の女
 嫁ぐ娘へ母手抜きすることを止め
 コンサート盛り上げている秋の虫
 冗談の中にピリッと利く山葵
 たったひとつの答探しに来た浜辺
 幕おりにゆっくりはらず鬼の面
 幸せをすぐ呉れそうなコマージュル
 いちじくが熟れているから行く畑
 秋は紫泪の壺がすぐ溢れ
 軽い咳やはり気になる人がいる
 平成の風に当てる亡母の文
 父と娘の対話途切れる妻の留守
 父さんがピエロの真似をして困る

大阪 宮崎 弘直
 鳥根 安江謙之助
 和歌山 山路 瞳子
 大阪 丹波三千子
 兵庫 谷岡 福子
 愛媛 田野 栄子
 長野 丸山 健三
 愛媛 渡辺トリヨ
 鳥取 美田 旋風
 岡山 藤原 秋月
 兵庫 中田 純次
 大阪 板東 倫子
 大阪 住田英比古
 静岡 吉野 信子
 兵庫 中川ヒサ子
 兵庫 丸山よし津
 岡山 大石あすなろ
 岡山 小野 克枝
 神奈川 田中 誠
 広島 古田比呂子
 鳥取 政岡日枝子
 和歌山 福本 英子
 大阪 平松かすみ
 福岡 松元 寿永
 鳥取 小西 雄々

旬のものの旬においしく食べている
 お針箱亡母の民話を詰めたまま
 頂は墨絵ばかりの老いの坂
 常識の線が親子で開き過ぎ
 月へ向かつて歩きはじめた子の童話
 どうしよう迷って捨てた亡母の帯
 不器用と言われる母の手が温い
 公園の句碑の余韻にちる落葉
 梅を干す日などなかった程冷夏
 返事来て心の健康とり戻す
 預かった宅配便に縛られる
 食べこぼす老いも愛しい血の絆
 浮き沈みしながら向う岸目指す
 前向きに生きよう先ずは美容院
 すきだよと言った貴男をもっとすき
 家中に花活けているおばあちゃん
 善人も仮面ひとつは持ち歩く
 ふる里で流れを守る鬼瓦
 漁を継ぐ決意をカモメからもらう
 愛ひとつ抱いて女のくすり指
 生きざまをちよっとくすぐる風に会い
 寡婦一人母の伝記は汗ばかり
 さよならを言っではならぬ秋の果て
 落とし穴の上にはきれいな石を置く
 終章のまだひとついろが見つからず

大阪 寺田 甚一
 鳥取 奥谷 彩子
 愛媛 谷口ナオミ
 愛媛 白石 春嶺
 北海道 吉田 泉陽
 北海道 榊原 秀子
 鳥根 榊原 秀子
 和歌山 青枝 鉄治
 大阪 森下 愛論
 大根 高橋きよし
 大阪 宮崎 菜月
 大阪 世森 幸雄
 兵庫 金井 矩子
 広島 江川 美栄
 大阪 福井富美子
 鳥取 小谷美ツ千
 鳥取 田村きみ子
 兵庫 上田 佳秋
 鳥取 木村富美子
 鳥取 石谷 忠良
 京都 小林 英子
 高知 沢村 洋子
 愛媛 中岡 鍊三
 鳥取 土橋 螢
 兵庫 田中 薫
 愛媛 宮尾みのり

子のしぐさ我が分身を見る思い
 空似でも声をかけたい人に会う
 夢よもう一度カムバックを決める
 趣味だけで済ますに惜しい舞姿
 判いくつ押せば福祉に届く金
 税務署も納得裏のない帳簿
 かき舟の話も弾む金婚式
 今年から娘祭に客で来る
 時々爪を研いでるうちの猫
 遠吠えの犬が無情のをせてくる
 孤独だとしみじみ思う管理職
 温もりを素足が知っている実家
 後悔をしている椅子の軋む音
 秋風にプランを立てる旅靴
 一人だけ残った叔母に会う仏事
 十五夜に少女は祖母に神話さく
 挨拶は日の経つ早さから始め
 旨い店皆んな知ってる並んでる
 何時もより早く起こされ目出度い日
 思い出をゆすって秋を手のひらに
 真ん中辺で会う人がある万歩計
 癌などと闘っている暇がない
 良い話ばかり聞こえる老母の耳
 横文字に弱い女の記憶力
 かと言って我慢ならない腹の虫

和歌山 武本 碧
 大阪 島元 ふみ
 鳥根 古割 舞吉
 奈良 御園 孝子
 北海道 本山 哲朗
 北海道 本山 哲朗
 石川 姥浦 博
 大阪 結城 君子
 鳥取 田中 友子
 大阪 宮本かりん
 大阪 宮城 如水
 千葉 伊藤 三峨
 兵庫 田辺 鹿太
 大阪 木下 道子
 大阪 泉谷喜代子
 兵庫 牧渕富喜子
 和歌山 吉村さち子
 大阪 瀬戸まさよ
 大阪 江口 明光
 静岡 蘭田 蓂杏
 広島 森井 一枝
 兵庫 松浦 大鷹
 千葉 神田ゆめ治
 和歌山 小根田 守
 鳥根 小白金房子
 岡山 妹尾 道子

父着てたポケットさぐれば爪楊子
書留で届く殺しのプログラム
風船が向うの岸で待っている
ときどきは人恋しくてノックする
すぐばれる嘘をつくから憎めない
秋の立ち話へ影の忙しい
痛い歯に舌がそろりとさわっている
ちゃんばらが終ると用が無いテレビ
野良へ行く髪は輪ゴムで事が足り
母に似た石の仏をふり返る
王将がまざまざと知る歩の怖さ
黙り込む父をしゃべらす母の酌
いい友がいつばいスルメの足を裂く
濡れ落葉大根一本買ってくる
怪我をして淋しがりやになりました
親が敷くレールの上で子がころぶ
八十路なお母はひとりの灯をともし
どの風が吹いても灯台立っている
矢印に逆らってから迷い込む
船大工船を見上げてばかりいる
主役より折目正しいエキストラ
むっとして出て蜘蛛の巣にひっかかる
盆栽に置けば一景つくる石
正論を殺しにかかる多数決
ポケットの礫ぬくめたまま冬に

大阪 西村 哲夫
岡山 尾高 水陽
鳥取 西浦 小鹿
福岡 一宮志のぶ
香川 辻上よしみ
栃木 岡島 秀宝
大阪 鴨谷瑠美子
愛媛 古川 義安
愛媛 久保 良子
大阪 岩佐ダン吉
愛媛 渡辺 泉
大阪 藤井 正雄
岡山 木下 草風
大阪 伊藤 武
広島 小島 蘭幸
大阪 岡田 一枝
大阪 西出 楓楽
鳥取 川崎 秋女
千葉 太田ヒロ子
島根 金築 雨学
宮城 牧野無名子
奈良 長谷川春蘭
大阪 児玉 蛙
広島 森井 菁居
兵庫 門谷たず子

ひとり旅軌道修正して帰る
ひげ剃って男は攻めの顔になる
黙殺のところどころにある疲れ
包丁を突きつけられて妥協する
お互いに少し笑うと解けてくる
石蹴りの石がそこらに無い団地
群がりて咲かねば淋し彼岸花
幸せが溢れて笑顔しまらない

秀句

ピルの窓から首を出させる赤トンボ
追越した子についてゆく広い道
よい噂ばかりを右の耳で聴き
ハガキ一枚そんな便りを母が待つ
月冴えて別れの台詞聞きもらす
いただいた恩の深さははかれない
アンパンを貰い迷い子喋り出し
仔犬の死ばかんと青い空がある
亡母に似てくる姉がますます好きになる
長い橋をたまに喧嘩もして渡る

特選

歩道橋渡る女が手を振った
脱皮する少女父さん大嫌い
母笑う栗がはじけたそのように
軸吟
することが多く八十路の忙しさ

広島 森田 文
岡山 岡 やすえ
京都 森本 芳月
徳島 濱田白柳子
熊本 岩切 康子
大阪 玉置 英子
兵庫 菊池トミエ
岡山 黒田よしを
大阪 寺田 太一
和歌山 天満三千代
大阪 高杉 鬼遊
和歌山 牛尾 緑良
高知 岡村 千鳥
兵庫 奥山美智子
大阪 小池しげお
福岡 村尾いさむ
奈良 住田 天端
和歌山 玉井 豊太
鳥取 土橋 睦子
愛媛 月原 宵明
岡山 寺尾 俊平
兵庫 黒川 紫香

全国誌上川柳大会参加者

総数 九九一名
府県別 順不同

【北海道】朝倉大柏 大橋政良 中里つね一

武田正美 山田友絵 星川信康 野沢なみ子

本山哲朗 山田秀雄 吉田泉陽 横島流水子

【青森】阿部進 一戸ツネ 阿部喜久江

岡本花匠 荻野ふじ 加川栄川 漆戸凡々子

兜森祥智 小寺花峯 斉藤 蒭 岡本かくら

櫻庭順三 佐藤 悠 相馬一花 笹田かなえ

相馬銀波 中山雅城 真喜内實 佐治千加子

村田善保 肥後和香子 山田十九子

波多野五楽庵

【岩手】菅沼道雄 三浦たくじ

【宮城】川村映輝 佐藤安男 遠藤さみ子

高橋 稔 本宮 茂 保田二郎 菅井みよの

干坂みつほ 牧野無名子

【秋田】田村三郎 疋田吉郎

【山形】大木一枝 鈴木玲於子

【福島】氏家寿恵 浦井 隆 浦井千代子

遠藤正美 大橋トエ 大原吾朗 大原辰次郎

折笠一雄 鳴原啓一 熊田 巽 小林忠義

洪水久雄 玉木柳子 富永桃鹿 長岐広士

藤川紫水 山田寛二 渡辺高月 渡邊満洲

【茨城】岡本 恵 加藤権悟 太田紀伊子

南雲 渚 船橋 豊

【栃木】大崎克明 岡島秀宝 田代好鳥

【群馬】黒崎和夫 茂木 旭 栗原シゲ子

【千葉】伊藤三峨 潮 九石 浅田扇塚坊

大川一雄 高橋統治 成島静枝 太田ヒロ子

加賀美白英子 神田ゆめ治

【東京】池口吞歩 大島久佳 加藤早苗

清原悦子 小寺 九 佐藤季穎 篠原耕平

鷹取淳弘 並木ハマ 松崎酔柳 松土登美子

持溝禎子 渡辺欸乃

【神奈川】奥原雨人 田中 誠 菱田満秋

【山梨】雨宮五郎

【長野】小柴和貴 北城達美 北城千里

丸山健三 吉池武朗

【新潟】高野不二

【富山】酒井 輝 島ひかる 舟渡杏花

結城健治

【石川】姥浦 博 越村智彦 細呂木魯木

紺矢 肇 広本文子 三宅亨亭 中嶋伊之助

吉本君枝

【福井】利根嘉章 村中富三

【岐阜】渡辺杏村

【静岡】渥美弧秀 大村正雄 川島一斗

園田猷杏 安本晃授 吉野信子

【愛知】小島健造 越村枯梢 石原圭依子

藤井高子 本多則夫 異相たけお 柳生みち子

【三重】橋爪吉五郎

【滋賀】大西菊水 平賀胤寿 大平太一郎

【京都】井上信子 奥山晴生 上高みゑ子

小林英子 小林幸子 阪本国公 大城戸悠水

山海友照 田中笑風 谷口箒雪 中井三重子

辻 一弘 都倉求芽 中川青楓 平尾もも代

永田松風 藤田芳郎 本荘福子 向田桜羊子

前上英一 松川杜の 松川芳子 森本芳月

山本 磔

【大阪】浅野房子 芦田絢子 安藤寿美子

芦田静江 足立淑子 油谷克己 池田寿美子

阿萬萬の 以倉菜々 池 森子 生駒志津子

石川 勝 石橋直子 板尾岳人 伊佐岡よし子

一瀬福一 伊藤 武 稲葉冬葉 泉谷喜代子

稲葉 洋 稲本凡子 乾 哲静 指宿千枝子

井上照子 井上直次 井上白峰 岩佐タン吉

今西静子 入江正夫 上田佳風 岩津ようじ

上田柳影 上村和子 植村喜代 上江洲勝子

内田一弥 内田倫子 江口明光 うつみ仙吉

江口 度 榎本吐来 江原秀夫 大河未佐子

海老池洋	江見頓坊	大内朝子	太田とし子	土田欣之	津守柳仲	寺井東雲	高田美代子	和田春風	小野楠喧	松本今日子	宮崎シマ子
大路美幸	大塚節子	大峠可動	岡井やすお	寺田甚一	寺田太一	土井英明	田中トシエ	宮園射月芳	宮本かりん	三宅つえ子	
大野武太	大家豚平	岡 良三	岡本吉太郎	富士光代	都倉謙三	豊福路子	田中ゆみ子	村上ミツ子	茂見よ志子	森川まさお	
岡田一枝	岡本久峰	小川速水	小椋世津子	内藤摩耶	中井正秀	長江時子	丹波三千子	柳瀬のぼる	山崎寿々子	山下美津留	
小笹鍊太	乙倉武史	柿木英一	柿花紀美女	中尾飛鳥	中川 楓	中島志洋	珍斉源次郎	山本希久子	山本憲太郎	山本たけし	
柿花昭二	籠島忠子	笠原吸江	梶川雄次郎	中野櫻子	那須鎮彦	西岡洛醉	徳山みつこ	吉田あずき	和田維久子	渡部さと美	
片上英一	神原 文	故亀山恭太	片岡智恵子	西出楓楽	西村哲夫	西森花村	富山ルイ子	朝倉尚子	石田明子	伊藤晴代	伊藤ハツ子
金井文秋	叶岡史風	河井庸佑	神夏磯典子	橋本定雄	泰 正子	八田 敏	中田たつお	井床芦蘭	射場昭一	上田佳秋	植村吝遊子
河内天笑	河内月子	川原章久	鴨谷瑠美子	羽原静歩	濱田良知	早崎和子	中西兼治郎	氏林洋敏	小井和子	小井里兆	大橋あきゑ
川見絹子	菊地繁男	北 勝美	川島颯云児	原美恵子	板東倫子	一本勇太	西田柳宏子	小川酔月	大黒政子	大原葉香	奥田みつ子
北川弘子	北田綾子	吉川寿美	河原崎礼子	備後辰郎	福浦勝晴	福田悦子	西村左久良	岡田秋月	吉田笑女	香川水聲	奥山美智子
橘高薫風	木下道子	木村天弘	岸野あやめ	藤井正雄	藤岡花梢	藤村メ女	西村りつえ	金井矩子	亀岡哲子	河津正治	門谷たす子
行天千代	楠 昭子	楠岡房子	北岡波留吉	芳地理村	堀 良江	堀江光子	野島満寿巳	北川茂子	倉田正一	倉垣惠美	河島いち子
栗谷春子	栗原富子	黒田真砂	木本ゆかり	増田善信	前田昭子	牧浦完次	樋口シマ子	黒川紫香	黒田能子	小山紀乃	菊池トミエ
小出智子	小糸昭子	児玉 蛙	桑田砂輝守	松永会美	松村 隆	水木博男	福井富美子	酒井靖子	佐伯英夫	白川夜船	北川とみ子
小森正晴	小西幹斉	小西小雪	小池しげお	水谷正子	宮城如水	宮崎弘直	福元みのる	鈴木良臣	住谷石舟	高見豊泉	久保まさお
近藤一途	酒井一壺	坂上高栄	後藤黎之助	宮崎美月	宮本信幸	三輪通彦	深日白光子	田中 薫	田辺鹿太	谷岡福子	嵯峨根保子
坂本和夫	崎山美子	佐倉宗悟	小林トメ子	村上剛治	榎山 隆	森 鯉子	藤井一二三	田測定人	玉田三重	寺西文子	田中喜代志
里 小路	椎江清芳	執行稲子	坂野はつこ	守先伸子	森下愛論	森本節子	藤田頂留子	鳥本 泰	中田純次	中塚礎石	丁坪サワ子
島元ふみ	清水絹子	清水利武	柴田英千子	楊井二南	安永暁子	山添眉水	古川覚然坊	中塚遊峰	長浜澄子	中村和代	東狐恭仁子
下村権太	神保拓生	瀬川幸子	柴本ばっは	山田里子	山本半銭	山本蛙城	古川喜美子	西川市三	西脇富美	萩原 繁	中川ヒサ子
世森幸雄	高杉鬼遊	高杉千歩	住田英比古	山本三郎	山本翠公	結城君子	本間満津子	服部一典	林はつ絵	原 宣子	西井つや子
高田博泉	高橋よ花	滝北博史	瀬戸まさよ	吉岡美房	吉川晋吾	吉川道子	真崎浪速子	春城年代	春名恵子	吐田公一	西口いわゑ
竹森雀舎	田中正坊	田中透太	勢理客トミ子	吉川 涉	吉田大輔	吉村一風	松尾柳石子	人見翠記	平田香子	福島姬女	西山八重子
田中文時	玉置重人	玉置英子	高須賀金太	吉村雅文	欄 智久	和田規公	馬継千代美	福本好花	藤原久子	保西岳詩	春城武庫坊
辻 香豊	辻白浜子	辻川慶子	高田てまり								

前川蛙泡 松浦大鷹 向井泰子 船津とみ子
森富士枝 柳井湛子 山口美穂 細見喜四郎
山崎君子 山田勝仁 山本義子 前川千津子
吉岡圭治 和田翠女 前田しゅう子
牧淵富喜子 松本ただし 丸尾はる子
丸山よし津 三崎ふゆ子 森田勢津子
山本ひさる

【奈良】 有山城麓 石田常念 故岩本雀踊子
伊藤定子 貝原博次 北山悟郎 大村美千子
柳原誓心 杉野睦朗 楢本義秋 田中紀美代
住田天端 天正千梢 西本保夫 中原比呂志
林 正浩 古川一高 坊農柳弘 長谷川春蘭
御園孝子 宮口笛生 米田恭昌

【和歌山】 青枝鉄治 池永正雄 岩本美智子
牛尾緑良 大越利治 尾田綾子 内芝登志代
小根田守 上岡正直 神平狂虎 久保美恵子
川下 崇 北山紀世 木村初子 児島与呂志
木本朱夏 栗本不空 児野 馨 坂部紀久子
小山太一 後藤正子 桜井千秀 垂井千寿子
杉山精子 武本 碧 田中輝子 千原淳太郎
田中みね 玉井豊太 玉置当代 天満三千代
辻内次根 土岐 照 中後清史 永広昇太郎
西口忠雄 西村和成 野々圭子 野村大茂津
橋詰みち 福井桂香 福井菜摘 古久保和子
福田和子 福本英子 藤井春子 松井かなめ
細川稚代 堀端三男 堀畑靖子 山口三千子

松原寿子 三谷周二 三宅一郎 吉田比佐子
三宅保州 宮口克子 村中悦男 吉村さち子
森 茜 森三枝子 森口恵子 山路瞳子
山田高夫 山根惠美
【鳥取】 青戸田鶴 新 正子 足立由美子
石垣花子 石谷忠良 乾喜与志 淡路ゆり子
乾 隆風 伊吹富恵 岩原喬水 石尾かつ乃
植田一京 上田俊路 上田宣子 石谷美恵子
大鳴小生 大西柳風 奥谷彩子 岩田輪多朗
鹿島 蘭 金山夕子 川崎秋女 江原とみお
岸本静生 幸家單車 小谷一穂 小谷美ツ千
小西雄々 権代康女 澤田千春 川上より子
白根ふみ 新家完司 杉本孝男 木村富美子
鈴木公弘 鈴木美美 高田羅奈 黒田くに子
武田帆雀 田中亜弥 田中友子 小林由多香
土橋 螢 土橋睦子 中井ゆき 清水加代子
中原汲香 西浦小鹿 西川和子 菅井とも子
西原艶子 西村半豊 西村黙光 田賀八千代
野坂なみ 野沢大漁 野中御前 田中ひでお
橋本孝由 林 荒介 林 瑞枝 谷口百合子
林 露杖 前田一枝 松本舎人 田村さみ子
美田旋風 光井玲子 森田熊生 津村八重子
森田華子 八木千代 山田草人 寺沢みど里
山中康子 山根八重 山宮愛恵 土橋はるお
横山房子 渡辺独歩 永井三津子
中森葉士人 羽津川公乃 春木圭一郎

政岡日枝子 松下たつみ 松本よしえ
丸山希久代 美浦美代子 山根しげる
吉田孔美子 流郷登美枝
【島根】 青山竹雪 尼れいじ 石倉美佐子
安食友子 板垣草丘 伊藤寿美 小田川智重子
岩田三和 浦辺静江 大野蒼流 久谷まこと
金築雨学 岸 桂子 勝部操子 久家代仕男
小砂白汀 小玉満江 柳原秀子 小白金房子
佐々木裕 島 祥庵 恒松叮紅 佐々木鳳笙
富田蘭水 中川幸一 柳楽鶴丸 菅田かつ子
西村早苗 浜野 肇 原 章峰 園山かおる
福岡博利 福岡芳枝 藤井明朗 園山多賀子
藤原鈴江 古割舞吉 堀江正朗 高橋きよし
堀江芳子 松本 昌 松本文子 多久和雪子
三島雄司 森 茂美 故森山修光 武島ちよえ
安江弥恵 吉岡さみえ 富金原佐吉
竹治ちかし 田中美彌子 長谷川博子
持田多輝子 安江謙之助

【岡山】 赤木 薦 池田半仙 井上柳五郎
岩道博友 岡やすえ 尾高水陽 江口有一朗
小野克枝 小野貞江 川端柳子 荻野鮫虎狼
菊池七穂 北川大成 北川拓治 大石あすなろ
木下草風 国定姫代 小林妻子 小野真備雄
後藤英子 坂井半升 下村夏子 嘉数兆代賀
妹尾道子 田中道博 田辺灸六 国米きくゑ
田原稔弘 千原理瑛 寺尾俊平 黒田よしを

富坂重 長尾恒心 中北恵子 後藤みち子

中桐敬吾 永田時吉 二宗吟平 清水悠貴女

灰原泰子 春名正己 福原悦子 竹中すみ恵

福原長江 藤川良子 藤田 誠 寺尾百合子

藤原一平 藤原秋月 牧野秀香 土居ひでの

松嶋靖子 松本忠三 松本元江 中嶋千恵子

宮本照子 森本吉則 山名基子 野田素身郎

山本玉恵 行吉照路 横山一声 花田たけ志

吉岡梢石 伏見すみれ 本田恵二朗

平田たけよ 矢内寿恵子

【**広島**】岩本笑子 江川美栄 藤岡ヒデコ

岡本清水 沖浜正宏 勝武夏喜 古田比呂子

小島蘭幸 田村新造 藤解静風 実成キクエ

時広一路 中木未香 中村 要 流 奈美子

新山胤一 林野魁光 横田英詩 森井一枝

森井善居 森川抜智 森田 文 山内房子

【**山口**】飯田白流 長井柳虎 安平次弘道

中村三良 平田実男 弘津柳慶 石川侃流洞

岡藤四郎

【**徳島**】川村和子 竹重武介 安宅美代子

尾形マツ子 濱田白柳子

【**香川**】木村明人 工藤吟笑 池内かおり

萬沢 翠 堤くに子 成重放任 松岡遼雲

大生美津子 川崎ひかり 新川マサエ

辻上よしみ 長尾田鶴子 永峰伽名子

松村迷観子 山地マツエ

【**愛媛**】越智一水 越智青園 宇都宮章子

片岡 要 菊地青水 岸 万伯 塩路よしみ

久保良子 清水恵子 首藤一升 白石ふさえ

白石春嶺 新野時子 清家 勉 竹田さやか

谷 真風 田野栄子 月原宵明 谷口ナオミ

中居善信 中岡鍊三 中村好恵 坪田イサ子

野村京子 野村清美 花岡順子 橋田呂久朗

原ますみ 平尾忠文 古川義安 宮尾みのり

宮本末子 宮本杜子 矢野佳雲 宮本はるみ

結城寂坊 若松博文 渡辺 泉 渡辺南春

村上久美子 結城ときえ 渡辺トリヨ

渡邊伊津志 渡辺ヤスノ 山之内さち枝

【**高知**】岩河誠三 岡村千鳥 久保内あつ子

小澤幸泉 北川竹萌 沢村洋子 西森利恵

南本東母 村上俊一 百田 幸

【**福岡**】梅田宣司 古賀健次 一宮志のぶ

小柳政子 田尻 茂 本田忠男 國武ナカ子

松元寿永 山崎 功 横地正好 佐々木よしお

藤田きよし 村尾いさむ 森園かな女

八尋いさを

【**佐賀**】岩崎 實 久保正剣 市丸はる子

高島 保 田口虹汀 筒井朴竜 永石 實

仁部四郎 野口旭恒 浜本義美 浜本ちよ

福島紀一 山門幸夫 山門タミ 山口高明

【**熊本**】有働芳仙 岩切康子 宇野照代

大川幸子 北川一進 黒田 緑 高野宵草

永田俊子 前田一耕 増田一乘 松岡ミツオ

【**大分**】三浦カツ女

【**鹿児島**】大山舞鳥影

本誌購読のお願い

今回の『川柳塔』八〇〇号記念誌上川柳大会には、同人・誌友のほか、他柳社や一般の方たちが多数ご参加いただきました。厚くお礼申し上げます。

ところで本誌は、大正十三年に創刊された麻生路郎の『川柳雑誌』を継承して発行している柳誌で、全国的に多くの同人・誌友を持っております。各種の投句欄や多彩な読み物があり、みなさんの作品の発表と鑑賞の場として、さらに川柳研究にもお役に立つと存じます。

誌代は一冊六百円（送料五十六円）ですが、半年分三千八百円（送料とも）をお払い込み下さった方は、本社規約による誌友として迎えたいと思います。同封の振替用紙ご利用のうえ、お申込みくださるようお願いいたします。

川柳塔社

再び閑話休題

川柳こぼれ話

田中正坊

平成二年（一九九〇）二月号からこの欄を書きはじめ、前回（昨年十一月号）で二十回となった。以前にも「閑話休題」として中休みしたが、今回も「再び閑話休題」ということで、バックナンバーを繰ってみた。掲載順にタイトルを並べると、次のようになる。

- ①川柳と辞典 ②辞典あれこれ ③川柳と外来語 ④川柳と表記法 ⑤川柳と用字用語
- ⑥川柳と季節 ⑦川柳と漢字 ⑧閑話休題
- ⑨キーワード ⑩川柳と文章 ⑪川柳と教詞
- ⑫「課題」について ⑬私の川柳修行 ⑭定型と音字数 ⑮定型いろいろ ⑯定型論余話
- ⑰色いろいろ ⑱れくいえむ ⑲極限状況と川柳

テーマについての計画があつて系統的に書いているわけではないので、雑然としてまあまりがないが、前半を中心に約三分の二は、川柳について私がさまざまな資料から学んだ

り考えたりしたことの中間報告的なまとめ、残り私私りの『川柳随想』となっている。前回にもおことわりしたが、全くひとりよ

がりの雑文だが、大勢の読者の中には、「あの話は参考になった」とか、「考え方を整理するのに役立った」と言ってくださる方もあるし、私自身、まだあたためているテーマもあるので、もうしばらく続けさせていただく。隔月の一ページだとしてゐるのは、私がお息を切らさずに書くためと、定期刊行物の常として避けられぬページ数の変更についてでも対応できるようにするためである。

なお、⑧閑話休題では、後半に川柳における「一字あけ」の問題に触れており、今回も特にテーマとしては掲げなかったが、時にやり問題となる「川柳と方言」について残りの紙数を埋めたい。

○ 『川柳展望』の七十四号に、「全国に会員がいるのに、方言を使った句が見当たらないのはなぜだろうか。その地方の人だけしか分らないという難はあるが、その方言でしか表せないニュアンスも見捨てられないと思うのだが……」という内容の投稿があつた。面白い問題提起だと思ふ。

俳人の江國滋も『季のない季寄せ』の中で

「その土地土地で耳にする言葉には生活感覚があつて、それぞれに味がある」とし、

桐咲いて熱いぞなもし道後の湯

悪いこと言わへん風邪なら寝るこつちや

広島は牡蠣ぢやあ食うてつかあさい

を挙げている。鑑賞ではないので、作者名は略させていただく。

川柳では、前田伍健の代表句の一つに

なんぼでもあるぞと滝の水が落ち

というのがあり、森紫苑荘が「こんな素晴らしい言葉が日本語にあつたのかとびつくりした」と解説書に述べている。

こんなこととしてまんねんという名刺

なにもせん日があつたかてええやんか

しよんぼりとねずみ逃がしてもした猫

母ちゃんはじよつびんかけて戻らない

アトランダムに方言がまじつた句を引用した。初めの二句は何とか理解できるが、残りの二句の「もした（戻つた）」、「じよつびん

（鍵）」は、その土地の人しか分からない。このあたりが、「方言」と「平言俗語」の区別が難しいところで、その方言が全国的にどこまで通用性を持っているかが問題となる。

特に全国的な大会とか、全国に読者を持つ柳誌にあつては、注釈をつけねば分からね「方言」は、避けるべきではないだろうか。



原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。二百字計
原稿用紙に清記をお願いします。編集部

川柳クラブわたの花 片上 英一報

街に住む子のことばかり秋夜長
孤独感抱いて坂道長々と
ひっそりと長屋ぐらしも納税者
小羊は酒に逃げ場を追い求め
一杯の酒で浮世のうさ忘れ
命がけの恋でストレスたまります
あの頃の命つないだ芋のつる
命綱夫にあずけもぐるる海女
子を助け親はおぼれて命たつ
許してる証茶碗に飯を盛る
許すとは言わぬが孫を抱いてくれ
孫の顔見せて故里許される
許そつと思えば募る嫉妬心
許すから帰つて来いと言つ手紙
勤忍と言つが早いか頭撫で
なにもかも許されている弥陀浄土
気を許すすきまぐりてどじをふむ

シマ子 弘直 泰成 隆 龍
しのぶ 君江 ますみ 明子 美津留 一風 幸枝 初子 暁子 友甫 剛治 花子

飢える顔かなしみの貌 写真展
友人に配る写真は嫁探し
シャッターへ孫が上手にポーズする
葬儀用 見合写真のように選る
カメラ持つありし夫や秋の天
黒柿の写真に米の話など
フィルムの残りて写す散歩道
いちまいの写真を妻に隠し持つ

久世川柳クラブ 二宗 吟平報

天の底抜けてるよつに続く雨
万歩計時には噂拾つて来
王様の真珠にねたみなどはない
六十路来て度胸をためす初舞台
教養の高さに惚れて受話器置く
目の前に危険親どり強くなり
倒れても強く優しい秋ざくら
踏まれても雑草強く身構える
首縦に振つて白衣の手が温い
手を振れば母も手を振る村はずれ
巡礼の旅路懺悔の鈴を振り
振り出しへ戻つた双六人生譜
歯車の錆落とし合う老夫婦

英一 千枝子 トシエ みき子 道子 春子 故拓生 鬼遊
半仙 伊久栄 山人 きくゑ 甫正 美恵子 秀香 邦人 吟平 すみれ 志重 恒心 贊平

川柳後楽吟社

從野 健一報

信用絶大すこし重荷になりかける
でかい声むなし響き秋深む
寢床にも風呂にも新曲ついて来る
旅に出て過疎の郷見る生活感

草風 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎 柳五郎

琴線に触れて心は鳴り響き
後もどり出来ぬ切符が父の掌に
咳してもくしゃみをしても独り者
妥協して沸騰点のない男
お茶に手を出さず言いたいことがある
コスモスのマントうれしい石地藏
老猫と散歩歩幅が合つてくる
知恵袋綻びだして老いる母
風きつて走る勇気のいる若さ
ピンボケの写真私に似て悲し
撃ち勝つた戦車のほうにある正義
酒のちからを借りてあなたと和解する
警官が走る弥次馬また走る
家計簿は必死赤字になるまいと

川柳塔おつぱこ吟社 木村あきら報

言い過ぎて心に重い石を抱く
一時の心を燃やす試着室
一言が心の窓を開かせる
一言の重み知つてる心の灯
人心見透かすような月が出る
下心あるのか三度注ぎにぐる
本心は見せぬピエロの厚化粧
金曜日心はずです母の荷が届く
真心の詰まつた母の空
あれ以来心開いてくれた嫁
一言が人の心を傷つける
心込め小さな種に息入れる
素晴らしい仲間が持てて心満つ

孝子 白柳子 いさむ マサエ あきら 吟笑 くに子 正雪 迷親子 登美代 文仙 良弘

義理の娘を叱る心が泣いている
秋夜長妻の心を覗き込む
悪い人悪魔が心覗いてる
母さんの心が詰まる毛急便
和解して心の傷が癒えてゆく
いい話ないかと焦る親心
猷体の心をせてメスを待つ
川柳がウマくて心見抜かれる
尽し終え心残りのない看護
歯に衣着せぬ話にある温み
目札で心を交わす喪の女と
同窓会昔話に時が経ち
笑顔よしやさしい言葉くれる娘
改革の風穴開けた総選挙

川柳化粧檣

植村客遊子報

十年振り帰る古里他人めく
許す気になって枕を裏返す
酷使した身体労る古希の坂
その先はこわくて問えぬ医のカルテ
野良猫も犬も生きてる頑張ろう
肩書へ深くか頭下げている
老い二人身の上話あきませず
額縁へおさまる写真撮つておく
改革と言えば浮足立つ世論
手花火の追憶母の影そこに
御来光仰いで涙無我の境
日記には見てほしい事も書いておく
人生に一息入れた汗を拭く

マツエ 子開
小なみ子
チカエ
よしみ
文男
ルイ子
かおり
放任
ひかり
紫香
治延
伽名子
スミエ

美しい切手を選び孫へ便り
どっこいしょ呑み込んで立つ敬老日
両方を睨みあわせて話聞く
花形の素顔に会えばしわもあり

岩美川柳会

羽津川公乃報

ひと汗をかいた木陰の茶がうまい
久しぶり雨の日のお茶よく喋る
すすり合うお茶に夫婦の歴史みる
一服のお茶で見合いの決めどころ
梨贈り宅急便でお茶がつく
入れ替えたお茶の本音に気づかない
お手前が出来る見合いの話する
さりげなくお茶を誘ったことがある
さあどうぞお茶で一粟取れるかな
お酒よりお茶がほしいと一日酔い
正眼に構えてお茶がますますなる
煎茶玉露とお茶の中毒症になる
お寺へ行くといつもおいしいお茶が出る
あれこれと薬茶に迷い病んでいる
美味しいうちにめぐり逢いたいので通う
茶先振る指が幸せかき回す
毒舌の男に飲ますずくだみ茶

はる女
嘉
美代
客遊子

砂浜にはつり鴉の見張り台
かがまりて貝取る老いや彼岸花
雀さえず千鳥に見える和歌の浦
水軍の子孫があおる祭酒

三幸川柳教室

三宅

保州報

喜与志
美恵子
はるお
單車
大漁
芳江
忠良
蜚
たけし
公弘
陸子
公乃
老由
希久代
八千代
美代子
嘉津江
嘉津江

開発も保存も波は知らん顔
この世から離れられないもやい舟
リゾートの波押し返す片男波
昔話にしてはならない青い海
実らない思いひそやかに萩の紅
ひとつでも実になるものがあればいい
隣まで気ままに伸びて瓜実る
やすらいだ形でいちよう実をつける
サラブレッド実を結ぶとは限らない
棒グラフ伸びて安堵の位置にいる
螢雪の功が実った叩き上げ
終章は掌にいつぱいの充実詩
実りある明日へひたすらベダル踏む
ふれあえばいつかは実るこほれ種

町子
親踏
武春
保州
美智子
昭枝
よし子
茜
章子
さち子
鉄治
初子
公子
高夫

佳句地十選 (12月号から)

山本 希久子

考えて考えぬいて立ってます
和むまで心の扉開け放つ
尋ね尋ねて辿り着くのは母の胎内
窓を斜めに吹いたのは或る野心
ひらがなのかたちで女したたかに
人生訓黙って示す父の背な
旅へ出る楽しみあつてよく動く
小袋は小袋なりの意見もつ
老いてゆく頭撫でたり叩いたり
灯がゆれる亡母が話しているように

真柳
單車
暁風
森子
年代
洋
正恵
日枝子
辰子
かりん

心境の変化森から脱皮する
好きだからどんな変化も見逃さぬ
変化する視線心を知ってから

心境の変化と軽く節を曲げ
お茶漬をかきこみ変化ない夫婦
変化球翔んでる妻に届かない

変化する地球知らずに蟬終る
遣伝子に異変百点取ってくる
母の目がふっと眩しい変声期

ベルリンの壁がこわれてからの地区
土壇場で内堀埋めたのは味方
顔色がバロメーターになっている

落着顔の顔珈琲を入れ替える
ひとことがまずい空気にしてしまふ
反応が鈍く喧嘩にならぬ妻

南大阪川柳会

金井

文秋報

川柳東大阪

森下

愛論報

恵子
百合子
当代

利治
靖子
みね

由梨
和子
朱夏

桂香
千秀
正雄

作二郎
楓楽
秋子

萬的
千里
悟郎

柳伸
庸佑
勝美

文秋
文子
智子

凡度
直子

反応は握手して知る選挙戦
残り火を胸に納めて引き分ける
点滴の反応危機をぬけました

熱さめて味のまずさが分かってき
グイエツト中にしておくまずい味
反応を示した貴女の目の視線

反応はないけど案山子立ってます
まずいとは言わぬ夫で平和です
孫に言われて妻の反応確かめる

夕コ焼が娘の顔で売れている
落着した安らかな軒
テートから帰ってなぜか八つ当り

警戒をされる程まで世話を焼き
黙々として牛小屋で流す汗
世話好きが内の娘に目を付ける

畦を焼く煙噂のちりやすし
父を焼く煙真っ直ぐ雲に消え
遠い月の山の煙は祖父のもの

祈願する寺で煙を溶びている
河渡るチャンス待ってる足踏みよ
散骨へ母なる河があたかい

ふるさとの河でまあるい風に逢う
お役所の都合で自然が消える河
八つ手を叩くために楓も濡れている

鼻の差で勝って思わず叩く膝
肩たたきされる覚悟は出来ている

善信
トミ子
智久

千梢
文江
シマ子

三恵子
シメ子
東雲

岩信
久子
ハル子

文秋
湖風
晋吾

愛論
恭昌
猪太郎

美子
信治

故雀踊子
真柳
良一

太一
庸佑

枯れすすき船頭小唄も遠い過去
夕映えを背にして戻る大漁旗
意表つく技が土俵に叩きつけ

初日の出たつた一つは美しい
オクターブちよっと上げ過ぎ恋の歌
酒の量年毎に減るクラス会

幸せと見てた人にも深い傷
山削り田んぼも海も埋まる故郷
旅先も留守が気になる苦労性

仏にも鬼にもなれぬ駄目女
芽出たさは八百と言ふ誌の香り
山行かば柿や蜜柑の無人店

適齢期家の娘も売りに出そ
春秋が一度に來たか狂い咲き
年甲斐のつもり駄弁と流される

行きずりのよく似た人を恋う旅愁
遠い耳笑顔で会釈してすませ
たねあかしされて首長は椅子を降り

キーを打つ慣れたる指のそのはやさ
ノーモア八月の空キノコ雲
資産公開見せる財布は軽い方

ぼたる川柳同好会
井上

はいチーズ カメラの前の七五三
七五三今日は無口の豆紳士
青い目も混じる晴れ着の七五三

千歳飴持って寝る子の重いこと

孤舟
頂留子
文子

紀一
喜久亭
治幸

ふさ子
義美
青琴

ちよ
虹汀
旭恒

高明
タミ
四郎

久仁於
幸夫
はる子

朴竜
正剣

直次報

一笛
方郎
幸子

幸子
蔽子

じつとせぬ子を追つビデオ七五三
 散るもみじもみじのような手で孫が
 散る紅葉庭掃いて待つ茶の心
 もう少し散るのは待つてほしい秋
 散る中に生き残された背の丸み
 散る迄は仰き見られる位置にいる
 木せいこの香りと共に散った君
 ひらひらと蝶が舞うよに銀杏散る
 石ころを投げたい奴がひとり居る
 医者が匙投げていたのに生きてる
 こんなセリフ言えまつかいと白本を投げ
 投げ入れにキツチンの筑も顔を出し
 十枚目履歴書書いてる無職
 ナフキンにホステス本名そつと書き
 同期会通知見るなり出ると書く

保子 吉太郎 博史 純次 馬洗 英子 恭子 しずえ 佳秋 直次 万之助 昭子 明光 祥司 正安

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

一匹が吠えるのと吠える住宅地
 老人に犬が步調を合わせてる
 来年は娘のえとで犬強し
 盆栽を抱いて機嫌を取りにゆく
 癒えた父菊に機嫌をそそぎこむ
 ご機嫌が悪うて蛸が寝ています
 不機嫌な顔を鏡で直してる
 人の世は誘い誘われ続く旅
 厨房に入る機嫌が夫にある
 コメカミがピクリ動いてからの風
 秋風が誘う枯葉の吹きだまり
 枯れかけた木へ流し目の誘い水

紫香 幸代 美々 夢之助 弘治 向西 四郎 歌子 定人 尚利 鹿太

川柳はまでら

井上

喜醉報

小遣いは妻の機嫌に左右され

勇次郎

アルプスの主役で燃える登山靴
 今日だれ主役は日替りアロサッカ
 おばさんが主役町内の紅葉狩
 笑われているとは知らずつい主役
 肩の荷が下りた主役のホームラン
 主役の座ゆずって円満新同居
 敬老日今日は主役の床柱
 孫掃り主役の地位を取りもどし
 お立ち台主役に成ったTパンツ
 ハイポーズいつも真ん中に居る主役
 泣き笑い共に主役の夫婦坂

源五郎 凡兵 広人 宙宙 三四郎 千流 しげお 酔舟 与呂志 喜風 喜醉

川柳岩出

児島与呂志報

枯れた芽が又おき上がる雑草の意地
 何処までも翔べる自由がある切手
 自由でも忘れてならぬ芯ひとつ
 すすき舞う枯野に独り立つ慕情
 どん底で育った子らに無い不満
 甘やかし過ぎた肥料が木を枯らす
 枯れてゆく色にも燃ゆる思いやり
 今日もまた何が不満か天の邪鬼
 不満など勿体なくて古希の秋
 剪定師僕の個性をねじ曲げる
 肩パットとって自由の気にひたる
 月並に自由もらった妻の位置
 妻の座は自由があつて自由ない

春子 和子 昌子 綾子 紳一郎 幸子 重徳 正義 正直 悦男 保子 達子

不自由を常と思つた過去もある
 井戸端は不満語れる主婦の城
 怒られて泣ける自由な母の膝
 求人欄わたしを満たす店がない
 枯れる草土と明日を確かめる

西宮北口川柳会

丸山よし津報

いのちある限り世界を歩きたい
 命より大事と言つてくれた人
 日に三度ごはんを食べている命
 地球より重い命を捨てたがり
 逝くときの科白は別にとつてある
 なにげない科白の中に込める愛
 爽やかな科白待つとせりふを思い出す
 せりふなどいらんハートの温い時
 どたん場で憎い科白が出て来ない
 夕映えの海から帰って来た男
 つつがなく生き夕映えに手を合わす
 何もかも許した顔が夕映え
 夕映えへ脳病む妻を抱いている
 あの人に映えるセーター着てデート
 夕映えの浜辺に立つて母を呼ぶ
 広辞苑の厚さに闘志湧いてくる
 羊かんの厚さ泣きごと言わさない
 一戦を辞せずバターを厚く塗る
 厚い雲抜ける頃には機内食
 札束の厚さは悪の厚さかも
 胸板の厚い男が蹴るボール

英子 千鶴子 愛子 忠雄 与呂志 紫香 みつ子 たず子 園歩 三男 鹿太 武庫坊 富貴子 キク子 富英子 暁風 諷云児 正とし ひろ子 能子 江美 佳秋 しげお 正坊 文 涼子

一服のお茶にようかん持て余す
無人駅ひとり降り立つちさい秋
一芝居打つ氣にさせる正念場
易々と白旗振らぬ意地のかげら
自分史を晒すベンだこ太りだす
山小屋も国際色のアルバイト
ちらちらと尻尾を見せて化けきれぬ
世間体だけで保っている絆

川柳ささやま

平野百合子報

トミエ
まさお
二南
澄子
備英子
義子
絹子
房子

草原を駆ける少女が蝶に似る
春からの予定で秋の旅に出る
後悔はしないときめた茜雲
なる程と思つて妻の愚痴を聞く
国中が同じテレビを見て平和
肝心なことを忘れた長電話
詳しくは記せぬ今日のお恋終る

純子
とよ子
恵美
貞子
つや子
市三
とみ子
靖子

すり切れて飽きても回る母の独楽
返還の国にはふれず来るロシア
飽き性と言われて長い夫婦坂
盃にお国のための沈めとく
いい国に生れた四季の花が咲く
呑めば出る自慢ばなしも飽きが来る
詳しくは知らぬがコレで揉めたはる
詳しくは誤解をまねく生き字引

和子
富美
芳郎
素水
可住
百合子

倉吉川柳会

渡辺 善句報

晴れ姿喜ぶ涙止まらぬ
チヨコ一杯はや弁慶の火事見舞

サカエ
碧水

一杯のコーヒー素敵な人と逢う
ぐるぐる幼い頃の夢を見る
毒入りの杯だつてありますよ
幼子と小羊だけが通る道
かす汁で一杯飲んだ顔になる
幼子の甘い匂に蝶がくる
どんぶりを持て杯はめんどうだ
喜びに便乗をして飲んでいる
遅刻して杯攻めにあつてゐる
十までは数えるよつたになる
幼妻吾子の重みで強くなる
杯進の話が匂だけで消え
杯に何やら怪し絵が浮かぶ
甘酒の匂に里の祭り恋う
保育器の中で印が付けてある
喜びをわけ合う友がいてくれる

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

千代子
寿満湖
かつみ
京子
美由紀
よしえ
石花菜
とみお
秋女
螢
康子
柳風
玲子
ゆり子
独歩
和枝

仰がれていても淋しい鬼瓦
そして朝もう白紙には戻れない
ばあちゃんか黙つて柱磨いてる
十人十色鬼も仲間に入れようか
鬼に好かれわたしも鬼の仲間入り
鬼の面いつもかぶつてゐる私
かくれんぼ鬼は遠くへ行つたまま
芸の道鬼の涙を知りつす
茶柱がよけい嬉しくする予感
家紋抱え家紋に生きる床柱
人柱立てた民話の橋も消え

信子
克子
太茂津
恵美
輝子
君枝
紀美女
紀久子
鉄治
忠雄
稚代

脇役が温い大黒柱です
無位無冠ただ一点の雲もなし
飯面脱ぎ心晴れ晴れ客となる
いま泣いた子がもう晴れている母の膝
会えばすぐ晴れる胸抱き悶々と
気晴らしのビールの泡がよく喋る
晴れる日をフリルの傘を待つている
片言が限る心を晴れさせない
愛がある限り白紙に戻せない
反骨のベンが白紙を塗りつぶす
一片の白紙が悲喜を演じ切る
筆先の気魄へ白紙あらたまる
産声の白紙に託す未来地図
筆先が白紙におびえ揃わない

京都塔の会

松川

杜的報

千寿子
保州
豊太
精子
光代
栄美子
好笑
涼太郎
佐代子
公子
三千代
和子
綾子

悪役の時計は五分進んでる
悪役が徹子の部屋でおもしろい
悪を斬る活字権力恐れぬ
悪役もこなす良妻賢母です
悪役に徹してくれよお父さん
井池の隅で売つてた焼芋屋
肉じゃがとみかんで足りる孫の客
別なこと考えている煙草の輪
限りあるいのち考え種を蒔く
考えるだけ考えて逢いにゆく
哲学の道を焼芋食べながら
屋上も芋畑となる京の街
考えておくは見込のない話

豊次
年代
諷云児
芳子
葉子
萬的
栄
紫香
百合子
礫
杜的
みち子
武庫坊

勸善懲惡活字がただす世の流れ

ほんわかとさせる活字の花名刺

亡き夫を知ってる人は皆老いて

ずけずけと言えは傷つく人が居る

河川敷に對抗試合が弾んでる

焼芋を買うのに千円札がいり

じやが芋に芽が出てわだかまりを捨て

戦争を知らないいもも蔓が伸び

芋蔓の先に知事やら元総理

芋粥がコトコト亡母がなつかしい

その活字待ったと伏字された頃

優勝へ活字が躍る人が舞う

義弟池田金鹿君を徳ぶ

三回忌萩には少し早い頃

川柳ねやがわ

高田 博泉報

水客

真柳

英子

てる

笑女

達子

福子

しげお

正坊

求芽

倫子

ただし

庸佑

敏

波留吉

一笑

恵子

ルイ子

高栄

静江

黎之助

菜月

かすみ

とし子

あやめ

光子

色即是空魂が飢えている

太っ腹で通り妻にはケチな人

のめり込む質でゲームに遊ばれる

言い訳の纏れる舌は信じよう

ここまでではうちの畑と彼岸花

邪魔になる指輪外してゆくデート

太っ腹な社長の隙を狙われる

看板にどうでも欲しい顔がある

太っ腹とみるか間抜けとみるかだが

ほほえみを忘れぬように鏡見る

看板は信用ですと言うお店

看板に偽りのある男たち

手ぶらの客に土産を持たすことはない

ゲーム終えコートに鳩が舞い下りる

墓地からの声聞えそう彼岸花

この辺は嘘だと知って聞いている

太っ腹会社はつぶしてもよいと言う

川柳藤井寺

高田美代子報

宗一

三夫

和夫

透太

敦子

トミ子

晋

しげお

公輔

和子

冬葉

英壬子

一芳

一途

たもつ

俊夫

三郎

時弘

洋

一風

英明

磯

速水

吉之助

度

庸佑

博泉

慣性の法則ブランコ揺れている

秋深し 隣は隣 うちはうち

夏バテのうつを捨てたい秋の風

爪切りの音を飛ばして夜は秋

秋ふかく置葉屋が回って来

案山子なき田圃に秋風のぼやき

秋風に制服ばかり目立つ店

無の刻へつるべ落としが輪をかける

落穂ひろい今年ミレ一の絵になれず

コスモスが揺れて私も揺れる秋

手紙より声が聞きたい電話口

反開放運動窮地来不足

へそくりをはたいてハワイ申込む

確かこの角で曲った福の神

妥協する男だんだん瘦せてくる

嫁さんに我が家の味を盗まれる

一徹な男で敵が多過ぎる

ひとを庇ってついた紙だと言うまいぞ

どんぐりころころ俺もお前もお人好し

川柳たけはら

森井 青居報

吸江

美代子

志洋

昭子

修六

たかし

利武

史郎

恒雄

悦子

治子

寿治

みのる

智久

春蘭

三郎

幹子

一屯

挨拶を交わす家庭はつぶれない

一步

富柳会

池

森子報

頑固者には勝てず苦笑い
孫去んで一層秋が深くなる

末貞一

名曲が静かな酒になつてくる

たつみ

シヤネル五番婦人一人酔うてはる
焼芋の匂に負けたダイエツト

宗一

孫を抱く夢は宇宙を飛んでいる
さまざまな起伏もあつて来た余生

すみ

民話からきれいな夢を貰う子ら
語りべの民話に囲炉裏の火がはぜる

茂美

この不況決死で越える決算書
シヤネルの香おとして母に戻る朝

志洋

さまたまな起伏もあつて来た余生
ルノアールお腹の兒にも見せる嫁

尚利

語りべの民話に囲炉裏の火がはぜる
過疎の風受けてちぎれていく民話

多賀子

終章に紅葉がみせた火の匂
角とれた石は素直に流れます

三郎

やもめになつて釘付けしてる木綿針
いい月だ今夜は愚痴を聞いてやる

向西

無人駅の隅に民話が吹き溜る
野仏は悲しい民話語り継ぐ

雄々

忘れたい忘れられない香を焚く
石橋を叩いてるのにある誤算

紅紫朗

祝福の花束熱く抱きしめる
大枚の金抱いたまま夢が醒め

六浦

無人駅の隅に民話が吹き溜る
野仏は悲しい民話語り継ぐ

与根一

越えて来た山のこだまがまだ消えぬ
石を積み罪の数ほど石を積み

花子

他人には笑顔で返す火の車
見え透いたお世辞他人だから言える

勇次郎

近くまで来た立ち寄る出雲弁
方言の余韻ほのほの温かい

静江

飛ぶなれば山越えて飛べ花の種
三代の暖簾みてきた石燈籠

登子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

夢之助

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

文子

お料理の画面匂もつけて欲し
無位無冠やつと墓石に名をとどめ

和樹

簡単に手術したらと言う他人
他人めし食うた親父の立志伝

弘治

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

静恵

古本の匂の中で師と出会う
八十を越した夫婦の鬼ごっこ

二子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

正治

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

太泡

抱かれた母乳が匂う児の未来
沈丁花の匂の中に母の顔

悦子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

石舟

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

友子

石ころの道だつたしっかり手をつなぎ
森子

美代子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

十四郎

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

米子

お料理の画面匂もつけて欲し
無位無冠やつと墓石に名をとどめ

昭水

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

澄子

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

静恵

古本の匂の中で師と出会う
八十を越した夫婦の鬼ごっこ

透太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

抱かれた母乳が匂う児の未来
沈丁花の匂の中に母の顔

文次

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

義良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

登志子

石ころの道だつたしっかり手をつなぎ
森子

花梢

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

紫香

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

芳枝

お料理の画面匂もつけて欲し
無位無冠やつと墓石に名をとどめ

維久子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

石舟

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

長三

抱かれた母乳が匂う児の未来
沈丁花の匂の中に母の顔

森子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

十四郎

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

米子

お料理の画面匂もつけて欲し
無位無冠やつと墓石に名をとどめ

透太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

抱かれた母乳が匂う児の未来
沈丁花の匂の中に母の顔

花梢

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

紫香

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

芳枝

お料理の画面匂もつけて欲し
無位無冠やつと墓石に名をとどめ

透太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

初孫をそつとだいたがこわれそつ
抱いた孫に今はワープロ習つてる

いわお

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

清子

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

達子

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

金のない男に惚れてから迷路
幸うに生きて迷路なぞ知らぬ

勇

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

義良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

登志子

迷路を行つて松茸をとつてくる
方向音痴またも出合つてる迷路

勇

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

逆立ちをすすると迷路が出られそつ
煩惱の迷路未だに抜けられず

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

名曲をしんみりと聞く秋夜長
思い出の名曲グラスの底で生き

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

名曲が溶かしてくれたわだかまり
舞儀すむまで流れていた第九

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

名曲が溶かしてくれたわだかまり
舞儀すむまで流れていた第九

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

名曲が溶かしてくれたわだかまり
舞儀すむまで流れていた第九

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

名曲が溶かしてくれたわだかまり
舞儀すむまで流れていた第九

太

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

叮紅

城北川柳会

吐田

公一報

神棚で小さな鳥居あぐらかき
共稼ぎ朝の勝負は秒刻み

秀夫

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

秀夫

ピンクの爪まあるく切つて誕生日
ゼネコンへ東京地檢加減せず

行子

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

千世子

湯加減をみてから誘う嫁やさし
爽やかな出来加減よき朝茶粥

史風

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

久留美

赤坂の夜はおとなの童話だな
分担の家事なめらかに夫婦独楽

春蘭

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

柳影

赤坂の夜はおとなの童話だな
分担の家事なめらかに夫婦独楽

春蘭

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

柳影

赤坂の夜はおとなの童話だな
分担の家事なめらかに夫婦独楽

春蘭

他人めし食うた親父の立志伝
腹割つて話せる他人居て楽し

妻良

方言の余韻ほのほの温かい
方言と何処へ行くのも二人連れ

柳影

息抜きに行方不明の三日程
 躁の日の女のことばよく滑る
 参拜の鳥居は公私差別せず
 旅立ちに忘れず持たす守り札
 建前で暮して無難な嫁姑
 風雪に耐えて鳥居は神の顔
 作文にころが痛む共稼ぎ
 切れ味のまずい言葉で今日のうつ
 娘が三人どの娘も姑と丸く居る
 この人に賭けた私を信じてる
 七人の敵へ相槌打つ余命
 幸不幸共に耐えてる夫婦箸
 疑いを抱かぬ女房の手が温い
 誰に見せるでもなし旅の写真増え
 過労死がくるぞぐるぞと洗濯機
 老母はいま童話の世界に生きたはる

打吹川柳会

奥谷 弘明報

八重 倫子 満津子 仙吉郎
 あい子 典子 頂留子
 登美子 昭子 静子
 白峰 政子 柳影
 公一

無駄足と知って出掛ける上天気
 上役の眼鏡に期待かけられる
 お天気がよくて不義理が多くなる
 上役の椅子をゆすりにやっけて来た
 カラスもお前もお高いところに止まってる
 酒も肴もカミさんの天気次第
 上役のふところにあるえんま帳
 桐の箱なんでも高く思わせる
 神様は高天原でご談合
 上役に香辛料をふっけておく

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

玲子 螢 孝恵 節子 早苗 石花菜
 よしえ 御前 弘朗
 ちよえ 智重子 好栄 民子 英子 歳栄
 はるみ 鈴江 かつ子 聖子 洞然 博利 清泉 白汀

カード社会時々自分見失う

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

占いのハートのクインソっぽ向く
 カード族悪魔があとをつけて来る
 使うなと言うてカードとコンドーム
 テレホンカード穴の向うにあるドラマ
 花束に添えたカードに見る打算
 カードとは打出の小槌現代版
 スペアのカードが笑う大晦日
 店を出てお面をはずし母になる
 赤ちやんのあぶくむすむす歯が生える
 菊の苗優雅な命植えつける
 良い名前ですわねにっこり手のひらに
 喜寿はそ俺にはしたいことばかり
 まだ見ない蝶を待つてる水中花

川柳塔とつとり

武田 帆雀報

光子 あずき 正晴 慶子 田実子 香住 弘直 暁子 千枝子 留吉 清芳 智子 孝男 大漁 螢 圭一郎 孝由 明美 楊芝 俊里 帆雀

気楽さはもめる子もなし遺産なし

気楽にと無学な妻に教えられ

気楽には出来ぬ世相のつけがある

妻の手の中で気楽に身をまかせ

ぼんやりと気楽していると生き過ぎる

留守番の気楽朝から飲んでる

清流の滝も汚水となる運命

生命の儚さ論す滝しぶき

糸を引く滝にも主張あつて落ち

涙の滝を枯らして女強くなり

滝めぐり一人歩く熊が出る

私を決心させた滝である

終の日へ流れつづける滝を抱く

当て外れ青い紅葉のバスツアー

稲青立ちてさらに農家の嫁不足

新世紀覗く夢抱く万歩計

本心を言葉尻から覗かれる
どん底を覗いて人は強くなり
居心地は如何とあの世覗きたい
吊間の客を覗いている柩
福の神ちよつと覗きに来ておくれ
のぞいたらのぞかれていた壁の穴
慌てるな米がなくなることはない
不作だと危ない米を食べさせ
細川さん信頼してる米不足
清水昆の河童はなんとユーモラス
黄桜の河童よく飲む春うらら

一枝

友夫

一京

山人

静生

由多香

喬水

黙光

粗粒

正恵

輪多朗

陸子

艶子

光子

登志子

ひろ子

久峰
照子
叡子
佳秋
楓楽
蛙

水質汚染カッパも遠退くマイホーム

どれ見ても見えてきたような河童の絵

ダム工事河童引越しせまられる

世の流れ河童の皿にねがいかけ

もの忘れ河童の皿にねがいかけ

頓堀の河童ネオンで浮かれてる

かつば巻きあとはあがりとお勘定

ポツカリと浮いて河童も空を見る

父の還暦真心こめて赤を編む

人生薄暮朱を足しながら足しながら

吊り皮がのんびり揺れる赤字線

米の値が高くて吉野屋が困り

動かない時間もあましてる風

梅雨晴れに肌さっぱり北の風

街角で心安らく風に逢う

自転車に乗るとナイーブになる風だ

昨日から嬉しい風の中にいる
風下を歩くひらたくなっている
過去みんな消してくれてる風の音
マンネリのくらしに新しい風を待つ
人憎む風の話は聞き捨てる
雑草も風の握手でうたい出す
完全のりんご欲しやと風の旅
馬耳東風聞き流している祖母の知恵
向かい風追い風があり生きてる
早苗田をはしゃいで渡る風の道
むらさきの風を訪ねる風の盆

絹子

春子

恭昌

さと美

宏子

兼治郎

英一

みつ子

凡子

希久子

宣司

鬼遊

日枝子

朗子

千春

ゆき
蘭
夕子
歌子
晶子
恵子
玲子
瑞枝

後ろ手に父がかばった向い風

モンローを知ってる風が老いて来た

忘れたい人の噂を風がする

千羽鶴発たすにちようどいい風だ

道祖神風の落葉にニッコニコ

サークル檸檬

小林

一夫報

鶴の旅の果てはおそらく深い湖

北方四島夕餉の鉢をこう並べ

今が一番若いと枯葉に励まされ

偽善にも偽悪にも倦み老いの酒

あなたより呼ぶ名前前なく黄昏れる

ゆっくりと落ちてゆきたい空の果て

私の中に住む虫よ泣かないで

愛はまぼろし紙ヒコキを飛ばす
空青し裁くものなど何もなし
豊かさの中で気力が疲れ果て
追い駆けた山のあなたの果てしなく
許すゆとりたぎる湯に水差してから
読みかけを閉じてやっぱりものと主婦
傾いた額を眺めている秋思
飽食の果てにころろを見失う
身の果てを今は考えないことにして

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

花子

正子

富美子

千代

天雀

千代

薫風

喜美子

正坊

希久子

一夫

ゆかり

いわず

薫

雅子

慶子
あずき
みつ子
楓楽
智子

樅熟れて電話が長くなっている
混浴の女ケラケラよく笑う
編みかけの毛糸は母の肩掛けに
にしんそば吸り顔見世噂する

路児
一笛
作二郎

おっとりとしすぎ歯車かみ合わず
おっとりの長男 嫁が決まらない
ベットまでおっとりしているいい暮らし
おっとり日にち薬を飲んでる
おっとりに合わすと振子くるい出す
プログラム三次会まで行くつもり
昔々映画館でくれたプログラム
喧嘩するはずでなかったプログラム
プログラム通りにゆかぬ村芝居
七五三 満も数えも受付ける
中腰で人の最後を見つめてる
真夜中の青信号は人嫌い
法螺を吹く話の好きな縄のれん
恋一途人の噂を気にしてず
手話にまで競馬予想をしてる人
結局は私の肩に荷がかかる
人間のルーツさがしに森へ行く

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

心棒を外したように出る疲れ
時に他人時に夫婦で渡る川
意地張って地球だんだん狭くする
ちよっといい女だ意地悪してみよう
同姓同名どんな人かとふと思つ
犬がいて猫いて一人秋刀魚焼く
意地張った悔いが佻しいワンカップ
散歩する彼女の犬がじゃまになり
冗談が受けているのは他人だけ
意地悪なレンズ女のペール剥ぐ

吉太郎 慶子 だし かげお 明光 杜的 登代子 博子 博子 英子 武庫坊 紫香 萬的 寿美子 正坊

家裁出る空の青さを信じよう
家計簿が他人の顔で指図する
ともすれば他人の顔になる鏡
風の日のプラットホームみな他人
坂降りて他人の顔になるふたり
乾杯と拍手のあとは皆他人
逃げ足が速く正体つかめない
手土産を提げてきたのに犬が吠え
嵐でも案山子は意地で田を守る
追伸に逃げ道そつと書いてある
裏口に母がいるから逃げられぬ
母親の責任がある逃げられぬ
追っかけて来るから少し逃げてやる
ことさらに秋は女を脆くする
子離れてとかく忘れっぽい夫婦
打てるなら打てよと杭を高くする
親孝行したいが親はお金持ち
壊れない夫婦茶碗を子に贈る
癌告知開き直れるかもしれぬ
さわやかな心でいたい秋だから

堺川柳会 河内 月子報

コスモスの丘青空とわたくしと
捨てようと誰も言わない祖父の杖
いい子感夕焼け道を子と帰る
ひとさまの不幸福憎い奴
対岸の火の粉が飛んでくる予感
子感が当たる私の耳が痒くなる
思い出に引き留められて捨てぞこね

静江 ひでお 求芽 年代 薰 武庫坊 二南 白溪子 波留吉 杜的 節子 スミ子 紫香 恵美子 萬的 正坊 げお 英一 太茂津 諷云児

新同人紹介

〒036 弘前市学園町3番地42 電話0172-33-5310 浅田隆樹

〒036 弘前市茂森新町2-6-5 電話0172-34-2668 一戸ツネ

〒036 弘前市西ヶ岳町1番地6 電話0172-35-2765 岡本花匠

〒036 弘前市千年2丁目9-8 電話0172-87-5081 中山雅城

〒572 寝屋川市国守町879-7 電話0720-22-0987 世森幸雄

— 薰風・恭昌推薦

クラシックやつばりナマを聴きにゆく
 子感みな外れてひとりしまい風呂
 憎まれ口叩く割には好かれてる
 迫力に押され思わずハイと言う
 山埋めて咲くコスモスに息をのむ
 惨敗へふっと見上げる青い空
 悪友の妻の子感が手きびしい
 迫力のある一輪の寒椿
 主客転倒捨てられるのは男です
 粗大ゴミおとなりさんの暮し向き
 踏切がとっても憎い救急車
 異常気象予感当たった米不作
 あの雲はわたしが捨てた影法師
 茶柱の子感に軽い朝の靴
 落選の子感慰めようがない
 叱られる予感我が子の素直さよ
 青空へ監督さんをほうり上げ
 胸底に憎い男の名を刻む
 憎い憎い男とステーキを食べる

むらくも川柳句会

藤井

明朗報

凡子 摩耶 道胤 かりん 小雪 文 千万子 花梢 文時 東雲 信博 夏子 寿恵子 妻水 天笑 寿美 月子

正朗 芳子 秀子 義良 ヤス子 百代 久仁 朝子

花の苗その先あなたの世話しだい
 夫婦仲その先どうか変らずに
 秋深し山の楽しいもみじ狩り
 趣味ひとつ持って文化におくれまい
 不思議にもこたつはうまい夢誘う
 こたつから返事はかりの寒い朝
 文化追うわが健康のある限り
 寒さきびし老いはその先案じられ
 気分転換 友とおしやべり温泉も楽し
 紅葉を眺める気分酒の味
 深い情けに救われる落日
 底冷えのこたつに明日は雪になる
 思慮深い嫁で一家は平和です
 芸術の深さに余韻まだ続く
 その先は知らない内に幕が降り

伸子 島子 三喜子 鶏生 定子 幸夫 是代 千里 美恵女 藤子 林蔵 雀子 延子 一葉 明朗

平成五年月間賞杯永 久保持者に田中薫氏

平成5年度の本社句会の月間賞杯永久保持者は、3月・7月の2回にわたって最終選者の天位を獲得した田中薫氏（尼崎市）に決定し、1月本社句会で表彰される。

また、皆出席者は、昨年12月号既報の皆出席者から12月句会に欠席した桜井千秀さんを削除し、計四十名となった。

祝 800号

田 中 み ね

〒640 和歌山市鷹匠町1-4
 電話 0734-36-0230

玉 置 当 代

〒640 和歌山市園部1-670-80
 電話 0734-55-6511

岩 本 美 智 子

〒641 和歌山市関戸5-7-11
 電話 0734-44-5437



岩本雀踊子さん逝く

別れの言葉

西尾 栞

私の大好きな雀踊子さん、どうしてそんなに死出の旅路を急いだのだ。『川柳塔』九月号の自選句に、あなたは、

これからの余生死んでたまるかい
という句を発表している。それを読んで、独り暮しになっても、さすが雀踊子さんだと感心していた許りのこの頃だったのに。
今年の二月に、あなたは最愛の奥さんを長い看護のあと、泪のうちにあの世へ見送られた。その時、

二女一男育てた妻の過労死だ

花好きな遺影に花屋で花を買っ

三途の川無事に渡った夢だより

という句を、奥さんにささげておられる。

あなたは、お酒が大変好きだった。川柳大会で他府県へ出られる時は、きつとワンカップを沢山仕入れて来て、車中や昼弁当の時にニコニコして呑んでいた。そして私達同行の者にふる舞っていられた。少しも崩れない、良いお酒だった。時々、大きな声で「大和の雀や」と言うて、みんなを笑いの渦にまきこんだ。

妻逝つた男に一升下げて来る

雨の日は雨の思い出あるお酒

と詠んでおられる。今度の死は、委しいことは知らないが、お酒がわざわざしたのではなからうか。大好きなお酒と心中したのなら致し方ないとしても、突然の訃報に、余りの突然の訃報に言うべき言葉もない。また、あなたの句に、

苦勞をした父母を知ってる二女二男

というのがある。お子様達は御両親の後ろ姿

を見て大きくなられたので、きつと岩本家を大切に、ますます繁栄して下さいよ。

雀踊子さん、三途の川まで行つて、おやこは来過ぎた、乗り越したと気がついて戻つて来るのを待っているが、今、あなたを送る鉦の音が晩秋の空に響き渡っている。矢つ張り終点まで乗って行つたのだ。哀しい別れが淋しい別れが、目の前にある。どうぞ安らかに雀さん眠つておくれ。

謹んでご冥福を心からお祈りする。

雀さん、さようなら、もう一度さようなら。

閻魔さんに一杯のませてすぐ帰れ 栞

弔 辞

黒川 紫香

噫々 私等の盟友、雀さんこと岩本雀踊子さん忽然と逝く。何と悲しいことでしょう。いくら先立たれた奥さんが恋しいと言つても、そんなに慌てて逝かなくても……

今月の十三・十四の両日、鳥取は鹿野で開かれる川柳大会に、同行する人達と、肩を叩き合つて約束されていたのは、八日の本社句会のことでした。十三日早朝、大阪梅田バス

センターに集まった一行は、九日に雀さんが倒れたら知らせを聞きました。

今年二月、最愛の奥様を病気で亡くされるまで、その看護に尽された有様は、本人は何も語られなかったが、人伝てに聞いても涙の出る話でした。その奥様を、

お多福の妻だが私の勲章だ
苦勞ばかりそれでも妻の勲章だ

というように慕い、偲ぶ句を発表されています。その苦しめて悲しい中にも、川柳から離れず、家庭を守りながら、柳誌、句会に投句し、佳句を発表されていました。

材木を扱われていた関係もあって、大きくて頑丈な体に似合わぬ優しさと愛嬌があつて、人をそらす憎まず、酒豪と言ふよりも酒好きで、一緒に旅をすると、自分の飲み代以上の酒バックを提げて来てふるまうので、雀さんと一緒に聞くと、また飲めると車中の旅を楽しんだものです。

私より古い柳歴で、鬼丸と号した昔からの柳友も多く、なぜか遠方の人と言つと、日本海に面した方々の名が上がつて来ます。その日本海沿岸の人達に、この訃報が届いた時の驚きと皆さんの慟哭が聞えて来る気がします。

いろいろ言いたいことがあります、胸につまつても言えませんが、

地下足袋の似合う賞罰ない私
と自分を評価し、

これからが余生死んでたまるか
このままで終らぬ男の絵双六

と決意をあらたにして間もなく逝かれた無念さは想像できますが、愛しい奥さんと極楽とやらで、楽しい話を川柳を交はえてして下さることを、念じて止みません。

山陰へ行くバスの席空けたまま 紫香

まさか まさか

宮口 笛生

まさか、まさか。雀踊子さんがあつけなく他界された。十一月八日の本社句会の帰途、近鉄鶴橋駅ガード下のやきとり屋で一杯つき合い、別れたのが最後でした。

翌九日午前七時に病院へ診察の順番取りに行き、一度家へ帰り入浴して洗いで倒れたよう、午後四時過ぎ、近所の方が訪ねてきてうめき声を聞かれ、すぐ救急車で運ばれたらしく、半分冷たくなつていたとか。

今年二月、最愛の奥さんを亡くされて以来一人住いで、「娘が来いと言つのだが、まだま

だ元氣やさかい、一人暮らしは氣楽や」と、ちよつと頑固なところもありました。こんな時誰か家の方がおられたらと、一人住いのかなしみをつくづく思われしました。

そして意識不明のまま、二十日に他界されたのでした。あの人の良い好作家の雀踊子さん。奈良県下では数少ない川柳塔の大先輩を失い、ほんとうに残念です。拙宅で毎年開く平城の会の芋煮川柳の会にも毎回、出席されたが、酒に崩れることなく、実に楽しく飲み食されたものです。もう一緒に飲めないと思えば寂しい限りです。

「最近、耳が遠くなったが、これは長生きの前兆だから長生きしようね。死んだらしまいや」と、谷垣史好さんのお葬式の時、話しておられました。長い間、奥さんの看病をされ、亡くされてがっかりされた反面、やせ我慢だったのでしょうか、「もう妻に手もかからなくなつたし、これから川柳一途にがんばる」とも言つておられたのに。きつと奥さんが迎えるに來られ、あの世で再会しておられることと思います。奥さん思ひだつた句。

どちらかが病めば夫婦という絆

やせ我慢している笑いにふと氣付く

花好きな遺影に花屋で花を買つ

ただただ、「ご冥福をお祈り申し上げます。

本社十二月旬会

十二月七日(火)午後五時半

メンズフアツションセンター

平成五年最終の本社旬会は、八十六名の出席を得て定刻にはじまる。

「おはなし」は、川柳雑誌時代から活躍の藤村メ女さん。家業が倒産し、五人の子供をかかえて途方に暮れていたとき、路郎師をはじめ柳人の方々の縁で仕事を始め、続けることが出来たという。ドラマチックな半生にはなつかしい柳人が沢山登場し、さながら川柳塔史の趣があった。八十二歳の現在、健康状態も良好なので、皆さんと地方へ旅し、温泉に入れるのを楽しみに、これからまずつと川柳を楽しみたいと結び、大きな拍手を受けた。披露に先だち、去る十一月に亡くなった、参与の岩本雀踊子氏に黙祷を捧げた。

初出席は、岡本久峰氏(大阪市)。月間賞は、前たもつ氏(枚方市)に輝く。

(司会―東雲) (受付―いわゑ・千歩)
(記録―ダン吉・月子) (清記―楓楽)

席題「買う」 榎山 隆選

今にみる議事堂まるごと買ってやる
一生に一度と思うナイフ買う
仇花を買い漁る世紀末のカード
イヤリング買って少女は大人びる
十田安い大根を買うペダル踏む
一役を買って出刃研ぐ暮れの汗
上海で食べ香港でお買物
失笑を買っても尻に敷かれてる
若い頃は土産梅田で買い揃え
性懲りもなくJR買いました
買いかぶりやろかおだててるんやろか
買えるならあなたの心戻したい
夢を買う猿を探しに出かけねば
夢の中あれもこれもと買っている
無一文で人の情けを買いました
成績は悪いが元氣買ってやる
誰よりもあなたを買ってます私
男一匹買われて祭り取りきる
札束を積んでも買えぬものがある
買ってからイヤモンつけるのはババだ
衝動買いカードが鬼を連れてくる
ひと恋えばひそやかに買う花の種
要領のよさを買われて秘書になる
安い物のうまい男の生き上手
安売りへ女は無駄を買い過ぎる
あつさりとサンゴのかんざし買ってくれ
土産物決して買わぬ社長さん

哲夫 親路 薫 みつ子 たず子 たもつ 天笑 保州 美代子 天笑 恵子 公子 欣史子 公子 正雄 房子 落児 いわゑ 柳宏子 章久 薫 たず子 森子 雅文 吸江

分割で息子新車を乗り回し
人柄の良さをみんなが買っている
横町で人の情けを込めて買う
悟りきったつもり線香買ってぐる
酒買いに出たまま夫婦帰らない
お一人様一つを買いに駆り出され
欲しいもの買わず要るもの買いなさい
島ひとつ買えとボスから指図が来る
聞きわけのない女と花を買う花屋
売り言葉買うてる暇が僕にない
赤い服買ってストレスはじき出す
淋しさについて花を買いすぎる
前向きに生きたくて買う広辞苑
名水のボトルは高いほど買われ
兼題「連続」 山本希久子選
貧しさが父から子へと受け継がれ
連続の車列が僕を通せんば
連続の出席だけが取り得だな
フオーカスの人連続のマイク浴び
昨日も今日も妻いそいそとして出かけ
連続の佳境へきつと鳴る電話
掃除機をとめて朝ドラ欠かささない
黒梓の葉書が続く寒い暮れ

月子 狸村 武庫坊 大茂津 月子 笛生 英壬子 雅文 森子 諷云児 一風 楓楽 楓楽 隆

愛は気まぐれ不連続線通過
 連続の外出 妻の矢が刺さる
 人生色々 吉凶禍福不連続
 ええことが三つ続いた落し穴
 夫婦なり連続劇に似ておかし
 失恋ばかり寅さん今日も旅の空
 普賢岳まだまだ続いている不安
 女ばかり三人産んでから思案
 連続のハードル越して父も老い
 新聞はゼネコドラマ続くなり
 失敗の連続神の試練かも
 愛別離苦 連続してた二十代
 ダイエット連続させるむずかしさ
 たわやかな花へ試練の風やまず
 連続させてゆくもゆかぬも君しだい
 連続の注文捌くみそかそは
 サスペンス連続殺人がお好き
 一、二、三、四人目もまた女
 連続ドラマに幕を引かせぬ視聴率
 連続五年ワースト一の死亡事故
 慶弔の連続 年金脅かす
 連続安 兜町にも舞う落葉
 連続のティッシュペーパー春の風邪
 まだ続く雨に人恋う石仏

薫
 ルイ子
 射月芳
 しげお
 いわゑ
 正雄
 萬的
 保州
 隆
 かすみ
 楓
 正坊
 英子
 朱夏
 頂留子
 英王子
 美智子
 吸江
 吐来
 三男
 稚代
 榎
 一風
 隆
 美代子
 かすみ
 ルイ子

不倖せの連続だった母の嘸
 人
 旨いけど続く困るから褒めず
 地
 諸行無常 計報が続く冬の風
 天
 父子家庭カレの匂う日が続く
 軸
 心配の連続 母である限り
 兼題「結果」 芳地理村選

萬的
 文秋
 武庫坊
 吸江
 希久子
 信義
 柳伸
 天弘
 正子
 蛭
 保州
 岳人
 ただし
 英王子
 正坊
 美智子
 金太
 道胤
 朱夏
 房論
 愛論
 勝晴
 ダン吉

結果見てからでは遅い舞台裏
 その結果やつと叶ったポックリ死
 結果だけ言えば背中が寒すぎる
 気短で結果を先に聞きたがり
 結果どうあれ妻に従うことにする
 お見合の結果は顔のせいかしら
 なるようになるさ結果を気にしない
 大袈裟に検査結果を言うておく
 悪いけど結果は癌と出てしまい
 もう結果見えているのに無理を言う
 結果など念頭になしひた走る
 毛生え薬の結果に期待せぬように
 相談の結果は妻の言う通り
 結果まで聞かず酒を出してくれ
 やるだけはやった結果に悔いはなし
 その結果 家を出たのは僕でした
 結果いま許す男を凶に乗せる
 検診の結果でうまいうどん食う
 努力した結果黙って語らない
 結果から言えばつまりあなたは馬鹿でした
 いい結果もう喝采が鳴り止まず
 秀
 結果どうあれ懸命に今生きる
 軸
 うれしさが顔に出ている良い結果
 兼題「捨てる」 河内天笑選

美房
 太茂津
 森子
 月子
 希久子
 道胤
 諷云児
 千歩
 笛生
 武庫坊
 いわゑ
 楓
 シマ子
 しげお
 洋子
 公
 雅文
 稚代
 ルイ子
 榎
 歌子
 狸村
 重人
 狸村

捨て上手な妻に整理を頼んどく
靱殻焼く煙よ捨てたふる里よ
ほろ酔いの舌からすべる捨て台詞

玄関に寒そうにいる古雑誌
捨てるのにお金がかかるボンコツ車
贅肉を捨てたら杜連上向きに

ダムの水に捨てた民話と手毬唄
捨てる嫁 拾う姑で折り合わず
捨てられる予感を抱いている夫

連れションで捨てる一人のわたかまり
捨てるにも勇気がいると笑う母
欲捨ててなんでも言えるようになる

捨てた封筒 婆ちゃんが拾うてた
リストラで金の卵も使い捨てる
捨てた石の一つに父の顔がある

捨てられる予感で先に逃げ出そう
こだわりを捨てると軽い靴になる
捨てるものばかり目につく十二月

諍うて捨てる決めたWベッド
捨てまくる嫁にストレス溜める姑
利用価値ないが捨てられないあな

さて捨てるとなんと思ひ出よみがえる
ああ文化ゴミ捨てるのに金が要る
ふるさとを捨てた若気を責めるまい

肩書きの誇りを捨てる職探し
欲捨ててからくじ運が強くなり
うちのより良いCDが捨ててある

そんなものを捨てると言えるのは他人
簡単にくるまを捨ててある路上

文 秋

ダン吉

雅 代

勝 美

金 太

雅 文

笛 生

鬼 遊

佳 秋

頂留子

智 子

正 度

諷云児

太茂津

弘 直

千 歩

明治生まれの気骨パーカー捨てられず
自尊心捨てるとバズル解けてくる
待ちぼうけ温いキップをちぎり捨て

捨てられたことになっている胸の創
ここからは邪念を捨てて鶴を折る
体力がないと男も捨てられる

捨てた女が輝いている御堂筋
下心捨てたら気持よく酔える
一番に出稼ぎ組を切り捨てる

兼題「気高い」 高杉鬼遊選
繁栄の街には気高い塔が無い
露の身に気高い朝の陽があたる

汚職せぬ議員気高く見えてくる
野に置けば妻は気高い月見草
お后になってほのぼの出る気品

気高さに遠い茶碗がいっち好き
どことなく気高い人に気負けする
そろそろと大仏様のすす払い

玉砂利のリズムで背筋のびてくる
コシヒカリ気高さがありよく売れる
尼さんを気高く見せる黒と白

寒行の気高き雪の永平寺

英壬子

吸 江

かすみ

三 男

吐 来

歌 子

たず子

落 児

天 笑

信 義

文 時

新正子

御英子

御英子

勝 晴

かすみ

気高いお経お布施きょうさん払ろてます
神鶏が気高い顔で朝の糞
はなれ小島のように気高いいる女

気高さが御堂の裏で眠ってる
献体を決めて気高くなる笑顔
和紙人形の気高いまでに帯の位置

気位の高い妻です耐えてます
りんと舞う白いドレスの胡蝶らん
薔薇の棘 気高さがあり憎まれず

気高い人の影を踏んでもいけません
泣きに来て気高くやさし弥陀の眉
気高きの垣根が少し高過ぎる

本宅は猫も気高くすましてる
気高さが邪魔で申かつ誘えない
とても気高い観音様に紅がある

気高きや松茸松葉コシヒカリ
商魂に流れ聖歌が狂いだす
面白い帽子で気高いお立ち台

凛として気品は膝の上にある
妻の背なときどき後光さしてくる
佳

風の刃に気高く向う冬木立
木守柿一つ気高く木に残り
外で会う猫が気高いふりをする

焼肉が匂う気高くしておれぬ
気高きで毎日爪を切っている
人

阿弥陀さま老母に気高い本願寺
地

金 太

章 久

武庫坊

楓 楽

冬 葉

度

岳 人

智 子

たず子

歌 子

紫 香

一 風

シマ子

楓 楽

朱 夏

森 隆

気高さは秋刀魚下げても変わらない たもつ

天

一本の藁が気高く見える闇

軸

トイレット気高い人をふと想い

鬼遊

兼題「寺」

西尾

栞選

折れて寺 曲って寺の京の路

緑良

化野の寺で無常と向い合う

〔編〕正子

何もすることがないので寺へ行く

螢

寺巡る旅情を添える京料理

庸佑

洋風に建てても寺の白い足袋

柳影

苔寺で寒い話ばかり聞く

〔松〕文子

お寺はん来やはった皆外へ出よ

眉水

落葉掃く尼僧に秋の薄日射す

勝晴

山寺の鐘で樵は昼にする

颯云児

鞠一つお寺の屋根へとんだまま

寿美子

お寺から外車出てくる日の法事

太茂津

寺の門出るとたんに飲む話

一風

ポックリ寺の鴉がわらう長寿国

たす子

てつべんに一つ残った寺の柿

岳人

生いたちは誰も知らない寺男

保州

お寺さん数珠で商才磨いてる

悟郎

禅寺に人間くさい布袋尊

正坊

男にも駆け込み寺がいる時世

柳弘

紅葉を避けて見返り仏に逢う

〔編〕英子

大仏さまを拝み忘れた東大寺

冬葉

姉さんと約束がある光善寺

たす子

山寺の和尚サッカーボール買う
高僧が草をむしっていた作務衣
人生解答ほとけの座でもとめ
東寺の塔見えてようやく旅終わる
チャンバラのロケをやつてる寺の庭
尼寺に猛犬ありと書いてある
柿みんな落ちて法隆寺も冬に
参詣が二の次になる大根炊き
しろありにまさかお寺はみくびられ
飲食街かと思つたら寺の町

無住寺も賽銭箱は置いてある
うつとりと伎芸天女の慈悲に逢う
近頃のとしよりは寺参りなどしない
新米が届いたらしい寺の鐘
楽しそうに観光バスが寺に着く

病院とお寺のそばで住んでます
本堂を貸して住職墮落する

弟に寺を譲った深い訳

山寺の一夜こんやく問答など如何

▼訂正 12月号 P16下段18行目「チョンマゲの頃から…」↓「チョンニゲ…」
▼ご芳志 津村八重子さん（鳥取県）から
亡夫供養のため、金一封拝受しました。

祝 800号

小出智子

佐々木鳳笙
(本名 芳正)

高田美代子

柳界展望

★富田林市民川柳大会は旧年11月7日、中央公民館で開かれ、次の同人2氏が秀句賞を獲得した。

銀行の金庫に他人の金ばかり
和田維久子

生きるとは水を汚してばかり
小出 智子

★第14回川柳塔鹿野みか月記念川柳大会は11月14日、町営国民宿舎「山紫苑」で155名が参加して開かれた。各題天位句と総合成績は次のとおり。

ふりかえりながら影法師
と生きる 大角 幸代

この土の下には沖が見えるのだ
山之内 洋

天高し人に尽くせる花で咲く
中原 諷人

友だちは死んでしまった
紙芝居 金築 雨字

ちぎれ雲 有縁の絆絶ち切れぬ
園山多賀子

はぐれ雲きつと孝行しに帰る
政岡日枝子

〈総合成績〉①金築雨字②新家完司③政岡日枝子④市村京子⑤大角幸代⑥林荒介⑦小島蘭幸⑧鈴木公弘

★第40回八尾市民文化祭は11月14日、107名が参加して八尾文化会館で開かれた。次の同人2氏が秀句賞に輝いた。

許すとは言わぬが電気つけてある
田中 透太

酒をおおつて男の酒が荒れている
松原 寿子

★第35回豊中市民川柳大会は11月28日、市立中央公民館で開かれ、

報われぬ稲穂を旅は見て帰る
宮前 秀子

のほか、稲葉長生・久保田元紀・坂野はつこ・市村散

歩・前田咲二・辻香豊の各氏が秀句賞に入選した。

★京都塔の会は平成5年の年間賞を決定、12月の年末句会で表彰した。最優秀賞

は川島颯云児氏、得点賞は田中正坊④松川杜的⑤都會求芽の5氏。

★第5回伊藤園おーいお茶新俳句大賞が文部省後援で作品を募集、川柳団体に所属する者にも参加を呼びかけている。「一般の部」は

A(65歳未満)とB(65歳以上)に分かれ、各部門の大賞には20万円と副賞はじめ優秀賞(5万円)、審査員奨励賞(3万円)、ユニーク賞(1万円)など。選者は

金子兜太など7名で、季語・定型などの制約はない。

締切は2月28日で応募は官製ハガキに部門と住所・氏名・年齢・性別・職業・電

話と所属句会名を書き、作品3句を東京都千代田区麹町1-6・伊藤園おーいお茶新俳句大賞係へ。発表は7月中旬予定。

★第7回川柳愛吟コンテスのテーマは「食」で、選者は山田良行・大木俊秀・井上松美・中村安重の各氏

句数は制限なく、既発表句も可。会費千円で優秀句には一万円・五千円・二千円分の図書券。締切は1月20日、応募先は島根県能義郡

広瀬町広瀬639・広瀬川柳愛吟会事務局へ。

▽出版△

■番傘川柳本社編「川柳その作り方・味わい方」(創元社刊・B6判268頁・1600円) 番傘川柳本社創立85年を記念して出版された川柳の入門書。

品3句を東京都千代田区麹町1-6・伊藤園おーいお茶新俳句大賞係へ。発表は7月中旬予定。

■NHK学園「川柳春秋」31号「わたしの川柳作法」に奥田みつ子さんが「ひらひらと触角」、大橋政良氏が「川柳楽書帳」と題して執筆している。

■福浦勝晴氏(理事・岸和田市)の「柳俳接近の時代」と題するコラムが「中央公論」12月号の「ホットライ

ン」に掲載された。

▽訃報▲

■岩本雀踵子氏(本名政雄本社参事・桜井市)は11月20日、桜井市済生会病院で死去、83歳。告別式は同22日に行われ、西尾榮主幹ら多数が参列した。

■神保拓生氏(本名千鶴男本社同人・大阪市)は12月10日、喘息のため死去、75歳。告別式は同11日、我孫子西集会所で開かれ、橘高薫風理事長らが参列した。

祝「川柳塔」800号

川 柳 塔 社

會計監査

松川杜的

塩満敏

小出智子

小池しげお

川島諷云児

河内月子

河内天笑

神谷凡九郎

奥田みつ子

榎本吐来

板尾岳人

西田柳宏子

黒川紫香

橘高薫風

西尾栞

常任理事

副理事長

副主幹

理事長

主幹

吐田公一

吉岡美房

宮園射月芳

宮口笛生

春城武庫坊

西出楓楽

辻白溪子

玉置重人

高杉鬼遊

田中正坊

阿萬萬的

野村太茂津

川柳塔社常任理事会

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

木村春枝 木村富美子 川上より子 金山夕子 神崎あいこ 門脇晶子 鹿島繭子 大塚恵子 石中時子 池尾保子 新正子 足立由美子 青戸田鶴子 石垣花子

野坂なみ 中野弘子 中井ゆき 富永のりこ 寺沢みど里 田中亜弥 菅井とも子 白根ふみ 塩谷八重子 さえきやえ 坂口一江 澤田千春 小村てい子 小塩智加恵

八木千代 矢野満子 茂理高代 三好寿々子 光井玲子 政岡日枝子 増田竹馬 堀江純子 福代天雀 広江富枝 服部朗子 林瑞枝 林荒介

800号おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

西	黒	門	奥	奥	上	秋	朝
口	田	谷	山	田	田	元	山
いわゑ	能子	たず子	美智子	みつ子	佳秋	てる	千世子
黒	吉	山	丸	藤	春	春	林
川	田	崎	山	村	城	城	
紫	笑	君	よし津	ノ	武庫坊	年	はつ絵
香	女	子		女		代	

祝 800号発刊

平成六年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

第14回(満13周年)記念大会のご支援ありがとうございました
ことし(第15回大会)もご支援くださいますよう よろしくお
願い申し上げます

						事務局長	副会長	会長
太田幸枝	大角幸代	大角正道	乾隆風	乾喜与志	石尾かつ乃	中原諷人	森山盛桜	土橋螢
山根八重	西浦小鹿	西川和子	中原みさ子	中原汲香	土橋はるお	津村八重子	田村きみ子	黒田くに子
土橋睦子	徳岡本丸	鈴木芙美	国森武子	加藤公子	小倉利男	岩崎みさ江	今本早苗	伊吹富恵
ほか会員一同 山根しげる	森明美	中澤正恵	谷口百合子	木下覚	吉田孔美子	横山房子	山岡久枝	安井博子

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人方
電話 (0857) 84-2100

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

顧問
主幹

坂 黒 北 北 柿 尾 小 大 内 上 岩 岩 伊 牛 野
口 瀬 山 山 花 田 倉 野 芝 杉 崎 倉 賀 尾 村
公 登 好 凡 紀 綾 ア 武 登 信 瑞 天 政 緑 太
子 紀 笑 太 美 子 サ 太 志 秋 穂 彦 一 良 茂 津

中 中 富 天 寺 辻 千 垂 玉 谷 田 田 杉 塩 坂
島 井 上 満 田 本 原 井 井 口 中 口 山 谷 部
正 栄 光 三 裕 淳 千 豊 信 輝 よ 精 佐 紀
博 美 代 千 美 守 太郎 寿 太 子 しみ 子 代 久 子

若 横 山 守 森 宮 松 前 堀 細 福 福 中 西 中
宮 垣 田 内 口 原 田 端 川 本 田 後 口 根
武 久 恭 三 克 寿 三 稚 英 和 清 忠 勇
雄 忠 子 子 枝 子 子 勝 男 代 子 子 史 雄 太

事務局および投句先

〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小島蘭幸方

あけましておめでとうございます

会 会
計 長

森石藤古古岩岡古三山時岩小
井原解田田本本谷宅内広本島
ほか 菁 淑 静 比 太 文 清 節 不 房 一 笑 蘭
一 居 子 風 呂 子 虚 晴 水 子 朽 子 路 子 幸

祝 川柳塔800号記念

新年おめでとうございます

三幸川柳教室

会員一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

「川柳塔」八〇〇号

お祝い申し上げます

福
西
範
子

大阪市都島区善源寺町

川柳塔800号おめでとうございます

川柳大阪よりお祝い申し上げます

塩山森高西芳福中山玉四坊川森南
満本村賀岡崎原下置宮農端松

柳美金洛鉄し比美重照柳一ま英
敏昌花太酔心お呂津留人佳弘歩お明

800号おめでとうございます

翠洋会

清肥児栗北片奥岡梅上稲井池中西高桶
水塚玉谷田田上田本田田上田西杉高
絹一春綾英みつ久宣佳凡照登兼鬼薰
子美蛙子子一子峰司秋子子志治郎遊風

渡米山堀堀古藤藤西中寺田高住
部田本江江谷村井出村井中杉谷
さと恭希久光良ひろ宏正楓叡東正千石
と美昌子子子江子子雄楽子雲坊歩舟

祝 800号

頌 春
平成 6 年元旦

川柳塔唐津支部

市 山 山 中 岩 野 浜 筒 山 久 仁 田 代
丸 門 門 村 崎 田 本 井 口 保 部 口 表
は 夕 幸 旭 久 朴 高 正 四 虹
る 仁
子 ミ 夫 弘 實 恒 於 竜 明 劍 郎 汀

むらくも川柳会

川柳塔社同人・誌友

藤 小 三 槻 大 安 今 児 槻 加 榊 堀 堀
井 林 代 谷 坂 部 川 玉 谷 本 原 江 江
明 延 朝 仲 藤 美 三 幸 一 義 秀 芳 正
恵 津
朗 子 子 子 子 女 江 子 葉 良 子 子 朗

おめでとう

八百のビバーク ハーケン磨き上げ 太茂津

川柳塔社副主幹

野村太茂津

〒640 和歌山市駕町14番地
電話0734-31-3773

日本現代川柳叢書 第七集

野村太茂津句集 詩歌文学刊行会

定価 二、五〇〇円(本体二四二七円)

平成六年一月一日発行

頌春

ことし六月一日(休)に川柳堺
三百号記念句会を迎えます。
また、第十二回夜市川柳大会
は七月三十一日(日)に決まりま
した。宜しくご支援のほど、
お願い申し上げます。

堺川柳会

綿	中	神	高	渡	福	村	小	以	竹	内	長
野	川	原	田	辺	田	上	西	倉	田	藤	谷
春		星		満	博	夏	菜	み	摩	耶	彰
香	楓	文	子	都	州	光	子	々	ず	耶	彰
河	河	高	藤	寺	藤	小	山	宮	桜	矢	中
内	内	橋	井	井	田	西	本	本	沢	倉	井
天	月	千	一	東	泰	小	半	か	あ	五	彗
笑	子	万	二	雲	子	雪	銭	り	か	月	梢
		子	三					ん	里		

祝 800号

サークル 檸檬

姫路 川柳化粧櫓の会

平成六年 頌春

本年もよろしく申し上げます

川島春蘭	駒井はる女	植村客遊子	保西岳詩	大原葉香	丁坪サワ子	服部一典
中塚遊峰	丸尾はる子	福島姫女	美原嘉	本多茂章	菅原朱玉	内海美代

東大阪市川柳同好会

会 長 ^{カタ}片 ^{オカ}岡 ^コ湖 ^{フウ}風

会 員 一 同

謹 賀 新 年

八尾市民川柳会

会 員 一 同

おめでとうございます

本年も何卒よろしく

富	笠	奥	松	竹	藤	川	小	辻	松	阿	黒	正
山	嶋	山	川	内	村	島	池		川	萬	川	本
ル	恵	美	芳	花	ノ	諷	し	白	杜	萬	紫	水
イ	美	智	子	代	女	云	げ	溪	的	的	香	客
子	子	子	子	子	子	児	お	子	的	的	香	客

謹賀新年

京都塔の会

松川杜的
都倉求芽
高沢栄
松川芳子
小林英子
山田葉子
本莊福子

祝川柳塔八百号

正本水客

黒川紫香

阿萬萬的

あけまして

おめでとうございます

川柳クラブ

わたの花

高杉鬼遊	西沢一雄
指宿千枝子	服部春子
井上しのぶ	秦正子
生嶋ますみ	平川幸枝
内田龍	松葉君江
小沢泰成	松木みき子
川崎友甫	牧戸きみ子
片上英一	水谷その
小出雅恵	宮崎弘直
白井貞子	宮崎シマ子
田中トシエ	村上剛治
田中花子	榎山剛隆
高橋初子	山下美津留
高橋明子	吉村一風
二瓶道子	鷺見一章
	安永暁子

謹賀新年

祝八〇〇号

城北川柳会

連絡先 〒675-01

加古川市平岡町新在家二〇〇六一八

吐田公一

電話(〇七九四)二三一三六八一

川柳若葉の会

橘高 薫風	指宿 千枝子	梅田 宣司	海老池 洋	大福 留吉	片上 英一	黒田 能子	小森 正晴	近藤 豊子	椎江 清芳	辻川 慶子	中島 実子	堀江 光子	宮崎 弘直	宮崎 シマ子	宮本 欣史子	山内 香住	安永 暁子	吉田 あずき
-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	--------

賀 春

岸和田川柳会

橘高 薫風	西田 柳宏子	阿萬 萬的	福浦 勝晴	深日 光子	真崎 浪速子	内田 一弥	楊井 二南	宮園 射月芳	中野 恵空	田中 文時	三輪 通彦	辻 翠子
小林 すみえ	芳地 狸村	岩佐 ダン吉	高橋 操漕	林 春栄	島崎 富志子	清野 こう	古野 ひで	原 さよ子	藪野 ケイ子	寺田 甚一	上田 真柳	

頌 春

八〇〇号お目出度う

ございます

平成六年元旦

岩見川柳会

幸 家 單 車
 宮 本 善 幸
 美 浦 美 代 子
 前 田 嘉 津 江
 石 谷 美 惠 子
 丸 山 希 久 代
 武 田 照 女
 山 内 芳 江
 羽 津 川 公 乃

謹 賀 新 年

うみなり川柳会

会 員 一 同

〒680 鳥取市相生町3-204 森田熊生

電話 0857-23-4672

あけまして

おめでとうございます

尼崎 いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尼崎三階
 (阪神尼崎駅西南三分)
 各地句会案内を御覧下さい

尼崎 おはま川柳会

例会 毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五―八
 尾浜公民館

尼崎 小園川柳会

例会 毎月第二、四水曜日午前10時

尼崎市若王子三―二―二一
 小園公民館

明けましておめでとうございます

川柳の町

弓削川柳社

同人一同

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削

会長 濱野奇童 TEL (08672)8-2459

事務局 山田福世 TEL (08672)8-2531

南大阪川柳会

会員一同

あけまして おめでとうございます

吉前椋古中中富高玉滝嵯近黒日北木鴨岡奥岡江上稲月湯井橋
井田山川井田永江洲置北峨峨藤崎下村村谷田村本口田葉原浅上高
他竹昭祥喜三純敞桂英博保洋恭万正一瑠美し吉明佳眞方馬直薫
一 同 二子司子子次子子子史子子子助安笛子子え郎光秋郎郎洗次風

ほたる川柳同好会

毎月第2火曜日午後1時から豊中市螢池公民館にて毎回薫風先生の御指導を受けております。 申込み・お問合せは 06-841-5265井上まで

1 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	5日(水)午後1時から おめでとぅ・世間・残る・半端	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から はじめ・触れる・皿・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 犬・頂上・暦	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
富柳会	9日(日)午後1時から 声・登る・嬉しい	房の家 近鉄滝谷不動下車すぐ 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 福・振る・封筒	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 拍手・誓う・ほのぼの・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
はたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 犬・初・舞う	豊中市立蜷池公民館 阪急蜷池駅西へ150米 〒560 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	12日(水)午後6時から 甘える・餅・演技・ライバル	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 器・防ぐ・こっそり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	18日(火)午後1時から 宝・出来る・初心	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木) 正午から 節目・声・夜明け・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川柳会	21日(金)午後6時から 運勢・苦勞・進む・鶴	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から きっちり・誤解・近い・顔	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
川 柳 ねやがわ	23日(日)午前11時から 犬・精力・友・相撲吟	秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
はびきの 市 川柳 会	23日(日)午後1時から 袋・装う・アマチュア・先祖・自由吟	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
岸和田 川柳会	23日(日)午前11時20分集合 近道・追放・出会う・答案	福祉センター北門前→貝塚山荘 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★あけましておめでとうございませう。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

この新年号をもって私たちの「川柳塔」は八〇〇号を迎えた。記念事業の一つとして行つた初の誌上川柳大会は、全国柳人の参加によつて成功を納め、入選作品を本号に発表することができた。また、田辺聖子さんはじめ社内外の方たちの「八〇〇号に寄せる」玉稿で誌上を飾らせていただけたことに對し、厚くお礼を申しのべたい。

★この百号前の七〇〇号は昭和60年（一九八五）9月号で、私も編集部の一員として校正を担当していたが、麻生霞乃・東野大八お二方の寄稿と座談会の記録を掲載することにどまり、頁数も

一〇八ページであった。当時からは同人・誌友も増え、また、川柳界そのものも上昇傾向を示していることもあつて、本号は初めて二〇〇ページに及ぶ誌面に多彩な内容を盛ることができた。

★今月十六日は、なにわ会館で他柳社からも選者を招いて記念川柳大会を開催するが、これもまた、本社の総力を挙げて成功させなければならぬ。さらに今年

は「川柳雑誌」創刊の大三十年から数えて七十三年の古希の年にあたり、これを記念して三回目の合同句集「川柳塔」を発行することとなつており、2月号にその要項を発表するので、こぞつて参加をお願いする。なお、「ひとこと」欄は今

月に限つて休載、みつ子・楓楽の二人とも編集後記を執筆することとした。（正）

☆川柳塔八〇〇号と併せて新年おめでとうございませう。八百という数字の重みを改めて噛みしめている。一年十二冊の塔誌を出すのも並大抵のことではないのに、

☆栃木県の過疎地に住んでいる孫の小学校では、秋の

学校祭に「種送り」という行事がある。全校生徒七十四名という小さな学校だから、何をするにも父兄が参加する。各学年毎に並んで六年生から五年生には「種もみ」が送られ、五年生から四年生には「南瓜の種」が送られた。そのように次々と種を送つて、一年生の

孫は来年四月入学の新生一年生に送る「朝顔の種」を代理の先生に渡した。☆都会暮らしばかりして、街の暮らしか、考え方との違いに途惑ひ歎くことも多かつたが、この「種送り」に

は感激したと言つ。学校田も畠もあり、児童たち自身も収穫した種を次の学年に送り継いでゆく。

☆誌齡八〇〇号の中に脈々と送り続けられたものを考える。偶然、古本屋で麻生路郎著「川柳とは何か」を見つけた。「句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸である」と自序に記されていた。（み）

○「一日が長く、一年が速いと感ぜられたら、齡をとつた証。一日が速く、一年も速く感ぜられたら若い証」と聞いたことがある。この伝でゆくと、まだまだ私は若い。今年もこの詩が、忙しさにささくれ立つ心を、鎮めてくれるだろう。

自分の感受性くらい
茨木のり子
ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな

みずから水やりを
怠つておいて
気難しくなつてきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失つたのは
どちらなのか

苛立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのは
わたくし

初心消えかかるのを
暮しのせいにはするな
そもそものが
ひよわな志にすぎなかつた
駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊嚴の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ
○今年もよろしく。（ふ）

作品募集

3月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 葉選
水煙抄 (10句)	黒川 紫選
銀河系 (3句)	河内 天選
茴香の花 (3句)	八木 千代選
吟「陽」	奥田 みつ子選
課題吟「測る」	細川 稚代選
「パン」	小林 トメ子選
「魚」 (3句)	吉岡 美房担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

4月号
課題吟 「歯」「ビデオ」「はさむ」
初歩教室「弾む」

本社1月句会

日時 1月7日(金) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター2階
中央区内本町1-1-1 電話06・944・11918

★短冊交換会 (1人3点以内)
★平成五年 月間賞杯授与・皆出席者表彰
★平成五年度 銀河系賞・茴香の花賞表彰

兼題 「今年」 「スター」 「若い」 「贈る」 「本家」

席題 1題 当日発表 各題2句以内
会費 500円 投句料310円(62円切手5枚)

河内 月子選
板尾 岳人選
小出 智子選
黒川 紫香選
黒尾 紫香選
西尾 葉選

本社2月句会 7日(月)

兼題 「リモコン」「浅い」「合言葉」「まぐれ」「調査」

夜市川柳募集

第8回「バス」 天根 夢草選
ハガキに3句 1月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「紹介」 森中恵美子選
ハガキに3句 1月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 1月23日(日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「うどん」 橋高 薫風選
ハガキに3句 1月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料61円)
半年分 三千八百円(送料共)
一年分 七千五百円(同)

平成六年一月一日発行
編集兼 西尾 葉
印刷所 藤原 童心社
大阪市阿倍野区三好町二丁目一六
ウエムラ第2ビル202号室

〒545
発行所 川柳塔社
電話 (06)261-1691 一四番
振替口座大阪81-33368番



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**
〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886